

フェアリーフェンサーエフ～元ドルファ四天王の旅～

ゆるポメラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はるか昔、邪神と女神の争いがあった。

戦いは拮抗していたが、両者ともに自身の力と妖聖を憑依させた特殊な武器を大量に撃ち合い、その力によってお互いを封印し、どこかここではない世界へと消え去った。

それから時は流れ、現代。

女神と邪神が遺した武器は『フューリー』と、それを扱う戦士は『フェンサー』と呼ばれていた。

フューリーはその強大な力ゆえ、集めると願いが叶うと噂されていたため、フェンサーはフューリーの奪い合いを常としていた。

とある出来事から働いていた企業を退社させられた……否、退社したフェンサーの青年レイルはパートナー妖聖と元人間でパートナー妖聖2人の女性と旅をしていた。

これは邪神と女神を巡る戦いに巻き込まれながらも、自分の”願い”を見つける物語

目次

共通ストーリー編

第0話	旅の始まり	1
第1話	地下牢での出逢い	4
第2話	大都市ゼルウインズ	12
第3話	ソーヨル草原にて	15
第4話	封印されし女神と邪神、そして再会	24
第5話	シャイでアンチキシヨウな暗殺者	33
第6話	ヤタガン溶窟のフューリー	41
第7話	カダカス氷窟は寒いよ	52
第8話	パーティの招待状と迷子の妖聖	60
第9話	キダナル地域のフューリー	71
第10話	宿に戻ったら妖聖研究家 came た	78
第11話	キュイの名前	84
第12話	ハーラーは残念美人	88
第13話	荒くれフェンサーと衝撃の事実	91
第14話	出現！ ザンクの親衛隊長	97
第15話	見逃されたと思ったら、仲間が増えた	102
第16話	ドルファの裏の顔	108
第17話	その日の夜	116
第18話	昼食にて	119
第19話	ハーラーの凄まじさ	123
第20話	ビューイの谷	127
第21話	シャイでアンチキシヨウな暗殺者、再び	130
第22話	長槍の乱入者と暗殺者の最後	133

第23話	ザンクとロンギについて	139
第24話	次のフューリーはお急ぎ？	143
第25話	ザワザ平野	146
第26話	四天王が2人もかよ！	149
第27話	違和感がある夜空	154
第28話	謎の黒騎士と謎の骸骨騎士	158
第29話	ザワザ平野での闘い	163
第30話	双方が納得する形も時には大事	169
第31話	宿に戻ったら蒼き疾風が来てた	178
第32話	レイルとピピン	184
第33話	次のフューリーの場所へ	186
第34話	地への回廊	189
第35話	女神の化身	192
第36話	エミリ	197
第37話	カヴァアレ砂漠	202
第38話	フェイスドロップ	206
第39話	元ドルファ四天王の実力	213
第40話	マリアノ	220
女神編		
第41話	失った者	225
第42話	リスタート	230
第43話	クラヴィーセ洞窟へ	235
第44話	ティアラの気になっていた疑問	243
第45話	カダカス氷窟の噂と再会	247
第46話	妖聖研究家との再会、そして新たな仲間	251

第47話	アポローネス	259
第48話	歓迎会	266
第49話	レイルとの初対面と入社式	269
第50話	慣れない宿暮らしと次のフューリー	279
第51話	最短ルートと村の異変	285
第52話	村の異変の真実	290
第53話	最小限で行こう	296
第54話	骸骨騎士、再び	298
第55話	定食屋にて	304
第56話	休息と次のフューリー	309
第57話	エフォール	312
第58話	定食屋で蒼き疾風を見かけた	321
第59話	好きな事、こみ上げる嬉しさ	326
第60話	妖聖同士の散歩	330
第61話	地への回廊で蒼き疾風と再会した	333
第62話	ピピン	338
第63話	朝食とホロンの用事	346
第64話	ホロンの正体	350
第65話	ルドケー溶鉱炉跡	353

共通ストーリー編

第0話 旅の始まり

ここはゼルウィンズ地方。

その一角にある、『シユケスーの塔』と呼ばれる塔の近くにある草原にて……

「……」

遠めから見れば少女にも見えなくもない銀髪のショートヘアの1人の少年……否、青年が本を読みながらくつろいでた。

そして彼の足元には、半円を描く曲がった角を持った、兜みたいに頭部全体を包む仮面を被り、灰色のボロボロのマントを着た真つ黒でちんまりボディの虫のような生物が地図を広げていた。

「毎回見てて思うんだけど、地図を見るのが完全に趣味になってきてるよね、ホロン」

「……（こくり）」

ホロンと呼ばれた生物は、主である青年……レイルの言葉に頷く。

「レイー！」

「ただいま戻りました」

すると167cmの2人の女性が戻ってきた。

1人は透き通った水色のロングヘアで耳から後ろ髪を二つに小さくわけ括った髪にしており、水晶のような瞳、蒼色のドレス系の服を身に包んでいる。

その女性……ティルア・テイリス・ティアーズは、レイルに抱き付いた。

「ティルア。レイが困ってるでしょ?」

「えー? でも私達、フエンサーと妖聖は対等で、尚且つ、レイの婚約者なんだから問題ないでしょ?」

「全くもう……、そうだけど私と貴女の場合は違うでしょ? 婚約者という点は合ってるけど……」

もう1人のクリーム色のロングヘアで、深い青色の瞳、白と青色

を基調としたドレスを身に包んだ女性がティルアに言った。

その女性……シャルロット・シャルルランザが小さく溜息を吐いた。

「だから僕らは、こうやって4人で世界を旅してるんじゃない。最初は僕とホロンだけだったけど」

「……（コクコク）」

フェンサーであるレイルとそのパートナー妖聖であるホロンは、4年前、ある企業で働いていたのだが、ある日を境にクビになった。厳密に言うと自分から辞めたのだが。

そこから色々旅をしている内に、しばらく顔を合わせてなかった昔馴染み2人に会いに行った。ただ最悪な形になってしまったけども。

まあ、なんやかんやで今に至る。一緒にいれて楽しいし。

「そういうえば、さつきシャルと街で買い物してた時に食い逃げがあったみたいだよ？　なんかパンを無銭飲食したんだって」

「いやいや。確かに食い逃げはダメだけどさ、やるならもつと食べてから逃げなよ。ドジっ子なの!？　その犯人」

「それが野次馬が多くて、よく聞こえなかったけど……あの街、フューリーが刺さってたでしょ？　それを抜いたからパンくらい大目に見てくれると思ったみたい」

「……」

シャルがそう締めくくると、レイルは呆れて頭を抱えた。

一瞬、自分の事を『兄貴』と呼ぶ男が頭に浮かんだが、流石に違うだろう……多分。

「正直フューリーを集めるとか、僕らには関係ないし……うーん。行ってみる?」

「何処に?」

ティルアとシャルが口を揃えて訊く。

「食い逃げ犯が捕まってると思われる辺境の地下牢に」

読んでた本を閉じ、よいしょと言いながら立つレイル。そう、例の食い逃げ犯が捕まってるとしたら多分そこだろう。

「……と言っても、ここから地下牢がある場所まで3日くらいかかると思うから、急ぎつつ、ゆっくり行こうよ」

「……（コクコク）」

そう言っているとホロンも頷いてた。気のせいかうずうずしているように見える。

「やっぱり私、レイと一緒に旅して良かったかも」

「ふふ♪ そうね♪」

早速と言わんばかりに旅支度をする2人を見て、お互いに顔を見合わせて微笑むティルアとシャルなのであった。

第1話 地下牢での出逢い

「……よいしょっと。侵入成功」

あれから3日かけて辺境の地下牢に着いたレイル達4人。ただ馬鹿正直に出口から入るのはアレなので、もう1つある反対側の入口から侵入したのだ。

『まさか侵入できる入口がもう一箇所あったなんて……』

『それが陽の光が浴びれる窓ですもの。多分、位置的には一番端の牢屋に繋がっているんじゃないかしら』

ティルアとシャルが呟く。

彼女達2人は特殊な妖聖なので、特定の条件を満たさない限り、人間やフェンサー、他の妖聖からは視認できないようになってる。

ちなみにホロンは元からレイルのパートナー妖聖なので、彼の肩にちよこんと乗っているが。

「ラツキー。ここの牢屋の鍵、蹴り飛ばせば開かれるみたい。それっ」と♪」

レイルが扉を蹴る。バコン！と音が鳴って、扉が開く。どうやら内側が脆かったせいなのか、すんなり開いた。

「……(ツンツン)」

何かに気が付いたのか、ホロンがレイルの頬をつついて、あれを見てと言わんばかりに主を呼ぶ。

そこには寝息を立てる看守が居た。

「ぐぐぐ……」

「もしかして……この看守、寝てる？」

『そうみたいね。魔法で眠らされてるみたい。あ、見て、レイ。あそこ
の看守達も眠らされてるみたい』

近くに寄って観察すると、シャルがそう言った。

確かにこの看守だけじゃなく、他の看守も魔法で眠らされているようだった。ぐっすり眠っている為、大きな声で騒がしい限り起きないのは明白だった。

「寝てるなら好都合だ。とりあえず、散策しながら出口まで行こう」

「……（こくり）」

『そうだね』

『そうね』

その一言に3人は異論無しであった。

◇

「ちよつとフアング、起きなさい！ ほら、起きるのよ。とつとと、起きて！ あたしよ、アリンよ。助けに来たわ。逃げましょ」

同じ頃。別の牢屋で、アリンと呼ばれた少女が牢屋を開ける鍵を使って、フアングと呼ばれた青年を叩き起こす。

「助ける？ 誰をだ？」

「あんたに決まってるでしょ！ パンを無銭飲食して捕まるなんて全く情けない。早く起きて！ 逃げるのよ！」

そう言つてアリンは、早く逃げるように促す。フアングが捕まった理由があまりにも情けないが。

「逃げる……なんでだ？」

「あんたにはフェンサーとしての使命があるでしょ。さっさと、ここから出て、あたしと一緒にフューリーを集めるのよ！」

「……嫌だね。俺はここが気に入った。ここで一生を過ごす。だから放っておいてくれ」

それを聞いたアリンは呆れたのか目を細める。

「……は？ あなた分かつてるの？ ここは牢屋なのよ、牢屋」

「分かつてねえな。ここにいれば、タダで飯めしが食える。寝たいだけ寝れる」

まさに天国だ。とアリンに豪語するフアング。

「……バカ、そんな美味しい話があるわけないでしょ。この街では、食料を盗む事は重罪なのよ。しっぺ百回の刑よ」

手が腫れて動かなくなっちゃうんだからと注意するアリンだが
……

「それはいい、もう顔を洗わなくて済む」

「呆れた。あなた本当にバカなのね。手が動かなくなったら、もうご飯も食べられなくなっちゃうのよ」

「よし、逃げよう。兄貴が作ってくれる飯が二度と食べなくなるのは流石に嫌だしな」

切り替えの早さに額から汗を流すアリン。彼が言っていた『兄貴』という単語が気になったが、牢屋から出る気になったから結果オーライとしよう。



「…………いやー、散策してみたけど、あんまり目ぼしい物はなかったね」

「…………（コクコク）」

『えーっと、レイ？　そもそもここ牢屋だよ？』

「うん。でも、加工ができそうな石ころぐらいだもんね、見つかったの…………ちよつと残念」

『ティルアが言ってるのは、そういう意味じゃないんだけど…………』

地下牢を散策して数10分。

牢屋の中を漁っては、古い樽の中を探してみたりと色々やってみたが、全く目ぼしい物は見つからなかった事に、肩を軽く落としながら残念がるレイルとホロン。

ティルアがそもそも牢屋なんだし、と言うが見事に会話が噛み合っていないかった。シャルはそれを見て苦笑い。

「…………それで、誰も抜けない剣を抜いたから、パンぐらい大目に見てくれる、と思つた訳ね…………。考えが甘いわ」

「別に盗んだ訳じゃねえ。試食品だと思つたんだ。いつその事、この剣を金に替えちまえばよかったぜ」

「…………？　（なんか聞き覚えのある声があるな。ティルアとシャルが言つてた無銭飲食した人かな？）」

何やら男女が喧嘩をしてる声が聞こえた。

レイルは気づかれないように、会話を聞きながら足を速める。すると人影がうつすらとだが確認できた。

「ひ、ひどい！ あなたはフューリーに選ばれたのよ？ この意味分かってる？」

「うっせえな！ 最終的にどうするかを決めるのは自分だって、俺は兄貴から教わってたんだ。お前の都合を俺に押し付けんな！」

「……（この2人、地下牢のど真ん中で何してるんだらう？）」

傍から見たら、口喧嘩してるようにしか見えない。

しかし場所が場所だ。とりあえず、声をかけてみよう。1人は自分の事を『兄貴』と呼んでる時点で誰かは察しはついたが。

「ファング」

「あ？ ……って、兄貴!? 何してんだよ、こんな所で!」

「……え？ あ、兄貴？ この子が？ お姉さんじゃなくて？」

声をかけたレイルの姿を見たファングは驚き、アリンはファングより背が低い152cmで黒を基調としたワンピースを着ており、両腕に赤いリボンを巻いた美少女？を見て戸惑っていた。

「簡単に説明すると、この街でフューリーを抜いた人がいて、その人が無銭飲食して捕まったから、どんな人かなーって思ってた散策がてら見に来た。ダメじゃん、ファング。無銭飲食しちゃあ……」

「試食品だと思っただよ。腹減ってたし……」

「まあ、ファングの場合、試食品だったら、ちゃんと区別つくもんね？ 大方その店、試食品のプレートが書いてなかったんでしょ。次からはちゃんと店員さんに訊くんだよ？」

「はーい。次からは気をつける……」

「ファングがあっさり言う事を聞いた!」

レイルがめっ!と言って注意すると、ファングは素直に次からは気をつけると言って頭を掻いた。その光景を見て驚くアリン。

「……ところで君はファングが抜いたっていう剣の妖聖？」

「そうなの！ しかも聞いてよ！ 宿っていたのはおっさんでも不思議な動物でもなく、こんな可愛い女の子の妖聖だったのよ？ もっとウハウハしてほしいわよー!」

「……いや、ファングにそれを求めろって言うのは難しいと思う」

アリンはそう言うが、ファングの性格上、こう言われるのは仕方な

いとレイルは思ってた。

「貴様ら！　そこで何をしている！」

すると騒ぎを聞きつけたのか、衛兵達がゾロゾロと集まり出した。

「やばい、見つかったわ、衛兵達よ！」

「お前がデケー声を出すからだろうが」

「……そうだね。今更だけど、ここが地下牢って事を忘れてたよ、僕」

フアングの言葉にレイルは頷いた。そりゃこんな大声で騒げば気づかれるって。

「フアング、この衛兵達は僕がやつておくから、2人はこの先にある出口に向かって外に出て。今後どうするかは2人で話して自分で決める事。いい？」

「……分かった。約束する」

「ん。それならよし。あとこれ渡ししておくね？」

そう言っつて、レイルがフアングに渡したのは弁当箱のようなものだった。しかも2人分。

「ここを無事に出て、道中に2人で食べなよ？　あ、お弁当箱はあげるよ。今後何かに使っつて」

「分かった。おい！　行くぞ！」

「え？　ちよつと、この子を置いて行っつていいの!?!」

兄貴なら大丈夫だからとアリンに言っつて、出口に向かって走るフアング達。

「よし。妖聖のあの子も一緒みたいだし、大丈夫でしょ。さて……」

「貴様！　たった1人でこの人数をやれると思っつうのか！」

衛兵の1人が剣を構えながら、そう言っつた。

「……君達、威勢だけはいいいね？　ホロン、フェアリンク」

「……（こくり）」

レイルがホロンにそう呟く。するとホロンの体が輝き出し、槍のよな形状のボロい釘に姿を変えてレイルの右手に収まっつた。

「はっ！　そのボロそうな武器で何ができ……」

何ができるんだと言おうとした瞬間、衛兵達の身体は真っ二つになっつた。

「……ふう。こういうタイプの人間って、相手が格下だっただけで見るや否や、こうだもんね、学習しなよ。来世でね」

「……（コクコク）」

追っ手が来る気配もないので、とりあえず自分達も出口に向かう事にした。

『レイ、きつきの子達が向かった出口の方から、別の力を感じる』

「……テイルアがそう言うって事は、ファング達が逃げた出口から別の追っ手と鉢合わせしたのか」

侵入した入口近くまで向かおうと思った矢先、テイルアがレイルにそう言った。この地下牢の出口は、自分達が侵入した隠しの場所とファング達が逃げた場所の2つしかない。

『レイ、どうするの？』

「……ファング達が無事に逃げられるように隙を作る。相手が誰だか分からないけど、一回だけ攻撃したら僕らも天井をぶち抜いて逃げるよ」

シャルの問いに、レイルはファング達が逃げれるよう隙を作った後、自分達も即座に逃げるという選択をした。



「く……っ。なんなんだお前。これがフェンサーの力……!？」

「貴様の剣には何も無い……。覚悟も信念も」

一方でファングも出口が見えた途端、立ち塞がっていた1人の男に苦戦を強いられていた。

「そんな剣では私を倒す事は出来ん！」

「ちっ！」

「ファング、ここはいったん引きましょ！今のあなたじゃ勝ち目はないわ！」

相手の男は只者じゃないと判断したアリンは、今は逃げる事をファングに優先した。

「バカ、ナメられたまま逃げ出せるか！」

「いいから！ 少しはパートナーの言う事も聞きなさい！」

「おい！ ちよ、引つ張るな！」

言う事を聞かないファングをアリンは強引に連れ出そうとするが……

「逃がさん」

ゆっくりとこちらに迫る男。手に持つ大剣型のフューリーを振り下ろそうとした時だった。

「(殺気……!?) く……っ！」

自分の背後から感じた殺気に男は反射的に大剣を盾のように構えをとるが、巨大な衝撃波がこちらに迫ってきた。受け止めた剣で衝撃波の軌道を何とかずらす。

「ファング、今のうちに逃げるわよ！」

一瞬の隙ができたアリンはファングを連れて、男に背を向けて出口に向けて走り出した。

「逃がした、か。あのファングという者、フェンサーとしては未熟だが、我が魂を震わせる何かがあった。暫しの間、猶予を与えてみるのもいいか……」

第3者による攻撃でファングとアリンを逃がしたその男……アポローネスはファングとの戦いで何かを感じ、逃がしてはしまったが、猶予を与えてみる事にした。

「しかし先程の攻撃……」

それよりもアポローネスは気になる事があった。第3者によって攻撃され、とつさの判断で衝撃波の軌道をずらした方を彼は見る。

「……(魔法による衝撃波かと思ったが、この壁の切れ込み、そして受け止めた際に感じた重み……間違いなく純粹な剣による衝撃波。もしや……)」

こんな芸当ができる人物をアポローネスは知ってるが、まだ確証が持てない。

「……もし先程の攻撃をしてきた者が、私の想像通りならば……セグロよ。お前もつかうかしてられぬぞ」

『ぐおおおーっ！』

アポローネスの言葉に彼のパートナー妖聖、セグロが答えた。どうやらセグロも自身と同じ事を思ってたらしい。

「道は違えど、武の道や己の信念を貫く者同士、引かれ合うのも宿命という事か。レイル、そしてホロン。……もし先程の攻撃がお前達だとしたら、ここ数年の見ぬ間にまた腕を上げたようだな。いずれお前達と会う日が来た時にそれまで更に剣の腕を磨かなくてはな」

アポローネスは期待に胸を膨らませる。

もし先程の攻撃の主が、かつての好敵手とそのパートナー妖聖だとすれば、どこかで彼らに会った時、期待に応えられるよう、更に剣の腕を磨かなくてはと思うのだった。

第2話 大都市ゼルウインズ

「と、とりあえず、ここまで来れば大丈夫でしょ。追っ手も来なかったし」

「……（コクコク）」

『ところで、逃げてこれたのはいいけど……ここって何処？』

『ええ。私も初めて見るけど……なんていうか大きな都市ね』

「……あらら。大都市ゼルウインズまで来ちゃったか」

地下牢から何とか脱出し追っ手も撒き、気付けば大都市ゼルウインズまで辿り着いていた。

ゼルウインズ地方の名前を冠した都市が、この大都市ゼルウインズである。企業『ドルファ』を中心に経済で栄えた、企業城下町だ。

街の中心にはドルファのビルが悠々と立ち、その発展ぶりを物語っており、レイルが知る限り総人口は140万人だった筈……

邪神と女神の伝承が言い伝えられており、フューリーの噂も他の地方より多い。あんまり興味はないけど。

「……はあ、まさかまた大都市ゼルウインズに来る事になるなんて。アポロの件もそうだけど」

「……（コクコク）」

『それってさつき地下牢の出口にいた人の事？』

「うん。ファンング達が脱出できるように、バレない程度の殺気を出したつもりだったんだけどなあ……」

シャルの疑問に答えるレイル。

地下牢の出口でファンングと交戦していた男、アポローネスを思い出すレイル。まさか元仕事仲間に行くわすとは思わなかったのだ……

「……（そもそもアポロは何しにあんな辺境の地下牢まで来てたんだろ？）」

まあ、あの職場が今どういう方針で行ってるのか知らないが、元仕事仲間の顔を見ただけ良しとしよう。

……次もしも会った時は、勝負を挑まれるかもしれないが。

「今後の拠点どうしよう……？ 正直、大都市ゼルウインズに身を置

くのは気まずいのが本音なんだよね」

『えっ? どうして?』

「前の職場の人達にうっかり遭遇するのが嫌だから」

『あー……』

それを聞いたティルアは納得した。シャルもレイルが何を言いたいか分かってるのか、苦笑いしている。

「とりあえず、僕が昔行きつけだった酒場に行こう。そこのマスターは物知りだから」

レイルの一言で4人は彼の行きつけだった酒場に向かう事に。

◇

「いらっしやいませ。おや……これはこれは。レイルさん、お久しぶりです」

「久しぶり、マスター。相変わらず繁盛してるね?」

酒場『桜花亭』に入ったレイル。この酒場の店主であるマスターはレイルの姿を見ると嬉しそうな表情で挨拶をした。

「今日は何かお飲みになりますか?」

「また来た時にいただくよ。今日はマスターに訊きたい事があって来たんだ」

「それはそれは。私の方でよろしければ」

そういう訳でレイルは早速、マスターにいくつか訊く。

「このスケッチブックに書いてある茶髪の男の人と紅い髪のツインテールをした女の子の妖聖を捜してるんだけど……」

「ああ。このお二人なら、いらっしやいましたよ。ソーヨル草原に向かうとおっしゃってましたね」

スケッチブックに描いたファングとアリンの絵をマスター見せ、2人がどこにいるかを尋ねるレイル。するとマスターの口から、ソーヨル草原に向かったとの情報が。

「ソーヨル草原か……とりあえず、行ってみるよ」

「でしたら盗賊に気をつけてください。最近、旅人を狙う盗賊が多い

と聞きます」

「うん、分かった」

情報を提供してくれたマスターに感謝しつつ、レイルは酒場を後にした。

「……という訳で、マスターから聞いた情報とこれからの事を纏めた結果、今からソーヨル草原に向かおうと思う」

『そこって確か、シユケスーの塔の近くにある草原だよね？』

『そうね。でもマスターは盗賊も出ると仰ってたわね。何かあったのかしら？』

次の目的地を聞かされたティルアとシャルは首を傾げる。

「せっかくだから、ピクニック感覚で行こうよ。マスターおすすめの弁当もさつき買ったからさ」

「……（コクコク）」

『わーい♪ みんなでピクニック♪』

『それなら近くのお店で、お菓子や紅茶の茶葉も買って行きましょう？ そろそろ蓄えが切れてた筈だから』

ソーヨル草原に向かう前に、お菓子等を買う事にした4人であった。

第3話 ソーヨル草原にて

「やっと着いたー」

ゼルウインズで準備を済ませ、無事にソーヨル草原に着いたレイル達4人。

『やっぱりここは何回来ても落ち着くね♪』

『そうね。いつもの小鳥の囀りが聞こえるのも変わらないわね』

ティルアとシャルが言う。

ソーヨル草原はのどかな草原で、様々な動物が生息している。遠くに見えるシケスーの塔が確認できるのもレイル達にとっては見慣れた光景だ。

「……（ペシペシ）」

「ん？ はいはい、分かってるよ。モンスターにも気をつけるってば」
レイルの頬を軽くペシペシと叩いて注意事項をするホロン。

そう。この世界では動物だけじゃなく、モンスターも存在する。なのでモンスターに細心の注意を払う。見つからないように。それと生態系を壊さないためもある。

もしも生態系のバランスが崩れてしまったら、自然豊かなソーヨル草原が枯れた大地になってしまう。

「さて。いつもの場所まで歩いて、お弁当やお菓子を食べよっか」

「……（コクコク）」

『さんせー♪』

『ホロンも言ってたけど、モンスターには気をつけて……よね？』

現在地から少し歩いた場所にレイル達しか知らないお気に入りのお場所へ向かう4人であった。



「あつ、あれじゃない？」

同じ頃。

ゼルウインズで情報屋のロロからフューリーがこのソーヨル草原

にあると聞いてやってきたファングとアリン。少し歩いていると地面に突き刺さったフューリーを見つけた。

「あそこに刺さっているのが、フューリーだよね？」

「ったく、散々苦勞させやがって。とつとと引っこ抜いて、ずらかろうぜ」

ファングがフューリーに近づいた時だった。

「そこのお方、お待ち下さい」

誰かに呼び止められ、振り向くと、そこには少女がいた。

腰の辺りまで伸びる水色の髪は一見すると銀色にも見えるくらいに綺麗に透き通っており、ゴシッククロリータ風の蒼いドレスの服を身に包んでいた。

「旅のお方、見ればずいぶんとお疲れのご様子」

「いや、そこまで疲れてねえけど」

ぶつきらぼうに答えるファング。

「いいえ、お疲れに決まっています。よろしければこちらのお茶をお飲みください」

疲労回復に効果がありますのよと言って、ファングにお茶を勧める少女。

「お、美味そう。ちようど喉が渴いていたんだよ」

「ちよつと、いくらなんでも怪し過ぎるでしょ。知らない人から貰ったものを食べちゃいけないって、助けてくれたあの子に教わらなかったの？」

目の前の少女が怪しいと感じたアリンは、レイルの名前をさり気なく出しながらファングに警告するが、ファングは美味しそうにお茶を飲む。

「うっ。か、体が……動かねえ」

「もしかして、痺れ薬!? もう、ファングの馬鹿。だから怪しいって言ったのに!」

ファングが飲んだお茶に痺れ薬が盛られていた事に気づくアリン。しかしファングもファングで、疑いながらも何故飲んだのか分からなかったが。

「な、なんて非道い事をおっしやるの……あ、あ……でも……なんだか新鮮……」

「なに、この女……」

フアングの苦し紛れの罵声に何故か高揚した表情になるティアラ。それを見てドン引きするアリン。

「それでは、目的の品も手に入れた事ですし私は失礼いたしますわ。ごきげんよう」

そう言い残してティアラは離れていった。

◇

ソーヨル草原から街道へと向かうためティアラが歩いてると、1人の男がティアラの前に現れた。

「あら、どちら様？」

「へへへ、オレは所謂ちんぴらさ。お決まりのキャラってやつだ。大人しくそのフューリーを渡すんだな」

「お決まりなキャラであって、随分とつまらないお顔をしていますのね。そもそも差し上げるものはございません」

ティアラがそう返すと、ちんぴらはニヤニヤと受け流した。

「なら腕ずくで頂くぜ。あんたごとな。その綺麗な顔が泣き顔になるのが見てみたいねえ」

「それは俺も見たい」

「!？」

ちんぴらが振り向くと、そこにはフアングとアリンがいた。

「……!?! だ、誰だ。てめえら」

「あら、フアングさん……だったかしら？」

「そうだ」

「なるほど。私を追いかけてきたんですね。わかりますわ、私を愛してしまったのですね」

「ンなわけねーだろ！」

顔を歪めながらフアングが言う。

「てめえ、この女の仲間か!？」

「違う」

「ええ、そうですわ。こちら、私の頼もしい下僕ですの」

「絶対に違う」

そう問われ違うと答えるファング。ついでにいつの間にかティアラに下僕扱いされてる事も否定する。

「ファングさん、私この方につきまとわれて困ってましたの。助けていただけます?」

「つて、誰があんたの味方なんか……」

あれだけの事をしておいて、アリンはティアラに呆れた。

「へへっ、お前もフェンサーか。ならお前のフューリーを置いてきな」

「あちやー……」

何故か自分達もちんぴらの標的にされてしまったようだ。

「……なあ。なんでお前、米粒なんて付けてんだ?」

「「は?」」

ファングの突然の言葉に、ちんぴらだけでなく、アリンとティアラも目が点になった。

「やべ、さっき香草を取りに行ってた女のガキから盗んで食べた弁当の米粒か。そんな事はどうだっていいんだよ!」

ファングの指摘にちんぴらが反論した時だった。

「……みいっくっく……」

「……は?」

突然の爆発音。ちんぴらの背後から何者かの低い声が聞こえた。

「(今の声……)」

その声を聞いたティアラは懐かしさを感じた。魔法を使ったのだろうか、白煙で姿がよく見えない。

「あ! ファング! あの子!」

「は!?! あ、兄貴!」

「あ、兄……貴? (もしかして、ファングさんのお兄様なんですか?）」

声の主を姿が確認できたのか、アリンとファングは驚愕の表情。そ

れを見たティアラはフアングの兄かと推測していた。

しかしそれは彼女の予想を大きく裏切った。

「……みい〜つ〜け〜た〜、みい〜つ〜け〜た〜。僕達の昼食泥棒みい〜つ〜け〜た〜……」

「えっ!? レ、レイルお義兄様!?!」

「は?」

声の主……レイルの姿を見て、ティアラは驚愕の表情。その言葉を聞いたフアングとアリンは目が点になった。

「てか何だよ、お前。兄貴の事、知ってんのか」

「しかも呼び方のニュアンスが……」

「そういう、お二方こそ、お義兄様とはどういうご関係なのですか」

お互いにレイルとはどういう関係だと訊くフアングとアリン、そしてティアラ。

「て、てめえ、さっきのガキか! お前もこいつらの仲間だったのか!?!」

「こいつらって?」

そんな3人をよそに突然、自分の背後に現れたレイルに驚きながらも反論するちんぴら。そして当人は首を傾げながら振り向く。

「あ。フアングとパートナー妖聖ちゃんじゃん。か弱い女の子と一緒にデート? 両手に華だね」

「いや、ちげえよ。誰がこの上品ぶってて残念腹黒女なんかと……俺、寧ろ被害者なんだが……」

「ま。僕も偉そうに言える立場じゃないから、問い詰めはしないけど。……で、なんだっけ? どういう関係かって? 弟分と僕の大事な人の妹ちゃんだけど何か?」

フアング達に気付き、冗談交じりな会話をしつつ、獲物を狩る目でちんぴらの質問に答えた。

「それより自分の事を心配したら?」

「は? てめえ、何言って……っ!?!」

ちんぴらが気付いた時にはもう遅かった。

何故なら、レイルのパートナー妖聖、ホロンが自身の基本形態であ

る槍のような形状のボロい釘をちんぴらの首元に突きつけていたのだから。

「へっ、こんな虫みたいなちっこい奴に何が……」黙れ、目玉抉られて死にたいの?」「ひいっ!?!」

ホロンの見た目をバカにしたちんぴらだが、レイルの殺気のこもった低い声色を聞いてビビってしまう。

「僕達4人共さ? 楽しみにしてたんだよ? ゼルウィンズで買った日替わりお弁当を食べるの。それをよくもまあ……どう責任を取ってくれるの?」

「……4人?」

レイルの『4人』という言葉に違和感を感じたフアングとアリン、ティアラの3人。

彼の言う、4人の内の2人はレイルと彼のパートナー妖聖のホロンで間違いないだろう。では残りの2人は?と思つた3人だが、姿が確認できない。

「う、うるせえ! だいたい名前でも書いてなかつ……」は? 名前ならちんぴらと書いてあつたけど」……は?」

ちんぴらの言葉を遮るレイル。そしてその証拠である空の弁当箱を見せつける。そこにはちんぴらとレイルの名前が記されていた。

「……あーあー。あのちんぴら、完全に兄貴を怒らせやがつたな。やっぱ食い物の恨みは恐ろしいぜ」

ニコニコと笑ってるが、明らかに怒ってるレイルを見たフアングは、ちんぴらを哀れみの目で見ると同時に心の中で合掌した。

「まあでも……僕もそこまで鬼じゃないから。ホロン、予備の縄あつたよね?」

「……(コクコク)」

「よし。じゃあこいつを縛り上げよつか」

そう言うと、レイルとホロンはちんぴらをぐるぐる巻きに縛り上げた。

「て、てめえ! オレをこんな風にしてどうする気だ!」

最早、簀巻き状態になつたちんぴらがフアング達のところに向かう

レイルに喚いた。

「? どうするもこうもこの場で放置するだけだよ。ソーヨル草原に生息するモンスターは、そこまで強くないけど夜になると稀に凶暴なモンスターが出てくるからさ。餌にならないように気を付けなよ?」
その言葉の意味を理解したちんぴらは顔が真っ青になるのであった。

◇

「おい兄貴、いいのかよ。アレ放っておいて……」

「あのちんぴらの事? 仮にもフェンサーなら、ああいう状況になった場合の体験をさせてあげないと」

ファングの疑問にやんわりと軽く答えたレイル。そして今度はティアアラの方を向き……

「それにしても大きくなったね? ティアラ。雰囲気ですぐに分かったよ」

「あ、あの……お義兄様? その、私もう子供じゃありませんってば……」

背伸びをして、よしよしと言いながらティアアラの頭を撫でた。子供扱いされたティアアラは頬を膨らます。

「ところで、なんで2人はここにいるの?」

「あー! そうだった! あんた、あたし達のフューリー返しなさいよ!」

レイルの言葉を聞いて、思い出したのか、アリンがティアアラに詰め寄った。

「えつと……ファング? どゆこと?」

「あー……実はな……」

アリンとティアアラが騒いでる間に、レイルはファングから地下牢から脱出した後、今の状況に至るまでの経緯を聞く事にした。

「なるほど。アリンちゃんの記憶を取り戻す為に、とりあえずフューリーを集める事になって、ソーヨル草原に来たら、ティアアラに痺れ薬

入りのお茶を飲まされ、追いかけて今に至ると……」

「キュイ、キュイ♪」

レイルが今の状況を纏めてると、キュイが肩に乗ってきて頬擦りしてきた。

「こら、くすぐったいてっば」

「キュイ♪」

「こらキュイ、お義兄様を困らせてはいけません！（キュイが私以外の人にこんな懐くなんて……）」

慌ててティアラがキュイを引き剥がすと同時に、初対面の人にこんなに懐くキュイを見て驚いていた。

「あーあ、誰かさんのせいで、お昼ご飯は盗まれるわ、誰かさんのせいで、お昼ご飯は台無しにされるわで気分が悪いよ！ 全く……」

「二……（相当、嫌だったんだな（のね）（ですのね）」

わざとちんぴらに聞こえるように文句を言うレイル。その様子を見て3人は、さっきのを相当根に持つてるんだなと思った。

「それでしたらお義兄様？ 私の縁者が宿屋を経営しておりますので、そちらでお食事はいかがですか？ お義兄様さえよろしければ、お泊まりの場所も提供しますわ」

「まあ、ゼルウィンズ外で野宿もアレだなって思ってたし。それにティアラには話しておきたい事もあるから、お言葉に甘えようかな」
それにティアラの縁者が経営してる宿屋なら、知り合いや元仕事仲間遭遇する事はあまりないだろう。

「それじゃあ、ティアラ、宿屋までの案内お願いしてもいい？」

「ええ、もちろん。付いていらして下さい」

「あ、フアング。何か食べたいものとかある？ リクエストがあるなら作ってあげるけど？」

「マジか!? じゃあ俺、兄貴が作る玉葱多めのオムライスが食いてえ！」

「どれだけ楽しみなのよ……」

やれやれ、着いたら色々ありそうだなと思ったレイルであった。

第4話 封印されし女神と邪神、そして再会

「どうぞ。ここが縁者の宿屋、向日葵荘ですわ」

「おー、外観が僕好み。ここを建てた建築者はいいセンスしてるよ」

ティアラの案内で宿屋に着いたレイル達。風車も建てられており、例えるなら、『自然豊かな宿屋』というのがレイルの第一印象だった。

「よし、手始めに三ツ星シェフの料理だ。次に三ツ星シェフの料理で、お次に三ツ星シェフの料理。そして最後に兄貴の料理でシメだ」

「あんたね……」

フアングの言葉を聞いて呆れるアリン。

…確かに以前、地下牢から脱出する際に、レイルが自分達にくれたお弁当を食べた時は美味しかったが。

「いらつしやい。お待ちしていたよ」

「お世話になりますわ」

「なんだ？ このおばちゃんは」

「さあ……？」

そして突然現れたおばちゃんに首を傾げるフアングとレイル。ティアラが挨拶してる限り、この宿屋の関係者だろうか？

「この宿屋の女将さんで、私の縁者の方ですわ。お食事は彼女が作ります」

「……このおばちゃんが三ツ星シェフか？」

「そうは見えないけど」

「だよ……ね？」

まあでも、案外見かけによらず、本当に三ツ星シェフだったりして。とレイルは内心想った。

「大丈夫。彼女の料理の腕は三ツ星レベルですわ」

「詐欺だ！ お前、嘘ついたのかよー！」

ティアラから衝撃の事実を聞いたフアングは不満な顔である。

「彼女の従兄弟のお嫁さんのお兄さんのご友人が三ツ星シェフです。つまり彼女も、ほぼ三ツ星シェフですわ」

「……ティアラ。それ、他人だからね？」

「しかも料理の腕と全くもって関係ねえ！」

レイルの言葉にそうだそうだ！と抗議するフアング。

「おやおや、お兄さん、私が三ツ星シェフじゃないって疑ってるね？」

私の名前はミツボ・シイ。つまり真正正銘のミツボシシェフさ」

「なんだその小ネタは！」

まさかのカミングアウトにレイルとフアングは驚きの声をあげた。

その顔が見たかったとばかりに、ミツボはあっははと笑う。

「でもまあ……しばらくの拠点ができた事だし……いっか」

とりあえず拠点は何とかなりそうさ。

ついでに後でミツボにキッチンを使わせてもらおう許可をもらおうと思うレイルであった。



「話って、なんだ？」

「……ちよつと、目を瞑ってくださいます？」

話があるとティアラに言われて、彼女の部屋に呼び出された3人は開口一番に彼女にそう言われた。

「……ねえティアラ。ちゃんと説明はしてくれるんだよね？」

「はい。それは勿論」

「……フアング、アリンちゃん。とりあえず言われた通りに目を瞑ってくれない？ ティアラが言ってるすぐ分かるっていう言葉は嘘じゃないと思うから」

今からティアラが何をするのかを解ってるレイルは念の為、彼女にちゃんと説明するのかを訊く。真剣な表情で返してきた彼女の目を見たレイルは、フアングとアリンに目を瞑れと指示した。一応、自分も目を瞑る。

「では……」

すると唐突な浮遊感を感じた。どこか遠くへと引っ張られている。そんな感覚だった。

「うわっ！ なんだこの感じ！」

「まだですわ！ 決して目を開けないで！」

「ちよつと!？」

やがて謎の浮遊感は終わりを告げた。レイル達の足元には踏みしめられる地面があることを感じた。

「……もう良いですわよ」

「なんだってんだ……いった……い……!？」

「……(まさかまたこの光景を見る事になるとはね……)」

目を開くと見たこともないような枯れた大地に立っていた。周囲を見渡せばその目に映った存在に己の目を疑う。この世のものとは思えない超越した存在がそこには居た。巨大な闇の化身。無数の剣のようなものによって鎖付けにされその底知れぬ邪悪を封じ込められた怪物。巨大な光の化身。怪物と同じく無数の剣のようなものによってその身を貫かれ眠りに就いた美女。

「でっけえ……女……? 石像か」

「め、女神、様？」

ファングはその存在がどういうものか理解してないのか者が物に見えたようだ。逆にアリンはその存在の正体を見抜いた。

「! お分かりになりますのね……流星は妖聖。……の、端くれさんですわ」

「今はそんな軽口相手にしてらんないわ。どこよ? ここ。あたし達、どうやってここに来たの?」

アリンの疑問にティアラは、ここは時間と時間の狭間にある意識空間で平たく言うと、夢みたいなものだと答えた。

「……これは、私……いえ。キュイの、特殊能力です」

「キュイ!」

「へへ。あなた、なんか凄い能力持ってるのね……」

「……(えー? アリンちゃん、納得しちゃうの?)」

ティアラが明らかに言葉を誤魔化したそぶりを見逃さなかったレイルは、その説明はどうなのか? と思った。

「ここはかつて女神が封印された空間。そしてあちらにいるのは……」

「……邪神!？」

「そう、邪神。かつて世界を滅ぼそうとしたと言われる邪悪なもの。現在は、体中に刺さった剣で封印されていますけど」

「ホントだ……微かに魔力の波動を感じる……死んではいないのね。それは女神も同じだけれど」

アリンが答える。もしそうだとすれば、女神もそうだが邪神も仮死状態に近い状態なのだろうとレイルは推測していた。

「あー。よく見りやなんか、トゲトゲがいっぱい刺さってんな。あれで封印されちまったのか」

「ええ。そして、そのトゲトゲもまたフューリーなのです。宿った妖聖は力を使い果たして消えてしまったけれど」

近くで見ても女神と邪神に刺さっている無数のトゲトゲの正体はフューリーであり、それに宿っていたと思われる妖聖の気配は無かった。

「かつてお互いを封印したフューリーも、全弾は命中しなかったようです。外れてしまい、人間界に残されたもの。それが……」

「あたし達のような妖聖とフューリーって訳ね」

「……(ま、例外もいるけどね)」

ティアラとアリンの言葉を聞いたレイルは、例外もあると心の中で呟いた。何せ、ホロン以外にも自分には彼女達2人という例外がいるのだから。

「ふくん。よくわかんねえけど、で、なんだってんだ？　ここが」

「先ほど手に入れたフューリーを使い、女神に刺さった剣を抜きます」

「! ……それって、封印を解く、って事？」

「……ええ。そうです。女神様の封印を解きます」

どうやらソーヨル草原で手に入れたフューリーを使って女神の封印を解くらしい。

「おい！　もうゴールじゃねえか！　俺はたらふく美味しい飯を食わせてもらおうー!」

「いや、1本や2本抜いたくらいじゃ復活しないでしょ……」

そんな訳ないでしょとファンングに突っ込むアリン。

「ティアラ。フューリーを使うって言うってたけどさ、具体的には？」
「はい、中に宿る妖聖を、あちらのフューリーに移して起動させ、抜き取ります」

「なるほど。引っ越してみたいな事をする訳ね」

ティアラの説明をファングとアリンにも分かりやすく例えると、あーなるほどと言って理解してくれた。

「とにかく要はフューリーを集めて、中の妖聖に封印を解いてもらえばいいんだろ？」

「まあそうですね。ああ、それと……封印を解こうとすると、何かが襲ってきますの。注意なさって」

「何かってなんだよ？」

いざ封印を解く作業を行おうとした手前、ティアラがそんな事をファングに言った。それを聞いて首を傾げるファング。

「多分……封印を守る防衛装置みたいなものかしらね」

「やっぱりあるんだね。そういうの。逆にない方がおかしいのかな？」

アリンの言葉にうな垂れるレイル。正直、防衛装置とかめんどくさい。

「そうですね。なかなか手強い相手です。抜く時は気をつけてください」

「どんなヤツがいるか知ってるの？」

「その……残念ながら契約してる妖聖は無理なようです。パートナーとの絆が継続中だから、でしょうね」

「ふーん……なくんか怪しいわね。さも見てきたっていうか……畏とかじゃないでしょうね？」

アリンはじろりとティアラに疑いの目を向ける。

「私、そんな手は使いません！」

彼女はその視線にムツとしたのか声を荒げて言った。

「カモミールティーの件、忘れたとは言わせないわよ？」

「こ、細かい事はいいですわ！ 女神を復活させるという目的は、あなたも同じなのでしょう。とにかく！ 私達はフューリーを集めて女

神の封印を解いていく！ いいですわね」

「はいはい。2人共、喧嘩なら封印を解くのが終わってからにして」

「うっ……はーい……」

「……（やっぱ、兄貴ってスゲーな）」

アリンとティアアラを仲裁するレイルを見て、ファングは色んな意味で凄いなと思った。

◇

「ひゃく、ほんとに襲ってきやがったな。てか、兄貴。素手で倒してたけど、手の怪我とかしねーのか？」

「別に素手で戦うのは何度かやってるし、鍛えて損はないからね。それにホロンが拗ねてたし」

「拗ねてた？ なんで？」

「……あのちんぴらにお弁当を台無しにされたせいで、ご立腹だったみたい。よっぽど楽しみにしてたんだよ。やっぱあの時、ピーしておけば良かった……」

「……（今後、兄貴（レイル）を怒らせないようにしよう）」

ふう……と溜息を吐きながら物騒な事を呟くレイルを見て、ファングとアリンは彼を怒らせないように誓うのであった。

「キュイキュイー！」

キュイも喜びながら何故かレイルの肩に乗っている。

「……」

「？ どうした兄貴？ 難しい顔して」

倒した筈の3匹のモンスターを見て、何故かその場から動かないレイル。気になったファングが訊く。

「ファング、ちよつとあの真ん中のやつに向かって1回、剣を振ってもらっていない？ 軽くでいいから」

「？ ああ。分かった」

どういう意味か分からなかったファングは言われるがまま、真ん中のモンスターにめがけて剣を振った時だった。

「ギユオオオオ!!」

痺れを切らしたのか、倒れてた筈のモンスター……ラクタバシヤが雄叫びを上げながら起き上がった。

「……やっぱ死んだふりをしてたなあいつ」

「は!? 死んだふり!? まさか他のやつもか!」

「ううん。他の2体は、フアングとティアアラが生命エネルギー箇所を狙ってたから、完全に死んでるから大丈夫」

突進してきたラクタバシヤの攻撃を回避しながら質問に答えるレイル。

「普通のモンスターと違うって事ですか!」

「……多分。知能レベルが違うが正しいと思う。モンスターだってバカじゃないし、こいつの場合、他の2体と違って、ある意味、防衛装置という役割は果たしてるね」

ラクタバシヤの連続攻撃を避けながら3人に大事だから覚えておきなよ?と解説するレイル。

「ギユ……ギユオオオオ!!」

「! あのモンスター、魔法を全身に纏わせてる!? フアング、レイル、当たったらヤバイよ!」

レイルに攻撃が当たらない事に苛立ったのか、ラクタバシヤは火属性の初級魔法、『バーン』を全身に纏わせ構えを取っていた。

「なあ兄貴。あいつ、なんか……勝ち誇ってるように見えるのは俺の気のせいかな?」

「気のせいじゃないと思う。あいつ、僕らが避けようが防御しようが関係ない攻撃をしようとしてるみたいだし」

最終的に周りは火の海になるだろうねと付け足すと焦り出すフアングとティアアラ。

「流石にあれは素手でだと難易度がちよつと高いかな。あいつ、フアングとティアアラの攻撃を喰らっても耐えてたくらいだし」

「で、ですが、お義兄様。お義兄様のパートナー妖聖さんは……」

言いにくそうに拗ねてるから使えないのでは、とティアアラが言うと、レイルは2人に微笑みながら安心させるかのように問題ないよと

答える。

「それじゃあ行くっか。ティルア！」

「はい♪」

するとレイルの隣に167cmの女性が現れた。その女性の姿を見たティアラは目を丸くした。

「う、嘘……お、お姉、様……？」

「はあっ!?!」

ティアラの言葉にファングとアリンは驚きの声を上げる。確かに女性とティアラは似た服を着てるし、雰囲気もどこか似ていた。

「あーもう！ レイ、どうしょ？ ティアラを直で見たら泣きたくなっちゃった……」

「とりあえず、あれを倒してからね？ 終わったらまた姉妹同士で話

せばいいじゃん」

「そうだね」

そしてレイルとティルアは、ラクタバシヤに向かって走り出した。

「ギョオオオオ!!」

「ティルア、フェアリンク！」

「うん、フェアリンク！」

そう叫ぶとティルアの身体が輝き出し、レイルの右手に収まる。彼の右手には、水属性の刀身を帯びた片手剣が握られていた。

「ティルア！」

『アタックエフェクト『スプラッシュユアサルト』』

「ギョオオオオオ!?!」

ラクタバシヤの懐に入り込み、泳ぐように攻撃をするレイル。何とか攻撃から逃れようと試みるラクタバシヤだが、それよりも先に渦潮の如くレイルの攻撃が襲ってくる為、逃げられない。

そして自身の目の前にレイルが現れる。

「さっさと終わらせて、みんなで晩御飯を食いたいんだ。ティルア！」

『アタックエフェクト『ティルアシュート』』

レイルの足元に集束した蒼色のボールのような物体が出現し、レイルはラクタバシヤめがけてボールを蹴り放った。

「ギユオオオオア!？」

断末魔のような雄叫びを上げながら、ラクタバシヤは蒸発しながら消え去った。

「はい。おしまい」

「す、すげえ……」

「あの2人って一体……」

「……」

声を揃えて呟くレイルとティルア。それを近くで見てた3人から見ても今の戦闘は圧倒的だった。

「ティルア。2人で積もる話はあると思うけど、ご飯を食べてからでいい? 僕とホロンもお腹減っててさ……」

「うん。それでいいよ。私もお腹減ってるし。ティアラも……それでいい?」

「は、はい……」

「それじゃあ……三ツ星シェフの晩御飯を食べに行こうか。ね、ファング?」

「兄貴、思い出させるなよ……俺のがっかりファンタジーを……」

こうして封印を1つ解いた一同は、元の場所に戻って、宿屋の食堂に向かうのであった。

第5話 シャイでアンチキショウな暗殺者

女神の封印を1つ解いた翌日。

「いらっしやーい！ お兄ちゃん達、今日も来てくれたんだね」

フューリーを集めるのに必要な情報を買う為、フアングの案で広場にやって来たレイル達。そこにはリュックサックを背負った金髪の幼い少女が居た。

「そっちのお姉ちゃん達は初めましてだね。情報屋さんのロロです！」

「こんな小さな子が、情報屋……!? 危険な目に遭ったりするのでは……?」

「ティアラ。情報屋っていうのは、相当な実力が無いとやってけない仕事だから、この子の場合は心配しなくてもいいと思う」

「大丈夫大丈夫！ そっちのお姉ちゃんの言う通り、あたし、結構強いんだよ！」

そしてレイルが自分は男だとロロに訂正すると、ロロは興味深そうな表情でまじまじとレイルを見た。

「へへ。じゃあ、お兄ちゃんがああの人かあ……」

「……君が僕のどの噂を言ってるのかはさておき、情報が欲しいんだけど?」

「はいはい。じゃ、お値段はこちらになりまーす」

ロロから提示された情報代を確認する一同。

「高っ。昨日も払ったんだぜ? ちょっとは負けようって気はねえのか」

「フアングさん、お支払いしましょう。子供相手に値切るなんて、大人のする事ではありませんわ」

あまりの値段に不満なフアングだが、ティアラが全額払うと言った事に驚く。

「なんだよ、お前なんて一番文句言いそうじゃねえか」

「へええへ意外と優しいところあるんだあ」

「か、からかわないで下さい。私はただ、当然の事を言ったまでです

わ

「こちら。ファンク、アリンちゃん。あんまりティアラをからかわないの。ティアラは照れ屋さんな部分もあるから、程々にしてあげなよ?」

「そうだよ。ティアラは昔から変なところで照れ屋だから、程々にね?」

「はーい」

「お義兄様!? お姉様まで!」

フォローしているようでフォローしてないレイルとティルアに地味にショックを受けるティアラ。

「毎度あり〜! フューリーは、クラヴィーセ洞窟のどこかにあるって話だよ」

ロロからフューリーの情報を貰った一同は街中を歩きだすのだった。

「そーいやまた目的地に向けて探索するのか……めんどくせえなあ」
「仕方ないでしょ? ほら、行くよ」

めんどくさそうに答えるファンク。それは仕方ないでしょと言うアリン。

「……それにしてもクラヴィーセ洞窟か。暗さ加減が前と変わってなければいいんだけど。一応途中でランタンか何か買って行こうか」

「それもそうだね」

「? お義兄様とお姉様はクラヴィーセ洞窟に行った事がございますの?」

気になったティアラがレイルとティルアに訊いた。

「昔、仕事してた時や今みたいに旅をしてる時にね。モンスター自体はそんなに強くないけど、あの場所って毎回入る度に暗さが変わるから」

「それでレイが洞窟に行く際は、念の為に携帯型のランタンを2つか3つくらい買って行こうって」

「使わなかった分は、旅してるの時に何かに使えばいいし」

「な、なるほど……」

用意周到な理由を聞いて、感心するティアラであった。



「着きましたわ。さあ、お2人のお手並みを拝見いたしますわよ」

「何よ偉そうに。どんだけ上から目線なのよ」

「あらごめんあそばせ。私おチビのアリンさんより背が高いものですから」

「身長の話してんじゃないの。精神的な話！ あんた絶対分かって言ってるでしょ！」

クラヴィーセ洞窟に着いて早々、ティアラとアリンの喧嘩が始まった。この2人はもしかして犬猿の仲なのだろうか？とレイルとティアラは見てて思った。

「……なんだろ、すっげー疲れる」

「フアング。ああいうのは今の内に慣れておかないと、この先もつと大変だよ？ はい。僕とホロンの手作りアイスキャンデーあげるから、元気出しなよ」

「……（スッ）」

「……あー、サンキュな。……うまつ！」

レイルの肩に乗ってたホロンがフアングにアイスキャンデーを渡す。

何故かホロンの顔が形になってる水色のアイスキャンデーだった。口にすると爽やかな味で、心なしか疲れも取れる感じがした。

「殺、殺殺殺……」

その様子を憎々しく睨む者がいた。

「……（ツンツン）」

「ん？ うん。確かに誰かが僕達を見てるね。別に放っておいていいんじゃない？ みんなー、誰かさんが僕らを見てるから注意してねー？」

「誰かって、誰ですの？」

気配に気づいたレイルとホロン。そしてレイルは敢えて相手に聞

こえるような声でフアング達に注意した時だった。

「殺。殺殺殺殺、殺殺」

現れたのは、フードを被った陰気な雰囲気を纏った少女。その隣には、和服に割烹着のような出で立ちをした白銀の狐耳の少女。

「こんにちは。こちらはエフオール。そして私はパートナー妖聖の果林かりんと申します」

「……(あの子、律儀だなあ。暗殺者っぽいあの子も根は絶対に良い子だな……)」

明らかにフードを被った少女が暗殺者っぽいのに、律儀に自己紹介をする彼女のパートナー妖聖は凄いなとレイルは思った。

「殺。殺殺殺殺殺、殺殺」

「てめえらフェンサーか。男女でイチヤつきやがって。私はてめえらみたいな恋愛脳ヤローが大っ嫌いなんだよ、とりあえず死ぬ。と、エフオールは申しております」

「ええ!? 色々ツツコミどころはあるけど、その二文字にそんな意味が含まれてんの!?!」

エフオールの口調の意味に驚愕するアリン。

「……(プンプン)」

「……何? 自分もあの子のような素敵なお人とデートしてみたいだつて? それ本気で言ってるの?」

レイルの肩で地団駄を踏みながら、果林を指差しつつ、何かを訴えるホロン。それを訳すレイル。

「……(シューーン)」

「だってこんな辛気臭いクラヴィーセ洞窟のイメージを覆す女神とその担い手が目の前にいるんだよって? 要は絵になるって事ね、それは僕も分かる」

「……(ハア)」

「ほんと自分もクララちゃんや、あそこにいる果林ちゃんのような素敵なお人と一度でいいから、お出かけとかしてみたいなって? ……それクララにどこかで会った時に言わない方がいいよ。クララが自信無くす」

ホロンの言い分に呆れるレイル。試しに果林の方に視線を向ける
と……

「~~~~~っ！」

何故か顔が少しだけ紅くなっていた。

「で、なんで殺殺言ってるんだよ」

「フアングさんいけませんわ。きっと深い事情がありますのよ。そう
でなければ、こんな恥ずかしい喋り方をする筈がありませんわ」

「確かにどんな理由かは分からないけど、可哀相に……」

「……」

エフオールの喋り方にティアアラが気の毒そうに言う。アリンも同
情的な目線をエフオールに送った。

「ちなみにエフオールがこのような喋り方なのは、お話するのが恥ず
かしいシャイなアンチキショウだからです」

「……それってただの照れ屋さんじゃん」

「……………殺っ！」

果林の言葉を聞いたレイルが決定的な事を言うと、エフオールは逃
げるように洞窟の中に消えていった。

「ああっ！ 待ってくださいエフオール！」

そして果林もエフオールを追いかけていった。

「なあ兄貴、なんだったんだアレ……？」

「さあ？ 照れ屋な暗殺者だったんじゃない？」



クラヴィーセ洞窟の奥まで進んだレイル達は、突き刺さったフュー
リーを見つけた。

「フューリー発見！ いただきー」

アリンが笑顔でフューリーを取りに向かうと……

「殺、殺殺殺」

「あ、また出た」

先程のシャイでアンチキショウな暗殺者、エフオールがアリンの行

く手を阻んだ。

「さつきはよくもバカにしたな。絶対に許さないし殺すから覚悟しろ。とエフオールは申しております」

「来やがったな。で、何の用だ？」

「殺っ！」

「だから殺すって言ってんだろが！とエフオールは申しております」

フアングの疑問に果林がエフオールの言葉を翻訳する。

「ところでエフオール、もう少し女の子らしい言葉遣いしたらどうでしょう。せっかく可愛らしいお顔なのですから」

「……言葉遣い以前の問題でしょうに。つうかさ……」

やれやれと溜息を吐くレイル。そして……

「……そういう風に育てられたのか、わざと言ってるのか知らないけど………あんまり調子に乗るなよ、小娘」

「「「「っ!?!」」」」

いつも以上の低い声でエフオールに呟くレイル。突然の変化にティルア以外の全員は背筋に寒気を感じた。

「レイ、手を貸そうか？」

「要らない」

「うん、分かった。それじゃあ私達は観戦でもしてましょ」

「おいー！」

「ちよつとティルア!？」

「お姉様!？」

まさかの言葉にフアングとアリン、そしてティアラはティルアへ非難めいた視線を向けた。だがしかしティルアは3人の視線を受けながらも、レイなら大丈夫だからと言い張る。

そしてレイルは指でちよいちよいと来いよとエフオールを挑発した。

「……殺」

その行動が気に障ったのか、エフオールはレイルに鎌を振り下ろそうとするが……

「っ!？」

その刃は届かず、何時の間にか彼の頭には居たホロンに白刃取りをされていた。鎌に力を籠めるエフォールだが、うんともすんとも言わない。そしてレイルが鎌の柄部分に手に取り、エフォールごと空中に投げ返した。

「殺!」

壁にぶつかる寸前に、エフォールは受け身を取り、態勢を整えて自身の武器を鎌から弓に変形させレイルに狙いを定めるが……

『! エフォール、後ろです!』

「っ!？」

果林の警告にエフォールは反射的に、身体を横に避ける。襲ってき た攻撃の正体は地面に当たると速度は保ったまま跳ね返り、なんとホロンの手に収まった。先程の攻撃の正体はホロンの基本形態の武器 だった。

「……パートナー妖聖の警告がなかったら、心臓貫通して死んでたよ ? 君」

「……(コクコク)」

「ごめんね、ホロン。いきなり威力調整とかさせちゃって」
「っ!？」

レイルの威力調整という言葉聞いたテイルア以外の全員が耳を疑った。この言い方から察するに、レイルはエフォールを殺す気だったのは確かだが、そうさせないようにしたのは彼のパートナー妖聖であるホロンという事になる。

「さてと……」

ゆっくりとエフォールに近づくとレイル。目の前の人物とそのパートナー妖聖の強さは明らかに異質で自分とは違う……殺されると思った彼女だった……

「フューリー、取ったどく」

「……(パチパチパチ)」

「殺?」

何故か彼は、エフォールをスルーして目的物であるフューリーを

取って仲間達の元に帰ろうとしたのだ。

「殺、殺殺！」

「おい！　なんで私を殺さないんだ！とエフオールは申ししております」

「？　だつて君、子供じゃん……今くらいのお仕置きで充分だよ」

レイルの口から『今くらいのお仕置き』という言葉聞いて、フアング達はいやいやいや!?と首を何度も横に振っていた。あんな物騒なお仕置きがあつてたまるか!と口にしたかったが、言えなかった。

「……(スツ)」

するとレイルの頭に乗ってたホロンがエフオールと果林の前に降りてきて、2人にアイスキャンデーを渡した。ホロンの顔が形になつてる水色のアイスキャンデーを。

「これを……私達にくれるんですか……?」

「……(コクコク)」

「……そう言ってくれる人なんて、初めてです。エフオール、ここは一旦退きましよう。では皆様、また会う日までごきげんよう！」

「殺」

そう言い残すと、エフオールと果林は洞窟の外へと消えていった。

「……(結局、さっきの暗殺者はなんだったんだろ?　まあ、1つだけ分かったのは、ホロンがまた他の妖聖の女の子に好かれたって事ぐらいか……)」

未だにバイバイしてる自分のパートナー妖聖の姿を見て、やれやれと思うレイルであった。

第6話 ヤタガン溶窟のフューリー

シャイでアンチキシヨウな暗殺者、エフオールと果林に遭遇した次の日。

「おはよー」

「おはよう、アリンちゃん」

宿屋の食堂でレイルが朝食の用意をしていると眠そうなアリンが現れた。

「どうもおそろようございます。出発の準備はとつくに整っておりますわよ」

ティアラがアリンに言う。

ちなみに彼女、レイルが朝食の準備をし始めた時に起きてきたので、早寝早起きなのは昔と変わらなかつた。三文の徳だし。

「何よ、まだそんなに遅い時間じゃないでしょ」

「日付が変わる前に寝て鶏が鳴くのと同時に起きる。人として当然ですわ」

「老人か。……てか、頬つぺたに食べかすが付いたまま言われても、説得力があんまりないわよ」

「へ?」

そう指摘されたティアラはキョトンと目を見開く。確かによく見ると、左の頬つぺた辺りに食べかすが付いていた。

「あ、ほんとだ。しょうがないなあ……ほら、ティアラ。こつち向いて」

「へ?」

多分、自分が作ってあげたデザートだろう。

そう思ったレイルは、てくてくとティアラの元まで歩き、常備しているポケットティッシュから一枚取って彼女の口元を拭いてあげた。

「はい、これで大丈夫。別に誰も取って食べたりはしないんだから、ゆっくり食べるんだよ?」

「うー……はい……」

「……（これじゃどつちが年上なのか分からなくなるわね）」

頭を撫でながら彼女に言うレイル。恥ずかしいのか顔を俯きながら返事をするティアラ。その光景を見て、どっちが年上なのか分からなくなるアリン。

「……（スツ）」

「あ。ありがと……」

そう思っていると、彼のパートナー妖聖、ホロンが朝食をアリンの前に持ってきた。

レイルもそうだが何故かホロンもエプロンを付けていた。すると今度は野菜スープを持ってきた。あんな小さな見た目で、こぼさずに物を持ってこれるのも凄いと思う。

……見てて、シユールだけでも。

「あー、ねみー」

「おはよう、ファング。寝癖が凄いから、食べ終わったらでいいから直しておきなよ?」

「おお。あー、地味に頭痛てえ……」

次に起きてきたファングが食堂にやって来た。彼は椅子に座ると頭が痛いとはく。それを見たレイルは直ぐに何かを作り、ファングの前に置いた。

「ほら、ファング。これを飲みなよ。楽になるから」

「……おー。うげっ……毎回飲んで思うけど、相変わらず慣れねえな。これ……」

「ねえ、何飲ませまたの?」

ファングに飲ませた物が気になったアリンがレイルに訊く。

「簡単に言くと、酔い止めと頭痛薬と眠気覚ましが混ざった料理……って言えばいいかな?」

「? なんて疑問形?」

「薬とも言い難いし、かと言って美味しい飲み物でもないからさ。僕的にこれはギリギリ料理って分類にしてる。ファング、また変な姿勢で寝てたでしょ?」

「うっ……だつてよお……俺だつて、気をつけて普通に寝てたんだぞ?」

フアングにそう指摘するが、こればかりはしょうがないとレイルは付け足す。

「それって単純にフアングの寝相が悪いだけじゃん」

「そうですわね」

「……お前ら、1回これを飲んでから言えよ。俺でさえ、気をつけてるようになっているんだからな？」

言いたい放題な女性陣にフアングが恨めしそうに言った。

「そういえば、ティルアは？　いつもならもう起きてくる筈なのに……ご飯冷めちゃうじゃん……」

「あ。そういやなんか昨日の夜だっけか？　兄貴がよく飲んでる酒になんか液体のようなやつを盛って自分で飲んでるのを見たな。結局、兄貴と一緒に飲んだのか？」

「あ”っ?」

「「っ!」」

まだ起きてこないティルアを見かねたレイルが心配そうに言う。

そしてフアングが思い出したとばかりにポツリと呟くと、レイルは低い声を出した。その声を聞き、思わず背筋を伸ばしてしまうフアング達。

「……ふん。いつも飲んでたお酒の味が違った理由はそういう事か。そつかく、ティルアが珍しく一緒に飲もうなんて言った理由はそういう……」

「あ、兄貴……?」

「レ、レイル……?」

「お、お義兄様……?」

フフフと不気味な笑みを浮かべるレイル。正直言っただけ怖い。

「僕、ちよ〜と〜と〜と、ティルアを起こしつっお話してくるから、3人は少しゆっくりしててね？」

「「……（ココココココ!!）」」

エプロン外しながら、少し遅れてもいいよね?とそこにあったのは極上の笑みを浮かべながらフアング達に訊くレイル。ただし額に幾本もの青筋が。これは怖い。

今の彼に反論したら命は無いと思った3人は揃えて首を縦に振った。

「……(くいくい)」

レイルがテイルアを起こしに階段を上がった直後、ホロンが見に行く?とフアング達を誘ってきた。正直に言っただけに行きたくないと同時に気になった3人は途中まで見に行く事に。

すると……

「ふわあー……ん〜……レイ? なあに〜……」

「……」

「あ、あれ? レ、レイ? な、なんでそんなに不機嫌なの?」

「……」

「え? き、昨日のアレはその……ちよ、ちよつとレイ? 落ち着いて、2人で話そ?」

「……」

「え、ええと……だ、だから、その……ひゃあああん!」

そこから先はテイルアの断末魔……というより、卑猥な声が聞こえた気がした。一体、何をされてるんだろうか?

「……」

とりあえず、知ったら自分達は何かを失いそうな気がしたので、3人はレイルの言われた通りに食堂で待つてる事にした。

◇

「あ。お兄ちゃん、毎度ー。お得な情報があるんだけど、この値段で買わない?」

「……ん。じゃあこれをお願い」

広場でロ口を捜し、情報料金をレイルは手渡した。

「まいどありー♪ フューリーの情報だよ。ええつとお。ヤタガン溶窟で見つかったっていう噂だよ」

「ヤタガン溶窟かあ……」

ヤタガン溶窟とは、大都市ゼルウインズの北西部にあるヤタガン火

山の麓に位置する洞窟の事だ。まさかあんな場所にフューリーがあるとは思わなかったが。

「そもそも噂って、誰から聞いたのよ?」

アリンが訊くと、ロロは内緒だと答えた。

「それより、お買い得商品があるんだけど、買わない?」

「……お買い得商品?」

お買い得商品と聞いて、レイル達は首を傾げる。

「うん。ドルファ社の新商品で、すごい美味しいカップ麺なんだけどさ、お湯を注いで完成するまで3時間かかるんだ」

「……(いや、なんで完成まで3時間かかるの?)」

「そのカップ麺には致命的な欠陥がある。手軽さに欠けるし、絶対に売れない。そして俺としてはいらない」

「珍しく賢い選択だわ。さあ、行きましょう」

「しつかり稼いできてねー」

そう言ってロロは、笑顔で見送った。

「……ロロちゃんや」

「? なあに、噂のお兄ちゃん?」

ファンング達に先に外に出ててと言ったレイルは、ロロに話しかける。

「そのカップ麺、1ついくら? 僕の見立てだと、150Goldだと
思うんだけど」

「お兄ちゃん、詳しいね? お兄ちゃんなら特別に100Goldで
売ってあげようか?」

「ううん。150Goldでいいよ。それを12個、買いたいんだけど……在庫ある?」

「まいどありー♪ 今度何かオマケしてあげるねー♪」

料金をロロに手渡し、商品を受け取ったレイル。

『レイ、なんで買ったの?』

「単純に食べたかったから。シャル達の間もあるよ?」

『それはまあ、嬉しいけど……もしかして3日分も買ったの?』
「うん」

フアング達が待つ外まで向かう途中、シャルに話しかけられたレイルは質問に答えた。しかしお湯を注いで完成するまで3時間かかるカップ麺を買う理由はあったのだろうか？

単純にレイルが食べたかったというのは本当かもしれないけど。

「魔法で熱湯を使えば、3時間というデメリットも解決できると思うて」

『なるほど。そういう事ね』

その答えを聞いてシャルは微笑みながら納得するのであった。

◇

「こちらがヤタガン溶窟のようですわね」

「まさかまたここに来る事になるなんてね……それにしても相変わらず暑いな」

ヤタガン溶窟に着いたレイル達。

その内部は古代文明によって作られており、舗装された通路も確認されている。だが同時にモンスターも潜んでいる為、こんな場所に来るのは一部の人間くらいだろう。

「とりあえず、3人にはこれを渡しておくから、飲んでおきなよ？」

「……」

そう言っただけレイルは、コルク栓で蓋をした小瓶をフアング達に手渡した。小瓶は冷たく、蓋からは煙が少し漏れ出していた。

「脱水症状を防ぐアイスドリンク。それを飲めば、少しの間だけ、こういう場所でも平気でいられるから」

「へえー。こういうのって、どこで売ってるんだ？」

「売ってないよ？ だって僕が魔法の練習がてら、独自に作ったやつだもん」

フアング疑問に答えるレイル。

とりあえず蓋を開けて飲んでみる3人。味はレモンシャーベットを液体にした爽やかな感じだった。すると早速変化が現れる。さっきまで暑かったのに、全然暑さを感じなくなった。

「おおー！ すげー！ 全然暑くねー！」

「ほんとだ。火山の中なのに全然暑くない……」

「ほんとですわ。お義兄様、売ったりしないのですか？ 凄く画期的だと思えますが……」

ティアラの言葉にファングとアリンも頷く。

こんな画期的な物、ゼルウインズで売りだしたら流行る事、間違いなしだと思ったからだ。

しかし、レイルは首を横に振る。

「いや売る気はないよ。こんなのが世の中に出たら、確かに便利かもしれないけど、作り方の殆どが魔法だから、悪用されやすいんだよ」

「それは……なんか残念ですわね」

「なんかもつたいねーな……」

「でもそれを聞いたら、確かにあり得なくはないかも……」

理由を聞いて残念がる3人。

新商品を開発する人は、こうやって悩むもんだよと3人に教えるレイルだった。

◇

「あつ、見つけました！ きつとあれがフューリーですわ」

「また予想外な場所にあるもんだね……」

しばらく歩いてると、通路の中心にある広々とした空間にフューリーが突き刺さっていたのを発見した。

「それじゃ、早速……」

ファングがやっとかといった表情でフューリーに近づく。

「ちよつとお待ちになって」

「なんだよ？ さっさと抜いて、こんな洞窟おさらばしようぜ」

「そうそう、何をもつたいつけてんのさ」

目の前のフューリーを抜こうとしたが、ティアラが待ったをかける。早くフューリーを取って、こんな暑い洞窟から出たいファングとアリンが不満を口にする。

「簡単に見つかり過ぎではありません？　こういう場合、何かしら罠が隠されてるとは思いませんか？」

「……罠？」

「ええ、フューリーが隠されている場所は、こういう古代の遺跡のようなものですからね」

隠した古代の方が、よくトラップを仕掛けているものだと言アアは付け足す。

「……確かにティアラの言う事も一理あるね。という訳で、今から古代人も想定しない方法で、このフューリーを取るから手伝って」

「古代人が……」

「想定しない……」

「方法……ですか？」

レイルがなんだ簡単じゃんみたいな感じで言った。そして彼の言葉の意味が解からないファング達は首を傾げた。

「先ず……こういう場所は大抵の場合、フューリーからほんの少し離れた場所に解除スイッチみたいのがある筈だから、ティアラとアリンちゃんはそれを探して？」

「二分かった（りましたわ）」

そう指示されたティアラとアリンはトラップの解除スイッチを探しに行った。

「兄貴、俺はどうすればいいんだ？」

「ファングは、そのフューリーの持ち手を触ってもらっていい？　正確には柄の部分で」

「えーっと、こんな感じでいいのか？」

「そうそう。そんな感じでそのまま置いてね？　仕上げをやっちゃおうから」

そう言うとレイルは、白いテープのような物を取り出し、ファングとフューリーを中心にして小さく囲むようにテープを床に貼った。

「……これでよし。ファング、フューリーから離れても大丈夫だよ」

「え？　離れちゃっていいのか？」

「うん。準備はできたから」

単純にフューリーの周りに小さな印をテープで貼っただけなのに、レイルは準備ができたと言ったのだ。

「お義兄様ー！ トラップの解除スイッチのようなものを見つけましたー！」

「はい。じゃあティアラとアリンちゃんはそこについてねー？ 僕らも直ぐに行くからー。ファング、行くよ？」

「お、おう……（え？ 俺らも向こうに行くのか……？）」

このフューリーをどうやって取るんだ？とファングは自分なりに考えたが、さっぱり思いつかなかった。

「ここからフューリーが見えるから、位置的にはこの辺りかな？」

「なあ、兄貴。結局、あのフューリー、どうやって取るんだ？」

「ん？ ここからだよ」

「「え？」」

ファングの問いかけにレイルは答える。

自分達がいる場所は、トラップの解除スイッチがある辺りで、フューリーがある場所までは少し距離があった。それを彼は今居る位置からフューリーを取るというのだ。

「ティルア」

「はい」

するとレイルはティルアを呼び出し、彼女をフェアリンクさせる。彼の右手には先端に深緑の勾玉のような物が付いた禍々しい見た目の鎖が握られていた。

「ティルアのフューリー形態変化を使って取るんだよ。最も、この鎖なんて形態変化、ティルアだけしかないんだけど。そーれ！」

『ちよつとレイ〜!? 久しぶりなんだから、もうちよつと優しく投げてよー!? ひゃああー!?!』

思い切り投げられた鎖は、フューリーの柄に絡みついた。掴んだのを確認したレイルは、一気に引き上げて抜き取った。

「あ、なんか溶岩が吹き出てきた。という事は罠が作動したって事だから……解除スイッチをポチつとな」

トラップの仕掛けを理解したレイルは、ティアラとアリンを見つけ

てくれた解除スイッチを押す。するとフューリーが刺さってた場所を中心に取り囲んでいた溶岩は通路の下の溶岩へと流れていった。

「ちよつとズルだけど、無事に取れたでしょ？」

「あー、確かにこの方法は思いつかないわな……」

「そりゃ古代人も想定しないわよ……」

「それにしてもフューリーが鎖に変化するなんて、私聞いた事がありませんが……」

フアングとアリンが感想を述べる一方で、ティアラは先程のフューリーの形態変化が気になっていた。

彼女が知る限りフューリーの形態変化は『剣』・『大剣』・『薙刀』・『ナツクル』・『槍』・『斧』・『鎌』・『弓』・『銃』・『ランチャー』の10種類が世間では確認されているのだ。

そこに11種類目の形態変化、『鎖』である。見た目が禍々しいのも気になるが……

「……皮肉なもんだよ。彼女自身に流れてる血がまさかこんな天文的確率でこうなるなんてさ……」

「っ!! (もしかして、お義兄様……)」

少し寂しそうに呟くレイルを見て、ティアラはある事に気づく。しかし確証がなかった。

女神の封印を1つ解いたその日の夜、姉であるティアラからこう聞かされた。自分がこうしていられるのはレイルのお陰であって、時がきたらティアラにも話すと姉は話していた。

そんな事を考えてると、自身の足元が振動し始めた。

「つて、今度は何……!?!」

「どうやらモンスターの親玉らしいな。今度は俺の出番だな!」

振動の正体は、装甲を纏った竜人と蠍のような甲殻獣だった。

「……お。ついてるね。食料が僕達の前に現れたよ。しかもあの甲殻獣は……ラヴァアンじゃん」

「「えっ。」」

自分達の聞き間違いだろうか？

凶暴なモンスターが現れたにも関わらず、レイルは目の前のモンス

ター達を食料と言ったのだ。

「なあ兄貴、あれ……食べるのか？ ドラゴンみたいなやつはともかく……」

「ラヴァアンはあんな見た目だけど料理すると意外と美味しいよ？」

前は確か……唐揚げと香草焼き、後はラヴァアンの出汁をふんだんに使ったスープだったかな？」

「しかも食べた事があるの!？」

まさか蠍のような甲殻獣……ラヴァアンを料理して食べた事があると聞いて、突っ込むアリン。

「あのドラゴンみたいなやつは……そうだけでなく、ビーフシチューの素材にもいいし……もやし炒めにも使えそうだなあ……テイアラは何か食べたいのある？」

「え!?! わ、私ですか!?!」

まさかのキラークラスに戸惑うテイアラ。

モンスター達に視線を向けると、ガタガタと怯えてるように視えた……気がした。

「そう、ですね……クリームシチュー……でしょうか……」

何故クリームシチューと言ったのか自分でも分からないが、食べたいものが何かと聞かれて頭に浮かんだのが、クリームシチューだっただけである。

「クリームシチューかあ……そういうえば最近作ってなかったっけ。よし、今日の献立はそれにしようか。……ホロン、フアング。あいつら、逃がさないようにね？」

「……(こくり)」

「おし！ 任せろ！」

こうして、テイアラのリクエストメニュー……クリームシチューの材料を得る為に、レイル達はモンスターに挑むのであった。

第7話 カダカス氷窟は寒いよ

ヤタガン溶窟のフューリーを回収してから数日。

「ふあああ……。なんだよ、いきなり叩き起こしやがって……」

「全くよ……お肌が荒れたら、どーしてくれるの。寝不足は美容の敵なんだから」

人がいい気持ちで寝てたのに。とファングとアリンが欠伸をしなから言った。何があったかと言うと、2人はティアラに朝早くに起こされたのだ。

ちなみにレイルはいつも通り、早めに起きたが。

「その程度の顔、多少のお肌の善し悪しなど関係ありませんわ」

「はあ……？ あんた朝っぱらから喧嘩売ってんの？」

「何が朝ですか。まっとうな人間なら、もうとつくに起きて働いてる時間です」

朝から早々に火花を散らすアリンとティアラ。

「つたく、これだからクソ真面目は。ほんの少しくらいサボる事を覚えねえと人生が味気ないぜ？」

「そうそう、ほんのちよつと二度寝したって……って、危ない、危ない。あたしまで流されちやうところだった」

「……（それにしても、アリンちゃんもファングに似てきた気がする）」
口には出さないが、アリンもなんだかんだ言ってファングに似てきたなどレイルは思った。

「全くお二人に合わせていたら、いつまで経ってもフューリーは集まりませんわ。さっさと支度してください！」

「……ところでティアラ？ ちやうど今フルーツゼリーが完成したところなんだけど。食べる？」

「はい♪ 頂きますわ♪」

「いや、食べるんかい！」

レイルの一言で、ティアラの行動が変わる事突っ込むファングとアリンだった。



「ヤッホー！」

「ごきげんよう。何かオススメの情報はあるかしら？」

「ご希望やお好みに合わせて、色々用意できるけど、そこはそれ、お金次第ね」

広場に行き、ティアラがロロに訊くと、彼女はお金次第で色んな情報を用意できると答えた。

「相変わらず露骨ね」

「あたし、お金しか信用してないの。お金大好きなんだもん」

ピカピカ光って綺麗だし、チャリンチャリンって、いい音するしと話すロロ。

「あたし的にはね、金って書いて、愛って読むんだ」

「……程度によるけど、その価値観の人はいると思うから、いいんじゃない？」

まあ、流石にロロくらいの歳で、その価値観になる人はそんなにいないと思うレイル。

「ちなみに極上のフューリーの情報があるよ？」

「では、それを頂きますわ」

「おっと、その前に。お金ちよーだい」

情報料金をロロに払うティアラ。

「まいどありー♪ カダカス氷窟にあるって話だよ」

「カダカス氷窟かあ……カダカス山脈の中腹にあるあそこか」

ロロから情報を教えてもらい、地図を広げるレイル。

カダカス氷窟は、大都市ゼルウィンズの北部にあるカダカス山脈の中腹にある氷穴である。

「そうなるよ、アレとアレが必要な。ロロちゃんありがと、行ってみるよ」

お礼を言うとロロは満面の笑みでまた来てねー、とレイル達に手を振った。

「具体的にはそうだなあ……あ。いいところに」

近くにいた巨大カマキリの足元に向かって、石を投げた。すると巨大カマキリはレイルが投げた石によって転んでしまい、完全に動かなくなってしまった……

「……とまあ、あんな風に頭を打って死んじゃう可能性もあるから、足元は特に気を付けるんだよ？」

「「は、はい……」」

今の光景を見せられた3人は、確かに足元には気を付けなければと思ったのだった。



「見て！ あのモンスターの体の中、フューリーよ！」

カダカス氷窟の奥へとたどり着いたレイル達の前にボスと思われるモンスターが居た。アリンがモンスターの体の中にフューリーがあるのを発見した。

「あの貝みたいなモンスターを倒せば、フューリーが手に入りそうだね」

「とつとと終わらせて、帰ろうぜ。兄貴が言ってた通り、俺は早く風呂に入りてえ。寒くてたまんねーから」

「それには同感ですわ」

そう言って3人は、貝のようなモンスター……フィルンバクトリテスに斬りかかったが、堅い殻を前に弾かれてしまう。

「『フェアライズ』！」

フアングとティアラはフェアライズと叫ぶ。すると2人の身体に必殺の鎧が纏われた。フアングは深紅の赤の鎧、ティアラは水色の鎧を。これはフューリーフォームと言い、自身の身体能力だけではなく、パートナー妖聖との力を最大限に引き出す事も可能な必殺技でもある。

「ギ、ギ、ギイイイイイ！」

「ぐっ！ こいつ……！」

「私達の攻撃を……っ！」

フェアライズした2人の攻撃をフィルンバクトリテスは鋭利な爪で受け止める。するとフィルンバクトリテスは大きな巨体を回転させ、ファングとティアラをふっ飛ばした。壁に激突する前にレイルが2人をキャッチして受け止める。

「よつと。2人共、大丈夫？」

「つてえ、わりい、兄貴。助かった」

「助かりましたわ、お義兄様」

フェアライズしてた為、致命的なダメージは受けていないファングとティアラを見て、安心するレイル。

再びフィルンバクトリテスを見る。2人が当てたと思われる攻撃箇所の堅い殻を観察すると、目立った傷はなく、フィルンバクトリテスからすれば、さっきの攻撃は掠り傷にも感じてない筈。

「ファング、ティアラ。あのモンスターは多分、物理攻撃……特に斬撃系は効かないと思う。後は多分……この寒さも関係してる筈」

「っ!!」

それを聞いたファングとティアラはハツとした。

レイルが言いたいのは、この洞窟内の寒さによって、自分達の身体能力が下がってるという事だ。現に今も寒さの影響なのか、体力の消耗が激しい気がするのだ……

「ああいう巨大貝みたいなモンスターは、対策が限られてるんだ。とりあえず、ファングとティアラには……」

そう言うレイルはファングとティアラにゴニョニョと小声でフィルンバクトリテスの対策を話す。

「え？ そんな単純な事でいいのか？」

「成功するイメージが浮かびませんわ……」

「とりあえず僕があいつを壁際まで、ぶっ飛ばすから、直ぐ動けるようにお願いね？」

その作戦を聞いたファングとティアラは半信半疑だった。しかも彼はフィルンバクトリテスを向こうの壁までぶっ飛ばすと言うのだ。

「ギギイイイイイ！」

「グ、ググイ……ググイイイイイ!!?」

レイルがとどめの魔法をフィルンバクトリテスに放った。

『メイルバーン』と呼ばれたその魔法の正体は、いわゆる熱湯で、それをまともに喰らい続けたフィルンバクトリテスは断末魔を上げて倒れた。

「倒した……のか?」

「フアング、死んだふりもしてないから大丈夫だよ。ティアラ、フューリーの方は?」

「よいしょつと。はい、無事に取れましたわ」

フューリーも無事に回収できて良かったと思うレイル達。するとアリンがこんな事を口にした。

「そういえば、さつきレイルが使ってた魔法って何?」

「そういや……俺もアレは初めて見たな」

「確かに気になりますわね。お義兄様、先程の魔法は何ですか?」

フィルンバクトリテスにとどめをさした時の魔法が気になったのか、3人はレイルに質問した。

「ああ……あれ? 僕、魔法の素質があんまりないからさ、初級魔法を組み合わせたただけだよ」

「「えっ?」」

「ちなみにさつきの、火属性の『バーン』と水属性の『メイウォル』を組み合わせて、”熱湯”を生み出したんだ。カップ麺も作れるし」

「お義兄様、もうそれは学会等に出した方がいいと思いますわ……」

それを聞いた3人……特にティアラは常識外れな事をしてないかと同時にレイルが魔法の新しい使い方を何気なくやってる事に驚きだった。

「さて。このモンスターを解体して、早くこの寒い洞窟から出よっか」

「なあ兄貴、解体してどうすんだよ?」

「さつきも言ったけど、海鮮鍋にして食べるんだよ。戻ったら、ミツボさんに大きな鍋がないか訊かないと……」

「……（やっぱり食べるんだ（ですね））」

ヤタガン溶窟の時もそうだったが、もしかするとレイルは、食べれ

そんなモンスターだったら何でも料理して食べる癖があるのでは？
とアリンとティアラは思った。

第8話 パーティの招待状と迷子の妖聖

「……やば。寝坊しちやった。あ、ティアラおはよ」

「おはようございます、お義兄様」

カダカス氷窟のフューリーを回収して次の日の朝。

未だに眠い目をこすりながら、ティアラに挨拶するレイル。今日は珍しく寝坊してしまったのだ。

「……にえむい」

「ほら、レイ。こつちに来て?」

「……ん」

フラフラと動きながら朝食をテーブルに置くと、ティルアが現れ自分の膝にレイルを座らせた。

「あの、お姉様……何してるんですの?」

「え? 何って……寝ぼけてるレイのお世話よ。えへへ、ぬいぐるみみたいで可愛いでしょ♪」

ギューつと、レイルをハグしながら妹の質問に答えるティルア。

「あんまりやり過ぎると、お義兄様に嫌われますわよ?」

「うっ! ……だって、レイってば、病氣的な抱き心地なんでもーん!

しょうがないでしょ! 頬っぺだって、肉球みたいにぷにぷになんだし〜!」

「具体的な例えですわね……」

そんな事を話していると、この宿の女将であるミツボがやって来た。

「おやおや。坊やが寝坊なんて珍しいね? ところで、坊やを膝に乗せてるお嬢ちゃんは何?」

「あ、初めまして。私はレイの婚約者で、ティアラの姉のティルアです。妹がお世話になっております」

「あら! 坊やの婚約者だったのかい。年は離れてるのかい?」

「いえ、レイは私と同じ24歳です」

「おやまあ! 大人びた坊やだとは思ってたけど……」

「ここでミツボ、レイルがティルアと同じ年だという事に驚く。

「あ、そうだ。忘れてた。ティアラ、あんたに手紙が届いてたよ」

「手紙ですか？」

「はい、これ」

ミツボはティアラ宛ての手紙を渡すと、去り際にティアラと何かを話していた。

「ミツボさん、面白くて優しい人ね？」

「ええ。お姉様の事も気に入ってましたし」

「そういえばティアラ、手紙って誰から？」

ティアラに言われ、封筒を開くと、中身は招待状だった。

「招待状……？ ドルフアから……」

「ドルファア？ ドルフアって……あそこの黒いビルみたいなやつで、ドルファア・ホールディングスとか言われてるやつ？」

「ええ」

「それじゃあ昔レイが話してた前に働いてた場所で合ってるわね」

「お義兄様が……ですか？」

それを聞いたティアラは初耳だった。

ティアラ曰く、レイルは4年前まではドルファアで働いてたとの事。チラツとレイルに目を向けると、ティアラに寄りかかって寝ていた。

「ただ今でも、腑に落ちないのよね……」

「？ 何がですか？」

「ティアラはまだ小さかったから知らないと思うけど、当時のレイはドルファアの幹部だったの。人望も厚かったって噂もあつたくらいだし。ねえ、今のドルファアの社長って誰？」

そう訊かれたティアラは、最近の広告をティアラに見せた。

そこにはドルファア・ホールディングスの社長、はながた花形の写真が貼つてあつた。

「……ふーん。副社長だった人が今の社長なのね」

「え？ このお方、元々副社長だったんですか？」

「レイが辞めるまではね。それに辞めた今でもドルファアが運営する孤児院に、こっそり顔は出してるの。レイって、面倒見が良いし、ああ見えて子供好きなところもあるし」

確かにレイルは面倒見が良い。

それこそティアアラも昔レイルに可愛がってもらった程だ。今でも子供扱いされるが。

「レイの事だから、この招待状のパーティーも行くでしょうね。気配を消しながらだけど」

「気配を消す……？」

「今日行った時に分かるわよ」

姉が言ってる気配を消しながらのパーティーに参加というのが、どういふものかティアアラには想像がつかなかった。

◇

「うわ、すごい……人がいっぱい」

「流石ドルファ主催のパーティーですね。集まってる人達のほとんどが街の名士ですわ。……それにしても、お姉様が言ってた通り、周りの人達……お義兄様に全然気づいてませんね」

「……僕の場合は色々あるから。それに気配を完全に消しとかなないと、ご飯にもありつけないよ」

パーティー会場の様子に目を輝かせるアリン。ドルファ社内の一室とはいえ、会場は細部まで徹底的にこだわっていた。来客も上流階級の人が大半だった。

そしてレイルの溜息交じりの言葉にティアアラは苦笑い。パーティー会場に入った途端、ティアアラ達以外、誰もレイルの存在を認識してないのだ。

まさかまたここに来るなんてレイルは思うのと同時に、気配を消してるとはいえ、見つかったりしないか不安だった。

「ねえ、ドルファって世界でも有名な大きな会社なんですよ？ なんであたし達を招待してくれたの？」

「それは私達がフェンサーだからですわ。きっとどこかで噂でも聞いたのでしょう」

「そういえば、あたし達以外にもあちこちにフェンサーがいるわね」
「！（ペチペチ）」

「……何？ ホロン。あ、ソーヨル草原で僕達のお弁当を奪ったちんぴら発見。ティアアラ、僕ちよつとあいつをピーしてくるよ」

「お義兄様、お気持ちはお察しますが、落ち着いてください」

「ホロンも落ち着きなさい」

ホロンがソーヨル草原で自分達のお弁当を盗んだちんぴらを発見し、レイルがホロンをフェアリンクさせようとした寸前に、ティアアラとアリンは2人を押さえた。

「とまあ、フエンサーは特殊能力者。この世界では稀有な存在です。誰もがその能力を欲し、有効に利用、活用したいと思ってる……」

「ふーん……」

「……（ま、第3者から見たら、そうなるよね）」

その理由を聞いて、レイルは今のドルファもそうなのかな？と思っ
た。

「ま、飯が食えるなら俺は何でもいいぜ……げつ、あいつはあん時の……！」

「どしたの、ファング？」

何かを見つけたファングにレイルが視線を向けると、クラヴィーセ洞窟で会った暗殺者とそのパートナー妖聖、エフオールと果林の姿が。

「見つかったら面倒な事になりそうだな」

「こういうのは無視した方がいいよ。あんま見ると、気づかれるよ。向こうは暗殺者なんだしき」

「そうする。兄貴、なんか飲むか？」

「あ、じゃあそのフルーツジュース取ってくれない？」

エフオールと果林に見つからないように、対処法をファングに教えつつ、彼から飲み物を受け取る。

「皆様、本日はお集まりいただき、誠にありがとうございます。ドルファ・ホールディングスのパイガでございます。総帥の花形に代わりまして、厚く御礼申し上げます」

「……（あ、パイガのとつつあんだ。また渋さに磨きがかかった気がする）」

眼鏡を掛けた男、パイガ・パイロンの姿を見たレイルは懐かしさを覚えた。よく彼の妻や子供の愚痴を聞かされたのをレイルは今でも覚えてる。最近はどうなのだろうか？

「ご存知の通り、我が社は衣食住、皆様の生活に関わる様々な事業を展開しております。また社会貢献もドルファが目指す所で、孤児院の運営など、慈善事業にも積極的に取り組んでおります」

「……あの口調からすると、孤児院の運営は今でもやってくれているみたいだな」

自分が辞めてからも孤児院の運営はどうなるかと不安だったが、ひとまず安心だった。ひとまずはだが。

『みんなの心に太陽を！』それがドルファの精神なのです」

「フン……いい話過ぎて嘘くせえな」

食事をしながらパイガの演説を聞きながら呟くファング。

「いいえ、社会貢献の話は事実ですわよ。世間からの評判も上々で、フエンサーの就職したい企業ナンバーワンですわ」

「ま、飯の味は信用してやってもいいが……」

「でも『みんなの心に太陽を！』っていう目標は、4年前まではそうだったんだよ。今はなんか……それさえも僕は怪しく感じるよ。なんか疑心暗鬼になりそう……」

「兄貴……」

「お義兄様……」

ティアラとファングの感想に、複雑そうな表情をしながらも同意するレイル。

「今宵は皆様と親睦を図りたく、このようなパーティを催させていただきました。どうぞご存分にお楽しみくださいませ」

そしてパイガは皆様にはピアノの演奏を楽しんでいただきましょうと言って、ピアニストを紹介する。

「ミスター・シャルマン！」

「……っ！（あ、シャルマンだ）」

まさかのピアニストが、知り合いの弟だったという事に驚くレイル。

『……………』

「シャル、大丈夫？」

『ええ、平気よ。少しびっくりしただけだから』

「ならいいけど、あんまり無理しないでよ？」

『……………うん。ありがと、レイ』

レイルの隣でシャルマンを複雑そうな表情で見るシャル。

実を言うと、彼女はシャルルランザ家の次女であり、シャルマンは彼女の生き別れの弟である。何故生き別れなのかというと、家でのいざこざ問題のせいで離れた家で済む羽目になったからだ。

『とりあえずレイ、パーティー楽しみましょ？ せっかくなんだし』

「……………そうする」

とりあえずレイルは、ティアラに少しだけ別行動するね？と声をかけておいた。



「……………ピアノを聴きながら、ご飯を食べるなんて久しぶりな気がする」

「……………（コクコク）」

レイルは2階のテラス付近で、シャルマンが弾くピアノを聴きながら、持って来た料理を楽しんでいた。

勿論、気配を消しながらだが。

「あれ？…なんかドの音がズレてるな。さてはあのピアノ、修理に出してないな」

「……………（コクコク）」

僅かな音色の違和感に気付くレイルとホロン。

シャルマンが演奏を間違えたりしないのは、レイルが一番知ってるので、彼もドの音がズレてる事に關しては、演奏してる際に気付いてるだろう。

「……………音楽かあ。マリーのハープが恋しく感じるよ。……………てか今更だけど、パイガのとつつあんが居るって事は他のみんなも居たりしないよね？」

ハーブの演奏が得意な同い年の彼女を思い出すと同時に、前の職場の人達がいなか焦るレイル。先程、演説をしたパイガが良い例だ。アポローネスは来てないだろう。だって彼の性格上、こういう場所には慣れないって言いそうだから。

「……(ツンツン)」

「何? あ、花形副社長……じゃなかった、今は社長か。渋さに磨きがかかったと同時に……なんか……老けたね」

「……(コクコク)」

「ぶえつくしゅっ!! おお、これは失礼……誰かワシの噂でもしてるのか?」

ホロンがドルファの総帥である花形を発見した。何やら上流階級の人達と話してた。思った事をレイルが呟くと、花形がくしゃみをした。それを見て、危うく笑いそうになるレイル。

「うえ、ひつく……ぶえくん……」

「?」

すると隣から泣き声が聞こえてきた。しかも聞き覚えのある声。

「ひつく……ぶえくん……」

振り返ると、白くて丸い猫みたいな物体に角と蝙蝠こうもりの羽が生えた生物……というか、妖聖が居た。妖聖は泣きながら何かを捜しているようだ。

「……(ちよつと待って!!) なんでクララがこんな所にいるの!?!)」

「……(あわわ)」

予想外の人物……というか、妖聖の姿を見て、レイルとホロンは焦る。その理由は単純だ。自分達は気配を完全に消しているが、唯一、自分達の存在に気づけるのがクララだ。

「ぶえくん……マリアノ様、どこにいるんですか……」

「……(しかも迷子!?) あのクララが迷子って、滅多にない筈なんだけど!?!)」

レイルが心の中で突っ込んだ時だった。

「ぶえくん……あつ……」

「……(どうしよ、目が合っちゃった)」

クララと目が合ってしまったレイルとホロン。そして数10秒後。
「ふえくん……！ レイルっ！！」

「しー！ クララ、分かったから泣き止んで！ 僕、見つからないように参加してるんだから！」

「……（あわあわ）」

知り合いを見つけて安心したのか、クララは泣きながらレイルめがけて突進……というか、軽いタツクルをしてきた。

◇

「……落ち着いた？」

「うん……」

なんとかあの手この手でクララを泣き止ませたレイルとホロン。正直、気配を消しながらだったので、かなり大変だった。

「……（スッ）」

「くれるの？」

「……（コクコク）」

「ありがと〜♪ はむはむ……」

自分用にとっておいた生ハムメロンをクララに進めるホロン。それを嬉しそうに食べるクララ。説明しておくが、妖聖クララは女の子である。

「……でも、クララが迷子なんて珍しいね？ マリーと一緒にじゃなかったの？」

「うん。最初はマリアノ様と一緒にだったんだけど、わたしがちよつと目を離したらいなくなっ……」

「あ〜……それで迷子になっちゃったのか。パーティで迷子になるのって、人が多ければ多いほど迷子になりやすいもんね……クララが不安になるのも分かるよ」

「……（コクコク）」

クララが迷子になった理由を聞いたレイルとホロンはうんうんと頷く。

「そういえば、クララ。最近のマリーはちゃんと休んだりしてるの?」
「えつとね、レイル達がいなくなってるから、ここ最近まで、マリアノ様はお仕事の時以外は引きこもりなんだ」

「……(え? マ、マリーが……ひ、引きこもり?) 気分転換とかで、どこかに行ったりしないの? 孤児院以外で」

「全然。わたしも誘ってるんだけど、上手くはぐらかされちゃうっていうか……」

自分がドルファを辞めた後、レイルはクララの主であるマリアノについて訊く。しかし返ってきた言葉は仕事づくめだとの事だった。昔はよく休日の時は、レイルとマリアノ、そのパートナー妖聖であるホロンとクララの4人で出かけて過ごしたものだ。

「……(ハア)」

「え〜!? こ、今度は、わたしとふ、二人つきりでって……うう〜……」

「……(ホロンとクララのやり取りを見るのも久しぶりだなあ)」

ホロンにそう言われ、照れてる様子のクララを見て思うレイル。実を言うと、クララはホロンに恋心を抱いている。そして当のホロンはそれに全く気付いてないのだが。

「ん? ねえクララ。あれ、マリーじゃない?」

「え〜? どこどこ〜?」

「ほら、あそこ。ここから見て、左端のところ」

「ほんとだ〜! マリアノ様だー!」

そんな妖聖を見て和んでいた時、レイルは見覚えのある黒いドレスに身を包んだベージュ色寄りの髪的女性を発見した。念の為、クララに確認を取ってもらったところ、捜していた人物で合っていたようだ。

「それじゃあ、わたし、マリアノ様の所に戻るね〜」

「うん。次は迷子にならないように気をつけてね? もしマリーに何か訊かれたら、同じ迷子になってた人が話し相手になってくれたって、クララの方から上手く話を誤魔化しといて」

「え〜? レイルの事、マリアノ様に言わなくていいの?」

「……うん。マリーも元氣そうだし、それにクララだけが知ってくれ

れば僕らはそれでいいからさ」

クララが心配そうな表情で言うが、レイルはそれでいいと言った。何せ、自分がドルファを離れた本当の理由を知ってるのはクララなんだから。

「あ、そうだ。クララにこれあげるよ」

そう言ってレイルは一枚の紙とチケットをクララに渡した。

「これなあに〜?」

「僕がドルファに在籍してた時に、よくホロンとお茶してた行きつけの喫茶店。カヌレとシフォンケーキが美味しいから、今度マリーと一緒に行ってみてよ」

「わあ。ありがとー♪ これだったらマリアノ様も行ってくれると思う」

受け取ったクララは嬉しそうにお礼を言うと、レイル達にバイバイしながら、自分を捜してるマリアノの元へ戻って行った。

「……さてと。ティアラには別行動する際に、状況によっては先に宿に戻ってるって言うてあるし、戻ろっか?」

「……(こくり)」

そしてレイルとホロンは、再び気配を消しながら、パーティー会場から出て行くのであった。



「マリアノ様〜!」

「クララ。どこに行ってたのよ。随分捜したのよ?」

「すみませくん。人が多くて迷子になっちゃって……」

「でも無事に見つかって良かったわ」

無事に主であるマリアノの元に辿り着いたクララ。迷子になったパートナー妖聖が無事に見つかった事に安心するマリアノ。

「? クララ、それは何?」

クララが器用に持つてる物に気付くマリアノ。

「わたしがマリアノ様を捜して迷子になった時に、わたしと同じ迷子

「なってた人から、話し相手のお礼につて貰ったんです」

別に嘘は言っていない。クララはレイルの事は伏せといた。

「そう。その方は今も居るかしら……お礼を言いたいのだけれど……」

「マリアノ様を見つけてくれた時に、パートナー妖聖の子に急かされて一緒に帰っちゃいました。入浴前に早くプリンを食べるって言ってました」

「ふふ……何よそれ。面白い妖聖ね……」

それを聞いて、くすりと笑うマリアノ。

この理由はホロンがクララに帰る理由はこんな感じで言っただけと云われたのだ。好きな人から？の頼みなので、直ぐにクララは首を縦に振ったが。

「これは……喫茶店かしら？ えつと……あら、私わたくしも聞いた事ないお店ね……」

クララが貰ったと思われる一枚の紙とチケットを受け取り、書かれていまする内容を読むマリアノ。

「その人の行きつけだった喫茶店みたいです。カヌレとシフォンケーキが美味しいって言ってました」

「せっかく頂いたのだし、今度のお休みの時に行きましようか。クララ」

「！はい♪ その人も喜ぶと思います♪ (やった♪ レイル♪、マリアノ様、喜んでるよ♪)」

嬉しそうなマリアノの反応を見たクララは、多分もうこの場に居ないレイルに感謝するのであった。

第9話 キダナル地域のフューリー

「へえー、そんな事があったんだ……」

「そうなの。ピアノを弁償しろって言われるんじゃないかと思ったけど」

ドルファ主催の立食パーティが終わって次の日。レイルはアリンから自分達が先に帰った後の出来事を教えてくれた。何でもファングと食べ物を取り合いになってしまい、おまけにエフォールに邪魔をされてしまいピアノにお茶がかかってしまったのだ。

「でも結果オーライで良かったじゃん。どの道あのピアノ、修理に出さないといけないくらい、ドの音がズレてたし」

「……それ、結果論にならない?」

「そうかもしれないけど、実はあのピアノって、定期的にメンテナンスしなきゃいけないタイプだから、どの道だよ」

だからこの場合は、どっちもどっちだとレイルは言った。

「……で、件のファングは?」

「洗面所で寝癖を直してるわ。珍しい事もあるものね」

そう言うアリンにレイルがそっか〜と言っていると、『だあく!!』後ろの髪の毛の寝癖が治せねえ!!』と洗面所の方からファングの音が聞こえた。

「おはようございます、お義兄様」

「おはよう、ティアアラ。昨日は先に帰っちゃってごめんね? 何か気になる話とかあった?」

「いえ、大丈夫です。気になる話といえば……そうですね、噂ですが」
食堂に入ってきたティアアラがレイルに挨拶をした後、パーティで気になる話……という噂を聞いたそうだ。

「噂?」

「はい。キダナル地域で御神体のように祀られてるといふフューリーがあるという噂ですわ」

「キダナル地域かあ……」

キダナル地域は、大都市ゼルウインズの東に位置する小さな村だ。

「じゃあ次の目的地はそこだね。何か明るい情報があるといいんだけど……」

嫌な予感がするのは気のせいか?と思うレイルだった。



「随分と荒れた街ねえ。人っ子一人いないじゃない」

「まるでゴーストタウンだな」

キダナル地域に着いたレイル達。

そこで見たのは人すらいない、まるでゴーストタウンのような住宅街だった。建物等はヒビが入ってたりと、完全に劣化しているのは明白だった……

「キダナル地域は閑静な住宅地の筈……それがどうしてこんな……」

「経済状況が良くないとは聞いてたけど……それにしては……っ!？」

しばらく歩いていたら時だった。

自身の背後にナニカの僅かな殺気を感じたレイルは咄嗟に殺気をまき散らした。襲ってきたナニカはレイルの殺気をもろに受けパタリと倒れた。

「グ、グゲ……ゲ……」

「きやあ! な、なに、こいつ!？」

「……肉食虫の亜種、グナーダだね。どうやら、キダナル地域がゴーストタウンの理由はこいつらが原因みたい」

泡を吹きながら倒れてる寄生虫型モンスター、グナーダを見たレイルが答える。他の場所で倒れてるグナーダを見る限り、どうやらここに住む人達は、このモンスターのせいで犠牲になってしまったのだろうとレイルは付け加えた。

「そもそもグナーダに街全体の人間を亜種にできる力なんて、僕は聞いた事ないけど……」

「!……フューリーですわ。恐らくグナーダがフューリーの力を利用して!」

「なるほどな」

「フューリーの噂は本当だったんだ……」

確かにそれなら、大量に潜んでいたグナーダの数も納得がいく。

「この街のどこかにフューリーを祀る祭壇がある筈です。それを探しましよう」

ティアラの一言で一同は祭壇がある場所に足を進めるのであった。



「なあ、さつきから泡を吹いて倒れてるグナーダが多くねえか？」

「そうですね……何故なのでしょう？」

「……（その原因は僕だなんて言うのなんかやだな。それにしても殺気を飛ばし過ぎたかな……？）」

祭壇に着くまでの道のりは比較的に楽だった。

そこら中に居る多くのグナーダ達が何故か泡を吹きながら倒れていたからだ。原因を知ってるレイルは面倒だから黙っておく事にした。

「あつ！ フューリーよ！」

アリンの声に視線を向ける。その先には祭壇に突き刺さったフューリーがあった。

「グギョオオオオオオオ！」

「「「っ!？」」」

足を踏み入れた瞬間、巨大な物体が上空から雄叫びを上げながら落ちてきた。

その正体は、グナーダの親玉と思われる巨大なモンスターだった。巨大化しているのは、祭壇にあるフューリーが原因だろう。

「ボスのお出ましか。フューリーは貰っていくぜ！」

「……よく見れば、周りにも数体のグナーダがいるね」

親玉のグナーダはファンク達に任せ、レイルは周りのグナーダを片づける事に。

「グギョオオオオオオオ！」

「え？ なんで？ あー……もしかして、アレかな。他のグナーダ達

を殺気で倒しちやつたから、それに怒ってる……とか?」

『いや、なんでそんなに冷静なの!?!』

……と思っただが、何故かグナーダの親玉はレイルに襲いかかってきたのだ。空中に回避しながら、襲いかかってきた原因をポツリと呟くと、アリンに突っ込まれた。

「ていー!」

「グオオオオオ……」

「……浅いか」

レイルは拳を放つ……が鋭利な爪によって防がれてしまう。しかしグナーダの親玉はレイルの拳圧により甲殻にヒビが入った事で呻いている。すると、周りのグナーダ達をチラチラと見始めた。

「グオオオオオ……!」

「なっ!?! こ、こいつ……」

「私達が倒したグナーダを……食べていますの……!?!」

なんとグナーダの親玉は、フアングとティアラが倒した他のグナーダを自身の爪で器用に刺し、そのままシヤムシヤと食べ始めたではないか。

正直言つて、見てて気持ちのいい物ではない。

「グオオオオオ!!」

「兄貴!」

「お義兄様!」

そして捕食して回復したのか、グナーダの親玉はフアングとティアラを無視して再びレイルめがけて飛びかかってきた。

その時だった。

突如、白い閃光のような物がグナーダの親玉の巨体を両断した。

「奇遇ですね。まさかこんな所で貴方にお会いするなんて」

「あれ? シヤルマン?」

その白い閃光の正体は、先日のドルファのパーティーでピアノを演奏していた青年、シヤルマンだった。

「兄貴、大丈夫か……って、お前、フェンサーだったのか。ピアニストかと思つてたぜ」

「ボクの方こそ。君はウエイターだと思ってましたよ」

「……（あ、この2人、お互いに仲良くは程遠そうな気がする……単純に素直じゃないかもだけど）」

フアングとシャルマンのやり取りを見て、2人は性格的に馬が合わなさそうだなとレイル思った。

「グ……グオオオオオ!!」

「こいつまだ生きてんのかよ!!」

「しかも気性が荒くなってない!?!」

奇声に近い鳴き声に振り向くと、シャルマンの攻撃によって、両断された筈グナーダの親玉がそこに居た。自身の片腕の鋏を斬られた事や突然の横槍のせいで明らかに怒り狂っていた。

「シャルマン。さっきの攻撃、別に手を抜いてないでしょ?」

「ええ。どのような時も全力を持って当たるのが、ボクの流儀ですの
で」

「……それはいい心がけだね。昨日のパーティーでのピアノ演奏も聴いてて良かったし」

「もしかして義兄^{にい}さん、演奏を聴いてたんですか? 完璧な演奏をお聴かせられなくて申し訳ないです」

「いや、元々あのピアノ自体、ちゃんと定期的な修理を出さなかった向こうが悪いんだから、シャルマンがそんな気を落とさないでよ」

「「え?」」

レイルとシャルマンのやり取りを見たフアングとアリン、ティアラは『義兄さん』という単語を聞いて目が点になった。

「……これ以上、キダナル地域を殺風景にしたくないんだ。せめてお前には安らかな眠りを与えてあげるよ」

「グオオオオオ!!」

「……シャル」

「ええ」

レイルの悲しそうな表情に應えるかのように、167cmの女性がレイルの隣に現れた。その女性の姿を見て驚くフアング達。特にシャルマンは目を丸くした。

「あ、貴女は……」

「シャルマン。終わったら、その事についてちゃんと話すから。シャル、フェアリンク」

「ええ。フェアリンク」

そう呟くと、シャルの身体が輝き出し、レイルの左手に収まる。彼の左手には、光属性の刀身を帯びた刀寄りの片手剣が握られていた。

「グオオオオオ!!」

「シャル」

『アタックエフェクト『サイファークライズ』』

レイルがその場で回転攻撃を放つと同時に、たくさんの光の柱が一気にグナーダの親玉に襲いかかった。

「グオオオオオオ!?!」

そして断末魔のような雄叫びを上げながら、グナーダの親玉は粒子になりながら消え去った。

◇

「……ごめんね、引き止めちゃって」

「いえ、逆に気を遣わせてしまって申し訳ありません」

グナーダの親玉を倒したレイルは、ファング達に一旦入口で待ってもらい、自分はシャルマンと話をする事に。ちなみに祭壇のフューリーは譲ってもらい、ファング達に預かってもらっている。

「デリケートな話だからね」

「……」

話題はもちろん、シャルの事だ。

「早速だけど、シャルマンは……シャルの事、憶えてる?」

「はい。……と言っても、知ったのはボクがフェンサーになってから少しなので、具体的な事までは……」

「……シャルマンは、どこまで知ってる?」

「シャルルランザ家の次女で、ボクの……生き別れの姉という所です」

それを聞いたレイルは、やっぱりかと思った。

「そっか。それじゃあ、シャルがどうしてこうなったかを話すから、シャルマン、誰にも言わないで聞いてほしい」

「……分かりました」

そして誰もいない事を確認したレイルは、自分の知ってる限りの事をシャルマンに話した。

「これが僕らがフューリーを探す事を除いての経緯だよ」

「それで義兄さん達は、世界を旅していると……」

話を聞いてくれたシャルマンは、時々相槌を打ってくれたり質問をしてきたが、レイルは彼が納得いくまで丁寧に話した。シャルだけではなく、ティルアとの関係も。

何故ティルアの事も話したかと言うと、後々ややこしい事になりかねないからだと判断したからだ。

「ただどうしてそうなったかはシャル達も分からないみたいだから、シャルマンの方でも情報を見つけてほしいんだ」

「確かにそれは引っかけられますね。分かりました。ボクの方でも少し探してみます」

あんまり長話もアレなので、ボクはそろそろ行きますねとレイルに言うシャルマン。

「シャルマン、身体には気を付けるのよ？」

「っ！ 心配してくれてありがとうございます。姉さんをよろしくお願ひしますね……義兄さん」

シャルマンはそう言って去っていった。

「もし世界が平和になったらさ？ キダナル地域に合う花を植えようと思うんだけど、どうかな？」

「ふふ、良いと思うわよ」

そしてレイルは大都市ゼルウインズで偶々花屋で買った花をフューリーがあつた祭壇に供えて、ファング達が待つ入口に戻るのであつた。

第10話 宿に戻ったら妖聖研究家に来てた

「お帰りー。待ってたよ」

「……………」

宿に戻った一同は各々の部屋に戻る。フアングが部屋に入ると見知らぬ黒髪の女性と頭の禿げた中年の男性が居た。

「ふーん、キミがフアング君か。なかなかモテそうな顔してるじゃないか」

「そうか？ 俺の方がイケメンだ」

女性の言葉に男性が答える。

「おい、あんたらいったい何もんだ？ 俺に何か用か？」

「私はハーラー・ハーレイ。こっちは私のパートナー妖聖のバハス。別に怪しい者じゃないさ」

「勝手に部屋に入りやがって、充分怪しいんだよ」

ハーラーは何事も無いようにそう言うが、フアングからすれば怪しいし、いい迷惑である。

「まあ、細かい事は気にすんなって。いい情報、教えてやつからさ」
「情報……………」

「ねえ、今、女の声が聞こえたんだけど……………あつ」

「あら、お客様？」

話し声が聞こえたのか、アリンとティアアラが部屋に入ってきた。

「ちようどいい。今からティータイムにしようと思ってたんだ。お嬢ちゃん達もおいで」

「オメエら、俺が作ってやったスイーツが食えるなんてありがたく思え」

バハスはそう言うと、テーブルに色とりどりのスイーツとティーセットを並べた。

「美味しい〜！ このガトーショコラ、最高〜！！」

「こっちのタルトも初めて経験するお味で、頬っぺたが落ちそうですわ」

「キューイ！」

「な、うめえだろ。俺は料理に関しちや嘘は言わねえんだ」

アリンとテイアラが目を輝かせながらケーキを頬張る。キュイもお気に召したようだ。

「うめえ……そっういや兄貴は？」

「キュイ」

「……（スヤア……スピー……）」

フアングの疑問に答えたのはキュイだった。よく見るとキュイの背中で、紫地に黄色い水玉模様のナイトキャップを被ったホロンが気持ちよさそうに寝ているではないか。

「おや、この子は……」

「おいおい、こいつはレイルのパートナー妖聖のホロンじゃねえか」

ホロンの見たハーラーとバハスが驚く。

「珍しい事もあるもんだ。この子がこの場に居るって事は……レイル君にティルアちゃん、それにシャルロットちゃんも一緒なのかい？」

「あ、はい。部屋で休んでいらつしやると思いますが……」

「ふあ……にえむい……あつ」

「レイ、大丈夫？　なんか賑やかな声がするけど……あつ」

「そうね。何か楽しい事でも……あら」

テイアラがそう答えると同時に、レイルが軽い欠伸をしながら部屋に入ってきた。彼の後ろにはティルアとシャルの姿も。

「やあー♪　3人共、お久しぶりー♪」

「元氣そうじゃねえか。オメエらもこっちに来て、スイーツを食え」

そしてハーラーとバハスもレイル達に笑顔で言った。



「ガトーショコラ、うまうま……」

「タルト美味しい♪」

「そうね。紅茶にとても合うわ」

「ホロン。うめえか？」

「……（コクコク）」

「そりや良かった」

「……（食べた方もそうだけど、ホロンの口ってどこにあるのかしら？）」

バハスが作ったスイーツを食べるレイル達。ちなみにホロンに至つては、自身よりも大きいフォークを器用に使つてガトーショコラを食べている。それを見たアリンはホロンの口はどこにあるんだ？と疑問に思った。

美味しそうに食べてるのは確かだが。

「ところで、ハーラーちゃんがなんでここに居るの？」

「二……（ハーラー、ちゃん……？）」

「いや、最近あちこちでフューリーをゲットしまくってる、イキのいい若手がいるっていう噂を聞いてね」

「ああ、そうなんだ。……ちなみに本音は？」

「どんな妖聖を連れてんのかと思つて見に来たのもあるね」

ハーラーに対しての呼び方もそうだと思つたファング達だが、少し気になる事が。

「妖聖に興味がおありなのですか？」

「まあねー。私や、妖聖研究家をやつてんだよ」

「？ 妖聖研究家ってなんだ？」

「そんな事も知らないんですか？ 妖聖研究家とは、まだ未知の部分の多い妖聖を、生物学的な見地から研究している学者さんの事ですよ」

「？」

「ファング。妖聖研究家っていうのは、分かりやすく例えると、オムライスはどういう経緯で生まれたのかを今でも研究してるって感じ」

「おっ。それなら分かるぞー！」

ティアラの説明もよく解つてないファングにレイルが彼にも分かりやすい例えで説明する。

「この子がファング君の妖聖かい？ ふうくん……へええく……」

「うう……視線で脱がされそう……というか、絶対脱がされた……」

ハーラーの視線に何かを感じ取つたアリンは、彼女から距離を取つ

た。

「妖聖ってやつは面白い生き物でね、パートナーの人間と色んな関係性をもったりする。親友とか師弟、恋人なんてのもいるんだよ」

「妖聖と人間のカップル!？」

「種族を越えた愛……ああ……なんてロマンチックなんでしょう……」

「あり得ないし……って、身近な一例が居たわね」

「そういえば確かに居ましたわね」

アリンとティアラの視線がレイルに向けられる。そういえば、ファング達には説明してなかった気がするの、彼は一応訂正しておく事に。

「ティルアとシャルは僕の大事な人だよ？　あとは……」「私達の婚約者よ」うん。まあ、そんな感じ」

「恋人じゃなくて、婚約者……しかも婚約者が2人も居るって……色々と凄いわね」

「お姉様から昔聞いた事がありますが、この方だったんですね……」
そこまで強調しなくてもいいだろうと思つたレイルだが、別に間違つてないのでそう説明しておいた。

「ちなみに、このバハスなんか、私にとっちゃ親みたいなもんさ。部屋を片せだの、服を畳めだの、歯を磨けだのって、うるさくてね」

「それはお前が身の回りの事を何ひとつできないからだ。炊事！　洗濯！　掃除！　毎日やってる俺に感謝しろ！　全く……」

「はいはい。感謝してるって」
この2人のやり取りを見たレイルは、全然変わつてないなと思つた。

「ところでキミ達は何でフューリーを集めているんだい？」

「はい。女神の封印を解いて、世界を平和にする為ですわ」

「俺はアリンの記憶の手がかりを探してるだけだ」

「ちなみに僕達は気づけば、こんな状況になつてた」

元々レイルはホロンとティルア、シャルの4人で旅をしていたのだが、ファング達に出会つて気づけば、フューリーを集めて女神の封印

解放という感じになっていた。

「記憶……って事はあれかい。アリンちゃんは記憶喪失ってか!？」

「そ、そうだけど……」

「珍しい……もう何年も妖聖研究家をやってるけど、記憶喪失の妖聖は初めてだよ……おい、ファンング君！ 私の妖聖と取り替えないか!？」

「は?」

「えっ……!」

アリンが記憶喪失と聞いたハーラーは、とんでもない事を言い出した。それを聞いたファンングとアリンは首を傾げた。

「ハーラー！ 無茶を言うな！ 大体俺はこんな奴のパートナーになるなんてごめんだ!」

「俺もだ、勘弁してくれ」

「あたしも遠慮しておく……色々調べられそうだし……」

満場一致の拒否にレイルはそりやそうだと頷いた。ハーラーは残念、と肩を落としていたが。

「あつ、そうだ！ いい情報があつたんだ。あんた達が欲しがってるフューリーの1本が、シユケスーの塔ってところにあるのさ」

「ホントに!? 早速行きましょう!」

「情報を提供したんだ。私も同行させてもらうよ。じっくり観察させてほしい」

「えっ……? なんかやだ……」

何を企んでいるのか分からないハーラーを見て、嫌そうな顔を浮かべるアリン。

「おい、ハーラー……」

「記憶喪失の妖聖なんて、何か秘密があるに違いないからね。研究者として興味がある。それに私はフェンサーでもある」

「ちなみにハーラーちゃんはこう見えて、妖聖の事以外にも詳しいから、仲間にして損はないと思うよ」

一応、レイルのフォローもあって、ハーラーが仲間になる事にファンング達は納得した。

「というか、シユケスーの塔にフューリーなんてあつたんだ？」

「そういえば、レイル君達はあの塔付近を拠点にしてるんだっけ？」

「フューリーがあるって知らなかったのかい？」

「何度かシユケスーの塔には入った事はあるけど、フューリーなんて見かけなかったよ？ ……そうなるよと最近の出来事になるよね、その情報」

「あの、お義兄様とハーラーさんはお知り合いなのですか？」

「そういや兄貴だけ、普通に話してたよな」

「確かに。でもなんかレイルだけ、ハーラーと話慣れてるっていう感じがするっていうか……」

さつきから気になっていた事をティアラはレイルとハーラーに訊ねる。その疑問はフアングとアリンも同じだった。何せ、2人の会話がただの知り合いとは別の感じがしたからだ。

「……言ってもいい？」

「私は別に構わないよ？ 別に隠す程でもないと思うけどね」

「ま、それもそうだね。ハーラーちゃんとは学生時代の同級生だよ」

「「え、ええええええええ！」」

なんとなく予想してた反応にレイルは、その内話すと言ったのであつた。ちなみに3人の反応を見たハーラーは楽しげに笑っていたが。

第11話 キュイの名前

「キュイ！ キュイキュキユ、キュキユーイ！」

「ええ、そうね。うふふ」

「お前ら、よくそれで会話成り立つよな」

シユケスーの塔に向かう道中、大都市ゼルウィンズの噴水広場にて。楽しそうにキュイと話すティアラを見てフアングが思った事を口にした。

「それは勿論。私とキュイは、運命的に出会ったパートナーですもの」
「もし良ければ、キミ達の出会いでも聞かせてもらえるかい？」

興味を示したハーラーが訊くと、ティアラは話し出した。

「私がフェンサーを目指し始めた頃の事ですわ。フューリーを探す為にも、まずは武器が必要ですので、武器屋に入りましたの」

そこで武器に混じって売られていたフューリーをティアアラが手にしたところ、偶然にもその武器にキュイが宿っていたそうだ。

「それがきつかけで、キュイと出会ったのですわ」

「キュイ！」

「武器屋に混じってたんだ。良かったね、いいパートナーに会えて」

「キューイ♪」

レイルがキュイにそう言うと、キュイは嬉しそうな声を上げ、レイルの肩に乗り頬擦りをする。そういう意味では、ティアアラがフェンサーになるのは運命的だと思えるだろう。

「その日から私とキュイは、共にフェンサー道を邁進してきたのです」
「なんだよ、フェンサー道って？」

「フアング。分かりやすく例えると、この世界の各町や村にある名物料理を食べつくす旅をする、みたいな感じ」

「お、それだったら分かるぞ！」

「……（いや、その例えはどうなの？ 正直、微妙に分かりにくいんだけど……）」

フアングにも分かりやすい例えで説明するレイルに、もつと具体的な例えはないのか？とアリンは思った。

「でも、キュイキュイって鳴くからキュイって名前にしたんでしょ？
あんたにしては意外よね」

「私も素晴らしい名前を思いつくす限り考えました。しかし、全て
キュイに拒否されてしまったのです」

それを聞いて、興味があつたのかどんな名前だったの？とティアラ
に訊くアリン。

「そうですね。例えば、アレクサンドロス三世とか」

「……………」

ティアラの口から仰々しい名前が飛び出してきた。

「おい待て。仰々しすぎないか。それと二世はどこに行った」

「一世と二世は、私とお姉様が昔飼っていた金魚とハムスターですわ」

「……………」

「レイ、シャル。お願いだからそんな目で私を見ないで」

まさかの妹からの発言にレイルとシャルから、そのネーミングセン
スはどうなの的な視線がティルアに送られる。

「それから、クレオパトラ七世とか……………」

「……………(じー)……………」

「だからレイとシャルは私をそんな目でみないでってば!? なんかホ
ロンからも視線を感じるし!？」

拳句の果てにレイルとシャルだけでなく、ホロンにまで視線を送ら
れ、ティルアは軽い涙目状態である。

「つーか、そもそもこいつはオスなのかメスなのか?」

「妖聖に性別など些末な問題ですわ」

「キュイ!」

「いや、それを些末で片づけるのは大雑把過ぎやしないかい?」

これには流石のハーラーも大雑把過ぎないかと思った。

「他にもいくつか素晴らしい名前候補はあつたのですが、どれもキュ
イは気に入らなかったようで……………」

未だにレイルの肩に乗ってるキュイを見ながらティアラは答える。

「それでシンプルにキュイで落ち着いたのか」

それなら納得だと思ったファンング達だったのだが……………」

「いえ。正式には、キュベリエルといいます」

まさかの名前にズツコケる一同だった。

「それはそれでまずくない?」

「そうでしようか?」

別の意味でまずくないか?と言うアリンにティアアラは首を傾げる。

「キュイ! キュキュイ! キュキュキュイ!」

「これでも妥協したの。正直、ネーミングセンスが酷すぎ、諦めかけてたら、よーやくまともな名前を考えてくれて良かった……だってさ」
「ふーん、そうなんだ……っていうかレイル、今キュイの言葉を翻訳したよね?! 解かるの!?!」

「あら。そうでしたの……って、お義兄様、キュイの言葉が解かるんですか!?!」

キュイが何かを言っていたので、レイルが翻訳する。なんでもない表情で翻訳するので、突っ込みに遅れるのと同時に驚愕の表情になるアリンとティアアラ。

「うん。学生時代の時にキュイに似た生き物と過ごしてた時があったからね。その影響もあると思ってる」

「キュイに似た生き物……ですか?」

「似た生き物……あつ、思い出した! 確か、レイル君にべったりだったあの子か。言われてみれば、ティアアラ君の妖聖に似てるね」

首を傾げるティアアラ。

そしてレイルの言葉にハラーが思い出したとばかりの表情で言った。どうやら彼女も知ってるようだ。

「入学して、ルームメイトになったレイル君と一緒に校内を散策する事になってね。その時に彼が見つけたんだ」

「レ、レイとルームメイト……う、羨ましい……」

若干2名ほど落ち込んでいたが、なんでもハラー曰く、入学してルームメイトになった2人が放課後に校内を散策してたところ、キュイに似た生き物が茂みで倒れてたのをレイルが発見したのだと言う。

「……(じー)」

「それがあの子なのかって? うん。そうだよ? ホロンは気づいて

たんじやないの?」

「……(ふるふる)」

「あー、今の話が合うようで合わないからか。そりや仕方ないよ」

レイルとホロンが何か話していたが、正直2人が何の話をしているのか分からない。ティルアとシャルも首を傾げながら顔を見合わせる限り、彼女達でも分からないようだ。

「てことはアレだよな。兄貴はこいつの言葉が解かるんだよな?」
「うん」

「こいつの性別って、結局どっちなんだ?」

キュイの言葉が解かると知ったフアングは、気になった事をレイルに訊く。

「教えてもいい?」

「キュイ! キュイキュキュ、キュイ!」

「……許可も貰ったから、教えるけど、キュイは女の子だよ? メスつて言い方はアレだから訂正させてもらったけど」

「「え、えええええええ!」」

フアングとアリンはともかくとして、キュイのパートナーであるティアラまで驚いてどうするのか?と内心思うレイルなのであった。

第12話 ハーラーは残念美人

「着いたよ、ここがシユケスーの塔だ」

「まさかまた入る事になるうとは……」

無事にシユケスーの塔に着いた一同。レイルに至っては内部に入るのは久しぶりだった。

「この中にフューリーが？」

「ああ。レイル君達は知ってると思うけど、シユケスーの塔は5階建てで、各階が強力なモンスターによって守られているのさ」

「平たくいえば、五重の塔。だから今回は最上階にあるらしいフューリーを見つければいいって事」

アリン達にもハーラーの説明が納得できるように分かりやすくするレイル。

「今まで何百人ものフェンサーが挑んだけど、誰一人攻略した者はいないって話だよ」

「何百人？ それちよつと盛ってねえか？」

「ああ、ちよつとな。でも攻略した人物なら、ここにいるぞ？」

「「は？」」

そう言つてハーラーは、レイルを指差す。そして目が点になるファング達。

「運動がてら、挑んでみたら……ねえ……？」

「……（コクコク）」

「特に魔法の練習にはちよつどよかつたよね」

「そうね。いい練習にもなったし。確か……多い時で5周はしたわよね？」

「「……」」

そう言うレイルにホロン、ティルア、シャルも頷きながら言う。しかもサラツとシャルがとんでもない事を言つてる事に驚くファング達。終いにはレイルが今回もなんとかなるでしよと言うのであった。

「ふく……それにしても、こん中、暑くないか？」

「言われてみれば、多少は……」

「……（なんだろう。嫌な予感がする）」

「……（ササッ!）」

ハーラーが汗を滲ませながら言った。シユケスーの塔の内部は基本的に温度が変わりやすいので、彼女が暑いと言うのも無理はない。だがレイルはハーラーの『暑い』という発言に嫌な予感がした。

その証拠にホロンが隠れるようにレイルの頭に逃げた。ティルアとシャルにも目を合わせてみるが、彼女達も何かを察していたようだ。

「やれやれ……どつこらしよと」

「ええつつ!」

「は、ハーラーさんっ!」

「シャル! レイの目を塞いで!」

「もう塞いでるわよ! レイ、見えてないわよね!」

「ナイスプレーな目隠しをする2人のお陰で、勿論見えないんだけど……」

服を脱ぐというハーラーの突然の奇行に困惑するアリンとティアラ。察していたのか、ティルアとシャルは直ぐにレイルの目を塞いだ。

「ん、どうした?」

「うわあああああ! あ、あんたは見ちやダメ!!」

「おい! 急に何すんだ、前が見えねえ!」

「見なくていいのっ!」

振り向くフアングにアリンが慌てて彼の目を塞いだ。フアングはフアングで、おい。俺の目を潰す気か!?!と騒いでたのが聞こえたが。まあ彼の気持ちも解かる。自分も最初はそんな感じだったなとレイルは思っていた。

だつてティルアとシャルが加減してくれなかったし。

「ハーラー、早く服を着ろ!」

「あんたも細かいねえ……よつこらしよと」

バハスに言われながらも、渋々と服を着るハーラー。

「所かまわず服を脱ぐな!いつも言ってるだろう!」

「あー、ごめんごめん。そんな青筋立ててなさんなつて」

「全く、お前って奴は……!」

そしてようやくティルアとシャルから解放されたレイル。溜息を吐くバハスを見て……

「……ハーラーちゃんの脱ぎ癖、治ってないんですね。バハスさん」
「そうなんだよ。レイル、お前からと言ってやってくれ!」

相変わらず苦労してるんだなと思った。

「ハーラーちゃん、所かまわず脱ぐのは止めた方がいいと思うよ?」

「えー? だって暑いじゃんかー……」

「ならせめて、脱ぐなら昔みたいに着ただけにして」

「んー……まあ、それなら考えておくよー」

バハスに言われ、レイルもハーラーに注意を試してみたが、反応が微妙な感じだった為、今後のハーラーの脱ぎ癖に関しては、多分マシになる筈だと常人以外には一応伝えておくのであった。

第13話 荒くれフェンサーと衝撃の事実

なんやかんやあって、無事にシユケスーの塔のフューリーを取れて数日後。

ロロから、大都市ゼルウインズの南に位置する村、ソルオール村にフューリーがあるとの事。

だったのだが……

『その村で管理されてるフューリーがあるんだけどね？ 最近、ザンクっていう荒くれフェンサーがその村を乗っ取っちゃって、フューリーを自分の物にしたらしいよ』

現状あんまりよろしくないんだよ。とロロが詳しく教えてくれたのだ。

一応、レイルの方でも酒場のマスターからソルオール村について聞いたのだが、マスターの方も最近いい噂を聞かないですねと言っていた。

ソルオール村はワイン製造で有名なので、ロロの情報とマスターの情報と合致するのだ。なので一行は現在ソルオール村に向かっていく最中である。

「なあ兄貴、なんでローブなんて着るんだ？ 寒いのか？」

もう少しで村に着く時に、何故かフード付きの黒いローブを着始めたレイルを見て疑問に思ったファングが訊く。

「それもちよつとあるけど、ファング達と別行動用にちよつとね？」

今回のフューリーは少し手がかかりそうな気がするから、念の為にね」

なんでもレイル曰く、十中八九だがザンクというフェンサーはソルオール村の人々を人質にしてそんな予感がするらしいのだ。

「だからファング達が村のフューリーを回収してる間に僕は先に村に侵入して人質を助けに行ってくるよ」

「うーん……兄貴一人だけ行かせるってのもなー……」

「……フフフ、相手の焦る顔が目には浮かぶよ」

「な、なんかレイル、楽しそうね……ちよつと怖いけど」

ソルオール村にいる敵がザンク1人だけとは限らないので、さり気なく数を減らしてくると言うレイル。フードを被ってる為か、表情が視えない彼の笑い声を聞いて引き攣った笑みを浮かべるアリン。そんなこんなでレイルはフアング達とは別行動を開始するのであった。



「戦え！ 親と子！ なんなら恋人同士で！ オレは人間の情というヤツが壊れていくのが大好きなんだ！ ギヤハハハハハハ!!」

「……（思いのほか簡単に侵入できた）」

村の入口の反対側に居た見張りの兵士を気絶させ、ソルオール村に侵入したレイル。気配を消しながら広場らしき場所に向かうとそこには件のザンクが居た。周りには村人らしき人達が地に伏していた。「ど、どうか、お許しください……！ このままでは村が滅んでしまいます……」

「なんだテメエ？ ならテメエが戦え。確かテメエにはひとり娘がいたっけな……生き残った方を助けてやる」

「……む、娘だけは……お助けを……!」

あろうことかザンクは村長と思わしき人に自分のひとり娘との殺し合いを要求してきたのだ。

「……（人質の扱いを分かっているやり方だな。認めたくはないけども）」

その様子を陰で見てたレイルはザンクのやり方は非道的だが、理には敵ってると思った。一般的に見れば卑怯だと思われるかもしれないが、これがもし『敵陣を取る戦い』だったら話は別になる。

「代わりに、私が……!」

「バカか、こいつ。自害しやがった。ケツ、胸糞悪い」

「……………」

「……（あの金髪の人、さつきもそうだったけど、もしかして……）」
その場で自害した村長を見て吐き捨てるように呟くザンク。その

隣で複雑そうな表情をしてる金髪の青年がレイルは気になった。もしかしたら悪い奴ではないかもと感じた。

「おい、娘を連れて来い！ バラバラにしてお手玉にしてやる！」

「キャハハハ！ いい！ それいいっ！」

兵士に命令するザンク。お手玉と聞いて、ザンクのパートナー妖聖のデラが面白そうに笑う。

「相変わらずですねえ、ザンク」

「あん？ よう、パイガじゃねえか」

「っ!?(なんでパイガのとっつあんがこんな所に居るの!?)」

現れた眼鏡をかけた男、パイガの姿を見たレイルは目を見開く。彼を見かけたのは、ドルファ主催のパーティ以来なのだから。

「なんだ？ 首尾よくフューリーを手に入れたオレに褒美でも持ってきてくれたのか？」

「確かに私達ドルファ幹部の使命はフューリーを集める事なのですがね……」

「……(私達?)」

パイガの『私達』という発言にレイルは疑問を感じた。この言い方だとザンクも関係してるという事になるからだ。

「もつと穏便に事を進めるようにと上からのお達しがあつたのですよ」

「おい、オレのやり方にケチつけようっていうのか!？」

「い、いえ、私ではなく上からの通達です。いいですかザンク。あなたがドルファの幹部だという事は秘匿されていますが、万が一世間にもバレてしまえば我が社の信用は何処までも沈んでいくんですよ」

「っ!?(あいつが……ドルファの幹部!?)」

その言葉は普段冷静なレイルが衝撃を受けるのに充分だった。まさかここ居る兵士は全員ドルファ兵士かと思つたが、レイルが知ってる鎧とは全く違っていた。……となると、ザンクの親衛隊みたいなものだろう。

「(ここでの出来事を解決しても、いずれ……いや、近い内に今とは違うドルファのみんなと戦う事になる。それなら……)」

それならこれを機に自分のこれからを決めよう。目的こそは変わってないが、かと言ってソルオール村を放っておけないのも事実だから。

「……ところでフューリーは保管してあるのでしょうか？」

「忘れちゃった。その辺にあるんじゃないかねえの？」

「わ、忘れてたって……!?!」

「(という事は、村のフューリーは別の場所にあるのか……)」

少なくともザンクが持つてないだけ有益な情報だ。なら自分は人質を救う作戦に専念できる。フューリーとザンクはフアング達に任せる事にしよう。

「ザンク様」

「何だ？」

するとザンクの親衛隊の兵士がやって来た。

「村に入ってきたよそ者を捕らえたのですが、ザンク様に用があると申しておりますが、いかが致しましょう？」

「どんな奴だ」

「はい。その、なんか勇者様御一行などと意味不明な事を言っております……」

「勇者だと……？ 面白え冗談を言うヤツだな、通せ」

「はっ」

ニヤリと笑ったザンクは兵士に通せと命令した。兵士が言っていた勇者様御一行というのは、フアング達の事だろうなとレイルは思った。

「フアング達も上手く潜入できたみたいだし、僕達も動こうか」

「……(こくり)」

『うん』

『そうね』

レイルの合図にホロンとテイルア、シャルが領いた時だった。

「ザンク様！」

「あん？ 何だ？」

先程の兵士とは別の兵士が入れ違いで慌てた様子でやって来た。

「隊長から伝言で、村に入ってきた侵入者を捕らえる許可が欲しいと」
「侵入者だあ？ さっきの勇者とかほざいてた奴らじゃねえのか？」

「あ、いえ、それが……」

兵士がザンクに説明しようとした時、反対側の村の入口から『隊長、落ち着いてください！』とか『おい！ 誰か隊長を押さえろ！』とか『ポポーン、こんな地味な嫌がらせされて黙ってられつかく……ヒーハー！』等が広場まで聞こえた。

「……おい。何があつたか一から説明しろ。アイツがあんなに荒れた声を出すなんて相当だぞ？」

「は、はい。隊長が反対側の入口の見張りの兵士からの連絡が遅いので、直接見に行つたのですが、兵士が気絶しており、隊長が落ちてた槍を手に取つたのですが……その、槍にバターが塗つてありまして……」

「なんだその地味な嫌がらせは!?!」

「しかも隊長曰く、蜂蜜も塗つてあつたそうです。拳句の果てに『引つかかってくれてナイス!』と侵入者からの煽り文が地面に書かれてまして……」

「……それで今に至るってか?」

「はい」

それを聞いたザンクはしゃあねえなと言いながらも溜息を吐いた。

「ザンク様!」

「チツ、今度は何だ……って、お前はなんでポコポコなんだ!」

「……隊長を押さええてたら、巻き添えを喰らいまして。そ、それより、これを!」

すると今度は何故かポコポコの兵士がザンクの元にやって来た。手に持っていた一枚の紙をザンクに手渡す。紙には『ザンクつて実はアホなん?』と書かれていた。

「……捕らえる許可を出そうと思つたが前言撤回だ。おい、アイツに伝えておけ。お前の好きにしているし、何だつたらぶつ殺してもいいってな!!」

「はっ!」

「ふむ。私達は隠れた方が良さそうだな」

「そうしましょ（……？　どこからか懐かしい気配がするわね。気のせいかしら？）」

内容を読み終わったザンクはブチ切れながら兵士達に命令した。その間にパイガと鼠ねずみのような大きな耳を持つ女性……パートナー妖聖のビビアはこっそりとその場を去った。同時にビビアは何か懐かしい気配を感じたが、気のせいだと思った。

「ホロン。パイガのとっつあん行った？」

「……（コクコク）」

「……ふう。危うくビビアに気づかれるところだったね？」

「……（コクコク）」

パイガが去った後の確認したレイルはホロンに確認をとる。実はビビアの気配察知に引っかかるところだったのだ。ビビアはクララと違って、気配だけでホロンの存在を認識できるのだ。

「……（面倒事になる前に行動開始しますか）」

とりあえず今は人質が捕らわれてる場所を誰にも見つからず捜す事にするレイルだった。

第14話 出現！ ザンクの親衛隊長

「……………でもないか」

ファング達とは別行動を取り、ソルオール村のどこかに捕らわれている筈の人質を捜すレイル。

『レイ、あそこの建物から人の気配を感じる』

「ほんとだ。入口の見張りがやけに多い……………」

ティルアの指摘にレイルは古びた建物に隠れながら入口に近づく。入口の前には見張りの兵士が5人居た。

『レイ、どうするの?』

「ザンクには僕が先に村に侵入したって事はバレてるから、まずは見張り全員を倒す」

どの道バレるんだからさ?と、シャルに言うレイル。

「さてと。それじゃあ正面突破しよっか?」

「……………(こくり)」

『無理だけはしないでよね? レイ』

『そうね。いつも言ってる事だけど』

そしてレイルは兵士の前に姿を現した。こうなると姿を隠す為に今まで使ってたローブは用済みなので、レイルは脱ぎ捨てながら兵士達に突っ込んだ。

「な、何者だ!!」

「侵入者だ! 捕まえろ!」

「まさかさつき伝令にあつた侵入者か!?!」

突然の侵入者の出現に動揺する兵士達。

「……………遅い」

「「うわあっ!」」

そして一瞬の内に兵士3人を気絶させ無効化するレイル。ホロンをフェアリンクさせ、武器の柄で攻撃しただけなので死にはしない。

「そ、そんな。一瞬で3人を……………」

「相手は見たところ子供のようだがフェンサーだ。だがこっちは2人だ! 一斉にかかれば……………!」

勝てるかと兵士が言おうとしたが、目の前に居た筈のレイルはおらず、自分達の背後に居たのだ。

「…喋ってる暇があるなら、かかって来なよ。まあ、もう終わってるけど……」

「えっ……」

「い、今、何が……」

今の一瞬で何が起きたのか解らない兵士2人はその場で倒れた。相手の兵士達は奇襲に慣れてなかったのか、あっけなく終わった。

「一見すると建物の中は何もないけど……」

建物の中は何もない。

だが見張りをしていた兵士達が居たくらいだ。逆を考えれば、何かを守ってたという事になる。

『レイ、この床の下から人の気配がするわ。多分、人質にされたソルオール村の人達だと思っわ』

考えてるレイルにシャルが言った。自分達が今居る床の下という事は、地下牢があるのだろう。それならやる事は一つだ。

「どこからか敵に見つからずに地下牢に続く場所とかないかな……」

『レイ、今居る場所から左上の端の位置に明らかに脆そうな床を見つけたよ。多分そこから地下牢に侵入できると思っよ』

テイリアがそう答えた。レイルは指示通りに向かう。

すると明らかに一箇所だけ人為的な脆そうな床があった。強い衝撃を与えれば地下牢があると思われる場所に行けそうだ。

「……（とりあえず急がないと）」

ザンクと兵士達の会話を思い出すレイル。

侵入した際に自分とホロンで仕掛けた悪戯に引っかけたと思われる人物は血眼になって自分達を捜してる筈だ。なら、急いで人質を助けに向かわねばと思っったレイルは力強く足を床に踏みつけて穴を空けて、そのまま地下牢に侵入するのであった。



「……………ん……………んは……………ん?」

一方その頃。ティアラは見知らぬ場所で目を覚ました。辺りを見渡すと、今居る場所が地下牢だという事に気づいた。

「そ、そうですわ……………! 確か、兵士に突然襲われて……………捕らわれてしまったのですね……………」

捕まった事を思い出したティアラは沸々と怒りを感じた。

「やってくれましたわね、あの野郎っ! 絶対に許しませんし、叩きのめして血反吐を吐かせてやりますわっ!!」

「な、なんだ! 貴様は……………「邪魔だよ」ぶふああっ!?!」
「!?!」

牢屋の外から見張りの兵士の叫び声と聞き覚えのある声が聞こえたティアラは牢屋の外に視線を向ける。見張りの兵士は誰かに蹴り飛ばされたのか、泡を吹きながら倒れていた。

「キュイ! それにお義兄様!」

「キューイ!」

「ティアラ、大丈夫?」

その正体はレイルと彼の肩に乗ってるキュイだった。

「どうしてお義兄様がここに?」

「ティアラ達以上に先に潜入した時に、村の人達が人質になって地下牢に捕まってるって聞いて、地下牢を捜して内部を散策したら、キュイが牢屋の中に居るのを見つけた。それでキュイがティアラも捕まってるって」

簡単に説明したレイルは、牢屋の鍵を開ける。

「それと地下牢で捕まっていた村の人達は全員助け終わって、村が安全になるまで別の場所で大人しくしてって指示しておいたから」

それを聞いたティアラはホッとした。

「それでティアラには……………「侵入者はどこ?」ヒーハー!?!」
レイルが何かを言おうとした瞬間、背後から殺気と奇声が聞こえてきた。

「見つけたぞ! 隊長! あのガキです!」

振り向くと現れたのは数人の兵士達、そして長槍を持ち、紅い服を

着た186cmの男だった。

「ヒーハー！ やあやあ、これまた可愛らしいガキだね〜」

「な、なんですの。私、あの方の声を聞いただけで寒気がしますわ……」

長槍の男の口調を聞いたティアラは何故か寒気がした。

「……うわ。なんか蜂蜜くさいな」

「ああん？ て事はお前が、オレの部下やオレ様に地味な嫌がらせしたヤツ？ お陰で未だに手のべたつきが取れないでござるよ！」

「部下はそうだけど、僕が仕掛けた罠に引っかけたのはお前でしょ」

「……あの、お義兄様。何をやらかしたんですの？」

「侵入する際に、村の反対側の入口で見張りの兵士を気絶させたついでに兵士の槍にバターを塗っただけ。……で何故かあいつが引っかけちゃったみたい」

「……(な、なんて地味な嫌がらせ!? 私だったら、耐えられませんが……)……それに引つかかるあの方もどうかと思います(……)」

それを聞いたティアラは何故それに引つかかったのかと思うのと同時に、自分だったら精神的に耐えられないなと思った。

「とまあ、ジョークタイムはここまでにしてだア。地味な嫌がらせをオレらにしたお前を見たら、殺したくなかったポン」

「……(めんどそうな奴に目を付けられちゃったなあ)」

レイルに長槍を突き付けながら言う男。

どうやら自分とホロンが仕掛けた罠に引っかけた男は、ザンク以上に危険な感じがした。

「ティアラ」

「は、はい」

「この村の人達から、この地下牢と繋がってる地下迷宮のどこかに、村のフューリーが保管してあるって言ってたから、ティアラはそれを回収してファング達と合流してくれない？ こいつの相手は僕がするから」

「それなら私も……！」

「それはダメ。ティアラはフューリーを回収するのを優先して」

「っ！ 分かりました。お義兄様、お気をつけて」

そう言うとティアアラは、その場から走り出した。とりあえず村のフューリーは大丈夫だろう。

「隊長。あの女、追いかけますか？」

「いんや、無視してもだいじょうぶい。お前らは万が一の場合に備えて、ザンクくんが御前試合してる場所付近で待機なー？」

「はっ！」

男に命令された兵士達は元来た道へと戻って行った。てつきり、ティアアラを追いかけるのかと思っただが。

「……随分と慕われてるね？ ザンクの部下だから、てつきりへっぴり腰なのかなと思ってたんだけども」

「フン。ザンクくんとオレ様の部下達は心配性な部分もあるが、基本的に優秀なんだな。なんら問題ないでござるよ！」

「…ホロン。」スピアピックモード」

「……（こくり）」

長槍を構えニヤリと笑う男。

そしてレイルもホロンをフェアリンクさせ、槍のような形状のボロい釘から螺旋状の溝が掘られたアイスピック風に変形させ、右手に持ち、構えた。

「場も温まってるまりましたところで……では、ザンクくんの親衛隊長、ロンギ行きま〜す！」

ソルオール村の地下牢での静かな空気の中、戦いの火蓋が切られた。

第15話 見逃されたと思ったら、仲間が増えた

ソルオール村の地下牢でザンクの親衛隊長、ロンギと交戦になった
レイル

「ヒヤッハー！」

「……」

長槍による連続突きをアイスピックで弾くレイル。

「ヒーハー！ よくそんな短い針モドキでオレ様の槍を躲せるねえ〜
！」

「……そっちの得物が長槍だからね。いつもの武器じゃ心許ないと
思っただけだよ」

「ならこいつはどうだ〜？ ほうわったあー！」

そう言うところ、ロンギは、長槍を横に振り払った。即座にしゃがむレイ
ル。攻撃を上手く躲せたが、牢屋の周囲が真つ二つになっていた。

「……（地下牢の地形を変える程の腕力、あいつもう人間じゃないな）」
そして気づけば、地下牢の広場らしき所に居た。何せ、移動しなが
らの戦闘を行っていたのだから気にする余裕なんてなかったが。

「シャオオオオオオ!!! 串焼きになるれえええつ！」

「（疾い……けど……）」

雷のような踏み込みでレイルに突っ込むロンギ。

「……ふんっ！」

「ぬあに!？」

即座に質量分身させたアイスピックを2本投げたレイル。スピー
ドを殺されたロンギは投擲されたアイスピックを躲しながらもその
まま突っ込む。

「いっただきいいいっ！」

「……遅い」

振り下ろされる長槍を躲すレイル。一瞬だけ緩まった踏み込みな
ら躲す事は造作もないのだ。

「ヒーハー！ お前いいね！ さあもつと楽しもうぜ？ レッツエン
ジョイ！」

「…………お断りっ！」



「フアングさん、これをー！」

「す、凄えパワーが沸き上がってくる……これが、ソルオール村のフューリーなのか……!?!」

無事に地下迷宮でソルオール村のフューリーを見つけ出し、フアング達と合流したティアラはソルオール村のフューリーを投げ渡した。「テメエツ、どうやって地下牢を脱出した?!」

「簡単な事です……地味な嫌がらせをされたと言う、変な人には絡まれかけましたが、お義兄様に助けていただきました！」

「……地味な嫌がらせをされた奴だと? つ! オレ様の事実はアホだとかほざいてたクソヤロウの事かーっ!!」

ティアラの言葉の意味を理解したのか、フューリーフォームしたまま地団駄を踏むザンク。緑色のカメレオンを巨人にした姿……というより怪物の姿で悔しそうに地団駄を踏む姿は滑稽極まりないが。

「あれだけフューリーを保管しておけと言ったのに、奪われてしまうとは……責任を取れよ、ザンク……!」

物陰に隠れザンクとフアングの戦いを見ながら呟くパイガ。

「テメエら、このオレをこけにしやがって……! 全員ぶっ殺してやるっ!!!」

「上等だ! 来いアリン!」

「うん!」

反撃開始だとフアングが剣を構えた時、爆発音が鳴り、それと同時に左側の壁が壊れて誰かが吹っ飛んできて態勢を整えていた。煙が晴れるとそこに居たのは長槍を持った男だった。

「ぐっ! なんだあいつは?!」

『長槍の……男?』

「よお、ロンギじゃねえか。お前が掠り傷なんて珍しいなあ、オイ?」
「ありやー? 気づけば、ザンクくんが居る場所まで来ちゃったで

しゆか？ そうなんよー。だーけど、流石に今の一撃であいつも死んで……………っ!？」

何かを感じたロンギが長槍を構えた瞬間、弾丸のような何かかロンギに突っ込んだ。長槍で受け止めるが、突進による衝撃波の余波のせいで壁際までぶっ飛ばされた。

「……………いちいちよく喋るな。ほんとに」

「兄貴ー!」

「ん？ あれは……………っ!？ な、なんでレイルがこの場に居るんだ!？」

ロンギをふっ飛ばした者の正体はレイルだった。彼が無事な事に安心するファンク達。まさかの人物の登場に驚くパイガ。

「ヒーハー! 今のはちよくと痛かったな……………お陰でお気に入りの服がボロボロですよ。困ったポン!」

「……………チツ（壁にぶつかる直前で受けるダメージを減らしたな、あれ……………）」

未だに服だけがボロボロだけの状態のロンギを見て、軽く舌打ちをするレイル。

「……………」

「っ! ヒーハー!」

今度はレイルが突っ込みアイスピックで攻撃を仕掛ける。そしてレイルの攻撃を見切るかのように、ロンギは長槍でアイスピックの攻撃の軌道を弾き返す。

「嘘だろ。隊長の攻撃が当たらないなんて……………」

「あの野郎……………ロンギの槍捌きを完全に見切つてやがる。あのガキ、一体何モンだ……………」

「速過ぎて目で追いつけねえ……………」

『あ、あたしも……………』

「ええ。相手も方もですが……………」

「確かに敵さんの槍捌きも大したもんさね。あの短い武器で渡り合うレイル君もだけど」

両者による神速の斬り合いは、この場に居る敵味方全てを驚かせるのに充分だった。

「喉の仏、もくらったあ〜!!!」

「たあつ!」

「何っ!?!」

急所を狙った突きによる攻撃をレイルはアイスピックで下から突き上げて長槍の中心を目掛けて弾き、ロンギの態勢を崩す。その僅かな隙をレイルは逃さない。攻撃の手を緩めず攻め込む。

「はあつ!」

「ちっ……! ほうわったあー!」

相手のゼロ距離に入り込んだレイルは、身体を回転させ加速力を起こし、アイスピックでロンギの首元を狙い刺すが、寸前の所で止められた。アイスピックを弾き返し、間合いを取るロンギ。

「ヒーハー! いいよ! お前いいよ! この場で殺すのが惜しいくらいだよ! ヒーハー! ザンクくん。オレ、こいつをお楽しみのハンバーグにしたいんだけど?」

「お前がそう言うなんて珍しいな。この村のフューリーはこいつらに取られちまったけど、どうするよ?」

「フューリーなら別の場所で回収すればいいんじゃないやね? 場所の目途はついてるし、後でこいつらを殺した後でも奪えば済むし」

「それもそうか」

狂ったように笑いながらロンギはザンクに言う。それを聞いたザンクはフューリーフォームを解除しながらニヤリと笑った。

「フアングとか言ったな? そのフューリーはくれてやる。良かったな? お前、命拾いしたぜ?」

「何だと?! 負け惜しみか!」

「あ? んな訳ねえだろ。機嫌が良いロンギが厄災魔法をお前らに撃たねえだけ、運がいいって事だ」

「そーそー。お楽しみの奴に取って置く。そういう子なんだよオレは」

「……っ! (それって、まさかあの……!?!)」

「っ! 厄災魔法だつて……!?!」

ザンクの言葉に噛みつくフアングに対し、レイルとハーラーは『厄

『炎魔法』という言葉に反応した。

「お前ら！ 退くぞ！ 今日には宴会だ！ 上が何か言ってきたら、オレとロンギが言い返してやるから安心しろ！」

「可愛らしいそのガキ。お前の顔、オレ覚えたぞく？ さあ、て、みんな行くよーん。他の部隊にも伝えといてねーん。今日はパーッとやるから、食材と酒の買い出しはよろしくねーん」

「はっ！ 撤退だ！ 退けーっ、退くのだ！ ……ところで、今日の晩飯担当は誰だ？」

「お前じゃね？」

「は？ いや自分、昨日隊長と一緒に作ってましたし！」

兵士達に命令したザンクとロンギは去っていった。兵士達は兵士達で何故か今晩のメニューを各々口にしていたが。

「あ、あの2人はまた勝手な事を……」

「でも部下の子が報告書を持って来てくれるからいいんじゃない。レイルとホロンの事はどうするの？ あの子達、多分ザンク達の事知らないと思うけど？」

「そ、そうだな。それも含めて、直ちに報告せねば……！」

物陰に隠れていたパイガはビビアの助言もあって、上にどうやって報告するか考えながら去っていった。

「……やれやれ。面倒な奴に付きまとわれたかも。厄災魔法って単語を聞くとは思わなかったけど……」

「確かにね。私もあの言葉は、嘘には聞こえなかったけどね」

レイルもファング達に合流。そしてハーラーが気になる事もあるけど、帰るとしますかと言った時だった。

「ちよっと待ってーな、ファングのダンナ！」

金髪の青年が声をかけてきた。

「ファング。なんか呼ばれてるよ？」

「あ！ お前は……誰だっけ？」

「ズゴooooooooo!!」

「……いや、知らないんかい」

ファングの反応にレイルが冷静に突っ込み、金髪の青年はズツコケ

る。

「ガルドや、ガルド！ ガルド・ガルドズオムや。さつきダンナと熱いバトルを繰り広げたフェンサーや！」

「ああ、そうだったな。うっかり忘れてた」

「アリンちゃん。説明を求む」

「あ、あたし!? えっと……」

なんでもアリン曰く、このガルドという青年はザンクが指定した御前試合の相手だったらしい。

「ワイな、アイツらの残虐非道っぷりには、ほとほと愛想を尽かしたってたんや。ほいでな、ワイ、決めたんや。今日からダンナについていくでー！」

「は?」

突然ついていくと言われ、目が点になるフアング。

「敵のワイを助けた、ダンナのバカさ加減に惚れたんや！ ダメって言われてもついていくでえー！」

そう言っつて本当についてくるガルド。

「ちよつとフアング、ホントについてくるよ、どうするの?」

「別にいいんじゃないか?」

「ほ、本気ですの!?!」

フアングの判断に驚くアリンとティアアラ。

「おおきにつ、フアングのダンナ！」

「うちのガルドちゃんをよろしくお願いします」

喜ぶガルドに、彼のパートナー妖聖の女性、マリサが頭を下げた。

「皆さん、ワイのこれからの活躍、期待しとつてや」

「フツ、賑やかになりそうだね」

「色んな意味だけどね?」

ガルドを仲間に加えた一同は、広場を抜け出して、ソルオール村を後にし、大都市ゼルウィンズまで戻るのであった。

第16話 ドルフアの裏の顔

大都市ゼルウィンズの街外れにある小さな屋敷にて。

そこでは黒いドレスに身を包んだベージュ色寄りの髪の毛の女性がハープを弾いて、小さな子供達に聴かせていた。

「皆、静かに聴いてくれてありがとう」

ハープを弾いていた女性、マリアノは演奏が終わると子供達に言った。

「マリアノ先生、すごく綺麗でした！」

「セア、ずうっとマリアノ先生に見惚れてたもんね」

「う、うるさいな！」

その光景を見たマリアノは微笑みを浮かべた。

この屋敷は孤児院であり、ここに住む子供達はみんな両親や家族がない天涯孤独の身なのだ。

「どうしてマリアノ先生はいつも皆の事が分かるの？」

「もちろん皆の事が好きだからよ。私にとって皆一人一人がとても大切な存在なの。だから悲しい事や辛い事があったら、私に言っ
ね」

1人の少女、アンの質問に優しく答えるマリアノ。

「マリアノ様、そろそろお時間が」

「分かりました」

そんな会話をしているとマリアノの部下であるザギが知らせにやって来た。そう。実はこの後、ドルフアで会議があるのだ。普段はそんなにないけないけども。

「ちえー、ザギのケチ！」

「自分がマリアノ先生と二人きりになりたいだけだったりしてー」

「なっ!? 我々マリアノ様親衛隊は、決してそのような低俗な感情を持ち合わせておらん！」

「こら、子供相手にムキになってはいけません」

セアとシユホにそう指摘され、思わずムキになるザギ。それを窘めるマリアノ。

「皆さん、またね」

『はい！』

子供達にそう言って、マリアノは孤児院を後にしたのだった。

◇

「弱い、弱すぎる、悲しい程に」

モンスターを倒したアポローネスが呟く。フューリーを回収がてら己を鍛えれば強者にも逢えるかと思つたが、どうも最近の敵が弱すぎるのだ。フェンサー然り、モンスター然り。

「私の悲しみを喜びに変えてくれる者はいないのか」

しかし私情は置いといて、この後は確かドルファに戻った後に会議あると聞いていたアポローネスは遅刻厳禁とばかりに、少し早足で大都市ゼルウィンズに戻るのであった。

◇

「バーナード補佐官、我がドルファ・ホールディングスの本年度の収支決算はどうなっている？」

「はっ。社長。昨年に比べ、20%前後の収益増が見込まれております」

ドルファの総帥、花形の問いに銀髪の長髪の男性、バーナードが答える。

「あれ以来、何年もかけて地域密着型の優良企業という顔を貫いてきたかいがあった」

「はい。では、予定通りに大規模な人員増加を実施致します。我が社の発展のために」

「うむ。だが、これはまだ第一歩に過ぎん。いずれ、我が社の名が全世界に轟くまで、進み続けるのだ。頼りにしているぞ、バーナード」

花形がそう言うと、バーナードは不敵に笑いながら、お任せくださいと答えた。

「私も力を尽くします。孤児院を始めとする我が社の慈善事業のお陰で、企業のイメージは優良です。人々は我が社をクリーンな企業だと信じきっています」

「我が魂は剣にあり。この剣は社長への忠誠の証。必要あらば、邪魔者は……斬る！」

「我らの裏の力を使えば、不可能な事などありません」

マリアノ、アポローネス、バーナードの言葉に分かつておると答える花形。彼らのお陰でフューリー収集が順調に進んでいるのも過言ではない。

「全てのフューリーが揃った時、ワシの野望は完成するのだ！」

「大変です、社長！」

「失礼致します」

すると一同が居る会議室に慌てた様子のパイガとザンクの部下が入ってきた。

「何事だパイガ！ それに貴様もだ！ 社長の前で、騒々しいぞ」

「し、失礼しました！ ですが、思わぬ事が、ぎ、ザンクとロンギが、敗れました！」

「何？ ザンクとロンギが……」

それを聞いたバーナードは驚愕の表情。彼だけでなく、他の一同もであった。何せ、ドルファ四天王の1人とその親衛隊長が敗れたと言うのだから。

「パイガ様、落ち着いてください。バーナード様、正確には隊長が機嫌が良いので、見逃してあげたという事です」

「何？ ならば、ザンクとロンギは今何をしている？」

「ザンク様と隊長なら、ソルオール村のフューリーの代わりに他のフューリーを回収にそのまま向かいました。自分は隊長に頼まれて、報告とパイガ様の護衛です」

ドルファ四天王の上司であるバーナードや四天王であるマリアノとアポローネス、社長である花形が居るのにも関わらず、淡々と報告するザンクの部下を隣で見ていたパイガは別の意味で関心した。

「一体、誰にやられたんだ？」

「は、はい！ ファングとかいう小汚いやつでして……デタラメに強いんですよ！」

「ファング……」

花形に報告するパイガ。ファングの名前を聞いたアポローネスは反応した。随分前に辺境の地下牢で戦った相手だからだ。

「それでお前は戦わずして逃げ帰ったというわけか？」

「情けないわね」

「……あ、いえ、私も善処はしたんですよ？　そもそも深入りは止めとけど、2人に言い聞かせたのですが……」

「隊長がソルオール村で厄災魔法を使いませんでした」

「何っ!?　貴様、それは本当なのか!？」

「はい。それに隊長が久しぶりの獲物……強者を見つけたと帰り際に言っていました。お陰様で自分達は隊長の服を繕わなければなりませんでしたが……失礼しました、今のは私情です」

バーナードとマリアノに責められるパイガだが、ザンクの部下が異議を申し立てた。それを聞いたバーナードは驚愕の表情になった。

「また厄災魔法を使おうとしたロンギを問いただしたいところだが、ロンギが敗れたと言っていたが……何者だ？」

「はっ。可愛らしい子供だったと隊長から聞いております。というか、子供にしか見えませんか」

「子供だと……?？」

「まさか……その子供を殺してないでしょうね？」

「いや寧ろ被害を受けたのは、うちの隊長なんです……（なんで自分、マリアノ様に睨まれなきやならないんだか。よし、スルーしよう!）」

信じられないという表情になるバーナード。マリアノに至っては、その子供を殺そうとしたという点が気に入らなかった。もしこの場にロンギが居たら、自分が殺していただろう。ザンクの部下はマリアノの視線をスルーしながら話を進める。

「そこで隊長がその子供と交戦した時の戦闘映像記録を自分に渡してきたので、これを皆様にご覧になってほしいと」

「ふむ。一理あるな。パイガ、お前の部署に映像を再生する機械があつた筈だが……まだ使えるか？」

「は、はい！ 手入れは欠かさずしてありますので、今でも使えると思ひます」

「よし、それをここに持って来い」

「パイガ様、機械が大きいのでしたら、自分も運ぶのを手伝いますが？」

「大丈夫だ。そこまで大きい機械ではないからな。では、直ちに持つてまいります！」

そう言うのと会議室を一度出たパイガ。そして数分後に少し大きめの機械を持って戻つて来た。

「では再生します。この映像記録は様々な角度で再生できると隊長から伺つております」

「随分と用意周到だな。しかし子供ながら、奴を退けるとは……面白い」

「一体どんな相手なんでしょう。私、興味がございます」

性格に難ありだが、ドルファ四天王にも引けを取らない實力を持つたロンギが敗れたという子供に興味を示すアポローネスとマリアノ。

そして映像が再生された。

ザンクの部下の報告通り、ソルオール村の地下牢に向かうロンギと数人の部下の姿があつた。

何やらロンギが未だに手がべたつくよと部下に愚痴つていた。これはどういう事だ？とバーナードに聞かれた部下は、地味な嫌がらせをされた経緯を説明する。それを聞いた花形はがははと笑つていた。

『隊長！ 見張りの兵士がやられています！ おい、大丈夫か!?!』

『どれ、オレ様に見せてみな。フン……顎を蹴られたのか。それに鎧がへこんでやがる。打撃技による傷だなこりや』

『そんなバカな!?! けっこう丈夫な鎧ですよ!?!』

『いんや。拳圧による武術がある。あれは極めると鎧も通してしまうと聞く。おい、こいつの応急処置をしろ!』

『はっ!』

そう言つて手の空いている部下に指示するロンギ。

「あのロンギが部下の手当てを指示しただと……」

これには花形やバーナード、四天王の3人も驚いた。その後も他の見張りの兵士の応急処置をしたり等、意外な一面があった。

『兵士達の容態はどうだ?』

『はっ。皆無事です。それと兵士達の話だと、襲つた相手は子供だったと全員言っております』

『……ガキか。他に特徴はねえか?』

『可愛らしい子供だと言つてました。瞬きをした次の瞬間には意識が朦朧としたと言つておりました』

『……ほーう。随分とナメた真似をしてくれるじゃねえか。侵入者はどここだ? ヒーハー!』

その時だった。

『見つけたぞ! 隊長! あのガキです!』

1人の兵士が例の子供を発見したようだ。だが、その子供の姿を見たパイガを除いた一同は驚愕した。

「バカな!?! レイルだど!?! 何故あの子がソルオール村に居る!?!」

「しかし社長。まだあの子供がレイルと決まったわけでは……」

「……(いや、私には分かる。あれは紛れもなくレイル!)」

「レイル……」

銀髪のショートヘア、152cmで黒を基調としたワンピースを着ており、両腕に赤いリボンを巻いた美少女のような子供を見て言葉が出ない一同。特にマリアノはどこか悲しげな表情をしていた。

『ヒーハー! やあやあ、これまた可愛らしいガキだね』

『……うわ。なんか蜂蜜くさいな』

『ああん? て事はお前が、オレの部下やオレ様に地味な嫌がらせしたヤツ? お陰で未だに手のべたつきが取れないでござるよ!』

『部下はそうだけど、僕が仕掛けた罠に引っかかったのはお前でしょ』
久しぶりに聞く懐かしい声に、ロンギに地味な嫌がらせをしたのはお前かと心の中で突っ込む一同。

『…ホロン。”スパイクモード”』

『……（こくり）』

そしてレイルは、半円を描く曲がった角を持った、兜みたいに頭部全体を包む仮面を被り、灰色のボロボロのマントを着た真つ黒でちんまりボデイの虫のような生物のパートナー妖聖、ホロンを槍のような形状のボロい釘から螺旋状の溝が掘られたアイスピック風に変形させ、右手に持ち、構えた。

そこからは凄まじい攻防だった。

狭い地下迷宮をレイルは駆け巡り、地形を壊されたにも関わらず、ロンギに蹴りを入れたり、アイスピックを使った斬撃による衝撃波を繰り返したりしていた。

『…37。今の斬り合いでその針モドキを弾いた筈だが、まだあるとはな』

『様子見とか、意外と冷静なんだね？ お互い様だけど』

『戦闘力といい、洞察力といい……お前、ただのガキじゃねえな？ 何モンだ？』

『それでも僕は24歳なんだけどなあ……』

『……（レイルよ。それはお前の外見のせいだと思うぞ。初見の者は誰でも奴と同じ反応をする）』

『……（そういうところは変わってないのね……レイ）』

溜息を吐くレイルを見たアポローネスとマリアノは心の中で突っ込んだ。

『可愛らしいそのガキ。お前の顔、オレ覚えてぞく？ さあぐて、みんな行くよーん。他の部隊にも伝えといてねーん。今日はパーツとやるから、食材と酒の買い出しはよろしくねーん』

その後も戦闘は続いたが、この会話を最後に映像は終わった。

「以上になりますが、社長、この正体不明の子供を隙あらば殺しても構いませんか？」

「ふん、貴様らはレイルに勝てるかと本気で思っているのか？ 貴様らではレイルの準備運動にもならんと思うぞ」

ザンクの部下の進言に異を唱えたのは、意外にもアポローネスだった。

「それはどういう意味でしょうか？」

「貴様は知らないかもしれんが、あの斬り合いでレイルは実力の10%も出しておらん」

それを聞いたザンクの部下は驚愕の表情になった。あれで実力の10%も出してないと言うのだ。しかも本気を出してないとアポローネスは言う。

「社長。レイルの件もそうですが、ファングなるものはいかがいましてしょう？ 早めに手を打った方が良いのでは？」

「……ふむ。そうだな。パイガ、そのファングとかいう男を調査しろ」「は、はいー！ 早速!!」

「では、私も報告が終わりましたので、これにて失礼します」

バーナードの進言に花形は考え込んだ後、パイガに指示を出した。そしてザンクの部下も花形に挨拶をした後、会議室を退室して行った。

「……バーナードよ、レイルがドルファを離れてから何年だ？」

「4年になります。まさか思わぬ形でレイルを目にするとは、私も思っておりませんでした」

「流石は我が好敵手だ。雌雄を決する時が楽しみだ……」

未だに再生されているレイルとロンギの戦闘映像を見ながら花形は呟いた。それに続いてバーナードとアポローネスが呟く。

「……（レイ……）」

他の3人が興味深そうに映像を見る中、マリアノだけはレイルが複雑そうな表情をしているように思えた。

第17話 その日の夜

会議を終えて、部屋に戻ったマリアノは先程の映像を思い返していた。

「レイ……」

それはレイルの事。

マリアノにとつて、レイルはドルファと一緒に働いてた同期であると同時に自分の好きな人でもあるからだ。

しかし4年前に彼はドルファを辞めてしまった。その後の噂では行方不明やら野垂れ死になったとか信じたくもない内容ばかりだった。

「……（でも、レイが生きてて良かった……）」

安心するマリアノ。

実はレイルが生きている事は薄々感じていた。何故なら孤児院の子供達がマリアノしか知らない筈のレイルと思わしき話をよく聞かされていたからだ。

『マリー』

先程の映像でレイルの声を聞いてから、自分をそう呼んでくれる彼の姿が思い浮かんだ。会いたい……今レイルに無性に会いたい自分がある。

「お疲れですか、マリアノ様？」

そんな事を考えていると、パートナー妖聖のクララが声をかけてきた。

「ちよつと、ね……」

「……（もしかしてレイルの事かな……）」

いつもだったら『そんな事ないわよ』と言うマリアノだが、素直にこう言う時は大抵レイル絡みだというのがクララは予想できた。

「マリアノ様、少し休みましょう。きつとお仕事で疲れてるんですよ」

「え、ええ。そうさせてもらおうわ……」

クララの様子がなんかおかしいと感じたマリアノだが、疲れてるの

も事実なので、少しだけ休む事にした。

◇

「……」

ソルオール村の一件でガルドとマリサを仲間にした後、宿に戻ったレイル達。バハス特製の夕飯ができるまでの間、レイルは宿の外に居た。

「はあっ！」

「ティアラ無駄な動きが多い！ もっとちゃんと相手の動きを見る！」

「はい！」

隣ではティアラがティルアに稽古をつけてもらっていた。

剣と薙刀による剣戟の音が響く中、レイルはシャルをフェアリンクさせ切っ先に皿を乗せながら皿回しをやっていた。集中力を鍛えるにはうってつけなのである。

ちなみにホロンはレイルの足元で夜空を眺めている。

「……なんかティルア、張り切ってるね」

『そうね。ちゃんと手加減はしてるみたいだけど』

レイルの言葉に答えるシャル。

最初はいつも通りの日課でティルアと打ち合いをしてたのだが、偶々ティアラが自分達の打ち合いを見てたらしく、ちよつと休憩してたところ、稽古をつけてほしいとお願いされ今に至る。

「今日はここまで。ティアラ、今の動きだと10回は軽く死んでたわよ？ 次やる時は魔法も使っているから」

「は、はい……（お、お姉様が鬼に視えますわ。……身体の節々が痛いですし、容赦ないですわ……）」

ティルアに全く一撃を与えられなかったと同時に、姉は意外とスパルタだったという事を痛感したティアラ。

「……今、私の事、鬼だとか思ったでしょ？」

「い、いえ！ そ、そんな事思っていないですわ!? ただ、お姉様が

ちよつと怖いなと思ってしまっただけで……あつ……！」

上手く誤魔化したつもりが、思わず余計な事を言つてしまい、口を塞ぐティアラ。

「……」

「え、えつと……」

当然、ティルアは笑顔だが目が笑つてなかった。なんとというか圧が凄い。

「ティアラ？」

「は、はい！」

「夕飯ができるまで、まだ時間があるから今度は魔法ありで稽古しましょうか♪」

「……はい」

これは流石に自分が悪いので、ティアラは素直に従った。今更思い出したが、ティルアは怒らせたら怖いのだ。現に目が笑つてないのが証拠である。

「……ティアラ。ご愁傷様」

「お義兄様!?!」

「もうレイつたら♪ 大丈夫、大丈夫♪ ちゃんと気絶程度になるように加減はするから♪」

「え？ え……う？」

この後、夕飯ができるまでの間、ティアラは姉による地獄の打ち合いをする羽目になるのであった。

第18話 昼食にて

次の日のお昼時。向日葵荘の食堂にて。

「まあ、食べ食べ。俺の奢りだ。遠慮すんな、じゃんじゃん食べえ！」
「あんたの奢りって何よ？ バハスとレイルが作ってくれたんじやない」

フアングの言葉にアリンが突っ込む。

「残すなよ、お前ら」

「…お残しは許しません…なんて、言ってみたり…」

「おう、分かっとなるがな。飯は一粒も残さへんって」

「まあいい子ね、ガルドちゃんたら。でも、いつも言ってるでしょ？」
その様子を見たマリサが言う。

「ご飯は農家のおじちゃんに感謝しながらしっかり噛んで食べな
きゃ」

フアングちゃんも噛まずに飲み込んだら、めーっよ？ と言う姿の
マリサは正に母親のソレである。

「…ごっくん！ ぷっはーっ!! おかわり!!」

「ドンとこい、ドンと食べえ」

「……………」

フアングとガルドの食いつぷりに唾然とするアリンとティアラ。

「……真昼間まっぴるまからよくそんなに食べれるね。君達2人の胃袋は私達の
英知の及ばない高次元にでも繋がっているのかな」

「フアングとガルドも育ち盛りなんだよ……多分」

作ってる身としてはありがたいけどね？とハーラーに付け足すレ
イル。

「ティアラはん、食わへんのか？ 要らんなら、ワイが貰うで！ ティ
アラはんのエビフライ、もーらい！」

「あ、あげせんわよー！」

そう言っって自分のエビフライを守るティアラ。

「アリンのエビフライを俺にくれ。俺んこの、とろとろのタルタル
ソースもいいんだが、お前のウスターソースがけのエビちゃんも捨て

「がたい」

「あんたにもやんないわよ！ この男どもは全くもー、油断も隙もあつたもんじゃない!! あたしの食べ物はお米一粒、砂糖ひとさじだって、あたしの胃袋のもの、絶対ぜーったい、不可侵領域っ！
べーっだ!!」

こつちもこつちだった。この場合はアリンの方が正しいが。

「レイ、まだ?」

「ティルア……レイを急かさないの」

「はいはい、もう少しだけ待ってよ。……それにしてもエビフライ、もう少し多めに作れば良かったね」

「……（コクコク）」

ティルアを宥めるシヤル。

そんな彼女の為にいつものアレを作ってるレイル。対してホロンは出来立ての玉蜀黍とうもろこしの唐揚げが盛り付けられた皿をテーブルまで持っていていき、皿を置いた。

「冷めないうちにホロンが作った玉蜀黍の唐揚げでも食べて。今ちよつと別なの作ってるから」

「この料理、あんさんが作ったんか!」

「……（コクコク）」

まさかのレイルではなく、彼のパートナー妖聖であるホロンが作った事に驚くガルド。キュイよりも小さな体で皿をこぼさずにとってきた事にも驚いたが。

「……（スツ）」

「キュイ?」

「……（コクコク）」

「キューイ♪」

するとホロンは玉蜀黍の唐揚げを数個ほど取った後、小さい小皿に分けてキュイに渡す。そして美味しそうに食べるキュイ。

「はい。ティルア、できたよ」

「わーい♪」

そう言つてレイルがティルアに料理を運んできた。ティルアの前

に置かれたのは『唐揚げのようなナニカ』だった。

「な、何だこれ……?」

「か、唐揚げ……?」

「しかし唐揚げの割には、ちよつと違和感があるな」

これにはフアングやアリン、料理を作ったバハスでさえ、レイルがティルアに作った料理を凝視する。

「ほんとにティルアは、その料理が好きね?」

「だってレイが作ってくれる料理、どれも美味しいんだもん♪ シャルだってそうでしょ?」

「それは否定しないけど、その料理が好きな人は半々だと思うわよ?」

「そうかい? 私も昔、レイル君にその料理を作ってもらった事が何度かあるけど、個人的に好きだよ? やっぱり美味しいね。コレ」

シャルの言葉に美味しそうに料理を食べるティルア。ちやつかりハーラーも食べている。彼女もこの謎の料理を食べた事があるのかティルアと同じ意見だった。

「あの、お義兄様? お姉様が食べている料理は何ですか?」

「ん? プリンの唐揚げだよ」

「……プリンの唐揚げ!?!」

ティアラの質問に答えるレイル。それを聞いたシャルとハーラー以外は驚きの声を上げた。

「プリンって……あのプリンか?」

「はい。バハスさんのご想像通り、お菓子のプリンです」

「……試食してもいいか?」

「少し多めに作ってあるので、持ってきてますね?」

そう言っただけレイルは皿に盛り付けて持ってきた。早速バハスが1つ食べる。

「どれどれ……っ! こりゃ美味しいな。初めて食べたが、俺でも食べれるぞ。味付けとか調整してるのか?」

「ティルアやハーラーちゃんが好きそうな味付けなんで、その辺は色々。使うプリンによって味付けが毎回変わるんです」

「なるほどな。今度この料理のレシピを教えてくださいねえか?」

「あ、もちろんです。みんなも食べてよ。次いつ作れるか分からないから」

レイルがそう言うのとフアング達も食べ始めた。反応は良い意味で様々だった。

ちなみにレイルの創作料理『プリンプリンの唐揚げ』はフアング達にも好評で、特に女性陣からは大好評だった。

第19話 ハーラーの凄まじさ

「ハーラーって昔からバハスと一緒にいるのよね。どんな風に出会ったの？」

昼食後。

なんとなく気になったアリンがハーラーに訊ねる。

「気になるかい？」

「うん。だって、あたしとフアングの出会い是最悪だったんだもん！」

「うるせー。お前まだ根に持ってるのか」

めんどくさそうにフアングが言う。

「その体を隅々まで調べさせてくれるなら、教えてあげるけど」

「あ、じゃあいいです」

「フフツ、冗談だよ」

「……（冗談に聞こえないのは僕だけかな？）」

冗談だとハーラーは言うが、レイルには冗談に聞こえなかった。

「あいつとの出会いは、私がまだ妖聖研究者として駆け出した頃だ。か弱い美少女だった私は、フューリーを探しに入った森の中で盗賊に狙われてしまったのさ」

「か弱い……？」

ハーラーが『か弱い』と言う言葉を聞いて首を傾げるアリン。

「儂げな私は、盗賊にとつてはいい獲物に見えたんだろうね」

「儂げ……？」

今度はフアングでさえも首を傾げた。

「必死だった私は何か武器になるものと探し、手近なところに見つけたフューリーを抜いて、応戦した。まあ、それがバハスとの出会いだったというわけだ」

非力で繊細な私にとつては、ただただ恐ろしい出来事だったよと

ハーラーは言った。

「何が非力で繊細だ。最後は盗賊に泣いて命乞いさせたくせに」

「あれ、バハスいたのか」

「ハーラーちゃん。バハスさん、最初からいたよ？」

念の為に言っておくが、レイルの隣でバハスは最初から聞いていた。

「しかしあの時、お前の俺に対する第一声が、えー、おっさん？ 女の子の妖聖がいいー！ だったんだからな」

「そうだったか？ あんまり昔の事を引きずっていると、頭が禿げるぞ」「……それ、俺に言うのか？」

「まあまあ……」

もしかして彼女はバハスに分かって言ってるのか？とレイルは思った。

「おいアリン、妖聖でも禿げるのか？」

「あたしに聞かれたって、そんなの分かんないわよ」

そもそもアリンは記憶喪失なのだから、そんなの知るわけがない。

「お前も危ないかもな。過ぎた事を気にしすぎだ」

「あたしがもし禿げたら100%あんたのせいよ。そしたらあんたの頭もつるつるにしてやるから」

「えっ、何々？ アリンちゃんも頭つるつるにするの？」

フアングに言ったアリンの言葉に興味津々なハーラー。それに対して、誰がするかー！と叫ぶアリンなのであった。



「ハーラー、口元になんかついてるわよ」

「ん？ ああ、歯磨き粉だ」

次の日の朝。

ハーラーの口元に何かがついてる事を指摘するアリン。そう言われた彼女は歯磨き粉だと答えた。

「あと、胸元にも何か白いものが」

「ああ、これは牛乳だ」

「臭くなるわよ……」

ティアアラの指摘にも何ともない表情で答える。

「ハーラー、また服にこぼした牛乳を放置していたのか。お前はどうか

してこうズボラなんだ」

「いやあ、他の事に気い取られてたから忘れてた。まあ細かい事は気にするな。ハハハッ」

「ハハハじゃない。俺が細かい事まで気にするのは、お前がズボラすぎるせいだろう」

全く、笑い事じゃないんだぞと、ハーラーに注意するバハス。

「あれ？ どしたの？」

「あ、レイル」

するとそこにレイルがやってきた。

「レイル君、バハスがズボラズボラって言うんだけど、私はそんなに酷いからね？」

「…程度によるけどね。バハスさん、ハーラーちゃんの酷さ加減どうなんですか？」

「酷いなんてもんじゃない」

ハーラーの言い分を聞いたレイルがバハスに訊くと、彼は酷いなんてもんじゃないと言った。

「俺が言わなければ、風呂も入らないわ着替えも洗濯もしないわで、およそまともな人間の生活じゃなくなるだろう」

「うわ、それは酷いわね」

「私なら自分で耐えられなくなりそうですけど……」

あまりの酷さに同じ女性として耐えられないなと思ったアリンとティアラ。

「……ハーラーちゃん、お風呂はともかくさ、せめて昔みたいにシャワーだけでもいいから浴びなつて」

「そうか。それだ！ その手があったの忘れたよ」

「……なんで忘れてるのさ。バハスさん、他にも何かありません？」

レイルがそう訊くと、バハスは他にもあるぞと言って口を開いた。
「あるぞ。あれは数年前、お前が研究に没頭していた日の事だ。俺がお前の部屋を掃除していると、ベッドの下からふわふわした毛の生えたボールを見つけた」

「……おかしいな？ なんかそれ、似たような事が昔あった気がする

んですが……」

バハスが今話してる内容は、学生時代にレイルが経験した事がある内容に似てる気がした。

「よく見るとそれは、カビの生えた桃の種だった……」

「ひいーっ！」

「ありえせんわー！」

その内容のオチにゾツとするアリンとティアラ。

「桃の種だったんですね。僕の場合はカビの生えた林檎の芯に蜘蛛が集まっていたんですが……」

「ひいーっ！」

「おいおい……」

続いてレイルの言葉を聞いて想像してしまったのか、真っ青になるアリンとティアラ。バハスは呆れながらハーラーを見る。当人はそんな事もあったねーと笑いながら言ってるが。

「お前は どうして あれを 放置 できるんだ」

「大丈夫、死にやしない！」

「ハーラーちゃん。確かに死にはしないけどさ……」

「お前の場合、大丈夫の基準が大雑把すぎるだろう！」

これには甘やかしすぎた俺にも責任があるかもしれないというバハス。

「これからは厳しくするから、そのつもりでいろ！　まずは部屋の掃除からだ！」

「分かった！　じゃあ、この本の続きを読んでからでいいか？」

「む、まあいいだろう。続きが気になるよと集中できないからな」

「……（えー!?　バハスさん、それでいいんですか!?)」

いやいや、ハーラーに掃除をさせるんじゃないかな？と内心突っ込むレイル。

「……こうして甘やかされてきたのね」

「垣間見ましたわね……」

「あ、あはは……」

アリンとティアラの言葉に苦笑いをするレイルなのであった。

第20話 ビューイの谷

その翌日。

レイル達は口ロからの情報で、大都市ゼルウィンズの西に位置するビューイ山脈にある、ビューイの谷に来ていた。

「うわ。なんて強い風だ。目を開けるのもやっとだぜ」

「今日の風の強さはマシな方だね。今の内にファンング達も目を慣らしておきなよ？」 下手すると怪我しちゃうから」

「あー、それって確か、この強風が原因で怪我人がたつて話だったよね？ レイル君、あの時の怪我人ってどうなったんだっけ？」

「全身が鎌鼬による大怪我」

「えっ……」

その言葉を聞いたハーラー以外の全員は開いた口が塞がらなかった。

ビューイの谷は日によって、風の強さが変わるから気を付けなよとレイルが注意する。

「……？ 気のせいかな」

「今……何か……」

「……（ここから少し離れたところ……か）」

何かの視線のようなものを感じたファンングとティアラ。レイルも殺気のようなものを感じた。それも違う場所からそれぞれ2つ。どうやら相手は風の音を使って気配を上手く隠してるようだ。

「3人共、どうしたの？ 向かい風にならない内に進みましょう」

「あ、ああ！ ちと、もよおした。小便してくる」

「は？ ちよ、ちよつと……」

「あなた、緊張感つてものはないんですの！」

ファンングの言葉にアリンは戸惑い、ティアラは緊張感つてものはないのかと言われる始末。

「あ、ワイもやー。奇遇やで。ダンナ、ここはいつちよ、景気よう、連れションといきまつかっ」

「おう、上等だぜ！ 派手にぶちかまそうぜ！」

「それじゃあ僕らはここで待ってるよ。2人共、ビューイの谷が浮遊島群だからって、うっかり落ちないようにね？」

「はーい」

フアングとガルドが外でお手洗いに行ってる間、レイルは例の気配がどう動くのかを待ってみる事に。

◇

「あー、スッキリした。行こうぜ」

「寄らないでくださいまし！」

フアングとガルドが戻ってきた途端、ティアラはそう言って、レイルの背中に隠れた。

「……何がだ？ 行こうぜ、ガルド」

「あいよ、ダンナ」

「こら、2人共、手を洗いなよ！ 手を！」

「ぐえっ!?!」

先に行こうとしたフアングとガルドの首根っこをレイルが掴みながら突っ込む。

「いや、だってこの風のせいで手を洗ったら、手が冷たくなるやん！」

「そうだぞ兄貴。近くに水場はあったけど、バカみたいに冷たかったぞ?!」

「…水場？ あーでも、水場は確かにあそこしかないもんなあ。しよぅがない……」

2人の言い分も解らなくもないレイルは、独自の魔法『メイルバーン』を発動させた。

「ほら。2人共、これで手を洗いなよ。温度はちゃんと調節してあるから」

「ほんまかいな？ つ！ おおく♪ めっちゃ、あつたかいわく」

「お、マジだ！ さっきの水場とは比較にもならないくらいあったけーぜ♪」

「洗い終わったら、ここの風を使って乾かしなよ？」

「はい」

やれやれとレイルが言いながら、ファングとガルドが手を洗い終わるまで待つ事、数分。

「相変わらず、レイル君のその魔法は便利だね」

「だって僕、魔法の素質がないんだもん。色々工夫するしかないじゃん？」

ちなみにハーラーにも、その魔法を学会に提案してみたら？と言われたレイルだったが、めんどくさいから止めとくと返した。

◇

「どうやらこの奥がくせえな」

「おうっ！ 前進あるのみや！ ゴーゴー！ 気張ってゴー！」

「ふふっ、ガルドちゃんたら元気がいいこと」

そんなガルドを見ながら微笑むマリサ。

「元気にもなるわ。こんなべっぴんさん達に囲まれてんやからな」

「確かに。マリさんも含めて、女性陣のみんなは華があるもんね。それぞれ違う魅力があるし」

「あらあら、ありがとう♪」

ガルドの言葉を聞いて、流星にその中に自分が入ってないよね？と思いたいレイル。ちなみに彼が言ってる『マリさん』というのは、言わずもがなマリサの事である。

「…… (ジョー)」

「…… (な、なんか、ティルアとシャルから視線が……)」

無言でレイルに抱き付くティルアとシャルからの視線が地味に痛い。まるで自分達には言ってくれないの？ような視線。

「えつと……ティルアとシャルも魅力的な女性だよ？」

「っ！ ありがとう♪ レイ♪」

レイルの口からそれを聞いたティルアとシャルはご機嫌になり、抱き付く力が強くなった……気がした。ついでに他の女性陣からは微笑ましい目で見られた。

第21話 シャイでアンチキシヨウな暗殺者、再び

「フューリー発見！ やっぱここにあったか」

ビューイの谷の奥まで進んだ一行は、ようやくフューリーを発見した。

「……（まただ。1つは近くにいます）」

一方でレイルは先程の殺気が気になっていた。1つは少し遠くから、もう1つは近くから。自分達の様子を伺っているのだろうか？

「殺」

「……おっと」

そんな事を考えてた時、何者かがレイルの懐に入り込んできたが、殺気を放っていた者の1人だと初めから分かっていたレイルは、ひらりと攻撃を避け、距離を取った。

「殺殺殺。殺殺殺」

「……（近くにいた殺気の正体は、エフオールか）」

「兄貴、大丈夫か!? って、お前は……エフオール!」

レイルを襲ってきた者の正体は、暗殺者のエフオールだった。突然の襲撃者に驚くフアング達。

「こんにちはー! エフオールのパートナー妖聖の果林です。今日もじゃんじゃん通訳していききたいと思います!」

「……（パタパタ）」

「あー、果林ちゃんだー。今日も可愛いくて絵になるねー。……って、ホロンは平常運転だね?」

「……（ドヤア）」

「…何ドヤ顔しながら、果林ちゃんエンジェル! 果林ちゃんマジ天使! って……あのねえ……」

「~~~~~っ!」

エフオールのパートナー妖聖、果林も現れた事で、レイルの肩でホロンが果林に手を振りながら何かを訴えている。そしてそれを訳すレイル。そしてそれを聞いて顔が紅くする果林。

「ところでガルド。エフオールに面識あったりは?」

「知らん知らん、ワイ、こんな嬢ちゃん、知らんがな」

「だよねえ……」

念の為にガルドにも訊いてみたが、彼は違うと答えた。

ソルオール村の一件でレイルが村に侵入した際に、ガルドの性格は解っているのです、エフオールと手を組んだという考えは絶対にはないと思っただからだ。

「つーかずっと俺らをつけて来たのかよー！」

お前はストーカーかい！と言うフアング。

「殺殺、殺殺殺」

「エフオールはあんたらが生きてる限り、どこまでも追いかけて殺すと、エフオールは申しております」

「相当恨まれてるようだね。一体この可憐な少女に何をしたんだい？」

「いや、俺なんもしてねえよ！」

事情を知らないハーラーに寧ろ俺は被害者だ！と返すフアング。

「ねえ、あなた前にフューリーには興味ないって言ってたよね？ ならどうしてあたし達を狙うの？」

アリンが訊く。

そういえば以前、クラヴィーセ洞窟でエフオールと遭遇した時、彼女はそう言っていた……気がする。なら何故、自分達を狙うのだろうか？

「殺。殺殺殺殺、殺殺」

「お前らみたい仲間でするんでいないと、なんも出来ない雑魚は見えてイラつくんだよ。仲良しごっこ見せつけて下らない優越感に浸ってんじゃねーよバカヤローと、エフオールは申しております」

「……寂しがり屋さんだ」

「だな……」

どう見ても寂しがり屋だよね？とレイルの言葉にフアングもうんうんと頷く。

「殺殺殺。殺殺殺、殺殺」

「……エフオール、またそんな事を……エフオールはこんなに可愛い

女の子なのに……」

「ちよつと、通訳止まってるけど？」

通訳が止まってる事を指摘するファンクに果林がああ、すみませんと答える。

「戦いこそが目的。戦う以外に生き方を知らない。エフオールはそう申しております」

「何故そのような事を……」

「物心ついた時から機関にそう教えられたからよ」

「子供が暗殺業や兵士に駆り出される論理、みたいなものね」

エフオールの答えにティアラは疑問を抱く。しかし彼女の疑問を答えたのは姉のテイルアだった。続けるようにシャルが答える。

「……(もう1つの殺気が動き出した。ゆっくりだけど、こっちに近づいてきてる)」

緊迫した空気の中、レイルは徐々に自分達が居る場所に近づいてくるもう1つの殺気に嫌な予感を覚えるのであった。

第22話 長槍の乱入者と暗殺者の最後

ビューイの谷のフューリーを探しに来た一同の前に、再び現れた暗殺者の少女、エフオール。

「必殺！ 激殺！ 滅殺！」

「ちっ、やるしかねえようだな！」

お互いに臨戦態勢に入ろうとした、その時だった。

「…な〜どという、この緊迫した雰囲気など全く気にせずに登場するこのオレ様！ ヒーハー！」

「あいつ、確かソルオール村の時の……！」

「……（もう1つの殺気の正体はこいつか）」

奇声を上げながら一同の前に現れたのは、ソルオール村でザンクと居た男、ロンギだった。同時にもう1つの殺気の正体がロンギだという事に気付いたレイル。

「やあやあ、これまた楽しそうでゲスなあ。こういう楽しそうな光景を見ると、嫉妬の念を覚えちゃうこのオレ様としては、全てをぶち壊したくなるわけです！」

「殺殺殺、殺殺！」

「なんだてめえは！ 邪魔するならてめえも殺すぞ。とエフオールは申しております」

イラつきながらロンギに文句を言うエフオール。それを通訳する果林。

「おーっと、人様の口上を遮る礼儀知らずのバカー1名をはっけ〜ん。罰として殺しちゃっていい？」

「殺、殺殺殺！」

「お前の方がバカなんだろう！ とエフオールは申しております」

「…脳内裁判で、お前ら2人は問答無用の惨殺刑と判決を頂きました。頂いちゃいました！」

ロンギがそう言ったその瞬間だった。

「さ、さっ……」

「え……」

「……緊急時なので、控訴は却下だポン」

エフオールと果林の胸から血が噴き出した。そしてパタリとその場で倒れる2人。長槍をクルリと一回転させながら呟くロンギ。

「さ、さっ……」

「エフオ……ール……」

「ああん？ まだ生きてやがるのか。ちよつとうるさいので黙ってなさいでござるよー！」

「させるか！ ガルド！」

「はいな！」

微かに息が残っているエフオールと果林に止めを刺そうとする口ンギに向かってファングとガルドが斬りかかる。その間にレイルはエフオールを、ホロンは果林を抱えて離れる。

「さ、さっ……？」

「喋らないで。とりあえず誰でもいいから2人に回復魔法をかけて」

「「うん（はい）（ええ）」」

なんで自分を助けた？とエフオールは言っているのだと思うが、とりあえずレイルは彼女を黙らせた。そして回復魔法が得意なティルアとシャル、ティアラはエフオールと果林の応急処置に入る。

「ハーラーちゃん、妖聖が仮に致命傷的な攻撃を負った場合って、その妖聖って直ぐに消滅するの？」

「いや、それはない筈だよ。ただ、この子達の傷が深い事には変わらないのは間違いないね」

妖聖研究者でもあるハーラーに気になった事をレイルが訊くと、彼女はそう答えた。

「……（くいくいー）」

「奇遇だね。ちようど僕も思ってたよ」

果林から離れ、レイルの肩に乗るホロン。

珍しくホロンが半ギレ状態になってるのを察したレイルは、ホロンをフェアリンクさせ、槍のような形状のボロい釘でもアイスピックでもなく、反り身の長剣に変形させ、右手に持った。



「クソツ！　なんで攻撃が当たらねえ！」

「それはお前の動きが単調過ぎだからだよ。ポポーン！」

「ダンナ！　こんの！」

「うくん、ガルドも前より腕が上がってるね。……だが、オレ様達の敵じゃねえな。あくらよつと！」

「ぐわっ！」

ファングとガルドの攻撃を長槍で捌きながら、余裕のある笑みで2人にカウンターを入れるロンギ。

「ほらほらく、今なら殴り放題でくすよく？」

「っ!?　か、身体に力が……入ら、ねえ……」

「う、動けへん……」

長槍を突き付けながらファングとガルドを煽るロンギ。反撃したいが、どういう訳か身体に力が入らなかった。

「はい、3分くらい経ちました！　……っーことで、反撃させてもら……っ!?」

「……」

「兄貴！（レイルはん！）」

ファングとガルドに長槍を振りかぶろうとした時、背後から殺気を感じたロンギは直ぐに長槍を盾のように構えた。目線だけ振り向くと、そこに居たのは、反り身の長剣を手にしたレイルだった。

「…ほう、誰かと思えば、あの時の可愛らしいガキじゃねーか。このオレ様が完全に背後を取られるのは、ザンクくん以来だね」

「……そりゃどうも」

長剣と長槍をぶつけ合い、弾いた後、お互いに距離を取るレイルとロンギ。

「……ねえ、質問していい？」

「ほくう、オレ様に質問とは敵ながら面白いガキだね。オレ様の答えられる範囲だったらいいよん？」

こういう思考の相手は、意外と質問には答えてくれる事をレイルは

経験上知っていた。ただし相手の機嫌にもよるが。

「エフオールと果林ちゃんを刺した際に魔法とは別の系統の何かを仕込んだでしょ？」

「ほーう。お前よく見抜いたな。その通りだ。ただし、そのザンクくんの獲物とガルドにやったのとは違う代物だがな」

レイルのその問いに、ふざけた口調から一変してロンギは真面目な口調で答えた。

「オレ様からも質問させろ。お前とお前のパートナー妖聖、普通じゃねーな？ 何モンだ？」

「……（勘が良いな、こいつ）」

「どういう意味だ……？」

「あいつ、何言うてるんや……？」

それを聞いたレイルは勘が良いなと思い、フアングとガルドは逆に質問の意味が分からなかった。

「僕らは普通だと一応思ってるけど。お前から見た場合はそうなんじゃない？」

「…フン、なかなか面白い言い方をする。その口振りだと相当な場数を踏んだと見たぞ」

「……」

流れる沈黙。レイルとロンギは互いに睨み合っていた。

「……まーいいや。今日のところは退いてやる。オレ様にやられるまで死ぬんじゃねーぞ？ バーイー！」

襲ってくるかと思ったが、ロンギはそう言い残して、その場から去っていった。

◇

フアングとガルドに簡単な手当てをしたレイルは直ぐにエフオールと果林の元に戻ったが、様子は芳しくなかった。エフオールに至っては意識が朦朧としていた。

「そいつらの怪我、治りそうか？」

「……」

ファングの問いに、ティアラは答えず首を横に振った。

「ティルア、シャル。エフォールと果林ちゃんの状況どうなの？」

「回復魔法を全部かけてみたけど、全く効果がないの。まるで何かの呪いみたい……」

「私も呪いなのかと思って、状態異常を治す魔法と並行しながら回復魔法をかけてみたけど、全く効果がないわ。残念だけど……」

ティルアとシャルにも訊いたが、返ってきた言葉は残酷なものだった。

「……（せっせっせ）」

そんな中でたった1人、ホロンだけはなんとかエフォールと果林を助けようと小さな体から色んな傷薬を取り出し、適応する薬を必死に探し続けていた。

「……（ダンダン！）」

「もう、いい、ですよ……」

適応する薬が違うと知ると、イラついたのか、ホロンは地団駄を踏みながら思いきり地面に投げつけ瓶を叩き割った。その様子を見ていた果林が呼び止めた。

「エフォ……ールと、私は、もう……助からないみたい、です……」

「……（ふるふる）」

「ふふ、おかしい、ですね……今になって、気付くなんて……」

自分に死ぬなど必死に訴えているホロンを見て、果林はホロンの背後に別の人影の姿がぼんやりと視えた。

「もつと早く……この気持ちに気付けば、良かった、た……」

ホロンを見ながら果林はそれだけを呟くと同時に消えていった。それはすなわち、エフォールも死んだという意味。

「……ファング、ガルド。エフォールと果林ちゃんの簡単なお墓を作るから手伝って」

「……ああ」

「はいな」

レイルの言葉にファングとガルドは何も言わず返事をした。他の

みんなも察してくれたのか、誰も異論を言う事はなかった。

第23話 ザンクとロンギについて

ビューイの谷の一件から翌日。

「あ、ティアラおはよー。珍しいじゃん、ティアラが最後に起きて来るなんて」

「ええ……」

珍しくティアラが最後に起きてきた。しかしどこか表情が暗かった。

「クソ真面目なお前の事だ。どうせエフォールの事でも考えてたんだろ」

「……」

様子がおかしい彼女にファングが言う。どうやら凶星のようだった。

「……彼女はもうして戦う以外に生き方を知らない等と言ったのでしようか。この世界に蔓延る悪が彼女をそうさせたのだとしたら、私は……」

「生まれなきや良かったって言おうとでもしたら、この場で私が引く叩くわよ?」

「す、すみません……」

自分の妹が何を言おうとしたか察したのか、ティルアが厳しい口調でティアラに言った。自分が言おうとした事に気付き、直ぐに謝るティアラ。

「そういえば今更訊くのもなんだけど……ガルドって、ザンクの元にいたんでしょ? なんぞ?」

「助けられたんよ、ザンクのヤツに」

話題を変えるかのように、レイルが気になった事をガルドに訊くと、彼はそう答えた。

「フューリーを狙うフェンサー達に襲われてもうおしまいやと思った時、突然現れたヤツがばったばったと相手のフェンサーやつつけてな」

今思えばただの気紛れやったんやろうなと話すガルド。

「けどワイは一方的に恩義を感じてザンクの手下になった。直ぐにやばいやつやいう事は分かったけど、その時にはもう抜け出せへん状況になっとったんや」

「なるほど。そういう事情があったのか」

それを聞いて納得するハーラー。他のみんなも同じ反応だった。

「そーいや昨日の奴はなんなんだ？ 前にソルオール村の時にザンクと居たよな」

「ロンギの事かいな。正直ワイも分からん。そもそもあいつはフェンサーでもないし」

「あの強さで、フェンサーではないんですの!？」

ビューイの谷で襲ってきた長槍の男、ロンギの事を訊くファング。実はロンギがフェンサーではなかったという事実を聞いて驚くティアラ。それは他の者も同じ心境だった。

「せや。ワイが知る限りだと、ザンクもそうなんやが、ロンギはああ見えて部下思いなんや。変わった狂人といったところやろか」

「だから部下も部下で、個性的な奴らが多いのか。なんか納得……」

「レイルはんが言いたい事も分かるわ。なんせ部下の奴ら、クリームシチューに入れる具材で口論になっては、最終的に殴り合って決めるくらいやったし」

「ちなみにその時は結局どうなったの?」

「ザンクとロンギが投票結果みたいなものを作って、選ばれなかった具材は、別の料理に使われたそうですわ。殴り合ってた部下達は顔がボコボコになりながらも笑って納得したみたいやし」

「うっわー……」

それを聞いたファング達は別の意味で恐ろしく感じた。アリンに至ってはドン引きしてしまった。

「そーいえば前に厄災魔法がどうかかって言ってたよな？ 厄災魔法ってなんなの?」

「それがワイもダンナ達と初めてあった時に知ったんや。ティアラはんは聞いた事ありまっか?」

「いえ、私もそのような魔法は聞いた事がございませんわ」

話の流れで思い出したのか、アリンが厄災魔法について訊いたが、ガルドやティアラも聞いた事がないと答えた。

「……」

「おい、ハーラー、どうした？」

「レイもどうしたの？」

「なんでもないよ、ね？ ハーラーちゃん？」

「ああ、そうだね。なんでもないさ」

いつもと違う表情をしていたレイルとハーラーの様子がおかしかったのか、バハスとシャルが声をかけるが、2人はなんでもないと返したのであった。



「ガルド君は面白い子だね。彼がいると賑やかになるよ」

「偶にちよつと騒がしくなったりするけどね？」

「湿った空気になるよりいいじゃないか。私は好きだよ？」

フューリーを探しに行こうと、支度が早めに終わったレイルは宿の外でハーラーとみんなが来るまで話していた。

「フアング達に厄災魔法の事を話すのは、ちよつと早いし、それに場の流れで話すような軽い話題じゃ済まないしね……」

「確かに。あれは場の雰囲気だけで話せるような代物じゃないからね。レイル君の判断は正しいと思うよ」

話は先程まで話題になりかけてた厄災魔法について。正直、フアング達に話すのは、ちよつと早いと思つたからだ。

「ハーラーちゃんはと思う？ みんなに話すのはまだ早いかな？」

「うーん、私はまだ話さなくていいと思うな。ただ、バハスが私達の様子がおかしいと勘づいていたからねー……」

「やっぱり？ シャルとティアラもなんだよね。この際だから、バハスさん達だけには教えておこっか。もし聞かれたらだけど」

「そうしようか」

かと言つて、自分達だけが厄災魔法について知ってるのもどうかな

ので、お互いのパートナー妖聖だけに教える事にした。

「……(ぴよこ)」

「あ、ホロン。もう大丈夫なの?」

「……(コクコク)」

するとタイミングを見計らってたのか、レイルの頭にホロンが現れた。実は朝からずっとレイルの頭に隠れていたのだ。

「? もしかして体調でも悪いのかい?」

「……(ふるふる)」

「朝食を食べる気分じゃなかったただけだって。……エフオールと果林ちゃんの事を考えてましただって」

どうやらホロンが今まで姿を現さなかったのは、エフオールと果林の事を考えてたかららしい。そういえば昨日、宿屋に戻ってからホロンは妙に元気がなかったと妖聖組から聞いたのをハーラーは思い出した。

「ホロン、あんまり無理はしないようにね?」

「……(コクコク)」

「レイル君も人の事、あんまり言えないと思うけどねえ……」

「ハーラーちゃん、何か言った?」

「いや、なんでもないよ。レイル君の気のせいじゃないかい?」

「……そういう事しておくよ」

ハーラーに何か言われた気がしたレイルだったが、彼女は気のせいだと言った。解せないが、そういう事にしとくレイルなのであった。

第24話 次のフューリーはお急ぎ？

フューリーの情報を貰おうとロロがいると思われる噴水広場にやってきたレイル達。

「あ、お兄ちゃん達だー！ ひっさしぶりー♪ 今日もとびきり美味しいこのお値段の情報があまるよ。どかーんと、買ってかない？」

案の定、彼女は居た。レイル達に今回の情報料金を見せる。

「……ふむふむ、2200Gold^{ゴールド}か。ロロちゃん、端数分のお金が微妙に足りないから、3000Goldで」

「はあーい♪ 800Goldのお釣りになりまーす」

「……ん。確かに。……端数分のお金、後で調節しておかなきゃ」

ロロからお釣りの800Goldのお釣りを受け取りながら、愚痴るレイル。

「今日の情報はね、実は結構急がないとゲットできないかも」

その言葉を聞いて、首を傾げるレイル達。急がないとゲットできないとはどういう意味なのだろうか？

「場所はザワザ平野にあるんだけどー、実はドルファがそのフューリーを狙っているの」

「あのドルファが？ それは本当ですか？」

「……（うん、なんとなく察してはいたけどさ……）」

ティアラは驚き、レイルはソルオール村の一件の時に、ザンクとパイガがそんな話をしたのを聞いてた為、なんとなく察していた。

「そだよー。しかもアポローネスって言う、めっちゃ強いフェンサーが率いているみたい」

「なんやてー！ ……あのアポローネスが？」

「……っ！」

ロロの言葉を聞いたガルドが驚きの声を上げ、レイルはその人物の名前を聞くとピクツと反応した。

「知ってるのか、ガルド？」

「アポローネスは、ザンクと同じ、ドルファ四天王の1人や」

「ザンクとそいつが、その四天王だって？」

「そういや前にパーティを開いてた会社がそんな名前だったなと言
うファング。」

「ドルファホールディングスは一部上場の総合企業なんだよ。孤児院
とか慈善事業にも力を注いでいて……地域密着型のもつても良い企
業みたい」

「コネクションの幅もとっても広いんだよ！とファングに説明する
口口。」

「確かに、地元民が就職したい企業トップ3に数えられている大企業
ですわ」

「その辺は4年前と変わらない評価ね。尤もあくまで地元民が就職し
たい企業という意味での評価だけ」

「……（ティルアの場合、皮肉も込めてると思うけど）」

「ティアラとティルアが言った。一方でシャルはティルアの言葉に
は、別の意味も含まれてるのを察していた。」

「あの噂は本当だったんだな。フューリー集めに、資金と人材をつぎ
込んでいるって」

「その噂って、いつからなの？ ハーラーちゃん」

「ドルファ主催のパーティがあった時期にそんな噂が流れ始めたのが
最初だね。でも、もしかしたら、その噂はもつと前からだったのかも
しれないけど……」

「ハーラーの言葉を聞いたレイルは、マジで今のドルファはどうなっ
てるんだ？と疑いたくなってきた。」

「しかしドルファが競争相手となると、面倒な事になるかもしれない
な」

「…ほんとだね。はあ……」

「フューリー集めにまさかドルファが関わっている事に溜息を吐く
レイル。」

「その通りや。しかもドルファ四天王、アポローネスが出てくるとな
ると、これは相当手強いで！」

「ガルドさん、ご存知ですか？」

「ティアラがガルドに訊ねる。」

「ワイは直接、会った事はあらへんが、アポローネスと言えば、ドルファの武闘派ナンバーワンフェンサーや」

「武闘派フェンサーねえ……相変わらぬ評価だなあ……」

「？ レイルはん、アポローネスの事、知つとるんかいな？」

「だって僕、4年前まで、ドルファで働いてたし、アポロとは元仕事仲間と同僚だもの」

「……「ええええええええっ!?!」「」」

レイルがそう暴露すると全員が驚きの声を上げた。

「あの、お姉様から聞いたのですが、お義兄様がドルファで働いてた時から、そのフェンサーは変わってないんですの？」

しかし前にティルアが言った事を思い出したのか、ティアラはレイルにアポローネスについて訊く。

「どうだろ？ アポロの事だし……変わってないんじゃない？ 多分だけど。ね、ホロン？」

「……（コクコク）」

レイルの言葉にホロンも頷く。

……ちなみにファングが辺境の地下牢で脱出をする際にアポローネスの隙を作ったのを手伝った事は言わないでおく事にした。

「さて。フューリーの場所も教えてもらった事だし、ザワザ平野に行こつか。ロロちゃん、情報ありがと。早速行ってみるよ」

「頑張ってねー♪」

それもそうだと思しながら、ロロにお礼を言った後、一同はザワザ平野に向けて出発するのであった。

第25話 ザワザ平野

口口からの情報でなんとか目的地に着いたレイル達。ここ、ザワザ平野は大都市ゼルウィンズから北西にある場所だ。

「ここがザワザ平野か」

「昼間はのどかな場所だけど、夜になると真逆でモンスターが活発になるんだよ」

「つーことは、俺らはタイミングが悪い時期に来たって事か？」

ファングの疑問にレイルは、こればかりはね？と答えた。

レイル達がザワザ平野に着いたのは夜で、大都市ゼルウィンズからザワザ平野までは意外と距離があるので仕方のない事だった。

「しつかし見た感じ、どこにもドルファの影も香りもありやしねえな」

「いや、ドルファの香りって何よ。香水じゃあるまいし」

それにまだ入口だものと言うアリン。

「それにしても、本当にアポロがここに来てるのかな？ 別に口口ちゃんの情報を疑ってる訳じゃないんだけどさ」

「気になったんやけど、レイルはんって他人に渾名を付ける癖でもあるん？」

とりあえず道なりに先に進む中、レイルが呟きにガルドが訊ねる。

それは他の者も気になっていた疑問だった。

「癖……というよりは、親しみを込めた意味のほうに近いかな？ あ

とは大事な人への想いのメッセージ的な？」

「そうなんですか？ でも、お姉様には渾名で呼んでませんよね……」

ここでティアアラが首を傾げた。その捉え方だと、シャルロットが『シャル』と呼ばれてるのに対して、自分の姉はレイルに渾名で呼ばれてるところを見た事も聞いた事もない。

「それは単純にレイがティアラに付けた渾名が恥ずかしいからよ。そうでしょ、ティアラア？」

「……言わなくていいから」

そう答えたのはシャル。そしてティアラは恥ずかしいのか、ぷいっとなつぽを向いた。

「あら。私だけ渾名を付けて不公平だとか言っ、服を脱ぎながらレイを押し倒して迫ったのはどこの誰かしら？」

「そ、それは確かに私だけ……って！ 妹の前で何を言わせんのよ!?!」

わざとらしく首を傾げながら言うシャルにティルアは慌てだす。

「ふ、服を脱ぎながら……!」

「お、お姉様……な、なんて大胆な……!」

「いや、ティルアちゃんも乙女だねえ」

「そうですね」

アリンとティアラはこの反応。ハーラーとマリサは意味深な笑顔である。

「同じ女性としてどうかと思っただけど、ある意味ティルアにしかできない芸当だから、そこは尊敬するわ」

「言わないで!?! それは流石に私の中で黒歴史なんだから!?!」

これ以上余計な事を言わせないように必死にシャルを阻止するティルア。止めて……!?!と言いながら。

「……盛り上がってるところ悪いんだけどさ？ その話、僕らが9歳の頃の話だからね?」

「それはそれでまズくない!?!」

話がややこしくならないようにレイルが溜息を吐きながら、女性陣に話のオチを教える。アリンが突っ込むが、レイルはいやくなんか、懐かしいね」と呑気に流してた。

「うおおおっ!」

「!?! こいつらドルファの刺客か!?!」

そんな空気も束の間、黒色の鎧を身に付けた大人数の兵士達が現れた。

「……囲まれたな」

「なんだと!?! でも兄貴、目の前の奴らしか見えねえけど……」

「草陰と木の上をよく見て？ 相手は上手く隠れてるつもりみたいだけど」

レイルの指摘に、ファングは目を凝らして、よく見ると確かに草陰

や木の上にも敵が隠れているのが確認できた。

「ここは僕らがやっておくから、先に行つて」

「けどよ……」

「ですが、お義兄様……」

「……。フアング君、ここはレイル君達に任せよう。敵にフューリーを取られてしまつては本末転倒だ」

足止めを自ら買って出たレイルにフアングとテイアラは少し渋つたが、ハーラーの言葉でなんとか納得し、フアング達は領いて走つていった。

「フン！ 貴様のような子供一人でこの人数に勝てると思つていいのか！」

フアング達が去つた後、1人の兵士がレイルにそう言つた。

「…直ぐそうやって勝つた気にいるよね。見かけだけで判断するなつて習わなかつたのかな……」

「……（コクコク）」

「運がないわね。貴方達」

「そうね。今日のレイルは不機嫌なの。同情するわ」

レイルは呟き、ホロンは頷き、ティルアとシャルは溜息を吐きながら兵士達にそう言つた。

「…『フォルストム』」

「ぐうわあああああ!?!」

「な、何……っ!?!」

魔法名をレイルが呟いた途端、木の上に隠れていた兵士達が血塗れになりながら落ちてきた。突然の事に追いつけない兵士達。

「あまり僕らを甘く見ない方がいいよ?」

レイルのその一言で、兵士達はそれぞれの武器を構え、臨戦態勢に入るのだった。

第26話 四天王が2人もかよ!

レイルに言われ、ザワザ平野の奥に先に進むフアング達。

「はああああつ!」

「またか!」

そこに新たな刺客が現れ剣を構えるフアングだが、彼より先に刺客を斬る者が現れた。

「シャルマン様!」

「お前はピアニストのキザ野郎!」

その正体はシャルマンだった。

なんかめんどくさそうな顔をするフアングに対して、アリンとテイアラは目を輝かせていた。逆に彼と面識のないハーラーとバハス、ガルドとマリサは誰この人?という状態だった。

「またお会いしましたね。あれから、あなた達のご無事を祈っていたんです」

「私も祈っておりましたわ。またお目にかかれますように」

「あたしもあたしも!」

この後、シャルマンの態度が気に入らない一部の男性陣とそれを擁護する一部の女性陣の軽い言い争いが発生したが、とある妖聖研究者とそのパートナー妖聖、そして母性がある妖聖の一言により、フアング達はひとまず先に進む事になった。



「ようこそ、お待ちしておりました。ドルファに敵対するフェンサー達よ」

「誰だ、お前?」

先に進むと、眼鏡をかけた中年男性がフアング達を待ち受けていた。

「ただの地獄への案内人ですよ。この先の奥でアポローネスがあなた達を待っています。そこでドルファ四天王の私とアポローネスがお

相手しましょう」

「四天王が2人もかよ！」

「ガルド！ この裏切り者！ ドルフアに盾つく者がどうなるか思い知らせてやる！」

眼鏡をかけた中年男性、パイガはガルドに向かってそう言った。

「そういう脅し文句はあまり好きじゃありません。覚えていますか、お久しぶりです。あのパーティ以来ですね？」

「げえっ！ シャルマン……何故、あなたが……」

「あらら。なんだか1人多いみたいね。しかも凄腕のフェンサーが」
シャルマンの姿を見て、たじろぐパイガ。ビビアがどーするう？と面白そうな表情でパイガに眩く。

「ふふふ……まあいい。いいかい君達！ 私も相手をしようと思ったが、アポローネス1人で充分だ。アポローネスが纏めて君達の相手をお願いします」

このドルファに弓引く野良フェンサーどもめ！とフェンサー達に言いながら。

「へへーん、アポローネスは強いんだぞー！ お前らなんて一捻りだ！」

『……………』

パイガの情けない態度にフェンサー達だけでなく、パートナー妖聖のビビアにも呆れられるのだった。

「…………コホン。さあ、ついてきたまえ」

さっきの話を流すかのようにパイガは咳払いをし、フェンサー達をアポローネスが待つ場所に案内するのであった。



「来たか。ドルファの敵。そして、我が魂と共鳴する者達よ」

パイガに案内された場所に着くと、アポローネスはフェンサー達に開口一番にそう言った。

「お前はあん時の！ お前がアポローネスだったのか!？」

「ダンナ、知り合いなんか？」

フアングの反応にガルドが訊ねる。

「ああ。こいつにはでっけえ借りがあるんだ。丁度いい、ここで返させてもらうぜ」

以前、フアングは大都市ゼルウインズの郊外にある辺境の牢屋でアリンと脱出しようとした際に、目の前にいる男に惨敗したのだ。まさかその時の男の正体がアポローネスだという事にフアング自身も驚いていた。

「フアング、少しは強くなったか？　そうでなければ貴様を生かしておいた意味がない。だが同時に貴様には感謝している」

「どういう意味だ」

アポローネスの言葉に、剣を構えながらフアングは訊き返す。

「貴様を助けた第3者による攻撃の正体を知る切っ掛けを私は得られなかった」

「切っ掛け……だと？」

「そうだ。あの日以降、私は更に剣の高みを目指すという心意気を得た！　我が妖聖、セグロも同じ！」

『ぐおおおーっ！』

『フアング、あの時だよ！　運良くアポローネスを襲った衝撃波の事だよ！』

言葉の意味が分からないフアングにアポローネスの言ってる意味が分かったアリンが思い出させた。確かにあの時、第3者の攻撃によって助かったのは事実だ。だがアポローネスがそこまで感情を表に出す程の事を自分に言う理由が分からなかった。

「パ、パイガ様！　アポローネス様！」

「し、失礼します！」

そこへ何かから逃げてきた2人のドルファの兵士が現れた。1人は焦りの表情、もう1人は落ち着け!!と言ってるが、彼も明らかに焦っていた。

「ど、どうしたんだ!?　2人共、傷だらけじゃないか!？」

「……何の用だ」

心配するパイガに対し、アポローネスはこれから始まるフアングとの戦いに水を差されたのか少々不機嫌だった。

「あ、あああの……」

「落ち着け！ 俺が説明する。アポローネス様、これからの戦いに水を差すような真似でのご報告、申し訳ありません！ しかし奴らは強過ぎます！」

「……聞こう。何があった？ それに奴らだと？」

兵士の1人がアポローネスに謝罪をしつつ、切羽詰まった表情で簡潔に答えた。その表情を見て何かを察したアポローネスが兵士に訊く。

「は、はいっ！ 奴らは……！」

だが、兵士がアポローネスに説明をしようとした瞬間、フアング達が来た方角から電撃を纏ったビーム状の水流が兵士2人に襲い掛かり、兵士2人は直撃してしまう。

「ぐ、ぐわああああ!？」

「!? こ、これは……！」

水流が兵士に当たった瞬間、電撃の嵐がバチバチと浴びせ終わった直後、兵士2人は軽い黒焦げ状態になりながらパタリと倒れた。近くに居たパイガが直ぐに駆け寄る。しかし兵士2人は気絶だけで済んでいた。

「な、なんだったんだ。今のは……」

「アポローネス。今の魔法はまさか……」

「……ああ。間違いない。『メイルディーン』だ。それを行使できるのは……」

何が起こったのか分からないフアング達一同。だが、アポローネスとパイガだけは違った。そして魔法の正体とそれを使用した人物を確信したアポローネスは、大剣を構えた。

「フアング、構えろ。私は貴様を本気で斬る！」

「俺はあんたに勝つ。前の時と違って、あれから俺は兄貴に戦い方を教わってんだ。あんたを倒す！」

「なるほど。そういう事か。だが……」

その言葉を聞いた瞬間、フアングの懐にアポローネスが入り込んでいた。彼の放つ殺気に気づいていたお陰もあってか、フアングはアポローネスの大剣を早いタイミングで受け止めた。

「我が好敵手を越えたければ、先ずはこの私に勝つてからにする事だ！」

「絶対に……負けねえ！」

互いの剣が激突する。それがフアングとアポローネスによる戦いの合図だった。

第27話 違和感がある夜空

フアングとアポローネスが戦いを始めた同じ頃。

「…お、魔法が当たった」

「……（コクコク）」

入口付近で襲ってきたドルファの兵士達を倒し、先に進みながら増援にきた別の兵士の相手をしてるレイル、ホロン、テイルア、シャルの4人。

「それにしても減らないね？ ふっ！」

「ぐふっ!？」

剣で受け流しながら、兵士の鳩尾に向かって蹴りを決め込むテイルア。

「当たり前でしょ。普通、こういう集団戦なんて滅多にないんだから。はっ！」

「ぐわあああつ!？」

光属性の初級魔法『フォルス』を全身に纏わせ、突きによる攻撃で兵士の鎧を貫通させながらダメージを与えるシャル。

「……（ゲシッ!）」

「ぐふっ!？」

小さい体を生かし、空中サマーソルトキックを兵士に浴びせるホロン。もろに喰らった兵士は地面に倒れ込む。

「はあああああつ!」

「…お前は眠ってる」

右手で兵士の攻撃を止めたレイルは空いてた左手で麻痺効果と睡眠効果を合わせた魔法を放つ。空気中にまき散らした霧吹きのような物質を浴びた兵士はパタリと倒れ込んだ。

「怯むな！ 奴らとてフェンサー！ 疲れは必ずくる！ 人海戦術だ！」

指揮官と思われる兵士が他の兵士達にそう鼓舞する。なるほど、考えたなど敵ながら感心する。

「ホロン、テイルア、シャル」

「……(コクコク)」

「フェアリンク！」

レイルの合図にホロン、ティルア、シャルは光となりレイルの元に集まる。彼を中心に虹色のオーラが纏わりつく。

「バカめ！総員、掛かれっ!!」

「「「うおおおっ！」」」

相手が1人になった事を好機だと思った兵士達は一斉にレイルに襲い掛かる。

「(予想通り、一斉にきたな……)」

しかしこれはレイルの計算の内だった。今から放つ魔法は、範囲調整がちよつとだけ難しい魔法だ。しかも場所はザワザ平野の入口付近なので何ら問題ない。

「…『シャボンストーム』！」

レイルが魔法名を呟いた瞬間、彼の右手から無数のシャボン玉が放たれた。視界を軽く遮る程のシャボン玉を前に兵士達は自然と動きを止めてしまう。

「な、なんだこの泡は……!?!」

「と、取れねえ……!」

そして気付けば全身が泡まみれになった兵士達は必死になって体に付着した泡を落とそうと躍起になるが、泡はどんどん大きくなる。

「今の内に先に進もう。なんか嫌な予感がする」

「……(コクコク)」

『あーあー……泡まみれ……』

『そうね。それに場所が場所なだけに、この光景は滑稽ね。放つておいても問題なさそう』

シャルの言う通り、泡まみれになっている兵士達はそのまま放つておいても大丈夫だろう。寧ろ、自分達が帰る際にどうなっているかが見物なのだが。

「……(また上空から嫌な気配だ。さつきよりも大きくなってる……)」

兵士達と交戦してる際にも感じたが、ファング達が向かったと思わ

れる先の奥の上空から嫌な気配を感じたのだ。最初は小さかった気配が徐々に大きくなっていく感じ……

まるで何かのタイミングを待つかのように。

それに夜のザワザ平野は常に星空が綺麗な筈なのだが、明らかに一部分の上空だけ、どんよりとした雲が夜空を覆い違和感があった。

「…急がないと」

違和感の正体があの雲かもしれないと思ったレイルは、ザワザ平野の最深部に急いで向かうのであった。

◇

「オラッ！」

「効かんっ！」

その頃、ファングはアポローネスと激しい戦いを繰り広げていた。アポローネスはファングの攻撃を大剣を使い巧みに躲していた。

「くそっ！」

攻撃が当たらない事に焦りだすファング。自分の攻撃は当たってる。だが、アポローネスに決定的な一撃が当たらないのだ。

「(やはり……)」

一方でアポローネスもファングの太刀筋には覚えがあった。彼自身の個性という太刀筋がありつつも、それとは別のどこか懐かしいこの感じ。

「うおおおおっ！」

「むっ、くるか……！」

そう思っていると、ファングが突っ込んできた。アポローネスは大剣を構え迎え撃つが、その瞬間、彼の左脇腹から血が噴出し、突然の痛みに膝をつくアポローネス。

「ぐっ……！」

「へっ、一発入れてやったぜ」

『ちよつとファング！ あんた何も考えずに敵に突っ込むなんてバカ!?! 攻撃が当たったからいいけど、外れてたらどうすんのよ!』

「うつせー！ 当たりやいいんだよ！ がっ…………！」

『フアング!?!』

「問題ねえよ、掠っただけだ…………」

同時にフアングも膝をつく。よく見ると右脇腹から血が流れている。
た。

「今の攻撃…………疾風、か…………久しく喰らったが、相変わらず油断できぬ技だな…………」

「余裕ってやつかよ？」

「いや。自分でも驚いている。反射的に返したとはいえ、その技はまともに喰らえばひとたまりもないからな」

「どうやら先程アポローネスが反撃できたのは、反射的にだからだそうだ。」

そして互いに構えたその時、黒い雷がフアングとアポローネスの間に爆音と共に落ちてきた。

「ぐっ、なんだ!?!」

「黒い…………雷、だと!?!」

そして音が徐々に小さくなり黒煙が晴れる。うつすらと見える黒い影…………

「……………」

煙が晴れたそこに現れたのは、マントを羽織い、黒い鎧を装備した謎の騎士だった。

第28話 謎の黒騎士と謎の骸骨騎士

フアングとアポローネスの前に突如として現れた謎の黒い騎士。

「……………」

「なんだ、あいつは……………」

『フアング、気をつけて。あの黒い騎士、只者じゃないよ!』

只ならぬ気配を感じ警戒するフアングとアリン。

「バカな!?! 何故この世界に居る! 貴様は6年前に我らが倒した筈!」

「……………」

アポローネスが驚愕しながらも大剣を構えながら騎士に問うが、騎士は答えず、重い腰を上げ巨大な大剣を突き付けた。

「その兄ちゃんよお…………その疑問が気になるなら、互いに剣を交えれば分かるんじゃないかい? お、掴めた……………」

「誰だ!?! って…………うおっ!?! な、なんだ!?!」

その質問に答えるかのように、フアングの足元からボロいグローブを付けた手が彼の足首を掴む。突然の出来事にフアングは反応できず、ティアラ達がいる場所まで投げ飛ばされてしまう。

「……………ふいー、あん? ここは……………ザワザワ平野か? 随分と変わっちゃったもんだなあ……………」

「な、なんだあいつは!?!」

『ぎゃああああ!?! が、骸骨ううう!?!』

「しかも喋ってますわ!?! 人でも入っているんですの!?!」

「ティアラはん、そんな訳あらへんやろ!?! どう見てもほんまもんの骸骨やないかい!?!」

「あの魔物は一体……………」

地面から現れたのは、刀身が折れ曲がった古びた剣に年季の入った丸い盾を装備した骸骨の騎士だった。しかも喋っている。フアング、アリン、ティアラ、ガルド、シャルマンが驚きながらも武器を構える。

「っ!?!」

「……………」

何かの殺気を感じた骸骨騎士は瞬時に攻撃を躲す。そして攻撃の主に向ける。攻撃の主はバハスをフェアリンクさせ、銃をこちらに向けているハーラーだった。

「……その尋常じゃない避け方、よりによってまたあんだかい」

『おいハーラー、あの骸骨みたいな奴を知ってんのか?』

バハスの疑問はフアング達の代弁みたいなものだった。

「また? 誰だ貴様……っ!? ま、まさか……」

一瞬首を傾げた骸骨騎士だったが、ハーラーを見て直ぐに口を開いた。

「まさか9年前、この俺に手も足も出なかった、あの時のズボラな小娘かつ!」

「ふーん……覚えててくれたのかい? 私は嬉しくないけど」

『いやいや、敵にまでズボラって言わせるって……』

色々とハーラーに訊きたいが、敵にまでそういう認識なのかと内心で突っ込むシャルマンを除く一同。

「あつちの黒髪の兄ちゃんは、黒騎士のダンナの獲物なんでね。終わるのを待つのも暇なんだわ。だからよお……」

後ろで黒騎士と交戦してるアポローネスをチラツと見た骸骨騎士はフアング達を見る。

「恨みはねえが、全員、俺様の準備運動の相手になってくれや。……できただけ加減はしてやるからよ」

ギリリと目を光らせ、刀身が折れ曲がった古びた剣をフアング達に突き付けながら言った。



「……………」

「(くっ! この者の太刀筋……6年前よりも力が増している!)」

大剣を片手で軽々と振り回しながらアポローネスに襲い掛かる黒騎士。アポローネスは防戦一方だった。

目の前の黒騎士は6年前にドルファの長期任務の際に行く先々で

何度も対峙した事があった。その当時、ゼルウィンズ地方の歴史に残る大事件が起きたのだが、ドルファ総出で奮闘しながらも事件は無事に解決したのだ。

いわばアポローネスにとって、黒騎士は因縁の相手でもある。

『ぐおおおーっ！』

「セグロ、どうした？」

『グルル！』

「何？ 奴の剣にパートナー妖聖の気配だと？」

するとセグロが何かを訴えてきた。

どうやら黒騎士のパートナー妖聖の気配を感じ取ったらしい。よく見ると確かに黒騎士の使う大剣から微弱だがオーラのような物質が噴き出していた。

「……………」

『グゲ、グル……………』

「それが貴様のパートナー妖聖か！」

『グルルウウウ!!』

そして黒騎士の大剣から現れたのは、異質な妖聖だった。

上から紫色の糸で吊り下げられたセグロと同じ大きさの黒と紫が混じり合った龍。そして鳴き声もどこか不気味だった。アポローネスとセグロは警戒する。

「……………」

「っ！ 速いっ！」

予備動作も無しの状態でアポローネスに突撃する黒騎士。寸でのところで剣を受け止めるが、衝撃で吹っ飛ばされてしまう。

『グ……………ルル……………』

「っ!? セグロ、大丈夫か!？」

『グルル……………』

どういう訳かセグロもダメージを受けていた。フェアリンク状態のパートナー妖聖がダメージを受ける等、聞いた事がない。

『昔、なんかの文献で読んだんだけど、その気になれば、フェアリンクしてる状態のパートナー妖聖にも攻撃を与える事ができるんだって』

ふとアポローネスの頭に浮かんだのは、かつて自分の好敵手が言った言葉だった。まさか今の攻撃がそれかと。

「……………」

視線の先には黒騎士が次は外さんとばかりにアポローネスを見据えていた。

「セグロ、奴の攻撃はお前にも蓄積するようだ。準備しておけ」

『ぐおおおーっ！』

もしも好敵手が言っていた仮説が正しければ、ここから先は文字通り、命のやり取りだ。

◇

「こいつ、すげえ強ええ……」

「バケモンかいな……」

「くっ……」

ファンング達は地面から突然現れた骸骨騎士に苦戦を強いられていた。それぞれ外傷はないが、各々斬られたという感覚はあった。

「いい腕だ。だが詰めが甘え……」

「ならこれならどうです！ 『メイブロード』！」

「あん？」

骸骨騎士が棒立ちしてたその隙に、ティアラは水属性の中級魔法『メイブロード』を放った。地面から水の槍が複数吹き出し、骸骨騎士に直撃する。

「ふむ、ちよつと過激な水浴びも悪くねえな……」

「っ!? そんな……私の魔法は確かに当たったのに……」

「ああ。お嬢ちゃんの魔法は当たったとも。だが俺様に魔法は効かねえんだわ……」

だが水の槍を叩き斬り、無傷で眩く骸骨騎士が居た。

「さて。次は何を見せてくれるんだい？ さつきみたいに全員で掛かってきてもいいんだぜ？」

「ぐっ……………」

「あん？ なんだ？」

さてどうするかと骸骨騎士が剣を構えた途端、アポローネスがこちらに吹っ飛んできた。背後で鎧の音を鳴らしながら、黒騎士は歩きながら骸骨騎士の隣に並び立つ。

「おいおい。そこからへんの魔物かと思つたら、さっきの黒髪の兄ちゃんかい。ダンナ、びっくりさせないでくれや……」

「……………」

「な、んだ、こいつの威圧感は……!? 身体が動けねえ……」

黒騎士の放つ威圧感のせいで、ファング達は動けなかった。あまりの威圧感に武器を握るのがやっとだった。

「剣を振っただけで、これほどの威力とは……!」

「……………」

深手を負い、満身創痍なアポローネス。そして無情にも止めを刺そうと大剣を振り上げる黒騎士。

「(くっ…………。ここまで、か…………)」

敵わないと悟り、目を閉じるアポローネス。しかし振り下ろされた筈の大剣は、いつまで経つても自分に来ない。まさかあの近距離で外したのか?と思ひ、目をゆっくり開く。

「っ！ お、お前は…………!」

「第一開口がお前つて…………君らしいけど、ちよつと酷くない？ アポロ」

そこに居たのは、黒騎士の大剣の刃先を指で受け止め、苦笑いしながらもアポローネスに声を掛ける好敵手^{レイナル}だった。

第29話 ザワザ平野での闘い

黒騎士の攻撃を指だけで受け止め、フアング達やアポローネスの危機に颯爽と現れたレイル。

「す、すげえ。兄貴、あいつの攻撃を指で受け止めたってのか……?」

『う、嘘……しかも素手だよ……』

フアング達から見れば、敵の真剣を素手……しかも指先だけで受け止めるという離れ技をやったのけるレイルに驚愕せざるを得ない。

「……………」

「…僕ばかり集中してていいのかな?」

「………… (ゲシッ!)」

レイルの呟きを聞いた黒騎士が振り返ろうとした瞬間、そこには彼のパートナー妖聖のホロンがおり、黒騎士はホロンの空中回し蹴りを喰らい吹っ飛んだ。

「アポロ、立てそう?」

「ああ、すまない……」

深手を負い、膝をついていたアポローネスをレイルはゆっくりと起こす。

「……黒騎士のダンナを吹き飛ばすとは、何モンだ?」

「今気づいたけど、またお前か……。何しに出てきた、チートグルメ骸骨」

その一言に骸骨騎士は青ざめる。

「ま、まさか9年前、ヘンテコな魔法でこの俺に傷を付けた、あの時の小僧かつ?! だとしたら何故、あの時と同じく姿がほぼ変わっていない!?!」

「企業秘密?」

「しやらくさい! なら、あの時と同じ串刺しにしてやるぜえ!」

そう言っただけ骸骨騎士は、レイル目掛けて突っ込んできた。

「させると思う?」

「吹き飛びなさい」

「っ!?! ぐおおおーっ!?!」

突如、2人の女性が骸骨騎士の背後に現れ、蹴りを浴びせ骸骨騎士を吹っ飛ばした。

「ねえシャル。なんか当たった感じがしなかったのは、私の気のせい？」

「そうね。寸前で盾でガードされたわ。あの骸骨、相当な手練れね」

「お姉様！」

「姉さん！」

その正体はティアラとシャルマンの姉であり、レイルのパートナー妖聖のテイルアとシャルだった。

「おー、いてて……ギリギリで防げたとはいえ、姉ちゃんら、いい蹴りを持つてるじゃねーの」

土煙が舞う中、骸骨騎士が首付近をコキコキと鳴らしながら歩み寄る。

「しかも蹴りの威力と魔力の流れからして……姉ちゃんら、人間でも妖聖でもねえな？」

「……………」

「そんな怖い目をすんなつて。別に詮索する趣味はねえよ」

ケタケタと軽く笑いながら、テイルアとシャルを見る骸骨騎士。

「……………」

「おいおいダンナ、自慢の鎧がちよつとへこんでるじゃねえか。つてか、あの小僧のちんまり妖聖、只者じゃねえな……」

「……………」

「アレかい？ 俺は別に構わねえが……」

するとホロンに吹っ飛ばされた筈の黒騎士が鎧の音を響かせながら、骸骨騎士の横に並んだ。

「……………」

「…………ダンナらしいね。小僧、それにその姉ちゃんら、コイツを倒せたら、今日は退いてやる」

そう言うのと骸骨騎士は、自身が持つてる剣とは別の剣の破片を地面に落とす。直後、地面が振動し地面から何かが現れる。

「グゴ、グゴ……主の命により……対象を……消去……」

「な、なんだ!? 鎧を着た……骸骨!」

『ほんとなんなの!? あの骸骨!? しかもまた喋ってる!?!』

「魔物が魔物を召喚するなんて……!?!」

『キュイキュイ!』

「めんどうだねえ……」

『ああ。しかもヤバイ感じがこつちまで伝わってくるぜ……』

「ワイ、もうホラー系はたくさんなんやけど……」

『あらあら。ガルドちゃん、大丈夫?』

「魔物なのに、なんとという威圧感……!」

地面から出現したのは、黒騎士に似た鎧を着た骸骨。手には棘付きのメイスを装備していた。魔物が魔物を召喚したという事実には、敵ながら驚きを隠せないファング達。

「小僧、コイツをその辺の魔物と一緒にしない方がいいぜ? 後ろの兄ちゃん達を殺すのも俺が命令すれば容易い。何を言いたいか……解るな?」

「……」

骸骨騎士の言葉に、大剣を地面に突き刺しながらこちらの様子を窺う黒騎士を見て、目的は恐らく、自分の戦力分析といったところかとレイルは直ぐに察した。

「ホロン、ティルア、シャル」

「…… (コクコク)」

「フェアリンク!」

「っ!?! (フェアリンクだと!?! あの者達はフェンサーではないのか!?!」

あの實力で!?!)」

レイルの合図にホロン、ティルア、シャルは光となりレイルの元に集まる。その様子を見て驚愕の表情になるアポローネス。

「殺れ!」

「消去……消去……!」

骸骨騎士の言葉に骸骨はレイルに目掛けてメイスを引きずりながら突進してきた。間合いに入った途端、骸骨はメイスを振りかぶる。その隙をレイルは逃さず、骸骨の足元目掛けて、蹴りを叩き込んだ。……」

「グゴ……グゲ……」

「……(なんだろ? 今の違和感……)」

瞬間、骸骨の態勢が崩れ、骨がバラバラになる。しかし違和感を感じたレイル。

「消去……消去……」

「っ!? 兄貴の攻撃でバラバラになったのに、あの骸骨……再生したのか!？」

「はっはっはっ! 茶髪の兄ちゃん、いいリアクションサンキューな。そうさ。そいつは俺様と同じ再生能力を持っているのさ。ついでに言っとくが魔法も効かねえぜ?」

『それって最早、ゾンビじゃん! レイルの攻撃が効かないって事!』
「惜しいな、お嬢ちゃん。厳密にはゾンビとは別物なんだぜ?」

なんとバラバラになった筈の骨が骸骨の元に集まり再生を始めたのだ。そのリアクションが見たかったとばかりに骸骨騎士がファング達に説明する。

「……ふーん、そういう構造か。なら、戦い方を変えればいい。シャル」

『シールダーモード』

レイルがそう呟くと、彼の右手には光属性が具現化したような盾が装備されていた。

「テイルア」

『リミット・ソードモード』

すると今度はレイルの左手に水銀の剣が装備される。

「グゴ……グゴゴ……対象……生存中……消去……消去……」

「……それはお前だよ」

踏み込みながらジャンプ斬りを骸骨に決め、着地した直後、隙を見つけたとばかりに骸骨はメイスを振り上げる。しかしレイルはお構いなしに剣で骸骨の下半身部分を連続で斬り続ける。

「グゲ……グゴ……!？」

「……(ピョコ)」

「グゴ!？」

「……(ザシユ！ ザシユ！)」

「グゴグゲ!？」

「…上半身、逃がさない!」

上半身と下半身が分かれたタイミングで今度はホロンが飛び出し、愛用の古びたボロい釘を手にその場で逃げてる骸骨の下半身を連続で斬り始めた。上半身も逃げ始めたが、それをレイルは見逃さなかった。

「……ダ、ダンナ、レイルはんの妖聖って、あんなに強かったん?」

「俺も初めて見た……」

『あ、あたしも……』

ガルドの言葉にフアングとアリンは首を横に振りながら答える。レイルが戦つてるところは何度か見た事はあるが、彼のパートナー妖聖であるホロンが単身で戦うのを見るのは初めてだった。

「……(ゲシツ!)」

逃げ惑う骸骨の下半身に止めとばかりに釘で斬り上げるホロン。完全に動かなくなつた下半身を見るや否や、レイルが斬り続けてる上半身に向かっていく。

「……(フン!)」

「グゴ……!？」

その場に落ちていた石を拾ったホロンは、骸骨の頭蓋骨目掛けて思い切り投げた。頭蓋骨に石が当たった骸骨は気絶するかのように動きを止めた。

「上半身の腕がお留守だよ?」

「……(ザシユ！ ザシユ!)」

「グゴ……グゴアア!？」

レイルとホロンの連撃によって、上半身の胸骨部分まで破壊された骸骨は、頭蓋骨のまま逃げ始めた。

「……もう、逃がさない。ホロン」

「……(コクコク)」

「っ! (ホロンのあの構え。まさか……!)」

再生能力の時間稼ぎの為に、必死に逃げてる事をレイルは予め分

かかってた。ホロンに合図を送ると、ホロンはレイルの頭に着地し、抜刀術のような構えを取った。アポローネスはその構えに見覚えがあった。

それはレイルがドルファに在籍してた際によく使ってた技であり、未だにアポローネスが見抜けない剣技による必殺技の構えだった。

「……………テイルア、シヤル」

『アタックエフェクト』『ザンゲキケン』『』

瞬間、レイルがその場から消える。

「グゴグゴアアアア!!?」

「……………ちよつとは僕も成長できた……………かも」

フアング達が瞬きをした刹那、次に目にしたのは、骸骨が断末魔を上げながら、消滅していく姿を見ながら眩くレイルの姿だった。

第30話 双方が納得する形も時には大事

「す、すげえ……今の何が起きたんだ？」

「全く見えなかった。あたし、レイルが敵じゃなくて良かったって思うわ……」

フアングとアリンの言葉にティアラ達も頷く。自分達が見た事がない剣技やフューリー形態であつさりと骸骨を倒したレイルを見たフアング達は戦慄した。仮にレイルが敵だつたらと思うとゾツとする。

敵に回したくないフェンサーの1位に入るだろう。

「アポローネス、無事か!？」

「ご無事ですか!？」

そこにパイガとドルファ兵がやって来た。何故か兵士達は泡だらけだが。

「はっはっはっ！ 小僧、まさか城攻め用の骸骨を本当に倒すとは見事だ。やはりテメエは面白れえよ！」

「……………」

骸骨騎士が拍手をしながらレイルに声を掛けた。黒騎士はレイルとアポローネスを見ているが。

「……………さっき言った事、覚えてるよね？」

「安心しな。男に二言はねえよ。約束通り、退いてやる。詫びと言っちゃなんだが、これをやるよ」

そう言うのと骸骨騎士は何かを投げ渡す。なんとその正体はフューリーだった。

「ダンナもそうなんだが、俺様はフューリーには興味はねえ……今回はそれでお互いに手打ちって事にしな。……そんじや黒騎士のダンナ、俺様はこれで失礼させてもらいますぜ」

そして骸骨騎士は、それだけ言い残すとザワザ平野から消え去った。

「……………次は正々堂々と消す。……割り込む事があつても貴公らを消す」

「!?」

骸骨騎士に続いて黒騎士が去り際にレイル、アポローネス、パイガにそう呟いた。黒騎士が喋った事に驚愕の表情になる3人。

そして大剣を地面に思い切り突き刺し、土煙に紛れるかのように姿を消していった……

◇

想定外の乱入者2人が去った後、静かになる一同。

「パイガのとつつあん、そっちのフューリーは譲るから、あのチートグルメ骸骨がくれたフューリーは僕らが貰ってもいいよね?」

「いいだろう。条件を飲もうじゃないか。そのフューリーは君達に譲ろう」

『っ?!』

レイルの衝撃発言にフアング達は驚いた。そしてパイガの返答にアポローネスを除いたドルファ兵士達も驚いている。

「レイルよ、貴様との決着はいずれつける」

「それなら怪我が完治してからにしてよ。万全じゃないアポロと勝負して勝っても嬉しくない。アポロだって逆の立場だったら、同じ事言ってくれるでしょ?」

「……ふっ。お見通しという訳か」

フアング達の元に戻る際に、アポローネスから訊かれたレイルは彼にそう返した。

「あの、お義兄様。どうしてフューリーの1本をドルファ側に渡したんですの?」

「簡単に言うと、監視の目があったから」

そしてザワザ平野の入口に戻る途中、ティアラの疑問にレイルは答えた。なんでも、あの骸骨騎士の配下と思わしき気配に見張られてる気配がしたからだと言う。

「交渉役に長けてる部分もあるからね。パイガのとつつあんは。雰囲気が違うでしょ?」

「確かにパイガのおっさん、いつもと違う雰囲気やったな。こう、四天王って感じやったわ」

「そうね〜」

その一言にガルドとマリサも頷いた。

「ですが、義兄さん。これでボク達はドルファのお尋ね者になってしまった。今後、ボク達はフェンサーだけでなく、ドルファの刺客にも狙われるでしょう」

「…あー、それはあるかもね。……とつても一部の派閥からだと思うけど」

シャルマンの言葉にレイルは肩を落とす。今のドルファ内部がどうなってるか分からないので、その可能性は無きにしも非ずなのだ。

「どうですか、一緒に行動しませんか。仲間が多い方がいいかと」

「え……えーっ!?! ウソウソ、ホントー! シャルマン様が、あたし達の仲間に♪」

「確かに………そうですわね。シャルマン様のお力があれば、この先、怖いもの知らずですわ」

シャルマンの提案にアリンとティアラは賛成。そうなると反対の者もいるわけで……

「ふざけんな! 誰がこんな奴と!」

「そやそや、誰がこんなキザ野郎と!」

「バカっ! こんな美味しい話に何言ってるの!」

ファングとガルドだった。そして声を揃えて、こんな美味しい話に何を言ってるんだと言うアリンとティアラ。

「まあ、いいじゃないか。こいつは確かに腕は立つ。楽できるぞ、ファング君」

「うーん、仕方ねえ……。その代わり俺と兄貴がリーダーだからな。なんでも言う事を聞くんだぞ。それが条件だ」

「はい。宜しく願います」

「……(僕はいつからリーダーになったんだろ? まあ、いつか……)」

ハーラーの言葉にひとまず納得したファング。

そして自分は何時からリーダーになったんだろ?と首を傾げたが、

まあいつかと思うレイルであった。



「なに!? アポローネスが敗れただと!」

「は……。アポローネスは念の為に病院で療養をさせています。他の兵士達も全員、軽傷でございます」

パイガからの報告を聞いた花形は驚きの声を上げる。フューリーは無事に回収できたが、四天王の1人が敗れたという事実には驚いてた。

「しかし、深手を負ったとはいえ、アポローネスが破れるとは、信じられん。一体相手はどんなフェンサーなのか」

「信じられないかもしれませんが……6年前にアポローネス達が倒した筈の黒騎士です」

「っ!?!」

パイガの言葉に目を見開く花形とバーナード。

「それは確かなのか?」

「はい。この目で確かめました。念の為にそちらの方も調査致します」

「…ふむ。パイガ、報告ご苦労。アポローネスには完治するまで休養だと伝えよ。そしてバーナード、例のフェンサーを叩き潰せ。お前なら間違いはあるまい」

「は、お任せ下さい」

「では私も失礼をば……」

そしてパイガとバーナードは社長室を後にした。

「はあ〜」

「つて、次に戦うのが自分じゃなくて良かったあ……とか実は思ってるんでしょー」

社内を歩きながら溜息を吐くパイガ。溜息の理由を言い当てるピビア。

「う、うるさいな! もしあの場にレイルが来なかったらと思うと

ゾツとしてただけだ……」

「まあ実際それは言えてるわね。アポローネスとセグロが無事にいられたのも、レイルとホロンのお陰だし」

「その話、詳しく聞かせてほしいわね」

「聞かせろ、聞かせろー」

別の声があったので振り向くと、そこにはマリアノと彼女のパートナー妖聖、クララが居た。

◇

「では今日を入れて3日は安静にしてください。傷の塞がり次第によつては、素振り程度でしたら大丈夫ですので」

「ああ。かたじけない」

「では私はこれで」

退室していく医師に改めて礼を言うアポローネス。

「グルル……」

「セグロ、傷の方は大丈夫なのか？」

「グルル」

とりあえずは大丈夫だと答えるセグロ。医師曰く、妖聖の方は個体差によるが、深い傷は負ってないから、とりあえず安静と言われた。

「失礼するよ、アポローネス」

「失礼するわ」

「パイガ。それにマリアノ……?」

そこにパイガとマリアノが入ってきた。溜息を吐くパイガの表情を見る限り、今から説明するのが窺えた。

「先ずはアポローネス、傷が完治するまで療養するようにと社長から伝言だ」

「承知した」

「次に……マリアノがここに居る理由なんだが、早い話、レイルの事を聞かれてしまつてな」

「そういう事か……」

それを聞いたアポローネスは納得した。それだったら彼女がこの場に来る理由も説明がつく。

「今回フューリーを回収できたのは、レイルが交渉に応じてくれたからなんだ。双方が納得のいく形だな」

「レイが？」

「そうだ。それと兵士達が軽傷なのはレイルが殺さないでくれたからだ」

兵士達が軽傷という疑問は納得したマリアノ。部下のザギから聞いたが、彼の同僚が『人生で初めて殺されなくて良かったと実感した』と言ってたらしい。

「ああ。あとそれとだね……」

そう言っつてパイガは懐から小型の映像記録を再生する装着をテーブルに置いた。

「これは？」

「見れば分かる。特にレイルと同期で付き合いの長い2人なら尚更かと思っつてね」

「……」

「それじゃ報告も終わったし、私はこれで失礼させてもらうよ。アポローネス、くれぐれも無理するんじゃないぞ」

パイガはそれだけ言うと、病室を後にした。

「……」

「グルル？」

「あ、ああ。そうだな……」

「マリアノ様く、これ見ないんですか？」

「そ、そうね。見てみましょうか……」

黙ってる2人に、セグロとクララが映像記録を再生しないのか？と訊かれた。動揺しながら返事をする主達を見たセグロとクララは珍しいなと思った。

そして映像が再生される。

『えー……』

『いや、そこを頼む！ 部下とアポローネスを助けてくれないか』

いきなり再生されたのは、めんどくさい表情のレイルだった。もう片方の声はパイガだろう。

『アポロを助けるのは別にいいんだけどさ……あの魔法を解くのめんどくさいんだけど。二度手間じゃん……』

元来た道を早歩きで進むレイルとパイガ。そこには全身泡まみれになりながらもがいてる兵士達の姿があった。

「見て見て。マリアノ様、あいつら泡まみれ」

「そ、そうね……なんの魔法を使ったのよ、レイ……」

「見ろ。右上の者に関しては、悟りを開いた表情をしているぞ」

これには別の意味で少しドン引きになるマリアノ。そして冷静に突っ込むアポローネス。

『……』

『ぐへっ!? あ、泡がさつきより減った……。っ！ き、貴様は……さつきの!? それにパイガ様?』

『…パイガのとっつあん、これでいいんでしょ?』

『ああ、感謝するよ! お前達、この子に手を出すんじゃないぞ?』

『えっ!? で、ですが……』

『今は休戦状態だ。今回の任務が終わった後に私がみんなに話そう!』

それより他の兵士達の手当を。緊急事態が起きた』

『はっ。直ぐに! 他の者達にも伝えときます!』

指をパチンと鳴らし魔法を解除したレイル。そこからはパイガが他の兵士達にも状況を軽く説明していた。

「指示が意外と的確ね。普段からこうだと良いのだけれど……」

「そうだな……」

パイガが普段からこうなら言う事はないのだが……というのがマリアノとアポローネスの正直な感想だった。

『なあレイル。ドルファに戻って来る気はないのか?』

『……無理。内部抗争が確実に起こるから』

再び早歩きで奥へ進み始めたレイルにパイガは彼に質問をする。しかし返ってきた言葉はそれだった。

『しかし困ったな。君のブロマイドの在庫がちよっとだけ残っていて

ね……」

『処分していから。そもそも誰が買うのさ？ 僕のブロマイドとか……』

「おいマリアノ。何故今のレイルの言葉に対して視線を逸らす」

「……してないわ(言えない、実はレイのブロマイドを買ってただなんて……。誰にも見つからないように5つ買ったただけだけど……もし残ってるなら、私が全部買い占めようかしら?)」

アポローネスの言葉に視線を逸らすマリアノ。実を言うとマリアノ、現在は絶対に手に入らないレイルのブロマイドを今も大事に持ってるのだ。

『ブロマイド!? ねえレイ、どういう事!?!』

『詳しく聞かせてもらいたいわね、レイ?』

『なんでティルアとシャルもそこで反応するの!?! 意味が分からないよ!?!』

するとレイルの両脇に167cmの2人の女性が現れた。

「……………この女達は誰?」

「レイルのパートナー妖聖だそうだ。最初は私もフェンサーかと思っただが……」

「ふーん……そうなの……」

「あわわ、マリアノ様、お顔が怖いです……」

それを聞いて、ふーん……といった感じで呟くマリアノ。そしてクララはマリアノが怖い顔をしてる事にビビっていた。

『グギャギャッ!』

『『邪魔く〜!!』』

『グゲエエエツツ〜!?!』

ちようどいいのか運が悪いのか、ザワザ平野に生息している魔物が現れた。……が、機嫌が悪いティルアとシャルによって蹴飛ばされ星になってしまった。

「あの巨大な魔物を蹴り飛ばすか。ふむ、落ち着いたら、素手の訓練もしておくか……」

「あ、あれくらい私もできるわよ!」

「お前は何に張り合ってるんだ？」

「グルル……？」

「うん。なんか昔のマリアノ様に戻ってきてるよね」

アポローネスとマリアノは気付いてないようだが、セグロとクララは、レイルがドルファに在籍してた頃の賑やかな感じに戻ってきてる気がするのだった。

第31話 宿に戻ったら蒼き疾風が来てた

ザワザ平野のフューリーの件から数日。

「釣れないね……」

「……（コクコク）」

「そうだね……」

「そうね……」

レイル、ホロン、ティルア、シャルの4人は大都市ゼルウインズの郊外にある湖で釣りをしていた。

「なんか今日辺りに、フアング達が向日葵荘に帰ってきそうな気がするんだよなあ……」

「……（コクコク）」

「レイの勘って、だいたい当たるもんね」

「そうね。しかもその勘が割と重要な事だったりするのよね。今までの経験上……」

そもそも何故レイル達が釣りをしているのかというと、フアングとアリン、ティアラとシャルマンの4人が温泉から帰ってきそうな気がしたのだ。

ちなみにロロから貰った温泉への特別無料招待券が4枚しかなかった為、じゃんけんで決めたのだ。行った事がある温泉だったので、レイル達はじゃんけんに参加しなかったが。

「レイ、そもそもこの辺って何が釣れるの？」

「パーティ用を使う大型の魚とか。蒲焼き用の魚……稀にコラーゲンたっぷり肉食魚とか、深海魚とか」

「なんでもありだね」

ティルアの言葉にレイルは釣れる魚を思いつく限り答える。

「……（ツンツン）」

「何？ あっ……掛かった」

ホロンがレイルの頬をつつく。釣り竿が動いている。魚が餌に掛かったようだ。

「ホロン、たも網を用意しといて」

「……（コクコク）」

「それじゃ私はレイの腰を支えて……シャル、この場合は合法だよね？」

「そうね。この場合は合法的にレイに密着できるし、問題ないわね」
約2名程、変な事を言ってるが、いつもの事なので、レイルは釣り竿に集中するのであった。

◇

「……つーことで、今日からこいつらが俺達の仲間になるピピンとソウジだ、仲良くしてやってくれ」

温泉から帰ってきたファング達は、留守番組のガルド、マリサ、ハーラー、バハスにレストランで遭遇したソウジと呼ばれた執事服を着た青年とピピンという、アフロヘアーの頭に剣を刺した、緑色の猫のような顔、紡錘形の身体という、着ぐるみのような謎の生物を4人に紹介した。

「おう、よろしゅーに、色男！ と、こつちの変なのが妖聖やな？ ワイの方こそ、なかよーしてやー！」

「ん、よろしく……。ほう変わった妖聖だね。これは興味深い。特に頭に刺さった剣がセクシイだ……」

ガルドとハーラーはこの反応。

「宜しくお願い致します。ソウジと申します。ですが、僕はフェンサーではありません」

「我が輩がフェンサーなのである」

「えええっ!! そんなアホな!」

「ほ、ほう……これは意表を突かれた。そういうパターンなのか。ではこの生き物は一体……?」

まさかのピピンがフェンサーで、ソウジが妖聖という衝撃の事実に驚愕の表情になるガルドとハーラー。

「若人達よ、修行が足りんぞ。目の前の者が何者であるか、フェンサーなら一目見て見抜けるようにならんとな」

「いや……誰が見抜けるのよ、それ……。ピピンを見て実はフェンサーだって分かる人がいたら、逆に教えてほしいわよ」

ピピンの言葉にアリンが突っ込む。

「なあ、そういうや兄貴は？」

「ホロンもいないわね」

「お姉様の姿も見かけませんが……」

「キューイ……」

「姉さんの姿もありませんね……」

この場に居ない4人をキョロキョロと見渡して捜すフアング達。

「あいつら4人なら、お前らが温泉に行つた日から出かけてるぞ。なんかパーティ用の材料を取つてくるとか言つてたが……」

「そろそろ帰ってくるんじゃないかしら？ 遅くてもフアングちゃん達が戻ってくる頃には、向日墓荘に帰ってくるって言つてたし」

その疑問に答えたのは、バハスとマリサだった。直後、ドーン！と外で音が鳴つた。

「な、なんだ!？」

フアング達が慌てて外に出ると……

「あら、ティアラ。お帰り。それとただいまー♪」

「シャルマン、お帰りなさい。あと、ただいま」

「あの、お姉様……それは一体……?」

「ね、姉さん……その、なんですか……それ?」

「え? 鮫だけど……?」

ティルアとシャルが笑顔で巨大な鮫を地面に置いていた。妹と弟の疑問に首を傾げながら答えるティルアとシャル。

「…… (ルルルルルン♪)」

「ホロンちゃんお帰り♪ あらあら、大きな鹿と猪ね」

「マリサ、突っ込むところ、そこやない!？」

「なあバハス、よく見たら、この猪……色んな村を荒らしまわってる猪の親玉じゃないかい?」

「こりやたまげた。ホロン……おめえ、とんでもねえ獲物を仕留めたな」

「……(ドヤア)」

今度はホロンがスキップをしながら巨大な鹿と猪と担いで持ってきた。あらあらくと言うマリサに突っ込むガルド。ホロンが仕留めたと思われる猪を見たハーラーとバハスはこの反応。

「初めまして。ティルア・テイリス・ティアーズと言います。『蒼き疾風のピピン』さん」

「シャルロット・シャルランザと言います。そちらの執事の方が妖聖ですよね?」

「宜しくお願い致します。ソウジと申します。驚きました。僕がピピンの妖聖だとよくお分かりになりましたね」

「ほう! 我が輩の名前や二つ名だけでなく、我が輩がフェンサーだと見抜くとは……失礼ですが、お嬢さん方、どこかでお会いした事ありませんか?」

名前だけでなく、ピピンがフェンサーでソウジが妖聖だと見た瞬間に見抜いたティルアとシャル。驚いた顔をしてる2人にティルアとシャルはくすりと笑う。

「レイ……婚約者からよく話を聞いていたので」

「婚約者……とな?」

声を揃えながらピピンの疑問に答えた。そして首を傾げるピピン。

「お、兄貴だ。……なんか担いでねえか?」

「ねえ……あれ、何を持つてるの? なんかホロンが持ってきたものよりも大きくない?」

直後、巨大な何かがファング達の元に飛んできた。巨大な何かは地面にズシン!と音を立てながら地面に置かれた。

「な、なんだこれ!! ワニか!」

「でかすぎやろ!」

「それ以前になんでワニなのよ!! 気絶はしてるけど!」

その正体はなんと巨大なワニだった。あまりの大きさにファングとガルド、アリンが突っ込む。

「……ただいま。ファング達もお帰り。あ、重かった……」

「お、おう。なあ兄貴……このワニ、どうすんだよ……」

「え？ 食べるんだよ？」

巨大なワニを投げたと思われる人物、レイルは質問に真顔で答える。

「あ。ピピンじゃん。やほ〜」

「……」

そしてピピンを見つけると、久しぶりくみたいなノリで手を振るレイル。鳩が豆鉄砲を食ったような表情をするピピン。

「へ、陛下!？」

『は、はい……う?』

我に返るなり、レイルに左膝を立て右膝をつくピピン。これにはフアング達も驚きの表情。

「ピピン、そういうのいいってば。みんなが困ってるから」

「いえ。なりませぬ! ……寧ろ、我が輩の心臓が止まりそうだったのですが……?」

「えー? そんなに驚いてないじゃないか……」

「それは陛下が自然体過ぎるのですぞ?」

そう?と首を傾げながらピピンの質問に答えるレイル。

「じゃあ今日はピピン達の歓迎会かな。刺身、マリネ、カルパッチョ、猪鍋……あれ? オリーブオイルと手作り塩胡椒って残ってたっけ?」

「兄貴、手作り塩胡椒なら、俺この間見た時、半分もなかったぞ?」

「ほんとう? あっ、どうせならパスタも作りたいな……4人共、帰ってきて早々に悪いんだけど、お金と買い物リストと渡すから、今から買い物に行ってきたらもらってもいい?」

「おー、いいぞ」

「お願いね。バハスさん、鹿……どうします? 実はこれ、ホロンにちよつかい出したやつなんですよ……」

「おまけの食材ってやつか。そうだな……鹿肉で和え物でも作るか?」

「いいですね。中途半端な野菜も余ってた筈ですし、それも使っちゃいますか……」

そう言うトレイルは、フアング達にあれよあれよと指示をして、作業に取り掛かるのであった。

第32話 レイルとピピン

「はい。シフォンケーキ。簡単に作れるお茶請けがこれしかなくて、悪いけど」

ピピンとソウジの歓迎会を行ったその日の夜、レイルとピピンは食堂に居た。

「おおー！ 陛下の手作り菓子を食べれるとは、我が輩も運が良いのう〜♪」

「あれ？ ピピンにお菓子を作ってあげるのって初めてだったっけ？」

テーブルにシフォンケーキを置くとピピンがそんな事を言ってきたので、首を傾げるレイル。

「ケーキを頂くのは初めてですな。焼き菓子なら、陛下が何度か作ってくれましたな♪」

「あ、そういう意味ね」

確かに言われてみれば、焼き菓子系は何度かピピンに作ってあげた事があるが、ケーキを作ってあげたのはこれが初めてだ。

「てつきりピピンがボケちゃったのかと心配したよ」

「ははは、ご心配痛み入りますな。我が輩はまだ現役ですしの」

「それもそうだね」

紅茶を一口飲みながらレイルは軽く笑う。

「時に陛下。そのお姿は、修行の一環ですか？」

自分の152cmの姿を見て気になっていたのか、ピピンが訊く。

「だいたい合ってる。あと、この姿の方がちょうどいいってのもあるよ？ 尤も、相手の内面性を知れるって意味でだけど」

「ほーう。一石二鳥……というやつですか？」

「うん。そんな感じ」

そんなこんなでレイルとピピンは互いに近状報告や、ファンング達と出会った事等を話すのであった。



その翌日の昼近く。

「レイ、ちよつとシャルと買い物に行ってくるけど何か必要な物とかある？」

「……必要な物か。うーん、こういう時に限って浮かばないんだよね」「それじゃ私とティルアで見繕ってくるわ」

「うん、お願い」

いつてらっしやいと手を振りながらティルアとシャルを見送るレイル。

「陛下。先程の娘さん2人が陛下の噂の婚約者ですか？」

すると今のやり取りを見てたのか、ピピンが声を掛けてきた。

「昔はね？ 正確に言うとうと、今は婚約者兼元人間で僕のパートナー妖聖っていう表現が正しいけど」

「元人間でパートナー妖聖……ですとな？ 陛下、まさかと思えますが……秘術をお使いになられたのですか？」

疑問に思ったピピンが訊く。

「……じやなきや、ティルアとシャルはこの世にいないよ」

「なんと無茶な事を……」

しかし返ってきた言葉はそれだった。現にレイルは複雑そうな表情だ。

「気付いたら頭より先に身体が勝手に動いてたよ。実はその後ティルアとシャルに怒られたけど、甘んじてお説教を受けたよ」

「いやー、あの時の2人は凄く怖かったよと苦笑いしながら、レイルはそう付け足す。」

「幼い頃から陛下をよく知る娘さん達なら、というやつですな」

「仰る通り」

「やれやれ。ピピンには、お見通しかと思うレイルなのであった。」

第33話 次のフューリーの場所へ

「さあ、今日も頑張ってフューリー探しに行きましょうか」

「……（ティアラ、切り替え早いなあ。まあ、良い事だけど）」

その翌日。

朝からやる気なティアラを見て、レイルは元気だねーと思った。

「おう、しつかり頼むぜ」

「いや、あんたも頑張るのよ！」

フアングはフアングでいつも通りだった。それが彼の良いところでもあるが。

「この時間帯って、ロロちゃんはあるのかな？ 今更だけど……」

「あ、いたいた、お兄ちゃん。まいど〜」

「おっと。噂をすれば……」

噂をすれば影と言えがいいのだろうか。

早い時間帯とはいえ、ロロが噴水広場に居るのかと思った矢先、件の人物が珍しい事に向日葵荘まで来てくれた。

「もしかしてわざわざ来てくれたの？」

「うん、今日はいいネタが見つかったからいつも最前にしてくれるお兄ちゃんに教えてあげようと思って」

「ホントに!? あんたいい子ね！」

「でしょ！ だからお金ちよーだい。あと、お兄ちゃんの頭なでなでも♪」

「いや、なんでレイルに頭なでなで？」

情報料金を要求するのはともかく、ついでのレイルの頭なでなでを要求するのは、何の意味が？とアリンは思った。

「で、その情報ってのは何だ。フューリーの場所でも見つかったのか？」

「うん、地への回廊で見つかったって話だよ♪」

情報料金を払い、フアングの質問に上機嫌で答えるロロ。レイルに頭をなでられてご満悦な表情だ。

「強いモンスターがウヨウヨしてるらしいからしつかり稼いできて

ねー」

「ロロちゃん、情報ありがと。お仕事、無理しないように頑張ってる？」

「はい♪」

そして上機嫌で去っていくロロ。

「地への回廊……」

「どうかなさいましたの、アリンさん」

「……え？ あ、ううん。なんでもない。それじゃ、すぐに出かけようよ」

アリンの様子がおかしい気がしたが、それもそうだと思い、地への回廊へと出発しようとした時だった。

「……あれ、シャルマン様は？」

その一言にレイルも辺りを見回す。シャルマンと彼のパートナー妖聖、リュシンがいないのだ。ちなみにリュシンは白いロボット型の真面目な性格の妖聖だ。

「そういえば、今日は姿を見ていませんね。どこかにお出かけでしょうか」

「私も今朝から見てないけど……」

「……」

ソウジとシャルの言葉にレイルは情報収集に出かけてるのかと思っただ。

「とりあえず地への回廊へ向かおうか。大都市ゼルウィンズから東の位置にある筈だけど……ホロン？」

「……（コクコク）」

レイルの合図にホロンは、地面に降りると、懐から地図を取り出し、全員に見えるように地図を広げた。

「ねえ、この印みたいなのって何？」

「あー、これ？ 僕らが行った事がある場所の目印。……と言っても、ホロンの趣味みたいなものなんだ。踏破した場所に印を付けるのが」
「つまりレイルはん達が今まで行った場所って事かいな」

「ほーう、印の数を見る限り、陛下達も相当な旅をしたのですな」

アリンの質問に答えるレイル。ガルドとピピンも興味深そうに印を見る。

「……（テシテシー）」

「で、ここがロロちゃんかフューリーがあるかもって言った地への回廊。印が半分しか付いてないから……今日で踏破できるかな？ま、行けば分かるかな」

「よし！ それじゃあ早速そこに行こうぜ！」

そして一同は、地への回廊へ向かうのであった。

第34話 地への回廊

大都市ゼルウィンズから東の位置にある地への回廊へ着いた一同。

「ここが地への回廊か。なかなか菌ごたえがありそうな場所やな。腕が鳴るで！」

「おうよ！ シャルマンの野郎がいなくても楽勝だって事を証明してやらあ」

やる気満々なファングとガルド。

「……このやる気、いつまで持つんでしょう」
「……………」

「あら、どうかなさいまして、アリンさん。なんだか、浮かないご様子ですわね」

「え……？ あ、ううん、なんでもない」

ティアラの言葉にアリンはなんでもないと答えるが、レイルが見ても彼女は上の空に近い感じだった。

「さ、あたし達も行きましょ。せつかくファングがやる気出してんだし」

そう言っアリンは先に進んで行った。



「……………」

「おい、アリン」

「え……？ あ、何!？」

しばらく進んでも上の空だったアリンの様子を見たファングは彼女に声を掛けた。

「氣い抜いてんじゃねーぞ。先は長そうだからな」

「わ、分かってるわよ、そんな事！」

「……お前、何か思い出したのか？」

ファングの言葉にアリンは分からないというより、どちらかと言うと何か引つかかると答える。

「なんていうか、どこか懐かしいような……それでいて、胸がざわざわするような変な感じ……」

「この地への回廊にアリンちゃんの記憶喪失に関する手掛かりがあるかもしれないって事か……ここ、遺跡っぽいし」

「なるほど、実に興味深いね」

レイルとハーラーも彼女の話を聞くと、その可能性も出てくるかもと頷いていた。

「遺跡で思い出したけど、そういえば、ここは昔、失われた古代人の叡知によって建造されたと言われている」

「古代人の……叡知ですか」

「うん。そして古代の人々に叡知を授けたのは女神の力によるものという説もある。だから彼らは女神を崇拜していたんだよ」

アリンちゃんの過去も、その話と何か関係があるのかもしれないねとハーラーは付け足す。

「そう……なのかな……」

「案外、アリンちゃんが記憶喪失な理由はアリンちゃん自身が女神の化身だからだったりして……」

「いやいや、流石にそれは……」

悩んでいるアリンにレイルが呟く。それを聞いた彼女は苦笑いしながら返す。

「陛下、それは勘ですか？」

「……勘って、言いたいけど、なんだろう、この地への回廊にアリンちゃんの記憶の手掛かりがあるのは確かで、ハーラーちゃんの話と総合すると、実はそうなんじゃないかって感じて……」

ピピンの問いに、レイルは真面目な表情で答える。

「なんか今日のレイの勘はやけに具体的だね」

「そうね。今までの経験上、こんな具体的な勘は滅多にないから、そういう事なんでしょうね……」

「うーむ、それならば慎重に進まなきゃいけませんね……」

ティルアとシヤル、ピピンが言う。

「勘って、直感みたいなやつか？」

「せやけど、なんか具体的過ぎとちやう？」

「ただの勘ではない。陛下の勘は、お主達にも分かりやすく言うなら予知能力。具体的な例え程、当たりやすいのだ」

「あー、学生時代の時にレイル君の勘が当たってたのはそういう理由か。それなら納得」

その言葉を聞いて驚くフアング達。しかしハーラーだけは妙に納得していた。

「まあ最終的にどうしたいのかを決めるのは自分だから。別にこれが疎ましいとか僕は思っていないよ」

とりあえず早く攻略しちやおうよとレイルはフアング達に言うのであった。

第35話 女神の化身

「おつ、お宝発見！ あれがフューリーやな、間違いないで！」

地への回廊の最下層と思われる場所まで辿り着く。少し歩くと広場のような場所にフューリーが刺さっていた。

「思っていたより簡単でしたわね。モンスターのボスもいないようですし」

「……（ボスがない、ねえ……）」

ティアラの言葉にレイルも辺り見渡してみる。ボスらしき姿は確かにない。だが代わりに別の何かを感じた。それはフアングも同じだった。

「いや、代わりに別のがいるみてーだぜ」

「…そうだね。出てきなよ、かくれんぼって年じゃないでしょ、バーナード」

そしてレイルがそう言うと、岩陰から銀髪の長髪の男……バーナードが現れた。

「ほほう、やはり気づいていたのか。相変わらず貴様の気配察知は鋭いな、レイル」

「……」

「たりめーだ。そんなに殺気を出してりやな」

フアングの言う通り、バーナードの殺気は隠せてないくらい出ていた。

「なるほど、我が社の四天王を2人やその親衛隊長も倒しただけの事はあるようだ」

「四天王……？ って事は……」

「ドルファの方……ですわね」

その言葉を聞いたガルドとティアラは、バーナードがドルファの関係者だという事を察した。

「またドルファかよ。っーことは、四天王の残りのヤツか？」

「違う。だが、ドルファを代表する者と思ってもらって結構だ」

「……（なんか僕の知ってるバーナードじゃないな）」

レイルはここで自分が知ってるバーナードと違う事に違和感を感じた。

「貴様達のフューリー、渡してもらおう」

「そもそもドルファが何の為にフューリーを集めているのです!？」

「貴様らに説明する必要はない」

敵対する人物にフューリーを集める目的を説明する必要は確かにない。よほどのお喋りじゃない限り。

「へっ、大方想像つくぜ。フューリーを集めりゃどんな願いでも叶うんだ。世界征服でも企んでんだろ」

「世界征服……まさか、邪神の復活を」

邪神復活、ありえない話ではなさそうだ。

「だろうな。フューリーは、古の時代に邪神を封印した女神の力を宿す武器。その力をもってすれば、邪神の封印を解く事もできるとされている」

その邪神の力さえあれば、世界を意のままにする事も容易いとハーラーが説明する。

「それで何？ 僕らが持つてるフューリーを渡したら、僕らは長生きできる訳?..」

「少なくとも長生きはできるぞ」

「へー、何時間……?..」

「数秒だがな……」

「数秒?.. 数秒って言った?.. 冗談は止めてくれない?..」

「私は真面目だが?..」

「なるほどね。あっはっはっは……」

「はっはっはっはっはっはっ……」

「……………」

何故か笑い合うレイルとバーナード。それを見たファング達は2人の異質な雰囲気あまりに息を呑む。そして流れる沈黙……

「は?.. 笑えないし」

「ぐおっ!？」

そう吐き捨てながらバーナードの腹部に拳を叩き込んだ。あまり

の威力にバーナードは吹き飛ばされる。

「数秒っていうのは、今みたいのを言うんだよ」

「す、すげえ……」

「(なんとという一撃。まさに数秒。なるほど。陛下にとって、数秒あれば今のような隙を与える行為だと遠回しに言ってますな……)」

フアング達は何が起きたとばかり目が点になる。そして動体視力には自信があるピピンもレイルの力の一端に驚いていた。

「ふ、素手とはいえ、今のは効いたぞ」

煙が晴れるとバーナードは服に着いた土を落としながら現れた。それを見たフアング達はそれぞれの武器を構える。

「やはり貴様は危険だ。ここで退場してもらおう」

「それは残念。だけどそろそろこの場からお暇しなきゃいけないんだよ」

バーナードの言葉にレイルが意味深な事を言った、その時だった。

「あたし、思い出した……」

アリンを中心に眩い光が放たれた。

「何……!?! 奴らが消えた!?! どういう事だ。今の力は一体……」



「……ここは……。いつもの宿じゃねえか。なんでこんな所に……」

「一体、何が起きたんでしょう……」

気がつくとフアング達は向日葵荘の広場にいた。遺跡のような場所に居たからか、空は真っ暗だった。

「女神の力の発動……だね」

「女神の力……!?! そんな、どうして……」

「それを使ったのは君だね。アリンちゃん」

さっきの現象と使った者の正体を答えるハラー。それを聞いたフアング達は目を見開きながらアリンを見た。

「あたし、ちよつとだけ思い出したよ。自分の事……」

「ホントかよ! でも、それでなんであんな事……」

「でもダンナ。それに気になるけど、あん時のレイルはんの意味深
だった言葉も気にならん？」

するとガルドの言葉に今度はレイルの方を見た。確かにアリンが
女神の力を使う際にレイルはバーナードに意味深な言葉を言ってい
た。まるで発動するタイミングが分かっていたかのうに。

「記憶喪失な人間はその人にとって縁ゆかりある何か……今回アリンちゃん
の場合は場所だね。そこの最深部や最下層に行けば行くほど記憶が
鮮明になりやすいと思ったんだ」

「そういう事か。レイル君の勘が当たった通り、アリンちゃんは妖聖
ではなく、女神の化身で間違いないだろう」

「……アリンちゃんの様子を見る限り、完全に思い出したって感じ
じゃなさそうだね。さっきの力が良い例だよ」

「そうなるね。あの場所だから出来たという事もあるかもね……」

「うん……。レイルとハーラーの言う通り、多分、そんな感じだと思
う」

しかも地への回廊でレイルが言った勘が見事に当たっていた。
アリンはただの妖聖ではなく、女神の化身という事実。しかし思い
出したのは女神と邪神による戦いや、ほんの一部だとアリンも答え
る。

「アリンが女神の記憶を持ってんなら、復活の方法も分かるのか？」

「うん、それは分かるけど……。復活の為の儀式の方法や、儀式を行う
場所も……」

「それじゃ早速……」

その場所に行こうぜとファングが言おうとしたが、アリンが待った
をかけた。

「でも、ダメなの。まだあとひとつ、フェイストロップっていうのが
……」

「なんだか飴玉みたいな名前してるね。次はそれの回収か……」

とりあえず次の目的が決まった。フェイストロップという物を見
つけて、女神を復活させる事だ。

「どうかしたんですか、皆さん」

すると今朝から姿を見かけなかったシャルマンが戻ってきた。

「お前こそ、どこ行ってたんだよ。大変だったんだぞ」

「いえ、別に」

「はいはい、フアング。どうどう……」

とりあえずフアングを宥めるレイルであった。

第36話 エミリ

「くそ！　なんでグーを出しちゃったんだ！」

「……何を出してたら勝ってたのさ？　……パーとか？」

「いやあそこはチョコキだろ、チョコキ！」

酒場桜花亭の近くに買い物に来ていたレイルとファング。

「つたく、買い出しなんてバハスとかソウジが行きやいいんだ」

「じゃんけんで決めたんだから文句言わない」

「そもそも誰だよ、じゃんけんで決めようなんて言ったのは」

それを聞いたレイルは首を傾げる。

「え？　ファングが決めたんじゃないの？」

「いや俺じゃねえ。もしかして兄貴？」

「僕でもない」

「……………」

ここでレイルとファング、そもそもじゃんけんで決めようと言ったのは誰だ？という疑問に首を傾げる事になった。しかもお互いに全く心当たりがない。

「やめてくださいっ！」

「ん？」

そんな事を思ってた時、女の子の嫌がる声が聞こえた。

「イヤ！　離してっ！」

「駄々こねてんじゃねーよ、お嬢ちゃん」

「そうそう。黙って、オレらの言う通りにしな。じゃないと痛い目にあっちゃうよ。そんなのイヤだろ？」

よく見ると、2人のちんぴらが1人の少女に絡んでいるではないか。

「やめてっ！　誰か……………」

「あきらめな。みんな見て見ぬふりだ！」

周りの人達は見えて見ぬふりだった。ある2人を除いて。

「おい、そこ。汚ねえ手をその子から離せ」

「そうそう。気持ちも悪い……………じゃなかった、汚い手を離せ」

「っ！」

フアングとレイルが割って入ったのだ。

「あん？　なんだ、お前ら？」

「俺は今、機嫌が悪い。このグーのせいだな」

「ねえねえ、僕らとじゃんけんしない？　お前ら頭がパーっぽいし、なんか勝てそう」

「誰がパーだ！　おちよくってんのか、テメーら！」

「ふざけんじゃねえぞ！　すっこんでろ！」

完全におちよくられて頭に血が上るちんぴら2人。

「じゃんけん、ポンツ！」

ちんぴら2人にフアングとレイルは思いきりグーを叩き込む。

「い、痛え……」

「く、くそ、お、覚えてろよ……」

あまりの痛さに、ちんぴら2人はその場から逃げて行った。

「……ふう。エミリちゃん、大丈夫？」

「レ、レイルお兄ちゃん……！」

「はいはい、よしよし。怖かったねー？」

「兄貴、知り合いか？」

「うん。知り合いの妹」

エミリと呼ばれた少女は安心したのか、レイルに抱き付いた。彼女の頭を撫でながら、フアングの疑問に答える。傍から見たら、姉妹にしか見えない。

「それでどうしたの？　迷子？」

「ち、違うもん。その、近道ができそうだと思って……」

「思いきり迷子じゃねーか」

「うう……」

フアングが突っ込むと肩を落とすエミリ。

「ちなみにどこに行く予定だったの？」

「……この病院に行きたくて……お兄ちゃんが療養してるって聞いたから」

そういうとエミリは病院の名刺を見せる。

「この病院ね。近くまで送ってあげるよ。フアングもいいでしょ？」
「ああ」

「あ、ありがとう！」

さっきのちんぴらの件もあるので、エミリが行きたい目的地の近くまで送ってあげる事に。

「この道を通つ直ぐ行けば、目印の花壇の広場が見えるから」

「レイルお兄ちゃん、フアングさん。送ってくれてありがとう」

「次からは迷わないようにね？」

「いや、俺は別に……」

エミリを噴水広場の大通りまで送り、そこからの病院への行き方を教えるレイル。

「それからこれ、よかつたら、これ貰つて？」

「これは……お守り？」

そう言つてエミリから渡されたのは、お守りだった。

「中に妖聖の花から煎じて作った万能薬が入ってるの」

「……渡さなかつたの？」

「いいの。傷が絶えないから必要だと思つてあげただけど、要らな
いって言われちゃつて……」

「……………」

その時のエミリの表情が寂しそうなのが窺えた。

「レイルお兄ちゃん、フアングさん。送ってくれてありがとう。次か
らは迷子にならないように気を付けるね」

それだけ言つとエミリは、レイルとフアングに挨拶して去つてい
た。

「……ほんと相変わらず不器用だよ。こんなの第3者が見なきや、気
づかないだろうに」

「不器用つて、エミリの兄貴がか？」

「……うん。アポロの妹なんだよ、エミリちゃん」

「!!」

それを聞いたフアングは青ざめた表情になる。もしあの時、黒騎士
や骸骨騎士の乱入がなく、レイルの助けも来なかつたら、自分はアポ

ローネスを……

そして最終的に自分はエミリから……

「……兄貴。俺は……」

「それ以上は言わないの」

「いてっ!？」

「次になんか言ったらチョップね?」

「いや、勘弁してくれ……」

フアングが何を考えてるのか解ったのか、レイルはそれ以上先の事は言うなどばかりにフアングの腰を少し強めに叩く。……恐らく、もしもの事を考えてしまったのだろう。

「よし。フアング、このお守りはフアングが持ってなよ。うん、それが良い!」

「なんだよそれ? 根拠はあんのかよ?」

「え? 根拠? そうだね、うーん……勘だよ」

お守りを受け取りながら、レイルのその言葉を聞いて、フアングは少しだけ気が楽になった。



「……ただいま」

「ただいま。ちよつと遅くなつたー……」

向日葵荘に帰ると、他のみんなが何かを話していた。

「お、ナイスタイミングや! ダンナ、レイルはん、出かけるで」

「出かける……?」

「どこに……?」

フアングとレイルの姿を見つけるや否やガルドがそう言った。帰ってきたばかりの2人は首を傾げる。

「カヴァレ砂漠です。アリンさんの記憶によれば、そこにフェイスドロップがあると……」

「フェイスドロップがあれば、女神を呼び出す事ができる」「本当か!？」

「うん！」

その言葉を聞いたフアングは目を見開いた。レイルもまさかこんなに早く見つかるとは思わなかった。

「ドルファが動き出す前に、先手を打ち、女神を復活させる……どうだい、フアング君、レイル君？」

「ああ、悪くねえ考えだ」

「右に同じ。異論無し」

寧ろ反対する理由はなかった。

「ところでフアング……お主、何かあったのかの？ 我が輩から見ても顔色が優れんようだが」

「買い物が終わった後にアイスを買おうと思ったんだけど、常識のない客に割り込まれちゃってさ。しかもアイスは台無し。ね、フアング？」

「ああ。そんなところだ」

とりあえずレイルは尤もらしい理由でピピンの質問を誤魔化しておいた。

「よし、行くとなりや、早い方がいい。みんな急いで準備だ」

「砂漠だから、みんな水筒を忘れないようにね？」

そして各々、カヴァレ砂漠に向かう準備をするのであった。

第37話 カヴァアレ砂漠

大都市ゼルウィンズから西の方に位置するカヴァアレ砂漠に着いた一同。

「なんや、ここは？ なんもあらへんぞ！」

「見渡す限り、砂、砂、砂……砂ばかりですな」

ピピンの言葉通り、見渡す限り、砂ばかりである。

「……うーん、フェイスドロップがどこにあるのか、私も全く見当がつかん」

「アリンさん、ここで間違いないんですか？」

「多分……」

ティアラの言葉に自信なさそうに答えるアリン。

「多分って……アリンお前、記憶が戻ったんだろ？」

「そうだけど……。じゃあ、あんたは1年前の今日、どこで、何してたか、はつきりと覚えてる？」

「1年前だろ？ えーと……って、んなもん、覚えてる訳ねえだろ」
「でしょ？」

それと一緒よ。と溜息を吐きながら答えるアリン。

「……つまり、アリンちゃんが女神の化身とはいえ、記憶の曖昧さは僕らと変わらないって事か」

「その辺は人間と同じという事になるね。なるほど、興味深いな」

「本当にフェイスドロップがあるのかどうか、不安になってきましたわ」

そういう意味では確かに不安だなとレイルは思った。

「なんとなく分かってるから、大丈夫だって」

「なんとなくかいなっ!？」

「……?」

ガルドが突っ込むと同時にシャルが足を止めた。

「? 姉さん、どうかしましたか？」

「……いえ、なんでもないわ。私の気のせいかもしれないから(さつきまで微かに出てた魔力の気配が消えた……?)」

シャルマンに訊かれたので、自分の気のせいだと答えるシャル。

「……………」

「お姉様？」

すると今度はティルアが足を止めた。

「なーにかしら？ この気配……。そして私の女の勘が告げてる。レイにくつついておくべきだった」

「あら、奇遇ね。私もちょうどそれをティルアに言おうと思ってたの」
そしてティルアとシャルは意味深な笑みを浮かべながら、レイルに抱き付いた。

「…………女の勘を信じない訳じゃないけどさ、今回は何の意味があるの？」

「見せつけてるの」

「いや、誰に!？」

珍しくレイルがティルアとシャルに突っ込んだ。これにはファング達も苦笑い。

「まあまあ、ひとまず落ち着くのだ。全員で一度決めた事を疑っては
いかん。仲間であろう？ アリンの記憶と直感を信じてやろうではないか」

「その顔で正論を言われるとなんかムカつくが……こんな所で四の五
を言ってもらえねえのも事実だな」

「そうですね。アリンさんを信じて進みましょう。お願いします、ア
リンさん」

任せて!と言うアリンに一同は進んでいくのだった。



しばらく先に進んだ時だった。地面から何かが飛び出す。それは
巨大な紫色の昆虫系に近いモンスターだった。

「きゃああー!」

「な、なんだ、こいつは……!?!」

「…………大きいね〜」

「……(コクコク)」

フアング達が驚いてる中、レイルとホロンは呑気だった。

「このような生物は私も見た事ないな。凶鑑にも載ってないヤツだ」

「……ガーディアンシード。フェイスドロップの番人よ」

「お前、なんで……女神の記憶か？」

「多分」

確証はないが、多分そうだとアリンは答える。

「フェイスドロップの番人か……おもしろいやないか！ やったるでえ！」

「ちよつと待つて！ あたしに任せて」

「アリン……」

そう言つてアリンはガーディアンシードの前に出る。

「静まれ、フェイスドロップの守護者達よ！ 女神の帰還である！」

「うむ。サマになっておる！」

「アリンはん、それっぽいでえ！」

だがしかし、ガーディアンシードは自身の腕の鎌を振り下ろしてきたのだ。

「きゃあー！ー！ え、嘘ー!? 攻撃してきた???’」

「役立たず！」

「何よ！ あんた、喧嘩売つてるの!?’」

悪態を吐くティアラにアリンがイラツとしながら反論する。

「……(フン!)」

「え?」

「……(ケツ!)」

そんな事も束の間、ホロンがガーディアンシードにアツパーを喰らわせる。顎付近をもろに喰らったガーディアンシードはその場で痙攣し泡を吐きながら倒れていた。

「ガーディアンと言つても、口ほどにもない……だつてさ?」

「……(チョイ、チョイ!)」

「何? ガーディアンシードつて食べれるのかな? つて……いや、無理でしょ。ちなみに食べれると思う人……いる?」

『いや。それは流石に……』

ホロンの通訳をしながらレイルの言葉に、フアング達は揃って首を横に振るのであった。

第38話 フェイストロップ

「どうやら今のヤツが最後だったらしいな」

倒れたガーディアンシードを見て呟くフアング。

最初の1体をホロンが倒した後、もしかしたらフェイストロップがある場所はそのガーディアンシードを辿ればあるのでは？と一同は気づいたのだ。

「フアング、あれ見て、あれ！」

アリンが何かを発見した方に目を向ける。そこには光輝く飴玉のような物体が。

「もしかして、これが……？」

「うん。フェイストロップで間違いないよ！」

「…なんか大きさがほんとに飴玉だね。幸い、フェイストロップ自体が光ってたから見つけやすくて良かったけど」

「確かにそれはそれで良かったよな……」

どうやら目的のフェイストロップで間違いないようだ。レイルの呟きにフアング達も苦笑い。

「よっしゃー！ 目的も達成やな！」

「これで女神の封印を解く事が出来るのですね……」

まあ何はともあれ、フェイストロップを無事に手に入れる事ができたのだ。

「礼を言う。君達のお陰で楽にここに来る事が出来た」

『!?!』

すると岩陰から聞いた事がある声と同時に人影の姿が。人影はゆっくりと一同の前に現れる。

「お前は……！」

「……バーナード」

「フェイストロップは私がいただく……。邪神復活の為にな」

「邪神復活ですって!?!」

その正体はバーナードだった。そして彼の口から邪神復活という単語を聞いて、ティアラは特に顔を青ざめた。

「ご苦勞だったな。道案内役としては申し分なかったよ。貴様らの旅はここで終わる……心置きなく死ぬ」

「……」

「っ！（フェアリンク！）」

レイルはバーナードに気づかれぬように、後ろに居るティルアとシャルに指で合図を送りフェアリンクさせた。相手に気づかれぬよう、光はレイルの指先に集まった。

「ふざけるなっ！ おっさんと違って、若いもんは日々進化してんだ！」

「そう、ボク達の旅は続く。だが……あなたの人生はここで終わる！」

「そや！ 目にも見せたるわ！」

「男子三日会わざれば刮目して見るべし！ 悔るではないぞ！」

そしてフアング達もそれぞれの武器を手に持つ。

「フェイスドロップは渡しません！ ドルファには！ 絶対に！！」

「ドルファだと？ フッフ……、ハ……ハハハハッ！」

ティアラのその言葉を聞いたバーナードは急に高笑いを始めた。

「ドルファなどただの踏み台……。利用できるものを利用しただけだ。貴様らとなんら変わらない」

「……それどういう意味？」

「邪神復活はこの私が為す。それこそが我が血の宿命……」

静かな口調でバーナードを睨むレイルに対し、バーナードは言葉を続ける。

「私は邪神の末裔……その血を継ぐ者だ」

そしてバーナードの頭部には紫色の禍々しい紋様が浮かび上がっていた。

「この身に流れし血は神の血……そして私こそが神の力を得るに相応しい。世界は闇に還り、闇より出ずる。そして私が創生の王となる！！」

「……なら、その前にお前を潰す」

その言葉を聞くや否や、レイルがバーナードに突っ込んでいく。

「地への回廊では遅れをとったが、そうはいかん！ ブラッディ、戦闘

用意！」

『……了解、マスター』

バーナードの声を合図に彼のパートナー妖聖、ブラッディがフェアリンクの輝きを発した。これはフューリーフォームの光だと理解してるレイルは迷わずに拳を振り上げる。

「だが、今の私には貴様の攻撃など効かん！」
「!?」

光が収まるとレイルの拳を受けても健在なバーナードが居た。しかし、姿が変わっていた。

身体は銀色の異形のような姿に変化していた。しかし、自分の知ってるバーナードのフューリーフォームとは完全に違ってる事に驚きを隠せなかった。

「塵と消えるがいい！」

「ぐっ!？」

「兄貴！」

「お義兄様！」

「レイル君！」

「レイルはん！」

「陛下！」

「義兄さん！」

咄嗟に両腕でガードしたレイルだったが、フェアライズしたバーナードの鋭利な腕によって遠くの岩場まで吹き飛ばされてしまった。

「てめえ！ よくも！」

「いくら元ドルファ四天王でも、あの攻撃ならレイルといえど助かりはしまい」

レイルが飛ばされた方を見ながらバーナードは答える。しかしそれより衝撃な言葉が。

「兄貴が元ドルファ四天王だと……?」

「知らないのか? ならば冥土の土産に教えてやろう。4年前までレイルは元ドルファ四天王で最強のフェンサーだった」

「そーいやワイ、噂で聞いた事があるで。ザンクが四天王に入る前ま

で、4年前のドルフアには四天王の中に最強のフェンサーがおつたつて……」

バーナードの言葉にガルドが思い出したかのように言う。

「そうだ！　だが奴は欠陥品だった。実力はあつたのは認めるが、フューリーフォームを使えない出来損ないには変わらん」

「ふざけんな……」

その言葉を聞いたフアングがバーナードを睨みながら呟く。

「絶対に許さねえ……！　てめえはこの場で倒す！」

『フェアライズ』

フアング達はフューリーフォームを発動した。



「そこだ！」

「もろたで！」

「……ふん。無駄だ」

「がはっ！」

バーナードは挟み撃ちを狙ったフアングとガルドの攻撃を冷静に受け止め、自身の鋭利な腕で2人を弾き返した。

「あんな巨体で、なんちゅー反応速度や……」

「く……あ奴も口だけではないようだ。だが圧倒的過ぎる……」

「これもフューリーとの融合係数を高めた力なのか……」

ガルドとピピンが呟く。バーナードの強さもそうだが、彼のフューリーフォームもザンクと同じ、フューリーに手を加えて融合係数を高めているのがハーラーには窺えた。

「まだだ！　まだ負けちやいねえ！」

「ふん、根性だけはあるという事か。だが、立ってるのは貴様ら2人だけだ」

「くっ！」

未だに余裕の表情のバーナード。そして現状バーナードと戦えているのは、実質的にフアングとシャルマンだけだった。ティアラはガ

ルド達の傷を治癒する為、援護に回っている。

「さあ……次の一撃で終わりにしよう」

『マスター！ 右方向から超高速の攻撃が向かってきます！』

「何？ 一体……っ!? ちい……!?!」

フアングとシャルマンに止めの一撃を放とうとした瞬間、ブラツデイからの警告と同時に殺気を感じたバーナードは両腕を交差してガードするが、体勢を崩してしまう。

「……さつきはよくも遠くまで飛ばしてくれたね、バーナード」

『っ!?!』

そして土煙の中から現れたのは、バーナードの攻撃によって飛ばされた筈のレイルだった。

「一体……何をした?」

「君に吹っ飛ばされた時に、背中に『ウォール』の魔法と『クロックダウン』の重ね掛けで威力を軽減しただけだけど?」

「魔法の重ね掛けだど!?! だとしても生身の身体で出来る筈が……」

ほとんど軽傷に近いレイルを見て驚愕するバーナード。直後、その場からレイルが消える。

「フアング、シャルマン。みんなも大丈夫?」

声に反応する方にバーナードが振り向くと、レイルはフアングとシャルマンの場所に居た。

「時間稼いでくれてありがと。回復薬を渡しておくから、みんなの事をお願い」

「ああ、分かった……」

「分かりました。義兄さん、気を付けてください」

そう言ってレイルは2人に全員分の回復薬を渡し、バーナードの方を向く。

「レイル君、恐らくヤツのフューリーフォームは融合係数を高めたものだ!」

「…そういう事ね。道理で僕の知ってるフューリーフォームと違う訳だ」

ハーラーの声を聞いたレイルが納得したとばかりに軽く頷く。

「……ホロン」

「……（コクコク）」

そしてレイルはホロンをフェアリンクさせ、反り身の長剣ではなく、鞘入りの長刀に変形させ右手に持つ。

「ハハハハ……。そんなただの武器で何ができる？」

「……」

そしてバーナードに向かいながら、レイルは鞘から刀を抜く。鞘は粒子となり、レイルの体に纏わりついた。バーナードは鋭利な巨大な腕でレイルに叩きつけようと振り上げる。

「がはっ!」

「…ほら。斬れた」

その瞬間、強化されたバーナードの身体から血が噴き出したのだ。よく見ると、彼の胸部分にはレイルが斬ったと思われる痕跡がはつきりと残っている。

「お、おのれ……!」

だが斬られた痛みには怯む事なく、バーナードは腕を振り下ろすが……

「……ふん!」

「ぐおっ!」

レイルは刀でバーナードの腕の鋭利な部分を受け止めた後、即座に弾き返し態勢を崩したバーナードの顔面に蹴りを決め込んだ。あまりの衝撃でバーナードは吹き飛ばされる。

「く、くそお……!」

「……(こ)だよ」

「っ!」

「はあ!」

「ぐあっ……!」

砂煙の中、バーナードは立ちながらも次の攻撃を仕掛けようとした途端、レイルは既に彼の背後におり、バーナードが気付いた時にはレイルの左の拳を腹に叩きこまれ、今度は反対方向に吹き飛ばされた。

「き、貴様……」

「……残念だよ。バーナード」

「何?」

そう言うのとレイルは、なんとフェアリンク状態を自ら解除したのだ。その証拠に彼の両脇にはティルアとシャルが居る。この行動にはバーナードだけではなく、ファング達も目を見開く。

「嘘っ!? フェアリンク状態を解除した!? レイルなんで!」

アリンの言葉はこの場に居る全員の代弁でもあった。そして、レイルが口を開く。

「この姿でのフューリーフォームは制約付きとはいえ、発動したくない時に限って発動条件を充たすんだもの……」

バーナードを見据えながら、そう呟いたのだ。

「フューリーフォームを使えない出来損ないが何をほざく。元ドルファ四天王の中で最強だった貴様でも、所詮この姿の私には勝つ事は不可能!」

「…は? 何を勘違いしてる訳? フューリーフォームくらいドルファに入社した時から使えてたよ」

「な、なんだと!」

その言葉を聞いたバーナードはありえないとばかりに声を上げる。

「この姿でのフューリーフォームのお披露目は、バーナード。君が初だから……」

不敵に笑うレイル。

それが合図かのように、ティルアとシャルはレイルと同じ利き手前に構え目を閉じた。するとレイルの足元から銀色と虹色が混じり合った光が出現する。

そしてレイルは目をゆつくりと開き……

「「フェアライズ!」」

光は輝きを増しながら、レイルを中心にカヴァレ砂漠を包み込み始めた……

第39話 元ドルファ四天王の実力

「『フェアライズー!』」

必殺の鎧の言霊を発する。光は輝きを増しながら、レイルを中心にカヴァアレ砂漠を包み込み始めた……

そして光は収まりカヴァアレ砂漠に姿を現したのは……

「……」

『フェアライズ・シーケンス・コンプリート』』

レイル……の筈だが、その姿は完全に別人だった。

髪形はショートヘアから、ロングヘアーに変わっており、瞳の色も『濃い紫色』から『赤色』に変色していた。

次に外装。紫色のヘッドドレスを被り、紫色のレオタード、両手には紫色の指絞め器を絞め付け、靴底に大量の棘がついた紫色のブーツを履いていた。

そしてオーラを纏っており、傍らには、ホロンが魔導書のような物を持ちながら浮遊していた。

「兄、貴……?」

『う、嘘……!? っていうか、誰!』

「お義兄様の筈……ですが、あの姿は一体……?」

『キュイキューイ』

「こりや驚いた……」

『おいおい、別人とかじゃねえのか?』

「ほんまにレイルはんかいな……」

『でもホロンちゃんが傍に居るし、本人で間違いない筈よ』

「むう。先程のお嬢さん2人の姿が見えないとなると……あの者は陛下本人で間違いない」

『ええ。どうやらその推測で間違いないようです……』

「す、凄い。リュシン、あれはボクの知る……義兄さんなのか?」

『ポジティブ。計測の結果、シャルマンの知る、レイル本人で間違いない』

フアング達は驚愕する。レイルが自分達の前でフューリーフォー

ムを使用した事に。だが、見た目が完全に変わっている為、レイル本人なのかという状況整理をするだけでいっぱいだった。

「……貴様、何者だ？」

「少なくともバーナード、君を倒す者です」

『いや、本当に誰!?!』

バーナードの問いかけに答えるレイル。なんと声も余計に女性らしい声色になってる。直で聞いたファング達は心の中で突っ込んだ。

「この私を倒す、だと？ それにそれがフューリーフォームだと？」

フン、笑わせる。ただ見かけが変わっただけじゃないか」

「ならば試してみますか？ 尤も、貴方じゃ準備運動程度にしかかなりませんが……」

「貴様!!」

その言葉はバーナードを怒らせるには充分だった。まるで自分の方が上だと言わんばかりに。バーナードはレイルに飛びかかる。

「死ねええええ！」

「……ふう」

「な、なに……!?!? ぐっ！」

バーナードは鋭利な腕をレイルに振り下ろす……。

しかし、その刃はレイルの指先で止められた。力を込めるバーナードだが、ピクリとも動かない。

「軽すぎですね」

「なんだと!?!」

「貴方の一撃が軽すぎだと言っんです。その様子だと実戦訓練や自己鍛錬もあまりしていないようですね」

淡々と告げるレイル。

「そろそろ終わりにしましょう、バーナード。どうやら貴方はもう僕の知るバーナードではないみたいです。ホロン、テイルア、シャル」

「……(こくり)」

『チェーン・カウント1……』

『チェーン・カウント2……』

レイルが合図を送る。するとホロンは手に持ってた魔導書をパラ

パラと捲り始め、テイルアとシャルは謎の言葉を発していた。

「くそー 離せ！」

「以前の貴方なら、その気になれば離れた筈ですよ？ その気になれば……ですけど」

自身の押さええられてる左腕をレイルから必死に離そうとするバーナードだが、時間の問題だった。

「……これで終わりです」

『アタックエフェクト『ジャツジメントソード』』

レイルの右手首に光の柱が纏わりつく。その右手を振り上げ、拘束状態のバーナードに叩きつけた。激しい炸裂音がカヴァレ砂漠全体に響く。

「が、ぐあああああああ！」

「終わりですね……」

その一言と同時にバーナードのフューリーフォームが解除された。

「お、王の座に就く……それこそが我がさだめ！ 我が運命！！ それを……貴様らのような虫ケラどもがっ！！」

「……………」

そしてレイルもフューリーフォームを解除する。変身前と変わらぬのフアング達を知るショートヘア時の姿だった。

「ふんー！」

「ぐはあー！」

満身創痍のバーナードの鳩尾に拳をレイルは叩き込んだ。

「……そういえばドルファは踏み台とか言ってたよね？ 確認したいんだけど、何？ あれは冗談？」

「そのままの意味さ。やはり、勘づいている者は先に消しておくべきだったな……。そう、マリアノとかな」

「……もういい。お前、黙れ。…マリーの努力を踏みにじったお前は黙れ！」

そしてバーナードがレイルにある人物の名前を口にする。その言葉に悪意を感じたレイルはもう一発だけ、バーナードの顔を殴った。

「がはあー！ お、愚か者どもよ、よく聞け……この世は闇に還る。その

運命は決して変えられない……」

その言葉を最後にバーナードは、流砂の中に落ちていった。

「感じ悪いわね」

「そうね……」

「昔はあんな感じじゃなかったんだけどね……」

「……（コクコク）」

ファング達の元に戻りながらバーナードが消えた流砂を見つめるレイル達。

「今のが兄貴のフェアライズ……なんか色々とすげえ……」

『う、うん……』

一方でファング達はレイルの戦い方は圧倒的の一言だった。あのバーナードを赤子の手をひねるかのように倒してしまっただのだから……

「ファング。フェイスドロップを手にとって」

「あ、ああ」

こちらに戻ったレイルに言われたファングはフェイスドロップを手を取った。

『!!』

「どうした、アリン？」

『……聖域が近い』

フェイスドロップを手にした事でアリンは女神が眠る場所である聖域……儀式の場所をフェイスドロップが教えてくれたらしい。

「よし！ このまま一気に進むぞ！」

先に進もうとした矢先、ファングのフューリーフォームが解除されてしまう。

「フェアライズアウト!? 大丈夫か、アリン！」

「ごめん……ちよつと疲れたみたい」

しかしそれはファングだけではなく、ティアラ達のフューリーフォームも解除されてしまう。

「シャルマン、すまない。これ以上、フェアライズは……」

「謝る必要はありません。みな限界のようです。フェンサーもね」

シャルマンが代弁する。みんな限界だったのだ。ガーディアン
シードやバーナードとの度重なる戦闘の疲れによつて。

「ああ、流石にちよつとな……」

「すまぬが、我が輩も少し休ませていただきたい……」

「……もう一步も動きたくないぞ」

ガルド、ピピン、ハーラーも同じだった。

「もう日も暮れる事だし、今日はここで野営しよう」

「そうだな」

「僕も賛成。砂漠で行動する際は、計画的にしないと危ないですし
……」

バハスの提案で、一同はここで野営する事になった。



「以前から何かあるとは思っていたけど、まさか補佐官にあんな秘密
があつたなんて……」

一方、カヴァアレ砂漠の岩陰に一人の女性……マリアノの姿があつ
た。

「けど……何者であろうと、ドルファアへの背信は許されざる行為、その
罪は死をもつて贖あつがわれる。当然の報い……」

「そうそう、死んですつきり！ いい気味！ いい気味！」

彼女の言葉にパートナー妖聖のクララが言う。

実はかなり前からバーナードが怪しいと思つてたマリアノは彼の
後を気づかれないように尾行していた。そしてバーナードが邪神の
末裔だという事を知つたのだ。

「ザギ」

「はい、マリアノ様」

「ドルファアの全兵を集結させて」

その指示に部下であるザギが少し顔を曇らせた。

「全兵、と言いますと……ザンク様の部隊もですか？」

「ええ。私としては不本意だけど」

マリアノは溜息を吐いた。正直言つて気が進まない。あのイカれた戦闘集団も集めるのがである。だがそうも言つてられないのも事実。

「とにかく全兵を集結させなさい」

「はい！ かしこまいました！」

そう指示を受けたザギは近くの街まで走つて行つた。部下を見送つたマリアノは、ある人物に目を向ける。

「カヴァレ砂漠、久しぶりに来たけど……目ぼしい素材がないね……」

「……（コクコク）」

それは素材集めをしてるレイルとホロンだった。

「まさかフューリーフォームをバーナードに使う羽目になるとはねえ……。この姿という意味でだけ」

「……（コクコク）」

どうやらバーナードと戦闘した際に、フューリーフォームを解放した事について話してようだった。マリアノもレイルのフューリーフォームを初めて見たが。

「昔はあんなんじゃなかったのにね。いつから人を見下すような発言をする野心家になったんだろう？」

「……（コクコク）」

その会話を聞いてたマリアノは確かにと思った。レイルの知る当時のバーナードだったら、あんな人を見下す発言はしないだろう。

「……（ツンツン）」

「何？ 満身創痍のバーナードを珍しく2発も殴つたのかつて？」

「……マリーの努力を踏みにじるような言い方にイラついたから」

「!!」

その言葉を聞いたマリアノは思わず声を上げそうだったが、グツと堪えた。

「さて。早く野営場所まで戻ろっか。みんな待ってると思うし」

「……（コクコク）」

そしてレイルはホロンはその場から去つて行つた。

「……」

「マリアノ様〜?」

「クララ。私はどうすればいいの……」

「え!?!」

心配になったクララがマリアノに声を掛けるが、予想外の言葉にクララは驚いた。その表情はどこか迷ってるのが窺えた。

「……………」

「(こういう時ってなんて言えばいいんだろう……。レイル達との約束もあるから、上手く説明できないよ〜…………)」

マリアノの顔を見たクララはレイルとの約束の事もあるので、何も言えなかった。

第40話 マリアノ

フェイストロップを手に入れた一同は野営して一晚過ごした後、カヴァレ砂漠の奥の方を進んでいた。

「着いた。……ここよ」

そして進んでいるとアリンが足を止めた。

「え……？」

「ここって……なんもあらへんで！」

「アリンさん、どういう事ですか？」

驚くのも無理はない。アリンが着いたと言ってるのは何も無い場所だからだ。

「フアング、剣を……！」

「ああ」

「……（なんだろ。この嫌な予感……）」

レイルは嫌な予感がした。バーナードの襲撃があったとはいえ、現に今も順調に進んでいる……その筈なのに何故か嫌な予感がするのだ。

「うおおおおっ！」

そしてフアングが剣を地面に深々と突き刺す。すると光が周囲を包む。光が収まると同時に神聖な祭壇のような物が出現したではないか。

「す、すごい……」

「これが女神の聖域……」

「…何もない場所に神聖な場所はあるって、なんかの本で読んだ事があるけど……」

確かに聖域とはよく言ったものだとしてレイルは思った。

「フアング、フェイストロップを中心にセットして。女神が降臨するわ」

「分かった」

アリンに言われた通り、フアングは聖域の中心に進む。

「いよいよですね……」

「……………」

その場に居る全員が固唾を飲む。

「いくぜ……………」

そしてファングがフェイスドロップをセット……………」

「オラオラオラオラオラッ！ 勝手な事をしてんじやねーぞっ!!!」

しようとした時、1人の男によって遮られてしまった。

「つたく、調子こきやがって！ 女神復活だあ!? んな事はな！ マ

リアノ様がお許ししねーんだよっ!!」

「っ!?!」

「……………」

男が言った人物の名前にレイルは一瞬動揺する。まさか彼女が来てる? この場に!?! そして親衛隊を率いたマリアノがレイル達の前に現れた。

「マリアノと親衛隊か……………」

「ドルファ兵も大勢おる……………」

しかもピピンの言う通り、大勢のドルファ兵士もいた。その数にファング達も身構える。

「オラオラオラオラッ! どーした!? 怖じ気づいたかつ!!」

「ザギ! お前、リストラされたんとちやうんか!?!」

「マリアノ様に拾っていただいたんだよっ! この裏切り者が……………今すぐメチャクチャに切り刻んでやるよっ!」

「リストラ? ガルド、なんで彼はリストラになったの? リストラ要素なんてないじゃんか」

「人事部から、フェンサーとしての素質がないって言われたからなんや」

先程フェイスドロップを遮った男……………ザギの言葉が気になったレイルはガルドに訊く。なんでも人事部からお達しがあったからだそうだ。

「ザギ……………下がりなさい」

「はい……………! マリアノ様っ!」

マリアノから言われたザギは下がる。

「あの女がマリアノだった?」

「……可愛らしいお嬢ちゃんじゃないか」

「女やからってナメたらアカンで。ああ見えて、四天王の1人……実力は折り紙つきや」

フアングとハーラーの言葉にガルドが警告する。

「お久し振りね、レイ」

「そうだね。マリー」

するとマリアノはレイルに声を掛ける。

それも年相応な優しげな表情でだ。変わってないなと思いつつながらレイルは普段通りに応答する。

しかも互いに渾名で呼んでる。これにはフアング達やザギ達親衛隊すら驚きを隠せなかった……

「4年経つても変わらないね」

「それはレイもでしょう? 子供達からよくレイの話は聞いてるわ」

「マリーには内緒って言ったんだけど……。絶対に困らせるような事を言つてそう……」

「ふふふ♪ 私は別に困つたりはしてないわよ?」

親しげに話すレイルとマリアノ。

「ちよつとレイ! 何楽しそうに話してるの!?!」

「同感ね。こればかりは私もスルーできないわ」

そんな2人の会話を聞いてて、我慢が出来なかったのか、レイルの両脇にティルアとシャルが現れた。

「うるさいわね。私はレイと話してるの、邪魔しないでくださる?」

「あら? その辺はごめんあそばせ。というか、なんでレイの事を渾名で呼んでるのよ。馴れ馴れしい」

「は? レイがそう呼んでつて言われたからに決まってるじゃない」

「仮にそうだとしても、知らない女がレイと仲良くしてたら、今の状況みたいに邪魔はするわよ? その辺はどうなの?」

「その意見だけは同感ね」

「「ふふふ……」」

マリアノ、ティルア、シャルの3人は黒い笑みを浮かべながらバチ

バチと火花を散らす。一部のドルファ兵士達は産まれたばかりの小鹿のようにビビっていた。

「…な〜どという、この緊迫した雰囲気と女同士の修羅場など全く気にせずに登場するこのオレ様！ ヒーハー！」

「つたく、お前のそういうところはオレ様も見習いたいとござせ……」

「そ〜う？」

「おう」

「キャハハハ！ ロンギ、面白〜い！」

「デラちゃん、そこ笑うところ？」

「ある意味、隊長しか出来ないと思います。断言してもいいです」

奇声を上げながら一同の前に現れたのは、ドルファ四天王の1人、ザンクと親衛隊長のロンギだった。彼ら2人だけじゃなくその親衛隊もいた。

「お前はザンク！」

「よお、ファング。てめえをぶち殺しに来てやったぜえ！」

「うるせえ！ 返り討ちにしてやる！」

「ククク……やっぱ面白れえ奴だ……。オイ！」

『はっ！』

そう言うと、ザンクは親衛隊の兵士達に指示をだす。指示を受けた兵士達はガルド達を囲んだ。

「ザンク様の邪魔はさせん！」

「くそ！ そこをどきいや！」

「それは出来ぬ相談だ、仕事仲間だったよしみだとしても！」

「腐れ外道の部下の割に、随分な事を仰いますのね！」

「みんな油断したらあかん。ザンクの部下達は普通のドルファ兵達とちやうで！」

ザンクの親衛隊の兵士達は普通のドルファ兵と違う事をよく知るガルドはティアラ達にも警告する。そして互いに交戦が始まる。

「やあやあ可愛いガキ。ぶち殺しに来たよ〜ん？」

「……（こいつの性格上、最初の一撃は間違いない味方関係なく攻撃する筈）」

ザンク達がそれぞれの相手と交戦を始めたのを見ながら、ロンギはレイルに長槍を突き付けながら話しかける。そしてレイルはロンギの思考を読みながらある結論に至る。

それは『最初の一撃目は自分の近くに居るマリアノごと』を巻き込む何か。

「…ホロン」

「……（こくり）」

「ほぅ、お前だけじゃなく、お前のパートナー妖聖も同じのを使えんのか。面白れえ……」

レイルとホロンの構えを見て何かを察したロンギは、ニヤリと笑い、長槍を構えながらレイルとホロンと同じ構えをとる。

「クロックアツプ」

魔法名を呟くとレイルとホロン、ロンギが消えた。地上空中で金属音と何かを通り過ぎる音だけが聞こえてきた。

「…レイの考えは分かったけど……個人的になんか複雑……」

「そうね。とりあえず私達は私達でやりましょうか……」

レイルの行動と考えを直ぐに理解したティルアとシャルは目の前に居るマリアノと向き合う。

「……たった2人でこの私に勝てるんでも？ クララ、フェアライズ！」

「はい、マリアノ様！ フェアライズ!!」

そしてマリアノの身体が変貌する。パートナー妖聖のクララが巨大化し、内部の中心にマリアノは収納された。

「天に召しませ……召しませ、天につ！」

「上等！」

ティルアとシャル、そしてマリアノによる3人の女同士の戦いの火蓋が切られた。

女神編

第41話 失った者

夜明け前のカヴァレ砂漠の聖域は、フェンサー達と組織のドルファ兵に乱戦状態と化していた。

「はあー！」

フューリーフォームをしたマリアノの巨大な腕がティルアとシャルに振り下ろされるが、彼女達はジャンプして攻撃を避ける。

「喰らったら、ペしやんこかな？」

「ペしやんこ……まではいかなさそうけど、一撃が重いのは間違いないわね」

近くの岩に着地し、攻撃の威力を分析するティルアとシャル。

「でもそれだけだよ。今のところ……」

「そうね。狙うとしたら……」

そう言っただけでティルアとシャルは、その場から一気にマリアノの腕に着地し、そこから一気にマリアノ本体まで駆け出した。

「っ！ クララ、フェアライズアウトよ！」

『えー!? と、解いちやうんですか!?!』

「いいからー！」

相手の狙いが解ったマリアノは即座にフューリーフォームを解除する。足場が急に無くなった事でティルアとシャルは落下しながらも態勢を保ちつつ地面に着地する。

「……（アポローネスが言ってた通り、妖聖とは思えない動きに洞察力）」

マリアノはクララをフューリーの基本形態である小振りな片手槍を変化させた。そしてティルアとシャルを見て只者ではないと警戒する。

「シャル、アレをやるわよ」

「珍しいわね。ティルアから提案してくるなんて」

「レイに負担をかけたくないから」

「そんな事だろうと思ったわ。それじゃあ……やりましようか」

そしてティルアとシャルは軽く深呼吸をしながら左手を前に構えた。

「(相手の雰囲気が変わった!?)」

『あわわ、マリアノ様〜！　なんかあの2人、凄い勢いで同調率が上がってます〜』

クララの言う同調率という言葉を警戒しながら、マリアノも身構える。

「シンクロライズ！」

なんとティルアの隣に居たシャルが光の粒子となり、ティルアに纏わりついたのだ。

「これで条件は貴方と同じ。レイの負担も少なくなる……」

そう言ってティルアは自身の基本形態である水属性の刀身を帯びた片手剣を右手に装備した。

「……………」

そして、それが合図かのように、ティルアとマリアノは目の前の相手に向かって走り出した。片手剣と片手槍がぶつかり合う。

「くっ！」

ティルアが片手剣で斬れば、マリアノが僅かな隙を狙って片手槍で突き返す。互いに武器を弾いては斬り返すという攻防が続く。

「はぁー！」

「しまっ……………!?!」

激しい剣戟の中、マリアノの攻撃によってティルアの片手剣が弾き飛ばされてしまう。その隙をマリアノは逃さない。

「クララー！」

『アタックエフェクト『ラファイニングシニカル』』

相手は態勢を崩して丸腰。ゼロ距離で回避はほぼ不可能な攻撃……これは取った！とマリアノが思った時だった……

「……………今の攻撃で私達に勝てる……………とても思ったの?」

「!?!」

瞬間、ティルアの身体が輝きだす。そして現れたのは消えた筈の

シャルだった。彼女の左手には光属性の刀身を帯びた刀寄りの片手剣が。

「遅いわよー!」

そしてシャルは閃光のような速さでマリアノを斬りつけた。

『あわわ、マリアノ様、大丈夫ですか!?!』

「はあ、はあ……なんとか、ね……(今の、百裂斬り……!?! どうして……)」

膝をつくマリアノ。同時に疑問が浮かぶ。それは先程シャルが放った技に見覚えがあったのだ。

「どうして、レイの技を……貴方が……」

「レイから基礎を教わっただけよ。寧ろ、なんで貴女は今の技を喰らっても軽傷なのかしら?」

「……確かに初見の人間なら、ただじゃ済まないでしょうね。でも私はレイと戦闘訓練もした事もあるから、その技も知ってるのよ……」

「だから軽傷って訳ね……。なんかズルいわね」

道理でマリアノが軽傷で済んでる訳だとシャルは納得した。

百裂斬りは確かにレイルの技だ。初見の人間ならまず見切れない。だがマリアノは最低限のダメージで済む方法で今の技を軽減したのだ。

『シャル、あの女がもしかして……』

「十中八九そうでしょうね……」

そういえば昔、レイルが自分達に言っていた。

ドルファに在籍してた時、自分達と同じくらい大切な同い年の同僚が居るといふ事をティルアとシャルは思い出した。

もしかするとマリアノは……

「がっ……」

「!?!」

そう思った時、何かが3人の前に飛んできた。

「はあ、はあ……」

「……(ぜえ、ぜえ)」

「ふー、ふー……ク、クソが……しぶといガキだ、ねえ……」

その正体はレイルとホロン、そしてロンギだった。3人は肩で息をしており、ボロボロの状態だった。ロンギに至っては、自慢の長槍が折れてしまっている。

「だが、もうさつきみたいなきも出来ねえ筈だ。お互いに……よお……」

「はあ、はあ……」

「せめてオレ様の……最後の、一撃を喰らって……死ねやあああああっ！」

「レイー！」

ふらついて立ってるのが、やつとのレイルに向かって、ロンギは折れた槍を投擲した。まずいと思ったティルアとシャルは踏み込むが、ギリギリ間に合わない……

このままではレイルに当たってしまう……

「ぐっ……っ……」

「ちい、よりにもよってアンタに邪魔されるとは……不覚……だぜえ……」

「え……？」

しかし投擲された槍はレイルに当たらなかった。そして標的に当たらなかつた事をロンギは悔しそうに呟くと同時にパタリと倒れた。それじゃあ先程の槍は誰に当たった？ それはマリアノだった。

「マ、リー……？」

「レ、イ……怪我は……ない……？」

ぐたりと倒れてる彼女をレイルは震えながら抱き上げた。

「な、なんで……僕なんかを助けたの……？」

「そんなの……簡単じゃない……」

「分かんないってば!! ……どうして、マリーが……まりーがあ……」

「泣かないの……レイ……男の子……でしょう？」

顔がぐしゃぐしゃになるくらい泣いてるレイルの頭をマリアノは優しく撫でる。

「ホロン……ボロボロだけど……大丈夫？」

「……(ふるふる)」

「わ、わたしは大丈夫だよ……心配……かけて……ごめんね……」

マリアノがロンギの槍を喰らってしまった影響なのか、クララも弱々しい声でホロンに謝っていた。

「消える……私の……命……」

「っ！ 嫌だ、嫌だよ！ マリー！ 死なないでよ！ マリー!!」

「レイ……私……私……レイの事が――」

その言葉を最後にマリアノは目を閉じた。同時にクララも消えていった。それはすなわち彼女の死。

「マ、マリー？ ねえ、起きてよ。……そういう冗談はいいからさ？ ねえ、ねえってば!!」

抱えていたマリアノが重くなった事でレイルは彼女が死んでしまったという現実気付いてしまう。

「……レイ……」

ティルアとシャルがレイルにそっと抱き付く。マリアノの気持ちは痛いほど分かる。自分達が死んだ時もレイルは今と同じように泣いていたのだから……

「う、うううう……うわあああああ！」

聖域にレイルの絶叫が響き渡る。もう大事な人を失わないように行動した結果がこれなのかと……

「……クソ女神、クソ邪神。お前達は僕とホロンを怒らせた」

「……（ギョロリ）」

沸々とレイルの中で女神や邪神に怒りが湧いてきた。ホロンの瞳も赤色に発光していた。

そっちがその気なら、こっちもやってやろうじゃないか。

あとはそれを今から実行するだけだった……

「……少しだけ、待っててね。マリー。もう、こんな目には合わせないって約束するから……」

もう喋らぬ彼女に別れを告げた直後、レイルは光に包まれながらこの世界から消えていった。

第42話 リスタート

——それはレイもでしょう？ 子供達からよくレイの話は聞いているわ

——レイルよ、貴様との決着はいずれつける

——キュイ♪

——わあ。ありがとー♪ これだったらマリアノ様も行ってくれると思う

——じゃあ俺、兄貴が作る玉葱多めのオムライスが食べてえ！

——どうぞ。ここが縁者の宿屋、向日葵荘ですわ

時が遡っていく。どうやら成功したようだ。レイルは先程までの記憶の映像を視ながら戻っていく。

「(それにしても……やっぱり時間旅行は……気分が悪い……)」

再出発の位置を指定したレイルは軽く時間酔いに襲われながらも、光に包まれていった。

「う……………」

レイルはゆっくりと目を開けた。穏やかな青い空と見覚えのある塔が確認できた。

……あと自分の胸当たりになんか乗ってる感覚がある。

「ミュイー！」

「……………ミュイ？」

「ミュイ、ミュイ♪」

見覚えのある姿と聞き覚えのある鳴き声の正体は、やはりレイルの胸に乗っていた。ミュイはレイルのパートナー妖聖で、ティアラのパートナー妖聖のキュイと似てるが色が薄紫色なのが特徴だ。

「……………(うくん…………)」

「(ここは…………シユケスーの塔の近くの草原?)」

「みたいね…………」

すると気が付いたのだろうか、ホロン、ティルア、シャルが順に起き上がった。自分達が目覚めた場所がシユケスーの塔の近くの草原だと理解する。

「ミュイ、ミュイ」

「ミュイがレイの中から出てきたって事は……」

「過去に戻ったって事ね……」

レイル達はひとまず、今までの活動拠点にしてた宿屋、向日葵荘がある大都市ゼルウインズに向かうのであった。



向日葵荘に着いたのはいいのだが……

「なんか騒がしくない？」

「……（コクコク）」

『ミュイミュイ』

宿の外からでも聞き覚えのある声が聞こえた。

「違うつつってんだろ！ 大体なんでティアラがここにいるのか、聞きたいのは俺の方だ！」

「……（声がデカいよ、ファング……）」

声がデカいよと思いつつも、このままだと入るタイミングを逃しそうなので、宿に入る事に。

「ごめんください。それからファング、声がデカい……」

「あ、兄貴!?!」

「レイル!?!」

「えっ!?! レ、レイルお義兄様!?!」

予想通りの反応だった。それよりも気になった事があったので……

「ファング、アリンちゃん。ちよつと部屋までいい？」

「お、おう……」

「うん、分かった」

「ティアラ、3人でちよつと話したいから部屋借りるね？」

「あ、はい……」

念の為にティアラに部屋を借りると伝えると、彼女は素直にどうぞと言ってくれた。

「さっきのティアラとの話の内容の件で聞きたいんだけど、なんかあったの？」

「それは……」

「信じてくれないかもしれないけど……」

さっきの会話についてレイルが訊く。するとフアングとアリンは暗い表情になりながらも話してくれた。カヴァレ砂漠でザンクと戦った後、ティアラの死体を見つけてしまった事を。

「……そっか。ごめんね、辛い事を言わせて」

「え？ 作り話とかって疑わないの？」

「アリンちゃんの女神の力が発現して、フアング達も過去に戻った……って事でしょ？」

「フアング達も……って、それじゃあレイル達も？」

「うん、そんな感じ。尤も、僕の場合、それに近い力を使ったただけだよ……」

その辺は追々に話すからと言って2人を納得させる。

「なあ、俺達が過去に戻ったなら、未来を変える事ができるかもしれない。そうだよな兄貴？」

「それはフアング次第だね。少なくとも、マシな未来には出来る筈」

「俺、変える。ティアラが死なないような未来にしてやる」

「ん、その意気、その意気」

そして儀式の場で殺されるティアラを見た事は、ティアラには言わないようにする事に。

「……ティアラも今の事はティアラには言わない事。大丈夫そう？」

『うん、大丈夫。妹に言えない事くらいなら、割と多い方だと自負してるから』

「……」

もしかすると一番辛いのは、姉であるティルアかもしれないなとレイル達は思った。



「……つまり、私とファンングさん、それにお義兄様達はかつて一緒に行動していた。けれど、アリンさんの力が発動し過去に飛ばされてしまった……そういう事ですか?」

「おう。分かってんじゃないかねえか」

「分かってませんわ。そんなバカげた話、信じられる筈がないでしょう」

「ま、無理だよ。急に信じろって言われてもさ」

とりあえずティアラにもファンング達が過去に戻った経緯を話したのだが……案の定、信じてないような反応だった。彼女が困惑半分の呆れ半分になるのも無理はない。寧ろ、それが正常な人の判断だと思う。

「だが、俺達はティアラを知っている。それが証拠だろ」

「確かに名前だけならまだしも、私の旅の目的まで知るのは困難でしょうけど」

「ファンングとアリンちゃんが初対面の筈のティアラにどこまで話したかによるけど……2人が言ってるのは本当だよ?」

その一言にティアラはレイルに視線を移す。

「どうしてでしょう? お義兄様が言うと妙に説得力がありますわ。ファンングさんとアリンさんが仰ると胡散臭いの……」

「かと言って、ティアラが信じられないのも分かるよ? ……とりあえず証拠みたいなのを見せるけど、それで大丈夫?」

「ええ。それでしたら……」

「えつとまずは……ティアラ!」

早速とばかりにレイルはティアラを呼ぶ。突然レイルの隣に現れたティアラを見たティアラは目を丸くする。

「う、嘘……お、お姉、様……?」

「ごほん、ではでは私の自慢の妹、ティアラの恥ずかしときめきメモリアルをお聞きくださいな。最近のより、昔の方がいいわね。そう、あれはティアラが4歳の時。レイに……」

「!? ま、ままま……待ってください! お姉様!! それは……!!」

「え? この話じゃない方がいい? じゃあ7歳の時のティアラの将

来の夢を……」

「いやあああああ!! 勘弁してくださいい!!」

姉が何を話そうとしたのかを察したのか、ティアラは全力で止めに入った。

「……ティアラ。その、テイルアがごめんね?」

「うう……。なんでそこまでお姉様は知っているのでしょうか……」

「妹想いという事で勘弁してあげて。それと未来で実現する事は、ティアラが直接見て判断してくれる?」

「はい。とりあえず状況に応じて慎重に判断します」

「ん。そのの返事だけでも僕らは充分だよ」

「あ、あの……お義兄様? その、私もう子供じゃありませんってば……」

「僕から見れば、ティアラは子供だよ♪」

「うー……」

ティアラの頭を撫でながら答えるレイル。

「よし。ねえファンク、確かこのメンバーで初めて行った場所といえ
ばクラヴィーセ洞窟だよね」

「そうだな。いいかティアラ。これからクラヴィーセ洞窟に行く。そ
こにフューリーがあるからだ。俺と兄貴はそこにある罠がどんなも
のか知ってる。本当だと分かったら信じろよ」

「信じるかどうかは別としても、フューリーは私にも必要です。いい
ですわ、クラヴィーセ洞窟に行きましょう」

次の目的地は決まった。

そしてレイル達は、初めてフューリーを手に入れた場所、クラ
ヴィーセ洞窟へ向かう事になった。

第43話 クラヴィーセ洞窟へ

「それじゃ、準備をしつかり整えたらクラヴィーセ洞窟に行くよ」
「おう」

「あいあいさー」

レイル達はクラヴィーセ洞窟に行く前に、大都市ゼルウィンズで準備する事に。

「ん？」

「どしたの、フアング？」

何かを発見したフアングにレイルが声を掛ける。

「いや、あそこにいるのってアレだよな。殺殺言ってる、コミュニケーションに問題ありの」

「…ほんとだ。エフオールが居る……」

視線の先には確かにエフオール、その隣にはパートナー妖聖の果林も居た。

「エフオールさん？ あの奇抜な格好の方がですか？」

「あれ？ 前はあんな格好じゃなかったんだけど」

アリンの言う通り、今のエフオールの格好は以前のようなシックな暗殺者装束ではなく、スコープが付いた眼帯とうさ耳フードを身につけ、肌を大胆に露出させた衣装だった。

「なあ、あいつに話しかけてみようぜ」

「ええっ！ いやでもまた理不尽な理由で襲われるのがオチだと思うわよっ。」

「まあ待て。前回は出会い頭の印象が悪かったただけだ」

「……なるほどね。それは言えてると僕も思うよ」

それを聞いて、一理あるなとレイルは思った。

「だろ？ 相手と同じ土俵に立てば、向こうも心を開いてくれるさ。上手くいけば仲間出来るかもしれない。おい、エフオール！」

そう言っつてフアングはエフオールに話しかけに行った。

「？」

「殺殺殺、殺殺殺殺殺」

「ちよ、ちよつとフアング!? 同じ土俵ってそういう事!」

「…ある意味、同じ土俵といえば、同じ土俵だけど……」

同じ土俵って、エフォールが使ってた『殺殺殺殺殺』という言葉遣いの事か……と呆然とするアリンとレイル。

「殺殺殺殺殺殺!」

「殺殺殺、殺殺殺殺、殺。殺殺」

「なんだこのバカは。ふざけてるのか?と、エフォールは申ししております」

「自分の事を柵に置いたー!」

「ですよー……」

ちやんと通じてるのかなー?と期待したレイルだったが、果林の通訳を聞いてしまった途端、やっぱりそうなのかと苦笑いを浮かべるしかなかった。

「殺殺殺殺殺殺殺殺」

「殺殺」

「寄るな不審者。と申ししております。……あのう、私からもエフォールに近寄らないようお願いします。教育に悪そうなので」

それだけ言うと、エフォールと果林は去ってしまった……



「着いたな」

「……確か、この最奥だったよね、フューリーがあつたのって?」

「うん。多分そこでエフォールと会う事になる筈。この2つが実現したら、あたし達の事を信じてくれてもいいよね?」

クラヴィーセ洞窟に着いて、ティアラに説明するアリン達。

「……どう思います? キュイ」

「キュイ、キュイキュイ!」

「アタシの中であなた方の不審者レベルはマックスに達しているの!

ちよつとやそつとの事では信用出来ないわ!と、キュイは申ししております」

「つて、ハマっちゃってんのかい！」

果林の通訳にハマったのだろうか何故かティアラはキュイの通訳の真似をしていた。それに突っ込むアリン。

「……こら、ティアラ。大袈裟に脚色するんじゃないの。キュイはそこまで言っていないから。今のところ半信半疑しか言っていないじゃないか……」

「あ、そっか。レイルはキュイの言葉が解かるって、前の世界でも言っていたもんね」

「そっか言ってたな」

「え、ええっ!？」

まさかの言葉に驚くティアラ。

「……全く。キュイが他の人に喋れないのをいい事に、都合よく脚色するんじゃないの。その辺、パートナーとしてどうなの？ キュイが精神的に傷つくとか考えないわけ？」

「……ごめんなさい……」

「そういう事をあんまり続けてると、元々悪気もないキュイが色んな人に殺される立場になるんだからね？ 嫌でしょ？ そういう事になったら」

「は、はい……以後、気を付けます……」

「……ん。分かればよろしい。ごめんねキュイ？ ティアラに強く言っちゃって」

「キューイ♪」

「キュイは優しいね。ほらティアラ。そんな落ち込んでだ顔してるよと、せつかくの可愛い顔が台無しになるよ？ 笑顔、笑顔♪」

「え？ あ……はい♪」

「……（）、怖え（い）……！ さっきの兄貴（レイル）、目が完全に笑ってなかった……!」

この後、ティアラに謝られたファングとアリンは気にしてないと笑いながら返した。そう返した理由は、先程のレイルが怖かったからというのもあるが。

「確か……キュイに似た生き物と過ごしてたって言ってたよね？ ど

んな子なの?」

「ちようどいい機会だし、3人に紹介しておくよ。ミュイ」

「ミュイミュイ!」

レイルが呼ぶとミュイが姿を一同の前に現した。

「似た生き物っていうか……色違いじゃねえか!」

「ほんとだ。しかも大きさもキュイと同じだ……」

「ほ、本当ですわね……強いて言うなら、身体の色が薄紫色で瞳の色が金色というところでしょうか……でも、外見がキュイにそっくりな妖聖を見るのは初めてです」

ミュイを見たファンング達は予想通りの反応だった。

「ちなみにミュイの正式名称は、ミュリエルって言うんだよ? だからみんなも気軽にミュイって呼んであげてね。あとこの子、キュイと同じで女の子だから♪」

「ミュイ♪」

「うん。よろしくね。ミュイ」

「こちらこそよろしくお願いしますわ」

「キュイ♪」

女性陣は仲良くなるのが早いなどレイルは思った。

「そういえば、エフオールの服装が変わってたよね。過去に戻ってきた筈なのに、どうして前と違うんだろ?」

「言われてみれば確かに妙だな。この先で会ったら本人に直接聞いてみるか」

「僕も異論なし。そうしようか」

もしかしたらこのタイムスリップについて、新しい事が分かるかもしれないと思ったレイル達は先に進むのだった。



しばらく進み、そろそろフューリーがある最奥近くまで行くと、どうやら先客が居た。

「よし、フューリーを手に入れたぞ! これでボーナス増額間違いな

し！」

「ボーナスはいいけど、私は戦いたいよね。あなたって小心者で直ぐに逃げ出しちゃうから、全然戦う機会がなくて太っちゃいそう」
その正体はドルファ四天王の1人、パイガとパートナー妖聖のビビアだった。

「ふん、賢い人間はそう簡単に剣は取らないものさ」

「殺っ！」

「うわっ!？」

何者かの襲撃にパイガは寸前のところで避けた。

「こんにちはー！　こちらエフォール、私はパートナー妖聖の果林です。エフォールに目を付けられた貴方達、気の毒ですが死んでもらいます」

襲ってきた者の正体はエフォールだった。

「来た来た！　私の出番ね」

「あら、平凡なサラリーマン面して、ずいぶん過激なお姉さんを連れてますね。なんだかいやらしい」

「仕方ないだろう！　妖聖は自分じゃ選べないんだ。こいつの格好のせいで、道行く人からも妻子からも冷たい目で見られてるんだぞ！」
「とか言って、嫌いじゃなくせに♪」

ビビアの格好を果林に指摘されたパイガは反論するが、ビビアが余計な事を言ってしまう。

「殺、殺殺殺殺！　殺殺、汚殺殺！」

「ええ、汚らわしいおじさんはさっさと片付けましょうか」

「……（なんかパイガのつつあんが可哀相に見えてきた）」

どのタイミングで出ようかなと思つた考えてたら、ファングがエフォールに声を掛けた。

「やっぱりいたな、エフォール！　それとお前は……誰だっけ？」

「お前こそ誰だ！」

「……（今のパイガのつつあんの突っ込み、キレがあったよね……）」

「……（コクコク）」

物陰に隠れながら思わず感心してしまうレイルとホロン。

「まあいいや。それよりエフオールに聞きたい事があるんだ」
「？」

首を傾げるエフオール。

「よし、今のうちに……！」

「え、逃げちやうの？ せつかく戦えると思つたのに……」
「！」

そしてその隙にパイガは逃げて行つた。

「……殺！ 殺殺殺殺！」

「お前のせいで獲物が逃げた。どう落とし前つけてくれんだよ。と、エフオールは申しております」

「どうやらお怒りのようだった。さて、どうしたものかとレイルは考える。フアングに悪気はないので彼女とは穏便に済ませたいものだ。

「うーん、落とし前ねえ……どうしようかなあ？」

「えつと……レイル？ 出来れば穏便にね？ 前みたいのはちよつと……」

「俺が言うのもなんだけど、俺からも穏便に頼む」

「？ いや、穏便に済ます予定だけど……」

それを聞いたフアングとアリンは安心した。またあの物騒な『お仕置き』を見るのはごめんである。

「それで落とし前だっけ？ これで許してほしいな？ ホロン？」

「……（スツ）」

そう言うと、レイルの頭に乗つたホロンがエフオールと果林の前に降りてきて、2人にアイスキャンデーを渡した。ホロンの顔が形になつてる水色のアイスキャンデーを。

「これを……私達にくれるんですか……？」

「……（コクコク。ひそひそ♪）」

「~~~~~っ!？」

「殺?？」

「な、ななな、なんでもないです！」

心なしか果林の顔が紅い。エフオールも彼女の様子がおかしい事に首を傾げていたが、果林はなんでもないと首を振っていた……

「ほら、フアング。今のうちにあれを聞いていたら？」

「そうだった。エフオール、お前なんでそんな服着てんだよ」

アリンに言われ、フアングはエフオールの服装について訊ねる。

「可愛いでしょう、私が選んだんです。エフオールにはもつと女の子らしいものに興味を持って欲しくて」

なんとエフオールが着てる服は、果林が選んであげたらしい。なるほど、それでうさ耳フードだったのかとレイルも理解した。

「でもそれを着るのは、なんつーか……だいたいぶ勇氣いるよな。自己主張が強いっていうかなんつうか……俺だったら金を積まれても着れないね」

「フアング、そんな痛い子を見るような目で見たら失礼よ。あたしも着れないけど」

「そうです、失礼ですわ。まあ私も着れませんが」

男性であるフアングは兎も角、女性であるアリンやティアラも着れない……らしい。

「そう？ 僕とホロンは普通にエフオールの服着れるけど？」

「……（うんうん）」

『あー、確かにレイとホロンなら普通に着こなせそうね。尤もホロンの場合、あの姿を取らなきゃだけど……』

『そうね。違和感ないし』

『ミュイミュイ！』

「「えっ……？」「」

レイルの一言に同意するホロン、頷くテイルアとシャル、そしてミュイ。それを聞いて口をポカンと開けるフアング達。

「……………殺！」

場の空気に耐えかねたのか、エフオールは洞窟の外へと消えていった。

「ああっ、エフオール！ 行かないでください！ エフオールは痛い子なんかじゃありませんよー！」

そして果林もエフオールを追いかけていった。

「……………結局、前回と同じような感じになっちゃったわね」

「あいつとの付き合い方だけは、何回やり直しても分かる気がしねえ」
「まあ、こればかりはね。しかも律儀にホロンがあげた手作りアイス
キャンデーは持ち帰ってくれたみたいだし……」

「……（コクコク）」

なんか未だに遠くから果林の『エフオールは痛い子なんかじゃない
ですってばー!』と聞こえた……気がした。

第44話 ティアラの気になっていた疑問

翌日、レイル達はヤタガン溶窟に来ていた。

何故なら、クラヴィーセ洞窟の次にフューリーを手に入れた場所がこの場所だからである。

「そういやクラヴィーセ洞窟のフューリー、なんか種類が違ってたよな？ 既に俺らが持つてるから当然っちゃ当然だけど」

「確かにパイガの事は想定外だったよね。前回クラヴィーセ洞窟で会ったのはエフォールだけだったし……」

気になった事をフアングが呟くと、アリンも確かにと頷いた。初めてクラヴィーセ洞窟に行った時はエフォールしか会わなかったのに、何故かパイガも居たからだ。

「仮にその話が本当だとするなら、タイムパラドックスが起きているのでは？」

「タイムパラドックス……って、なんだ？」

「フューリーの種類が違うし、本来のフューリーも手にしていると仰ってたでしょう？ その変化が起点となり、様々な事象に影響を及ぼしていると考えられますわ」

ティアラの説明を聞いたフアングは、そういうもんかと納得した。

「タイムパラドックスねえ……。頭の片隅にでもおいておこうか。とりあえず3人共、これ飲んでおきなよ？」

そう言っただけレイルは、例のコルク栓で蓋をした小瓶をフアング達に手渡した。

「これって確か兄貴が作った脱水症状を防ぐ飲み物だよな？ なんか前より冷たくねえか？」

「言われてみれば確かに……」

「一応、今回は飲んでから半日くらい長持ちするように改良してみたよ」

「えっ!? マジで!？」

「いつの間にな!？」

自分達の知らない間に、レイルが効能をグレードアップしてた事に

驚くフアングとアリン。2人につられてティアラも蓋を開けて飲んでみる。

「凄く飲みやすいですね。お義兄様、売ったりしないのですか？」

「悪用されると嫌だから、売る気はないよ」

案の定、ティアラにも前の世界と同じ事を質問されたので、のほほんとした表情でレイルは答えた。

「そういやこのフューリーは、兄貴が取ってくれたんだっけな」

「そういえばそうだったね。仕掛けと違って変わってたりするのかな？」

「正直に言うと、僕もその辺が不安なんだよね」

前の時と同じく仕掛けが変わってなければ、フューリーを取るの容易い。前の時と同じ方法で取るという意味だが。

「ま、でも結局、同じ方法でフューリーを取らせてもらっただけだね」

「兄貴、モンスターのの方はどうするんだ？ 前の時と同じでいいのかな？」

「もちろん美味しく頂くよ♪ もし出現するモンスターが変わったら、それはそれでいいんだけど♪」

とつてもいい笑顔でフアングの質問に答えるレイル。

「なんか、お義兄様が凄くいい笑顔してますが……」

「このフューリーを取った後に、今レイルが言った意味がティアラにも分かるわよ」

そのいい笑顔の意味は、直ぐに分かるわよとティアラに教えるアリンなのであった。



その日の夜。

無事にヤタガン溶窟のフューリーを手に入れたレイルは向日葵荘の食堂で紅茶を飲みながら本を読んでいた。ちなみにフアング達はもう部屋で寝ている。

「あっ……」

「あれ、ティアラ?」

誰かが入って来る気配がしたので、視線を向けると寝間着姿のティアラだった。

「眠れないの?」

「ええ。まあ……」

「ちよつと待ってて。紅茶でも淹れてあげるから」

珍しい事もあるもんだなと思いつながら、レイルはティアラの分の紅茶を淹れる。

「はい、どうぞ。ティアラの口に合えばいいんだけど」

「ありがとうございます」

ティアラはレイルが淹れてくれた紅茶を飲む。口にすると飲んだ事の味だった。

「お、美味しい……」

「それは良かったよ。僕が独自にブレンドしたものだからね」

レイルが独自にブレンドしたと聞いて、ティアラは納得した。

「……それで? 僕に何か聞きたい事でもあつたんじゃないの?」

「えっ……」

「顔に出やすいよ、ティアラ」

頃合いを見て、レイルが訊くとポカンとするティアラ。

実はヤタガン溶窟のフューリーを前の時と同じ方法……ティアラの形態変化を使った時、ティアラの様子が妙におかしかったのだ。

「お義兄様、お聞きしたい事があるんです」

観念したのか、ティアラは不安そうな表情で口を開いた。

「お義兄様は私の事、どこまでご存知なのですか?」

「また難しい事を聞いてくるね……」

質問の内容にやれやれと肩を落とすレイル。でも、ティアラなりに頑張つて絞り出した質問なのだろう……

「少なくとも他の人には言えない秘密も含めて、僕はティアラの事を知ってるよ」

「っ! そう、ですか……」

「そんな顔しないの。その秘密があろうがなかろうが、ティアラは

「ティアラなんだし」

ティアラの頭を撫でながら安心させる。

「そろそろ寝なよ。睡眠不足はお肌によくないからね」

「はい。おやすみなさい、お義兄様」

その時のティアラの表情が安心したように見えたのは、気のせいじゃないのかもしれないとレイルは思うのだった。

第45話 カダカス氷窟の噂と再会

その翌日。

前の時と同じ、山脈の中腹にある隠しの入口を見つけて、レイル達はカダカス氷窟に入る。

「そういや、このこのフューリーの情報を貰う時、ロロとも初対面だったよな」

「毛糸のパンツ買う時のぼったくり価格は変わらずだったけどね……」

フアングの言葉に肩を落とすアリン。ロロの商売が相変わらずだったのだ。

「そういえばカダカス氷窟で思い出しましたが、ある噂があるみたいなんです」

「「噂?」」

ふと思いついたのか、ティアラが口にした。

「ええ。なんでも死体処理場として、ここが使われてるらしいのです……」

「死体処理場だと……? おい待て。前はそんなのなかったぞ!」

「うん。前の時はそんな物騒な噂なかったよね……」

確かに前の時はそんな噂はなかった。もしかしてこれも過去の変化による原因なのだろうか?

「つーか、すげえ冷気だな。お、なんだ!? こんなところにマントが落ちてやがる!」

そんな事を考えていると、フアングがマントを発見した。

「落ちていたのではなく、明らかに置いてあるのだと思いますけど」

ティアラの言う通り、落ちていたというよりも置いてあるという表現が正しい。

「どっちも同じだろ。俺は俺の意志で運命を切り開く。つまり俺の意志でこのマントを俺の物にするくらい朝飯前だ」

「似て非なるとはこの事を言うのかもね……」

「人様の物を勝手に取るなんて言語道断です」

フアングの言葉にレイルとティアラが突っ込むのであった。

◇

「うー寒い寒い。前回よりはマシだけど、やっぱり寒いもんは寒いよ」
「さみー。洞窟に入る前までがすげえ幸せだった気がしてきた」

「見た事もないような凄まじい鳥肌が……今なら生姜をすりおろせそうだよ」

「生姜を入れた鍋焼きうどんになりてえ」

「食べたいって言うより、最早なりたいよね……」

寒さでおかしくなったのだろうか、フアングとアリンが面白い例えを口にした。

「鍋焼きうどんもいいと思うけど、個人的にはピリ辛鍋もオススメかな。具材は海鮮物で肉は豚肉、野菜はキャベツ、豆腐も入れると尚美味しいよ?」

「やべ……想像したら食いたくなってきた」

「あたしも……」

「私もです……」

この調子だと今夜の晩御飯も前の時と同じく海鮮鍋がリクエストになりそうだなとレイルは思った。

「っ!? 皆さんあれを! 人が倒れてます!」

するとティアラが何やら血相を変えた顔で何かを発見した。確かに誰かが倒れている。

「……」

「おい兄貴、こいつは……」

「確かドルファの……」

「嘘でしょ……マリー!? それにクララまで!」

直ぐに駆け寄るレイル達。

だが倒れていた人間を見たレイルとフアング、アリンの3人は驚いた。倒れていた者の正体はなんとドルファ四天王の1人であるマリアノ、そして彼女のパートナー妖聖のクララだった。

「大丈夫。まだ息はあるよ」

「こっちのパートナー妖聖の子も生きてるわ。ただ直ぐに手当てをしなきゃだけど……」

ティルアとシャルが言う。

2人は随分と弱っていたが、幸いな事にマリアノとクララもまだ息はあった。だが場所が場所なだけに手当てをしなないとまずいのは誰が見ても明白だった。

「フアング、ここのフューリーの回収を任せてもらってもいい？ 僕らは入口でマリーとクララの手当てをしてるから」

「分かった！」

「ホロン、クララを運んで」

「……（コクコク）」

とりあえずフューリーはフアング達に任せて、レイルはマリアノをホロンはクララを抱えながら一度、洞窟の外に出るのだった。

◇

カダカス氷窟の入口まで戻ったレイルは直ぐに応急処置を施した。

「とりあえず外傷は全部治しておいたわよ」

「あとはティアラ達が戻ってくるまで安静させてあげましょ」

「よ、良かった……」

シャルとティルアの言葉を聞いたレイルは安心したのか、その場に腰を下ろした。

「でもなんで、マリーとクララが……」

「……（コクコク）」

「過去に戻ったとはいえ、初めて会ったのって確かカヴァアレ砂漠の筈だよな？」

「ええ。厳密には女神の聖域だけど……」

まさに疑問はそこだった。この場に居ないフアングとアリンもそう思うだろう。

本来、マリアノと会うのはフェイスドロップを入手した後。しかも

夜明け前のカヴァアレ砂漠で遭遇する筈なのだ。それなのに彼女とクララはカダカス氷窟で倒れていたのだ。

「う、うくん……」

そう思っていた矢先、クララが目を覚ました。

「クララ！」

「あれ？ レイルにホロン？ あっ！ そうだ！ マリアノ様は!？」

「クララ落ち着いて！ マリーなら大丈夫だから！」

「ほ、ほんと？」

「ほんとだから。隣にいるでしょ？」

「よ、良かった……」

起きて早々に慌てるクララを落ち着かせる。そして隣で寝ているマリアノを見つけて安心してクララ。

「とりあえずフアング達が戻ってくるまで、お茶して待つてようか。クララ、何か温かい飲み物でも飲む？」

「うん、飲む」

「(でも一体……何が起きてるんだろう?)」

まさか自分達の予想よりも早く再会できるなんてとレイルは眠ってるマリアノを見て思うのだった。

第46話 妖聖研究家との再会、そして新たな仲間

カダカス氷窟のフューリーも無事に回収できた一同は宿に戻り各々の部屋に戻る。マリアノとクララはレイルが彼女が目覚ますまで介抱するとの事。

「あー、色々あつて疲れた。腹が減った。なんかこう、甘ったるいもんが食いてえな」

自分が使わせてもらつてる部屋にファングは眩きながら入る。

「その願い、叶えてしんぜようぞ」

「うお!? 部屋に大量の菓子が並んでやがる! とうとうランプの魔人でも現れたか?」

テーブルには大量のお菓子類が並んでいた。

「やあ、邪魔してるよ少年」

「ハーラー! おっさん!」

そこに現れたのはハーラーとバハスだった。

「ん? なんで君は私の名前を知ってるんだい?」

「……あ。いやその……俺はこう見えて妖聖研究に興味があつてだな。だからお前の事も知ってるんだ」

ハーラーとも初対面だったという事を思い出したファングは、ありきたりな理由で誤魔化す。

「ふうん。君がねえ」

「な、なんだよ。言つとくがストーカーじゃねーからな」

「ストーカーだなんて思う訳ないだろ。面白いね君は」

ちよつとだけ安心するファング。実際、過去に戻ってテイアラに会つた際に言われたのが原因なのだが。

「ハツハツハツ。こいつがストーカーされるタマかよ」

俺がいなきやゴミ溜と化した部屋でジャンクフードを片手に研究ばつかしてる女だと笑いながら付け足すバハス。

「ところで君、そのマントはどうしたんだい?」

「ああ、さつき拾つたんだ。全くありがてえ」

「それは私が置いておいたもんだよ。でもまあいい、君にあげよう」

「このマント、ハーラーのもんだったのか。なら、お前、あんなところで何をしてたんだよ?」

フアングがその理由を訊こうとした時……

「騒がしいけどなんかあったー? あっ! ハーラーとおっさん!」

アリンがちょうど部屋に入ってきた。隣にはティアラも居た。そしてアリンもフアングと同じ反応をする。

「おや、君も私を知ってるのかい」

「おいおい、俺はおっさんじゃねえぞ」

「フアングさんとアリンさんのお知り合いなのですか?」

ティアラが口を挟もう前に要件はなんだ?とフアングがハーラーに訊ねる。どうやら折り入って頼み事があるようだった。

◇

「なんかフアングが居る部屋が騒がしい……というか、賑やかなんだけど」

「……(コクコク)」

「しかもなんだか甘くて美味しそうな匂いがする」

『あっ……誰だか察したかも……』

クララの一言でフアングの部屋が賑やかな原因を察したレイル達。

「こ、ここは……」

「マリー!」

そんな事を考えてると、マリアノが目を覚ました。

「レイ……? それに貴方達は……? クララは!」

「マリアノ様〜! 目が覚めたんですね〜!」

「クララ! ええ。お前も、よく無事で……」

目を覚ました主に安心するクララ。それはレイルも同じ気持ちだが。

「マリー、身体は大丈夫そう?」

「ええ……動ける程度には」

「それじゃあ別の部屋に移動しよっか。二度手間な説明はアレだから

ね」

本当はこの場でも聞いてもよかったレイルだが、それだとファング達にも説明するのが二度手間になってしまうからだ。

ひとまず6人は賑やかな声が出たファングが使ってる部屋に入る。

「い、イヤーっ！ このマッドサイエンティスト！ ち、近づかないで！ あっ！ レイル、助けて！」

「やあー♪ レイル君、それにティルアちゃんとシャルロットちゃんも！ 久しぶりー♪」

「……（パタパタ）」

「ミュージック」

「あー！ その子も一緒なのかい？ 相変わらずレイル君にべったりだね」

「ハーラーちゃん、久しぶり。戯れてるところ悪いんだけど……」

「……ふむ、レイル君がその顔しながら言うって事は相当な事だろうね。話を聞こうか」

レイルが割と真面目な表情をしてるのを見て何かを察したハーラーは直ぐにアリンを放すのだった。



「なるほど。そちらのお嬢さんはドルファの幹部でレイル君の昔の同期、しかもカダカス氷窟で倒れてたのを助けてあげたという訳だね？」

「大まかに説明するとそんな感じ。それでハーラーちゃんに聞きたいんだけどさ、カダカス氷洞窟の噂について何か知ってる？」

マリアノとの関係をレイルが説明した後、ハーラーにカダカス氷窟の噂について訊ねる。

「死体処理場になってるっていう物騒な噂だろ？ ここ最近流れた噂だから私も本当かどうか怪しいけどね」

「最近か。どのくらい最近か具体的に分かってたりする？」

「うーん、そうだね……ドルファ・ホールディングスのパーティが中止

になった時期よりちよつと前くらいかな。私が噂を聞いたのもその時期だし」

ドルファの立食パーティが中止になったと聞いたレイルは軽く目を見開く。

「マリー、パーティが中止になった理由って知ってたりする？」

「悪いけど私も明確な理由は分からないの。具体的な説明なしに中止になったって言われてはぐらかされただけだったし……」

パーティが中止になった理由をマリアノにも聞いてみたが、幹部である彼女にも明確な説明はなかったという。

「……そういう事か。噂の正体だけど、ドルファの人間だろうね」
『っ!?!』

そしてある結論に至ったレイルが口にする、全員が驚きの表情をした。噂の正体はドルファ社員による人為的な犯行だと言うのだ。

「だっておかしくない？ パーティが中止になったなら社員全員に連絡する筈だし、僕が知ってる昔の同期だって1人くらいは疑問に思うよ？ 現にマリーが良い例だよ」

「でもなんでカダカス氷窟を噂の出处にしたの？」

「それは単純に死体処理場に適した場所だからだよ」

アリンの疑問にレイルは答える。

「カダカス氷窟の内部って寒かったでしょ？ 入る日によって内部の寒さも変わるし、まさにカダカス氷窟は天然の冷凍倉庫。気絶した人や死人を置きっぱなしにしたらどうなる事やら……」

「お、おい兄貴、待てよ……。まさかそれ……!」

「もうここまで言えば、みんな分かるでしょ？ 噂のからくりはそういう事だよ」

フアング達は背筋がゾツとした。何故カダカス氷窟が死体処理場なのかという由来を知ってしまったからだ。

「ですが、どうしてマリアノさんが狙われたんですか？ そもそも何の為にそんな事を？」

「マリーを亡き者にする事で、得する誰かがドルファに居るというのが可能性の高い理由かもね」

マリアノとクララが狙われたのはそういう理由かもしれないと答える。

「あ、そういえばファング。カダカス氷窟のフューリーは回収できたの？」

「なんとかな。一時はフューリーが折れちまってどうなるかと思ったけど、アリンのお陰でフューリーが進化したみてえなんだ」

「それはまた災難だったね……」

あの時はマジで焦ったと肩を落とすファング。

「それでマリーはこれからどうするの？ この際だからはつきり言うけど、ドルファに戻っても直ぐに殺されるよ」

「私は……」

これからどうするんだとマリアノに問うレイル。しかし彼女の表情は見る限り迷ってるのが窺えた。

「マリーは僕が守るから」

「え？」

「だからさ？ マリーは少しくらい我儘になってもいいんだよ」

「レイ……」

前の世界で彼女は自分を庇って死んでしまった。その事は当然マリアノは知らない。自分と同じく時間逆行したファングとアリンでさえも。

「マリアノ様、レイル達と一緒に行きましょうよ♪」

「クララ……」

「だってその方が色々と楽しそうですし、マリアノ様もレイルとまた一緒に居たいって前々から言ってたじゃないですか」

「なっ……！」

そして追い打ちをかけるかのように、お顔が真っ赤ですよ〜と言うクララ。

「余計な事を言うんじゃないの」

「なんかマリーは決まったっぽいし、ハーラーちゃんは どうする？」

「レイル君と行動するのは退屈しないし、それにファング君の妖聖の力を間近で見たいってのもあるよ」

「だと思ったよ。」

「む……………」

その言葉を聞いたレイルはなんとも彼女らしいなと思った。レイルの反応を見たマリアノは頬を軽く膨らます。

「フアング達もいいよね?」

「俺は構わないぜ。なんと言うか……………こういうのは、慣れてるからな」
「あたしも」

「私もですわ」

フアングとアリン、それにティアラも納得してくれたようだ。

「それじゃ僕は宿の外で少し休んでくるよ。マリーに超高速回復魔法を使っちゃったからさ」

そう言うのとレイルは背伸びをしながら部屋から出ていった。

「おいティアラ。なんだ? 兄貴が言ってた超高速回復魔法って」

「いえ、私も初めて聞きました……………」

先程レイルが言ってた『超高速回復魔法』という単語が気になったフアングがティアラに訊くが、彼女も初耳だった。

「えっ、何々? レイル君、また超高速回復魔法を使ったの?」

「うん。シャル、これで何回目だっけ?」

「そうね……………ミュイの分も合わせるなら、これで5回目になるわね……………」

「ミュイミュイ!」

その魔法が何なのか知ってるハーラー、ティルア、シャル、そしてミュイの3人と1匹。

「ねえ、さつきレイルが言ってた超高速回復魔法ってどんな魔法なの?」

「そーだね……………簡単に言うと内面から傷を治せるって言えば分かりやすいかな?」

アリンの質問にハーラーが答えた。

「私達が使ってる回復魔法は、外傷……………つまり外側の傷を速く治せるけど、内面の傷……………心臓とかの臓器類は治すのが遅いの。粉碎骨折とか吐血のし過ぎで血が足りないとかね」

「けどレイが使ったのは、1週間は安静にしないと治らない傷をその日に治せる回復魔法。それが今言った超高速回復魔法よ」

「……」

ティルアとシャルが更に分かりやすく説明する。

彼女達と同じく回復魔法を使えるティアラとマリアノは啞然とした。何せ、回復魔法の領域を完全に超えているのだから……

「まあでもレイル君曰く、大事な人達にしか使わないのが流儀だそうだよ。学生時代の時に教えてもらったけど」

「そうなんですか？ 私もお義兄様に教えてもらいたいですわ……」

「…ティアラ。私とシャルはレイに超高速回復魔法をかけてもらった事もあるし、なんだったらその魔法も使えるけど……止めておいた方がいいわよ？」

ハーラーの言葉にティアラはレイルに超高速回復魔法を教えるもらおうかな？と呟いたが、姉であるティルアにジト目で返された。

「え？ まさかレイルが使う魔法の事だから、常識外れなやり方だったり？」

「それは人によるかもね。少なくとも危険度はかなり低いから大丈夫」

「それでしたら、心臓マッサージとか……でしようか？」

「それもハズレ。どっちかっていうと、レイの性格で考えた方が分かりやすいかもね」

「レイの性格で？ 私が知る限りだと……魔法の重ね掛けとか？」

「それもあるけど、答えは人工呼吸」

「「っ!!」」

やり方を聞いた女性陣……アリン、ティアラそしてマリアノは別の意味で目を見開く。特にマリアノは顔が真っ赤である。

「それでも覚えたのなら、レイに頼んで教えてもらったら？」

「か、考えさせてもらいますわ……。お姉様が言いたいのは、つまり……羞恥心を捨てると？」

「そういう事。ある意味、レイらしいでしょ？」

超高速回復魔法は大事な人達にしか使わない……その意味が分

かった気がした一同、特に女性陣なのであった。

第47話 アポローネス

ハーラーとマリアノが仲間になった次の日の朝。

「それで今日はどこに行くの？」

「そういえばレイル君には言ってなかったね。実はザワザ平野にフューリーがあるらしいんだ。けど、それがドルファの幹部に守られていてね」

なんでもハーラー曰く、ザワザ平野にフューリーがあるとの事。しかもそこでドルファの幹部が守ってるらしい。

「ドルファの幹部？ 誰だろうねー？ パートナー妖聖は龍だっけ事しか浮かばないやー」

「レイ……貴方、分かってて言ってるでしょ？」

絶対にザワザ平野にいるドルファの幹部が誰なのか分かってるよ
うな言い方をするレイルをジト目で見るマリアノ。

「やだなマリー。誰もザワザ平野に居るのがアポロだなんて言っ
てないじゃないか♪」

「もう答えを言ってるじゃないの……」

「あ、いい事思いついた♪」

「……まさかアポローネスを仲間に取り込む気？」

何かを思いついた表情のレイルを見て察したマリアノが口にした。
「なあ、アポローネスを仲間にするって……それって実際にできる
か？」

「正直言っただけ難しいわね。あの男は剣の研鑽にしか興味を持って
ない……ただ……」

「ただ？」

「レイとの決着はつけるって入社当時から言ってたから……あるいは
だけど」

少なくともアポローネスを仲間にする確率はゼロではないとマ
リアノはファンク達に説明する。

「アポロがそれを望むなら、僕は応えるけどね。……ただ万全の状態
じゃなかったら、別の方法を取るけども」

「お義兄様、別の方法ってどのような事を？」

「平和的交渉」

つまり話し合い的な事をするかもと付け足しながら目的地に向かうのであった。

◇

「さて。無事に目的地に着いた訳だけど……」

大都市ゼルウインズから北西にあるザワザ平野に辿り着いたレイル達一行。

「唐突だけどき、フアング達は今夜の晩御飯は何がいい？」

何を思ったのか、今夜の晩御飯のメニューをフアング達に訊くレイル。

「どうすっかなあ。やっぱり兄貴特製の日替わりハンバーグか？ いや

玉葱多めのオムライスも捨てがたい」

「ガキの食いもんじゃねえか。もつと作り甲斐のあるもんをリクエストしたらどうなんだ？」

「そういう、おっさんはどうなんだよ？」

「俺か？ そうだなあ……レイルの作る料理はどれも絶品だが、手間がかかる料理だったら、ロールキャベツと鯖の味噌煮定食だな」

「ああ、昔作ったあの料理ですか……」

だいぶ昔の話になるが、バハスはその2つの料理を気に入ってくれたのをレイルは思い出した。

「私は茸きのことチーズのリゾットがいいですわ」

「あ、私も私も〜！」

「私も。強いて言うなら、日替わり系リゾットがいいわね」

「私も」

ティアアラ、ティルア、シャル、マリアノはリゾットをご所望のようだ。

「クララは？」

「わたし〜？ 玉蜀黍の唐揚げがいい〜」

「ホロン、揚げ物がリクエストに入ったから、手伝いよろしく」
「……（スツ）」

任せてとばかりにレイルの肩でサムズアップするホロン。
「お前らよくあんなべちよべちよしたお粥みたいなもの好きだよな。女はみんなそうなのか？」

「世の中の女性がそういう訳じゃないと思うけど……でもよく聞くよね。そんな話」

「俺、あれは食った気にならねえよ」

「リゾットが苦手な人ってそういう理由が多いんだよね」

ちなみにレイル自身はリゾットは好きな方だ。ただ特別好きな料理ってわけじゃないけども。

「アリンちゃんとハーラーちゃんは何がいい……って、ハーラーちゃん何してるの？」

「何ってアリンちゃんを観察してるのさ♪」

さつきから会話に入っていないアリンはハーラーに絡まれていた。そのせいかアリンに元気がない。逆にハーラーは活き活きしていた。「なんだよアリン。元気ねえな。いつもの食欲魔人はどこいったんだよ」

「この状況を見て元気な答えを求めるのは、無茶というものよ……」
「体温は妖聖の平均値だね。筋肉や骨格も人型妖聖の典型みたいだし……」

「うー……うざい……体、勝手に触らないで……」

覇気がない。しかもハーラーに絡まれてしまったからなのか、アリンが疲れてるように見える気がする。

「ハーラーさんずっとあの調子ですわね」

「なんか流石に気の毒になってくるな……」

「なんかハーラーちゃん、いつも以上にはしゃいでいるなー」

「レイ。感心しないで、止めてあげなさいよ……」

そしてマリアノにもそう言われ、とりあえずレイルはファングとバハスの3人でハーラーを止めてあげるのであった。



ザワザ平野の最深部の近くまで進むにつれレイルはふと思った。

「……（そういえばシャルマンとも合流してないなあ）」

アリンが言っていたが、前の世界ではレイルがドルファの兵士達と戦ってる間に、この辺りでシャルマンと合流したそうさ。なんだつたらドルファの兵士達とも遭遇してない。

「……（ツンツン）」

「何？ あー、はいはい。ファング、アリンちゃん。ちよつと……」「？」」

ホロンがレイルに何かを訴えてきたので、とりあえず前の世界の事を知ってるファングとアリンを呼ぶ。

「どうした兄貴？」

「……一応、乱入者には警戒しといて？」

「それって前の世界に現れた黒い騎士と喋る骸骨の事？」

そうだとばかりに頷くレイル。

この先、アポローネスが居ると思われる場所に行く訳だが、乱入者……つまり黒騎士と骸骨騎士がまた現れる可能性があるかもしれないのだ。

「現れるかもしれない事を知ってるのは、未来から来た僕らだけだからさ。その辺を2人にも考慮しといて」

「分かった」

「確かに過去が変わってるとはいえ、その可能性もまだ残ってるかね……」

だから一応、警戒する事に越したことはないだろう。

「さて。行きますか……」

「……（コクコク）」

そして奥に進むと、アポローネスはやはり居た。無言で佇むその姿は彼らしいなとレイルは思った。

「たのもー！ 頼もしい目付け役がここに居ると聞いて、やってきたよー！」

「軽^{かる}っ!? しかも目付け役って何!？」

「レイ、貴方ねえ……」

「……………」

第一声のレイルの掛け声に代弁するかのように突っ込むアリン。マリアノは溜息を吐き、そしてアポローネスに至っては鳩が豆鉄砲を食ったような表情をしていた。

「……………はは。ふはははは」

『!?』

すると突然アポローネスは笑い出したのだ。これにはフアング達も驚く。

「ちよつとアポロ、今のどこか笑う要素あった？」

「いや。自分でも分からぬ。……久しいな、レイル」

「さっきのは、レイが緊張感のない事を言ったからだと思っけど……………」

「そこに居るのは……マリアノか。なるほど、そういう事か」

レイルの隣に居たマリアノを見つけると、アポローネスは疑問が解けたとばかりに納得していた。

「生憎と、私はもうドルファには興味はない」

「? その言い方だと、アポロがドルファを辞めましたって聞こえるんだけど……」

「もう最近の事になるが、私はドルファを抜けさせてもらった」

アポローネスのその一言はこの場の全員を驚かせるのに充分な理由だった。

「という事は?！」

「ああ。レイルが言っていた通り、目付け役にでもなっただろう」

「「おっしやあ（やったー）！」」

まさかの結果にフアングとアリンは声を上げて喜んだ。他のメンバーも驚きはしているが、笑顔を浮かべていた。

「よろしくお願いしますね。アポローネスさんは私やフアングさんより年上で、お義兄様やお姉様達のように頼りになりそうですわ」

そしてハーラーさんは少し残念なところがありますしと付け足す

テイアラ。

「私のどこが残念だつて言うんだい？」

「……！ ハーラーという女人。そなたは私に近づかないでもらいたい。煩惱が刺激される」

「はい？」

「……（アポロが必死だ。まあ……ハーラーちゃんの格好がアレなせいでだから、こうなってるだけなんだよな……うん）」

何故か顔を赤くするアポローネスにハーラーは首を傾げる。その理由を察したレイル。

「今晚はアポローネスの歓迎会だな。いっちょ腕を振るつてやるか」

「この際だから、マリーの歓迎会も一緒にやりましょうか。昨日はなんだかんたんで出来なかつたので」

「……（コクコク）」

「そうなるど宿に戻る前に買い出しもしねえとな」

料理担当が定着している3人……バハス、レイル、ホロンがそれぞれ頷き合う。

「俺、肉な！ 思いつきり肉肉しいもんが食いてえ」

「肉肉しいって……」

フアングの注文に軽く呆れるアリン。そもそも『肉肉しい食べ物』なんてあるのだろうか？

「…お肉か。あるにはあるけど……」

「どうした？ なんか難しい顔してるが……」

「いえ、ホロンが獲ったお肉なんですけど……いや、現物を見てもらったほうがいいですね。ホロン、アレ出してくれない？」

「……（こくり）」

何やら渋つてるレイルを見たバハスが訊く。とりあえず現物を見てもらった方が早いと感じたレイルはホロンに指示を出す。

「……（よいしょっと）」

そしてその小さな体からホロンは見るからに巨大な2本の角が生えた緑色の恐竜型モンスターを取り出し、その場に置いたのだ。

「レイルよ。こやつはヴァアラファールではないか。まだ生きてるのか

？」

「いや。死んでるよ。血抜きはしてあるし、魔法を使つて綺麗な冷凍保存状態にしてあるよ。香草を摘んでたホロンにちよつかい出してきて、それを返り討ちにしたんだよ。ね？」

「……（コクコク）」

「相変わらずだな、お前も」

「……（ドヤア）」

なんでもこのヴァラファールというモンスター、アポローネス曰く『ダスヒロウ平野』と呼ばれる場所に生息しており、それなりに凶暴なモンスターだとの事。

「……デカいな。兄貴、これ……食えんのか？」

「食べれるよ？ 魚でいう大トロとか、色んな部位が食べれるモンスターだし」

「なんかワニが懐かしいね、フアング……」

「あつたな、そんな事……」

そういえば前の世界で、レイルがワニを片手に宿屋に持つてきてたのをフアングとアリンは思い出した。

「いっその事、このまま僕が宿屋まで持つてく？」

「レイ、それだけは止めなさい。大騒ぎになるわよ？」

マリアノの言う通り、この巨大なモンスターをそのまま大都市ゼルウィンズに持つていったら、大騒ぎになるだろう。

「そうなるよ、ここで部位ごとに分けて捌いちゃうか。ホロン、手伝つて」

「……（こくり）」

「レイル、捌くのであれば私も手伝おう。セグロ」

「ぐるる」

「ありがと、助かるよ」

「お前らだけじゃ大変だろう。俺にも手伝わせてくれ」

「助かります。それじゃ最初は……」

そしてバハスも加わり、レイルを中心にヴァラファールを捌き始めるのであった。

第48話 歓迎会

アポローネスが仲間になったその日の夜。

「うめえ〜！ おっさんと兄貴の作った飯はやっぱうめえな！」

「どれもさいこー！」

食堂ではリアノとアポローネスの歓迎会が現在進行形で行われていた。フアング達はレイルとバハスが作った料理に舌鼓を打つ。

「……（スツ）」

「キューイ♪」

「わ〜、美味しそ〜♪」

「……（スツ）」

「グルル」

ホロンは出来立ての玉蜀黍の唐揚げが盛り付けられた皿をキューイとクララの前に置き、セグロには玉蜀黍の唐揚げの他にキャベツの素揚げ1玉と味変容のディップソースを置いた。

「しかし、こうして誰かと食事をするなど、久しぶりだ」

「そうね」

感慨深そうに言うアポローネスにリアノも頷く。一人で食事をする事はあつても誰かと食事をするのは本当に久しぶりだった。

「アポロ、桜花亭のマスターから貰ったお酒があるんだけど。どう？」

「禁酒とかしてたっけ？」

「今は平気だ。せっかくだ、頂こう」

「はい、マリーも」

「ありがと、レイ」

かつての元同僚であるレイルとこうしてまた食事をするのもリアノとアポローネスにとっては嬉しい事だった。

「……ハイブリッドなお酒だつて、マスターは言ってたけど……飲みやすいね。これ」

「ああ。酒……というより、水か？」

「どちらかというと、果物系を使った飲み物に近いわね……」

「……でも飲みやすくて美味しいからいいよね」

「違うない」

「それもそうね」

桜花亭のマスターから貰ったお酒の感想を言うレイル、アポローネス、マリアノ。飲みやすいのはいいが、種類が何なのか首を傾げたが、美味しいから特に気にならなかつた。

「ねえアポロ。気になったんだけど、なんでドルファを抜けたの？」

「私も気になるわね。貴方ほどの人間が抜けるなんて、余程の理由だと思っただけ？」

話題はアポローネスが何故ドルファを抜けたのかという話になった。その話にファング達も箸を置いてこちらに集中する。

「お前達はパーティーが中止になった件を知ってるか？」

「パーティーって、マリーからも聞いたんだけど、具体的な説明もなく中止になった立食パーティー？」

「そうだ」

事の経緯は例の立食パーティーが中止になった次の日からだとの事。社内で異質な空気をアポローネスは感じ取つたらしい。

「マリアノ。お前が行方不明扱いになったのもその頃だ」

「私が行方不明扱い？」

「ああ」

「それなら確かにマリーとクララがカダカス氷窟で倒れてた時期と合致するね。それで？」

「社長に呼ばれ、社内の異質な空気の事を話したが、社長も薄々だが気づいていたそうだ」

ドルファの社長である花形に呼ばれたアポローネスが話したところ、花形もその空気に感じていたらしい。

「そこでザワザ平野のフューリーを回収という表向きの任務と同時に私はドルファを抜けたという訳だ」

「なるほどね」

ひとまずアポローネスがドルファを抜けた理由は分かった。

「ふと思っただけけど、ドルファの入社式の時のレイってどんな感じだったの？」

「確かに。レイの事だから目立ってそうね……」

「何言ってるの。僕なんか目立つ訳ないでしょ。普通の入社式だったよ♪」

ティルアとシャルにそんな事を聞かれたレイルは笑いながら、手を横に振りながら答える。

「いや、目立ってたな」

「ええ、目立ってたわね」

しかしアポローネスとマリアノに違うだろと言われてしまう。

「それから訂正しておくが、普通の入社式ではなかったぞ」

「そうなのか？」

「当時はそのまま普通に入社式を終える筈だったんだけど、ある同期社員がレイに模擬戦を挑んできたの」

「俺その話聞きてえ！」

「あたしもあたしも！」

「私も聞きたいですわ」

「私も興味あるねえー」

そして今でも鮮明に憶えてる入社式の事をアポローネスとマリアノは話し出した。

第49話 レイルとの初対面と入社式

遡る事、7年前……。

「ここがドルファ・ホールディングス……」

「うわー、大きいビルですねー、マリアノ様」

マリアノはパートナー妖聖のクララと共にドルファ・ホールディングスの入社式の会場に来ていた。

「人がたくさんいますねー。」

「みんなドルファに入社する人達みたいね。こんなに入社する人がいるなんて思ってたわ……」

見渡すと周りは新入社員でごった返していた。

「入社式は広場で行うと聞いてるけど……えっと、広場の場所は……」

「そこのお嬢さん、何かお困りですか？」

入社式が行われるという広場の場所を探していると、突然マリアノに馴れ馴れしく声を掛けてくる男が現れた。

「何か御用かしら？」

「見ればお困りのご様子！ エリートである自分がお助けしましょう！」

「……」

「なんだお前！ マリアノ様に向かって馴れ馴れしいぞ！ マリアノ様く、こんな奴ほつといて早く行きましようよー」

クララの言う通り、馴れ馴れしい男だった。

現に今も別に聞いたわけじゃないのに、自分語りをしている……正直言って迷惑だ。

「なんとというお美しいお名前！ 是非とも、貴女のお助けになれるかと！」

「いえ、間に合ってるわ（はあ……理想の殿方っていないのかしら？）」

こんな時に自分の理想の男性が颯爽と現れては助けてくれればいいなどマリアノは軽く現実逃避していた。

「…あのく、そこ邪魔なんでどいてくれませんか？」

「あん？」

すると男の後ろから声がした。

声の主は銀髪のショートヘアで152cmで黒を基調としたワンピースを着ており、両腕に赤いリボンを巻いた少女のような子供だった。マリアノから見ても子供は迷惑そうな表情をしている。

「あく、お嬢ちゃんごめんね？ 用件なら後で聞くよ？」

「……………これでも僕は性別はれつきとした男なんですけど？」

「!? (え……………女の子にしか見えない……………)」

目の前の子供が男だという事実には驚くマリアノ。

「それにそちらの女性とパートナー妖聖が困ってるのに、口説くとか何考えてるんですか？ ましてや入社式ですよ？」

「おいおい、場違いなガキがいい気になってんじゃねえよ。年上は敬えって習わなかったのか？」

「は？ 僕は今年で18歳だし？ それに敬う人くらい自分で決めろし」

まさかの自分と同年だったという事実には別の意味で驚くマリアノ。身長のせいで全く分からなかった。人は見かけによらないとは正にこの事だろう……………

「……………(ピョコ)」

すると子供の頭から半円を描く曲がった角を持った、兜みたいに頭部全体を包む仮面を被り、灰色のボロボロのマントを着た真つ黒でちんまりボディの虫のような生物が姿を現した。もしかしてパートナー妖聖なのだろうか？

「…ホロン、またこういう人いたよ。どう思う？」

「……………(ケツ！)」

「常識のない人だね。こんな綺麗な女性と……………か、かわつ……………可愛いパートナー妖聖の女の子が困ってるのが分からないのかだつてさ。わ、わたしがか、可愛いって……………うう……………」

「(クララのこの顔……………私、初めて見たかも……………)」

ホロンと呼ばれた妖聖の言葉をクララが通訳する。しかも顔が赤い。主であるマリアノでさえ見た事がないくらいクララは真つ赤になっっていた。

「そんな虫みたいなのがてめえの妖聖か？　いかにも雑魚みたいな見かけしてんな？」

「……（ゲシッ！）」

「ぐほっ!？」

するとホロンが男の顔面に向かって蹴り飛ばした。その威力は凄まじく男は地面に倒れた。

「て、てめえ！　エリートである俺様に向かって……!？」

「今のは自業自得かと。僕のパートナー妖聖をバカにしたからでしょう？　あ、警備員の人だ。すみませーん……」

「お、憶えてやがれ〜!？」

そう言う男は捨て台詞を吐きながら、その場から去っていった。

「…はあ。やっと思った……」

「あの、ありがとうございます。助かりましたわ」

「ん？　ああ、気にしないでください。怪我とかはないですか？　そ

ちらのパートナー妖聖も」

「いえ、怪我とかはしてませんので大丈夫です……」

「わたしも大丈夫だよ〜」

助けてくれた目の前の彼にお礼を言うマリアノ。主だけでなく妖聖の自分にも気遣ってくれたクララは好印象をもった。

「それじゃあ僕はこれで。失礼します」

「あ、あの……」

「？」

「な、名前……」

そして普通にその場から去ろうとする彼をマリアノは引き止めた。名前を聞きたいだけなのに、何故か緊張して言葉が続かない。

「レイルです。僕の名前」

「マ、マリアノと申します。助けてくれてありがとうございます」

「どういたしまして。道中、気をつけてくださいね？　それじゃ」

「……（パタパタ）」

マリアノにそう言うレイルはホロンに『広場ってこっち方面かな？』と言いながら去っていった。

「……」

「マリアノ様、お顔が真っ赤ですよ」

「クララもでしょ」

「……」

お互いに指摘され何も言えなくなるマリアノとクララであった。

◇

「ここが今日から私が働く場所か……」
「ぐるる」

アポローネスはパートナー妖聖のセグロと共にドルファ・ホールディングスの入社式の会場に来ていた。

「しかし広場というのはどこの事だ？」
「がう？」

入社式は広場で行うらしいのだが、場所が分からずアポローネスは軽く迷子になっていた。

「てめえ！ ふぎけんじゃねえぞ!!」
「むっ」

アポローネスの目に入ったのは、同じ新入社員と思わしき男が、銀髪のショートヘアで152cmで黒を基調としたワンピースを着ており、両腕に赤いリボンを巻いた少女のような子供に絡んでいたのだ。直ぐにアポローネスは間に入った。

「おい貴様、子供相手に何をしている！」
「チツ！」

そう言っ舌打ちをした男は、その場から去っていった。
「怪我はないか？」

「助けてくれてありがとうございます。怪我とかはないです。いやー、こんな見た目だから絡まれやすいのかな？」

「それ以前に、この場にお前のような子供が居るからじゃないのか？」

「あ、これでも僕、性別はれつきとした男で年も17歳なんですよ？
正確には今年で18歳ですね」

その事実を聞いて驚くアポローネス。なんと目の前の少女……ではなく少年は、自分と同じ17歳だと言う。身長が低く見えるのは、修行してるからだと言う。

「自己紹介が遅れました。レイルです」

「アポローネスだ。こいつは私の妖聖のセグロだ」

「ぐるる」

「龍の妖聖って初めて見た。やっぱりカッコいい……」

「……（ピヨコ）」

するとレイルの頭から半円を描く曲がった角を持った、兜みたいに頭部全体を包む仮面を被り、灰色のボロボロのマントを着た真っ黒でちんまりボデイの虫のような生物が姿を現した。

「あ、この子は僕のパートナー妖聖のホロンだよ」

「……（パタパタ）」

「ぐるる」

「……（ペコリ）」

ホロンがセグロに仕草でよろしくと言ってるのがなんとなく伝わった。アポローネスには頭を下げながら挨拶をしているのでこちらも挨拶をする。

「お前もこれから広場に向かうのか？」

「うん。場所の確認をしたとこだから、良ければ一緒に行かない？」

「ああ。こちらとしても助かる。ちょうど場所に困ってしまってた……」

「場所が広場って曖昧な表現だもんね」

そう話すと、レイルはその気持ちは分かると苦笑いしながら答えた。そしてレイルとアポローネスは入社式が行われる広場に向かうのであった。



広場に着くと、そこには大勢の新入社員がいた。中には腕つぶしに自信がありそうな男女の姿もあった。

「あら。貴方はさっきの……」

「あつ、先程はどうも」

「レイルとホロンだ〜♪」

「……（パタパタ）」

すると黒いドレスに身を包んだベージュ色寄りの髪の毛の1人の女性がレイルを見つけるなり声を掛ける。女性の傍らには白くて丸い猫みtainな物体に角と蝙蝠の羽が生えた生物が居た。恐らく彼女のパートナー妖聖なのだろう。

「知り合いか？」

「ううん。さっき僕に絡んできた人が居たでしょ？ その人が彼女を

口説いてたから、僕が止めたの」

「なるほど。それでか」

「そちらは？」

「さっき知り合いになったアポローネス。困った人から助けしてくれたんだ」

「アポローネスだ。以後、よになに」

「マリアノと申します。以後、お見知りおきを」

「クララだよー」

その女性……マリアノとそのパートナー妖聖クララは、自己紹介をしつつ、レイルと知り合った経緯をアポローネスに話した。しかしその絡んできた男にも困ったものだなと3人は思った。

『えー、これよりドルファ・ホールディングス新入社員の入社式を始めたいと思います』

ちょうど入社式開始のアナウンスが鳴ったのを聞いた3人は近くの席に座るのであった。



『以上をもちまして、入社式を終わりたいと思います』

「いやー、無事に終わった終わった〜」

「それにしても総帥が所用で来れないというのが、私は気になるけど

……」

「多忙なのではないか？」

一通りの入社式が終わり、席を立つレイルとマリアノ、アポローネスの3人。総帥の代わりに副社長である花形が挨拶してた事が気になったが。

「確かこの後って希望者だけが立食パーティーに参加だった？　ちなみに僕は参加しない予定」

「奇遇ね。私も参加は遠慮する予定」

「私は立食パーティー自体が苦手だな。参加する予定はない」

この後に行われる自由参加の立食パーティーに参加する気はない3人。他の社員達を見ると半数以上の者がパーティーに参加するみたいだった。

「2人が良ければ、僕らだけで歓迎会やらない？　2人共、騒がしいのはあんまり好きじゃないでしょ？」

「！」

その言葉は的を射ていた。

正直、アポローネスもマリアノも騒がしいのはあまり好きではない。寧ろ、その誘いはありがたかった。

「ええ。そのお誘いなら是非」

「ああ。私もそれで構わない」

「それじゃあ行くか。まずは材料を買いに……」

そして3人が広場を去ろうとした時だった。

「おい！　そのガキ！　待ちやがれ！」

背後から荒げた声が聞こえた。誰かと思えば振り返ると、マリアノをナンパし、アポローネスに止められ、レイルに絡んできた男だった。

「さつきはよくも俺様に恥をかかせてくれたな！」

「はあ……」

「……（まあ、溜息も吐きたくなるな（わ）……）」

溜息を吐くレイル。そんな彼の心境を察したマリアノとアポローネスは同情の視線を送る。

「それで？　僕に何か御用ですか？」

「この場で俺様と勝負をしろ！ 貴様のような何の取り柄もなさそうなガキがドルフアに入社する等、笑止千万だ！」

男は周りの新入社員にも聞こえるように、わざと大声でレイルを侮蔑する。

「貴様……！」

「言っている事と悪い事の区別もできないのかしら」

「おいおいなんでそっちの2人が怒るんだ？ 俺様はそっちのガキに事実を言っただけだよ？」

正直アポローネスとマリアノも男の態度には怒りを覚えていた。しかし男は態度を崩さない。

「えっと勝負だっけ？ いいですよ。受けましょう」

「ほう、随分と利口な返事だな！」

「だって今後の生活……というか邪魔されたら嫌だし……」

勝負の申し出を受ける事にしたレイル。どの道、挑まれた勝負を受けないと今後の生活にも支障がありそうな気がしたからだ。

「それから迷惑料として、パートナー妖聖は見物させとけよ」

「つまりホロンは手を出すな？」

「当たり前だ。このエリートである俺様の顔に蹴りをいれたんだからな！」

横暴な要求をしてくる男にアポローネスとマリアノは、男を睨みつけた。

「そういう訳だから。ホロン、2人と一緒に見学してて？」

「……（コクコク）」

レイルの指示に従ったホロンはアポローネスの肩に乗った。

「……大丈夫かしら？」

「だといいいのだが……それより周りを見る」

「？」

心配するマリアノとアポローネス。

そして質の悪い事に他の新入社員もぞろぞろと集まってきた。レイルを大勢の前で『見せ物』にするという男の魂胆だとアポローネスは理解した。

「……(ハア)」

「あいつ終わったくって言ってます」

ホロンの通訳をするクララの言葉にマリアノとアポローネスは視線を向ける。

「いい感じにギャラリも集まった事だし、おっぱじめるか……」

「……」

なんと男は丸腰のレイル相手に剣を抜いたのだ。これは流石にマリアノとアポローネスも目を見開く。

「ドルファにてめえのようなガキは必要ねえ！ 死ねえええっ!!」

「……」

「何!? き、消えた!?」

男はレイルに向かって走り出した直前、目の前に居た筈のレイルが突如消えたのだ。

「ど、どこだ!?」

「……こつち」

「!? い、いつの間に後ろに……「ふん!」ぐはっ!?」

背後からしたレイルの声に振り向こうとした男だったが、背中に蹴りを浴びせられた男は地面に倒れ伏す。

「あー、終わった終わったく……」

「ぐほっ……き、貴様っ！ 逃げる気か!」

てくてくとマリアノとアポローネスの元に戻ろうとするレイルに男は倒れながらも引き止める。

「……くくくくくくくく。入社して早々、死にたいの?」

「!?」

「(この威圧感……それに先程の攻撃までの動作……レイルは只者ではない!)」

レイルが威圧を放ちながら静かに呟く。その威圧はこの場に居る全員が震えるものだった。一部の者は背筋から寒気を感じた。そしてアポローネスはレイルが只者ではないと感じた。

「お、俺様はエリートだ! こんな奴に負けて……たま、るか……」

「……くくくくく。そんなプライド捨てたら?」

「く、くだらないだと……？ ふ、ふざけんじやねえええっ!!」

男は怒りのまま、再びレイルに襲い掛かる。

「……危ないな。2人に当たったらどうしてくれるのさ？」

「ば、バカな!? 指先で受け止めただと!」

しかし振り下ろされた剣をレイルは指先で受け止めたのだ。男は力を籠めるが、うんともすんとも言わない。

「……」

そしてレイルは指先に軽く力を籠める。すると剣の刀身はパリンツ!!と音が鳴り砕け散った……

「な、な、な……っ!」

「……ぶっ飛んで反省でもしなよ」

「ぐはっ!」

そう呟きながらレイルは武器がなくなり茫然としてる男を再び蹴り飛ばした。

「いやー、2人共お待たせ♪ 余計な時間を取らせちゃってごめんね？」

「……」

何事もなかったようにアポローネスとマリアノに声を掛けるレイル。

「……（パートナー妖聖なしでこの実力……助けてくれた時もそうだったけど、目が離せないわね）」

「……（剣を指先で受け止めるだけでなく、刀身を破壊してしまうとは……面白い!）」

レイルが只者ではないと感じるのと同時に、彼に興味を持ったマリアノとアポローネスなのであった。

第50話 慣れない宿暮らしと次のフューリー

「こんな感じだ（かしら）」

「……………」

「あははっ！ レイル君らしいや！」

レイルとの初対面時の経緯を話し終えるアポローネスとマリアノ。話を聞いてたファングとアリン、ティアラは未だに啞然としており、ハーラーは面白そうに笑っていた。

「なんか……いつも通りのレイだね」

「そうね。平常運転なレイね」

ティルアとシャルは、その頃になってもいつも通りのレイルだった事に安心した。

「兄貴に挑んだそいつって今でもドルファにいんのか？」

「いや。僕らがドルファに入社して、1年が経とうとした時に死んだよ」

そう聞かれたレイルは、ファング達にその元同僚の男の末路を話した。

「最初の時だけだったよね？ あいつの印象が悪かったのって」

「ああ。最初の印象は最悪だったが、行動を見ていく内に、根は悪い奴ではなかったな」

「そういえば、動物には優しい一面もあったわね」

「あつたあつた！」

まあでも惜しい人を亡くしたよと思い出すように話すレイル。

「そんな感じで、入社式で勝負を申し込まれただけ」

「……確かに普通じゃないわね。というか、指先で剣を受け止めるなんて……そんな事できるの？」

「理論上は鍛えれば可能だ。だが、レイルのように素手で真剣を受け止めるのは並み大抵の事がないとできん」

アリンの疑問にアポローネスが答えた。

「覚えても損はないと思うよ？ 空いた手を使って相手の心臓に風穴を空ける事もできるし……」

「なんかサラッと物騒な事を言ってるじゃない!？」
なんでもないように言うレイルにアリンは突っ込むのであった。



その日の夜。

レイルは向日葵荘の食堂で紅茶を飲みながら本を読んでいた。ちなみにフアング達はもう部屋で寝ている。

「レイ?」

「あれ、マリー?」

誰かが入って来る気配がしたので、視線を向けるとマリアノだった。

「まだ起きてたの?」

「…いや寧ろ、それ僕のセリフなんけど。紅茶、飲む?」

「いただきます」

とりあえずレイルはマリアノの分の紅茶を淹れる。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

紅茶を受け取ったマリアノはレイルが座ってるソファに腰を下ろしたのだ。

「なんで僕が座ってるところに?」

「別にいいじゃない。……嫌なの?」

「いや全然」

「そう♪」

レイルがそう答えるとマリアノは上機嫌になりながら紅茶を飲む。

「それにしても宿暮らしというのはどうも慣れないわね。人の気配が多くて落ち着かないわ」

「気にし過ぎじゃない? もしかしてこの時間帯に起きてたのって、そのせい?」

「それもあるわね」

宿暮らしという慣れない生活に愚痴るマリアノ。人の気配に敏感

な彼女にとって、落ち着かない気持ちも解らなくもない。

「そういうレイこそ、こんな時間に起きて何をしてたのかしら?」

「……誤魔化したね。別に大した事じゃないよ?」

「教えなさい」

「マリーのご想像にお任せします」

「教・え・な・さ・い!」

「分かった分かった。マリー、顔が近いって! 君の可愛い顔を間近で見れるのは個人的に嬉しいけども!」

「~~~~~っ!? ば、バカ……」

レイルにさり気なく可愛いと言われ、顔を赤くしながらレイルから視線を逸らすマリアノ。

「それで何をしてたのかだっけ? イメージトレーニングだよ」

「なんの?」

「魔法の」

「どうやって?」

「この本を読みながら」

そう言っただけで自分が読んでた一冊の本をマリアノに手渡す。

「これは……料理雑誌?」

「僕が愛読してるシリーズの1冊だけだね」

なんと料理雑誌だった。

魔法のイメージトレーニングだとレイルが言うから、てつきり魔法を扱う専門書かと思ったマリアノだったが、全く違うジャンルだった事に思わず目が点になってしまう。

「僕は魔法の素質がないから、色々と工夫が必要なの」

「レイには魔法の常識というものはないのかしら?」

「フェンサーの癖に魔法使えないの?なんて、バカにされるよりはマシじゃない?」

「……」

正直マリアノが知る限り、レイルが使用する魔法はどれも常識外れ且つ画期的な魔法なものばかりなので、彼の発想には毎回驚かされるばかりだ。

「さて。マリーには僕の秘密を知られちゃった訳だし、どうしてくれるよるか？」

「は？」

その言葉に思わず間の抜けた声を上げてしまうマリアノ。

「だってマリーに秘密の特訓内容を教えちゃったから、当然マリーも付き合ってくれるよね？」

「今のやり取りで、そんな要素がなかった筈だけど？」

「そんなの知らないなあ〜♪」

軽く反論するマリアノだが、当のレイルはどこ吹く風といった表情だ。

「そういう訳でマリー？ 今夜は寝かさないぞ♪」

「…わ、分かったわよ……（はあ……不謹慎だけど、期待してしまう自分がいるから、なんとも言えないわ……）」

これからレイルに何をされるのかを期待している自分がいる……と思ってしまうマリアノなのであった。

◇

そして翌日。

フューリーの情報を貰おうとロロがいると思われる噴水広場にやってきたレイル達なのだが……

「……」

「マリー、元気ないよ？ 大丈夫？」

「……大丈夫なわけないでしょ。誰のせいだと思ってるのよ」

「ごめん、僕のせいだね」

あんまり反省のないレイル。事情を知らないフアング達は彼女の態度に首を傾げる。

「もしかして、レイの夜更かしに付き合わされたの？」

「……ええ。そんなところ」

「どのくらい？」

「私が寝落ちするまで」

「……まあ、そのご愁傷様」

ティアアとシャルに聞かれて頷くマリアノ。2人も経験した事があるのか、マリアノの肩を軽く叩きながらそう言った。

「いらっしやーい。今日も活きの良い情報を、大好きなお兄ちゃんの為に、仕入れといたよ。特売価格このお値段で、どーお？」

そして案の定、彼女はいつも通り居た。レイル達に今回の情報料金を見せる。

「……えーつと、4980Goldか。ロロちゃん、5080Goldで」

「まいどありー！ 100Goldのお釣りになりまーす」

「……ん。確かに」

お釣りを受け取りながら、レイルは今回使った情報料金をメモする。

「んとねえ、ソルオールって村にフューリーがあるんだけど、そこはザンクってフェンサーが支配してるらしいの」

「……ザンク、か」

「また、あそこに行くんだね。あたし、あいつ嫌だな……」

ロロからの情報にフアングとアリンは複雑そうだった。

「ザンク……あやつが動いているのか」

「面倒な事になったわね……」

アポローネスとマリアノもあまりいい表情ではなかった。

「あれー、ザンクを知ってるのー？ でも、一度売った情報はガセでもない限り、クーリングオフは絶対にしないよっ！」

値引きとかもノーセンキューだからね！とフアング達にくぎを刺すロロ。

「そういう事はしないって。ロロちゃん、そんなケチ臭い客には、今度から情報料金を通常の1.5倍にして対応しなよ。さて、僕らは今からソルオール村に行ってくるよ」

「はーい、いってらっしやーい♪ また来てねー♪」

「なあアリン。なんかロロの奴、兄貴にだけ優しくね？」

「確かに……」

前の世界と同じく、ロロのレイルへの態度に不思議な疑問をもつファンクとアリンであった。

「ファンク、ザンクを知ってるのか？」

「……まーな。ちよつと色々あってな」

大都市ゼルウィンズからソルオール村に向かう途中、アポローネスに聞かれたファンクは前の世界の事は伏せて曖昧な返事をした。

「ザンクはマリアノ、パイガ、そして私と共にドルファ四天王に数えられたフェンサーだ」

「正確にはレイが抜けた後釜……と言った方が正しいかもね」

マリアノの言葉にアポローネスもそうだなと返す。

「だが、ヤツの魂は外道に落ちた修羅そのもの。……無闇に関わらぬ方がよい」

「ちなみにアポロとマリーから見てのザンクの印象ってどうなの？」

「……なんとなく察しはつくけども」

ちよつと気になったレイルはアポローネスとマリアノから見てのザンクについて訊く。

「やつが強いのは認めるが、私は同志などと認めた事はない。手段を選ばぬ残虐非道、邪悪な輩なのが私の印象だ」

「私も同じ意見ね。何か気になる事でもあるの？」

レイルの質問の仕方が気になったマリアノ。こういう時の彼は何か気になる事がある時だ。

「……いや別に。とりあえず直接見て見極める事にするよ」

しかしレイルは彼女の疑問にそう答えるだけだった。

第51話 最短ルートと村の異変

「……ここは、あんまい思い出がねーな」

「大丈夫だつて。大体、一度戦った相手でしょ」

ソルオール村の近くまで着いた途端、ファングがそう呟いた。そんな彼をアリンは励ます。

「面倒な戦いはゴメンだぜ。だから、最短ルートを目指す」

「最短ルート？ ああ、地下牢のルートを使うんだね」

ファングの言う最短ルートという言葉に納得したとばかりにレイルは頷いた。

「ああ。確か村の地下牢にフューリーがある筈だ。ザンクとの戦いを避けて、地下牢に忍び込み、フューリーを盗み出す！」

「賢い選択だ。外道とは関わらない方がいいからな」

アポローネスや他のみんなもファングの作戦に賛成のようだ。

「という事で……おい、アリン！ 牢屋のある場所を探して来い！」

「やっぱりそうなるのね」

なんとなく分かってたとばかりに苦笑いしながらもアリンは体を妖精くらいの小さいサイズまで縮小させた。これは一部の妖聖が使える能力だ。

「それじゃあ行ってくるわ」

そしてアリンはソルオール村に侵入できる入口を探しに飛んでいった。



「どうした、戦え！ 命を懸けて殺しあえ！ 勝った方の命だけは助けてやる！」

「お、お許してください！」

「そんな事はできません！ 兄弟同士で殺し合うなんて！」

ソルオール村の広場にザンクは居た。兄弟同士で殺し合いをさせられていた村人2人は必死に懇願する。

「バカヤローツ！ 兄弟同士だから面白えんだよ！ あーっ、イライラする！ そんなに仲がいいなら、一緒に眠ってろ！」

「がはっ!？」

そう言っつてザンクは村人2人を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた村人2人は地面に蹲りながら気絶した。

「ケツ、つまらねえ奴らだ。何故、オレ様を楽しませねえ！」

「キヤハハハ！ ザンクがキレたキレた。今日もキレキレ！」

パートナー妖聖のデラが面白そうに笑う。

「く……」

その光景を見てたガルドは複雑そうに見ていた。

「ザンク、程々にしてくださいよ」

「あーん？ オレに意見するとは随分、偉くなつたじゃねーか？ え、パイガ？」

眼鏡をかけた男、パイガの言葉に聞いたザンクは軽く睨む。そして肩をすくめるパイガ。

「忘れたんですか、私はあなたのお目付け役なんですよ？」

「それがどうした？ オレ様のやり方に文句あんのか？」

「い、いえ……そういう訳では……。ですが、上がもつと穩便に、と言っているんです」

「……うっせえ！ フューリーを手に入れたんだから、文句はねえだろーが！」

「たぐだいま。見回りから戻って来たでござやるよ！」

すると長槍を持ち、紅い服を着た186cmの男、ロンギと親衛隊の兵士数名が広場にやって来た。

「おう、ロンギ。お前らもご苦労」

「ザンクくんもパイガすわくんもお疲れ。ところで、倒れてるこいつら今日もダメだったん？」

「全然だ」

「おーし、お前らこの村人2人を連れていきなしゃーい」

「はっ！」

ロンギに指示された兵士達は村人を運んで行った。

「隊長、ザンク様」

すると今度は入れ違いに別の兵士がやって来た。

「どうした?」

「先程、反対側の入口から侵入したモンスターを仕留めたのですが、見た事もないモンスターでしたので……ザンク様と隊長のご意見をいただきたいのです」

「見た事ねえ……」

「モンスターだあ?」

兵士の報告にザンクとロンギは顔を見合わせる。

「オーライ、オーライ! あっ、ザンク様に隊長。それにパイガ様。おい、お前。建物にぶつけるなよ!」

「やかましい! なんなの分かってるわ!」

丁度いいタイミングで少しボロボロの兵士が口喧嘩をしながら何かを運んできた。

「こちらがそのモンスターです」

広場に運ばれたのは、骨が剥き出し状態の四足歩行型のモンスターだった。

「なんだコイツは……狼型? にしては、やけに少しでけえな……それともドラゴン系の類か?」

「いんや、それにしても翼も生えてなければ、ドラゴンの鱗みたいのものないねえ……」

それなりにモンスターの生態に詳しいザンクとロンギだが、部下達が仕留めたこのモンスターは見た事もなかった。

「一応、村人にも訊いたのですが、誰もこのモンスターは見た事もないみたいです」

「つて事は、この周辺に生息してるモンスターじゃねえって事か……」
「そうなるね。騒ぎになってもおかしくない見た目をしてるしね」

ソルオール村に生息するモンスターは、ゴースト、ポイビー、そして稀にであるが、キダナル地域からグナーダが移動してくるくらいだ。

「それから、他の者も言っていたのですが、自分達がこのモンスターを発見した時には、抵抗する間もなく倒れたのです」

「なんだと?」

「はい。まるで安息の地をやっと見つけたかのように、安心しながら……と言いますか……?」

「……」

部下の話によると、この未知のモンスターは、部下達を一瞬見た後に村の方を見て、その直後に安心したかのように倒れたと言う。

「おい、入口の防御を固めろ。特に反対側は念入りにな。それと周辺のモンスターには特に警戒しろ」

「お前らは村人達に足りねえ物資を聞いて回れ。村長には村の連中が不安がらないように今の状況を一言一句、丁寧に説明しろ。物資は見張りと交互に買い出しに行け」

「はっ!」

直感でこれは只事ではないと判断したザンクとロンギは部下達に指示を出す。

「ロンギ、どうやら今日は祭りの日になりそうだな」

「奇遇だね。ザンクくん。オレ様もそう思ってたところだよ……」

ニヤリと笑い合うザンクとロンギ。

「パイガ、お前はさっさと帰れ。巻き込まれて死にたくなかったらな」

「え? どういう事だ?」

「パイガすわくんの身の保証まではできないって事だよ。シャチヨさんにも説明しておいて?」

「む……わ、分かった……」

「お前ら、パイガすわくんを会社まで護衛してやれ。無事に送り届けるまで気を抜くなよ?」

「はっ!」

とりあえず命が惜しいパイガは数人の兵士達と一緒に広場から去っていった。

「お前ら。これからオレとロンギで地下牢に保管してあるフューリー

の場所に行ってくる。全員に今日は命日になるかもしれない任務だと伝える！」

「新しい指示を出すまで、今出した指示に全力を尽くせ。いいな！」

「はっ！ 行ってらっしゃいませ！」

これからの行動を部下達に指示を出したザンクとロンギは、地下牢に向かうのであった。

◇

「ただいまーつと」

「アリンちゃん、おかえり。どうだった？」

しばらくしてアリンが帰ってきた。出迎えるレイル達。

「大体の場所は分かったわ」

「アリン、見張りとかはいたのか？」

「ざっと見たところ、見張り自体は結構いるみたいだけど、気をつけて歩けば、なんとかなると思う」

「簡単じゃねえな……」

つまり慎重に進みながら地下牢を目指すという形になる。

「なるべく戦いは避けましょう」

「了解。万が一、見つかりそうになったら無言で相手の腹に拳を叩き込んで気絶させればいいんだね？」

「サラツと真顔で怖い事を言わないでくれる？」

「冗談だよ」

「お義兄様の場合、普通に実行しそうですわね……」

冗談で言ってるのか本気で言ってるのか判らない表情のレイルにアリンとティアラは突っ込むのであった。

第52話 村の異変の真実

「この階段を下りた先よ！」

アリンが見つけた地下牢へ向かうレイル達。

「アリン、なんか臭うな？」

階段を下りて進むと、ファングが呟いた。

「え、あたし、ちゃんとお風呂入ってるわよ！ ティアラじゃないの？」

「私も入ってます！」

失礼などばかりにティアラが答える。

「ちげーよ、なんか、嫌な臭いがする」

「うわ。ほんとだ……」

ファングの言う通り、どこからか嫌な臭いがした。その臭いの元を辿ると、近くに少し大きい窯のような物があった。

「この穴から臭いが……うっ！（死体が……墓穴……いや、処理場つてところかよ？）」

穴をファングは覗くと、穴からは数々の死体の山がこちらを覗いていた。

「どうしたの、ファング？」

「来るな！ 見るんじやねえ！」

こちらに来るアリンを止めるが、時すでに遅しだった。

「これは……ザンクの仕業。フェンサーとして、許しがたい非道ですわ！」

「女だけでなく子供まで手をかけているとは……度し難い」

「人間としてあつてはならない行為ね」

ティアラ、アポローネス、マリアノもこれには怒りを隠せなかった。

「……気持ちは分かるけど、そう決めるのはまだ早計だよ」

「右に同じく。みんな少し落ち着きなつて」

『!?』

だが異を唱える者が居た。それはレイルとハーラーだった。他の者はこの光景を見て何を言ってるんだとばかりに目を見開く。

「ハーラーちゃん、例のアレ。まだ持っていたりする?」

「レイル君がそう言うと思つて、かなり前から新しいのを用意してあるよ」

「流石ハーラーちゃん。仕事が早いね」

そしてレイルは死体の山に近づき、手を前に出す。

「…『ソナースキャン』」

レイルが魔法名を呟いた瞬間、彼の右手から半透明の球体が死体の山に向かって放たれた。球体はドーム状に変化し音波のような物質がフアング達にも視認できた。

「なんだアレ。もしかして、アレも兄貴の魔法なのか?」

「そうだよ。学生時代の頃にレイル君が独自に編み出した魔法でね。初期段階前の病気の発見や死因の完全解析する事ができるんだ」

「前者はまだ理解できるけど、後者は何の意味があるの?」

「後者が特に大事なんだ。今の状況がかなり分かりやすいね」

「どういう事ですか?」

「……この村人達の死体は殺せざるを得ない理由があつて、殺されたのかもしれないって事さ」

それを聞いて信じられないとばかりに、ハーラーの説明に衝撃を受けるフアング達。

「……」

「レイル君、どうだった?」

「正直に言つて……えぐいね」

すると今度はハーラーが用意したと思われる機械をその場に置き、起動させた。レイルの表情は複雑そうな表情だった。

「みんなに先に言つておくよ。今回はある意味、ザンクが正しい」

「ど、どういう事だよ!?!」

「この映像を見れば嫌でも分かるよ。この魔法の再生は限りなくリアルタイムに近いから、その辺は理解してね」

レイルは念の為の注意事項をフアング達に言う。

「ハーラーちゃん」

「オツケー。再生つと……」

そして映像が再生された。

『だ、だれか……た、たす、けて……』

『か、体の奥が……か、痒いよう……』

最初にフアング達の目に映ったのは、何かに苦しむソルオール村の村人達だった。

『う”っ……い！ お、おえええええっ!?!』

すると1人の村人の口から肉食虫の亜種モンスター、グナーダが飛び出してきたのだ。その光景を見た他の村人達は悲鳴を上げる。

『クソツ!! 遅かったか!』

『なんであのヤロウの言葉に疑問を持たなかったんだ!! お前ら、とにかく他の村人達を非難させろ!』

『はっ!』

そして声を荒げながらザンクと親衛隊長のロンギが部下達に他の村人達の避難を指示させた。

『グ、グゲ……ゲ……い!』

『ちい！ クソがつ!』

襲ってきたグナーダをザンクは剣で斬り、ロンギは長槍で突く。しかしグナーダは攻撃を見切って、2人の攻撃を避けたのだ。

『オレ達の攻撃を避けただど!?!』

『なーんか、ムカつくねー……』

『痛い、か、体がいた……ああああああ!?!』

『今度はなんだ!?!』

『オーイ……冗談じゃねえぞ……』

子供の悲鳴を聞いたザンクとロンギは思わず手を止めてしまう。何故なら、蜂型モンスターのポイビーが子供の身体のあらゆる場所から突き破って飛び出してきたのだ。しかも通常のポイビーよりも一回り大きかった。

『グ、グゲ……ゲ……』

『ビ、ビビッ……ビビビッ……』

そしてポイビーはザンクとロンギが相手にしてたグナーダを見つけると、小さな手を使ってグナーダを持ち上げたのだ。

『グ、グゲゲ……!』

『ビ、ビビビツ……!』

『ちい!』

次の瞬間、グナーダを持ち上げたポイビーが凄まじい速さで突撃してきた。ザンクとロンギは攻撃を寸前で避ける。

『さしずめ空中戦もできるようになりましたあ……ってところか?』

『だろうね、肉食虫のグナーダに毒蜂の中でも無類の速さを誇るポイビーか……やってくれるね?』

肉食虫に毒蜂……ある意味、恐ろしい組み合わせだ。

『ロンギ。グナーダはともかく……ポイビーが人間の中から出てくる話、聞いた事あるか?』

『ないね、オレ様も初めて見たよ。だが見直さねえといけねえのはポイビーもグナーダと似た生態を持つ可能性が高まったって事だね……蜂の癖に生意気な』

『はっ! 違いねえ!』

あり得ない現象を目撃したせいで、逆に笑いたくなる気分になるザンクとロンギ。

『ザンク様! 隊長! 大変です!』

すると全身が切り傷の1人の部下が駆け寄ってきた。

『なんだ!』

『こつちも立て込んでるから、手短にね』

『村人達を広場に非難させた直後、数名の村人達の身体からグナーダと何故かポイビーが出現しました!』

『なんだ?!』

『しかもグナーダとポイビーが連携を組んでいます。現在は自分達でなんとか応戦していますが……』

その報告を聞いたザンクとロンギは自分達が交戦してるグナーダとポイビーに目を向ける。

『グ、ゲゲ……』

『ビ、ビビビツ……』

まるで何かを企んでいるかのような鳴き声だった。

『ザンク様！ 隊長！ 倒した筈のグナーダとポイビーが何故か再生していますー！』

『再生だと!? どういう事だ!』

『そのままです！ 部位破壊をして倒しても完全再生して襲ってくるんですー！』

そしてザンクとロンギはある結論に辿り着く。

『まさかあの野郎……!』

『やってくれんじゃねえか……!』

『グゲゲ……』

『ビビビツ……』

それは今、自分達が交戦してる最中のグナーダとポイビーだ。部下達が言つてた完全再生能力……つまり親玉であるこいつが元凶だ。

『おい、そっちの戦力の状況はどうなってる?』

『今はまだなんとかあります。』

『村人に怪我人とかはいないわくけ?』

『怪我人の方はガルドの方に任せています！ 恥ずかしながら自分は

回復魔法は使えないので……』

『お前ら。グナーダの特性は憶えてるな？ 最悪の場合になっても殺

すんじゃねえぞ』

『時間が惜しいから、全員に伝えて迅速に行動しろ！ いいな!』

『はっ!』

部下が去っていった後、ザンクとロンギは得物を構えた。

『上等だ……』

『オレ様達の手で……』

『ぶっ殺してやるよ!』

そして映像はそこで終了した。

「これを見てもザンクが悪いつて、言い切れる?」

「……」

映像を見たファングは何も言えなかった。言葉に表せないといった表情だ。

「まあでもファング達の言い分も解るよ? だけどここにある死体の

中には妊婦もいたわけだし」

「!? そ、それじゃあ産まれてくる筈だった子供は……?」

「グナーダに喰い殺されたんだろうね。栄養源として」

「ひ、酷い……」

非情な現実を聞かされて言葉を失うアリン。

「しかし解せぬな。ならば何故ザンク達は、この村を未だに支配などしているのだ?」

「僕の推測なんだけど……村を支配っていうのは表向きで、本当は誰も助けてくれないから、ケジメとして自分達が村を守ってあげてるんじゃないかなって……」

「レイ、どういう事?」

「早い話。誰も助けてくれないっていうのは、自分が周りから悪人認定されてるっていう意味」

アポローネスとマリアノの疑問に答えるレイル。

「……ザンク達みたいな性格の人間のお陰で救われる命もあるって事」

「殺される事が……ですか?」

「それに近いって事。それとティアアラ。勘違いしてるっぽいから、訂正しておくけど……僕が言ったのはモンスターの被害や一部の人間って意味で、ティアアラが考えてるのは別だからね?」

ティアアラが何を言おうとしたのか察したレイルは、そういう意味とは別だと強く言った。

「とにかく今は地下牢のフューリーを回収してから考えよ?」

「ああ。そうだな……（もしかして兄貴……）」

そういう捉え方もあるという事を自分達にも憶えてほしいという意味で、ああ言ったのだらうか?とファングはレイルの背中を見て思うのであった。

第53話 最小限で行こう

「この奥に地下牢があるわ。でも見張りがいるけど……どうする？」

更に奥に進むと、アリンの言う通り、数名の見張りの兵士が居た。

「最小限で済むなら、面倒でもやるしかねーだろ」

「！ おい貴様ら！ ここで何をしている！ 皆の者、侵入者だ！」

1人の兵士がファング達を発見する。そして各々、自身のパートナー妖聖とフェアリンクし、武器を構える。

「「うわあっ！」」

「な、なんだ!？」

「おい！ 大丈夫か!? 一体、何が……」

しかし兵士達が武器を構えた時、他の兵士が1人、また1人と地面に倒れていた。突然の事に驚く兵士達。

「アポロ、こいつら奇襲には慣れてないわけ？」

「恐らく慣れてないだろう。こういった気配を消しながらの奇襲は特にな……」

「普通は想定しないと思うけど……」

兵士達を無力化した者の正体はレイル、アポローネス、マリアノの3人だった。

「あ、それとき……」

忘れてたとばかりに、レイルが兵士達に向かってこう言った。

「君達、前ばかりじゃなくて、足元や背後にも注意した方がいいよ。」

「「貴様……何を言って……っ!？」」

こいつ何を言っただと兵士達が思った矢先、背後から強烈な殺気が襲ってきた。

振り向くと、鞘入りの長刀を抜刀術のように構え持つホロンの姿が。

「…… (チャキン) 」

「「ぐはっ……」」

そしてホロンが長刀を鞘に納刀する頃には兵士達はその場に倒れ込んだ。

「俺、ホロンが戦ってるところ、未だに慣れねえ……」

「あたしも……」

「あの、お義兄様のパートナー妖聖って、あんなに強いんですの……？」

他の兵士の相手を終えたフアングとアリンが言う。これには当然、ティアアラも驚いていた。

未だに慣れないが、妖聖であるホロンが単身で人間と戦ってるという事にだ。しかも使ってる武器が愛用の古びたボロい釘ではなく、前世界のカヴァアレ砂漠でレイルが使用してた鞘入りの長刀でだ。

「ミュイミュイ！」

「…ん。分かってるよ。みんな、とりあえず先に進もつか。ミュイが僕らが来た道から人の気配がするって言ってるみたい」

「うわっ……マジかよ。挟み撃ちとかになったりしねえよな……」

レイルの言葉にフアングはそうになったら面倒だなという感じで言った。

「まあ、その時はその時に対応する……だろ？ レイル君？」

「そういう事」

「ちなみにもしもだけどき、そういう状況になったらどうする気だったの？」

アリンの疑問にレイルは一度、うーんと考えながら……

「どうしてあげよっか♪」

「うう……聞かなきゃよかったかも……」

意味深な笑顔で答えるレイルにアリンは聞かなきゃよかったと思うのであった。

第54話 骸骨騎士、再び

「あつた！ ファング、あれよ！」

更に奥に進むと目的のフューリーを発見した。

「待ちな……テメーら、何者だ？」

「おーっと、侵入者を複数はつくけくん！ ……何者だ？」

しかしそこにザンクとロンギが現れたのだ。

「嘘、なんでここにザンク達が……」

「やれやれ……見つかっちゃまったか……」

「途中まではよかったんだけどね……」

「確かに」

レイルの言葉に頷くファングとアリン。

「何者だ、って聞いてんだ！ 耳がついてねーのかよ？」

「正直に答えると、ポイントが高いし、アレよろ？」

「ただの迷子です」

「いや真顔で何言ってるんだお前？」

ザンクとロンギの質問に真顔で答えるレイル。そして同時に突っ込むザンクとロンギ。

「…おかしい。こう言っておけば、大抵は見逃してくれたんだけど……」

「レイルよ、それは流石に無理があるだろう……」

「そうね。無理があるわよ、レイ……」

これにはアポローネスとマリアノもそれは無理だろと言う。

「ん？ 誰かと思ったら、アポローネスとマリアノじゃねえか。こんなヤツらとつるんで、何してやがる？」

「おんやまあゝ。ほんとだ。なんかのドツキリかい？」

「……私はもうドルファアのフェンサーではない。我が魂はレイルとファングに預けた」

「……元より私はレイに預けてるけど」

ここでアポローネスとマリアノの存在に気づくザンクとロンギ。そして自分達はドルファアのフェンサーではないと答えるアポローネ

スとマリアノ。

「よく分かんねーが、オレは真面目腐ったお前が昔から嫌いだったんだ。ちようどいい、一緒に片づけてやる!」

「オレ様もなーんかアンタらが気に入らなかつたんだよね。……やっちゃっていい? いいよね! 脳内裁判で可決しました!」

そしてお互いに武器を構え、臨戦態勢に入ろうとした、その時だった。

「おいおい、なんか楽しそうじゃないの。俺様も混ぜてくれよ……」

会話に入り込むかのように不気味な声が響き渡った。そしてその声の主は地面から現れた。

「……………ふいー、あん? ここは……………魔力の流れ的にソルオールか? だがアイツの気配がここに残ってるから間違いねえな……」

「……………(まさか、このタイミングでくるか)」

「あ、あいつは……………!」

「前の世界でも現れた骸骨!」

「し、しかも……………喋ってますわ!」

その正体は前の世界のザワザ平野で現れた骸骨騎士だった。

「ちよつとそこの兄ちゃん2人。ちよつと聞きてえ事があるんだが、ここに骨が剥き出しの四足歩行型のモンスターを知らねえかい?」

「っ! 骨が剥き出しの……………」

「四足歩行型のモンスターだと……………!」

骸骨騎士は近くにいたザンクとロンギに訊ねた。心当たりがあるのか、ピクリと顔色を変えるザンクとロンギ。

「ほう。その目は……………居場所も知ってるな」

「その前に聞かせろ。テメー、何者だ?」

「ワリいな。俺様、二度手間な説明は、あんま好きじゃねえんだわ……………」

「…ちっ! お探しのヤツなら、村の広場の外でオレとロンギの部下が嚴重に警備してる」

「そうか! 広場の外だな! ならパツと行こうじゃねえの!」

そう言うのと骸骨騎士はこの場に居る全員を魔法陣で囲み、刀身が折

れ曲がった古びた剣を地面に刺す。そして魔法陣は光を放った。



「ここは……」

「ソルオール村の広場の外……?」

「どういう事ですの?」

「恐らくヤツの転移魔法だ。それもかなりの高度の」

周りを見渡すと、その場所はソルオール村の広場の外だった。そしてフアング達の疑問に答えたのは、ハーラーだった。

「まさか古の時代にあったという、あの転移魔法?」

「ああ、そのまさかさ。今じゃ古い文献にしか載ってないけどね……」

「あの魔物はそれを使えるというのか?」

「……まあね」

ハーラーに続いてマリアノとアポローネスの疑問に答えたのがレイル。しかし2人は骸骨騎士に対して警戒的な表情だ。

「ああ。確かに俺様が捜してたヤツで間違いねえ……」

「な、何者だ貴様!」

「お前ら下がれ! 全員だ!」

「ついでにその場から離れてろ!」

「はっ!」

そして骸骨騎士は、倒れてる例のモンスターの元に近寄る。ザンクとロンギの部下が武器を構えたが、ザンクとロンギの一声でその場から離れる。

「つたく、お前は昔から無茶しやがる……」

「……」

「……そうか。今までご苦労だった。」

例のモンスターに話しかける骸骨騎士。傍から見たら独り言にしか見えない。

「……さーて。兄ちゃんら、待たせたな。俺様と獲物を賭けたゲームをしようぜ?」

「あ？ 獲物を賭けた……」

「ゲームだと……？」

話を終えた骸骨騎士は、ザンクとロンギに向かってある提案した。「そうだ。あそこに居る兄ちゃんらとの戦いの切符を賭けてだ。参加条件のルールは守ってもらうがな……」

「テメーもフューリーが狙いか？」

「フューリーには興味ねえよ。兄ちゃんら2人が面白そうだと思うんだよ」

「酔狂なヤツだね〜」

「はっはっはっ！ よく言われる！」

ザンクとロンギの言葉にケタケタと笑う骸骨騎士。そして参加するかの返事を視線で求める。

「おい！ ガルド！」

「な、なんや!？」

するとザンクは大声でガルドの名前を呼ぶ。突然、自分が呼ばれた事に驚くガルド。

「上司命令だ！ お前はクビだ！ そのフューリーを持ってどっか行け！」

「ザンクはん、あんさん……」

「うっせえ！ さっさと行きやがれ！」

意味が解ったのか、ガルドはソルオール村のフューリーを持ってファング達の元に駆け寄った。

「ダンナ、急に差し出がましいんやけど……」

「ああ、分かってる！ 一緒に来いよ！ お前は俺達の仲間だ！ いいよな？ 兄貴」

「僕はファングの意志を尊重するよ。まず断る理由なんてないし」

「おおきに！」

ガルドの申し出を受け入れるファングとレイル。前の世界でも彼は仲間だったのだ。断る理由なんかないだろう。

「それじゃ、さっさと戻るとしますか」

「えっ、ちよっと！ 村の人達はどうするの!？」

「あのチートグルメ骸骨は妙に律儀だから、村の人達の安全は大丈夫だと思っよ」

「レイル君の言う通り、あいつは変なところで律儀だから心配ないよ」
「おいちよつと待て」

去り際にレイルとハーラーが呟くと、骸骨騎士が待ったを掛ける。

「……よく見りや、9年前の時の小僧と小娘か」

「……」

「まあいい。今日の俺様は紳士的だ。無事に戻れるように、ヒントをやるよ。骸骨の戦士達に注意しな」

そう言うのと骸骨騎士は、さっさとどっか行けとばかりにレイル達を追い返す。

「なんなんだアイツ……なんか態度がムカつくな……」

「よく分からないけど、ひとまず戻りましょ」

「そうだな」

そして一同はソルオール村を後にするのであった。

「さーて。俺様達も始めるとするか……」

「……その前に参加条件って言ったな。それを教えろ」

「ザンクくんの言う通り、懇切丁寧に教えてもらいたいもんだね」

レイル達が去った後、ザンクとロンギは骸骨騎士と向かい合っていた。
た。

「もちろんだ。参加条件は兄ちゃんら2人……俺様と1対2で戦うっていうルールだ。こういう風にな……」

「なんだこりやあ……!?!」

「結界だ?!」

骸骨騎士が指を鳴らすと、2つのドーム状の結界が出現したではないか。1つはソルオール村全体、もう1つはザンクとロンギ、骸骨騎士が居る村の外側の一定の周囲。

「この結界は特別でな。高度な攻撃魔法でもちよつとやそつとじゃ壊れねえ。フューリーフォームによる強化攻撃でもだ」

「随分と粋な計らいだな、オイ」

「だろう？ それと兄ちゃんらの部下達全員にも結界を張っておいた

ぜ。安心して観れるようにな。その方が思いきりやれるだろ？」

「質問く。オレ達がやり合ってる間にモンスターとかは来ないわくけ？」

「その辺は安心しな。この勝負のケリがつくまではモンスターは、村にも絶対に来ねえ。仮に来たとしても、俺様の配下が事前にぶつ殺してるからよ」

「……」

隙あらば即攻撃しようと思ったザンクとロンギだが、目の前の骸骨騎士からはそれすら困難な事が理解できた。

……この骸骨騎士は強い。そう感じる2人。

「それとこの結界には仕掛けが俺様なりに工夫してあつてな？ 兄ちゃんなら気に入ると思うぜ？ 毒ガスとか、そういうのじゃねえからそこは安心しな」

「さしずめデスマッチってところか？ いいねいいね、嫌いじゃねえ……！」

「ヒーハー！ いいね、いいね！ さーき、サプライズ的なお祭りの始まりなのじゃー！」

「さあゲームを始めようか！ 遠慮せず、俺様を殺す気で掛かってきな！」

「上等だ！」

そして結界内で狂人達による戦いが今、始まろうとしていた。

第55話 定食屋にて

ソルオール村のフューリーも回収し、ガルドも仲間にした一行は大都市ゼルウインズにある定食屋に来ていた。

「あらあら、ガルドちゃん、そんなに急いで食べるとむせちゃうわよ？
ほらほら、お口のまわりが汚れてるわよ。はい、ふきふき」

「ん、おーきに」

「マリサ、ほんつとに甲斐甲斐しいわねー」

「母親と手間のかかる子供のようすわ」

ガルドの世話をするマリサを見て、アリンとティアラが口にした。

「お前、ガルドが小せえ頃から一緒に居るのか？」

「それでもあらへんで」

フアングの疑問にガルドはそうでもないと答えた。

「ワイが継母まははの仕打ちに耐えかねて家を出たのが8つの時で、その2年後やったから、ワイが10の頃に会ったんや」

「今、何気に重い過去をちらつかせたわね」

「……………(重いな(わね))」

アリンの呟きに、レイルとアポローネス、マリアノも何も言わないが同じ事を思っていた。

「10歳なら、まだ十分小さいですわよ」

「ほうか？ でも10歳なら1人で生きていけるで。もう十分大人や」

それを聞いたティアラは随分とシビアな環境で生きてきたんだなと思っただ。

「この子は出会った頃なんて、まるで野良犬みたいだったのよ。子供とは思えない険しい顔をしていたの」

「へー、意外。今はこんなにへらへらしてるのに」

マリサの言葉を聞いたアリンが意外そうに言う。他のみんなも頷いていた。

「ちなみに2人の出会いは、どんな感じだったの？」

「ワイが腹空かせとったら、何でも願いが叶うっちゅーフューリーの

噂を聞いたんや」

「なるほど。それで飯を出させようとしたんだな」

「せやせや！ 流石ダンナは、ワイの事よう分かってはるわ」

「そういえば、フアングも第一声が飯出せだったわね……」

「二……（違和感ないな（わね））」

フアングの言葉を聞いて、アリンは自分の時もそうだったなど思い出した。レイルとアポローネス、マリアノも試しに想像してみたが……正直、違和感がなかった。

「そんなこんなで、よっしやフューリーが抜けたー！ 思ったら、マリサが出てきたんや」

「ご飯出せて言われた時は、驚いちゃったわ」

「あー、分かるわその気持ち」

苦笑いしながら答えるマリサにその気持ちは分かると答えるアリン。

「飯の代わりに出てきたのが、口うるさいマリサやってん、ワイも驚いたわ」

「口うるさかったのか？ 甘やかしてるみてえじゃねーか」

「昔はめっちゃ口うるさかったんや、これが」

ガルドはそう言うが、どう考えても甘やかされてるようにしか思えない。

「あの頃のガルドちゃんってば、とーっても不健康な生活を送っていたの。パートナーになったからには、まず生活改善をさせなきゃって燃えちやったのよ」

「始めはウザかったんやけど、あんまり本気でワイの事を心配するもんやから、なんや情が湧いてまってなあ」

「だんだん心を開いてくれたのよね、ガルドちゃん」

そして今のような感じになったという訳みいだ。いい話である。「……にしても10歳かあ。村の開拓をみんなでやったあの頃が懐かしいや」

「そーいやあつたな。そんな事……」

「え、何それ？」

レイルとフアングの呟きにアリンが気になったのか聞き返す。

「確かそれって、レイが色々勉強になったって言ってた頃だよね？」

「そうね。それなりに楽しんでたくらいしか聞いてないけど……」

するとティルアとシャルがそう言った。パートナー妖聖である彼女達もレイルがその頃は色々勉強してたとしか聞いてないらしい。

「そういえばフアングとレイルって、どんな感じで知り合ったの？前々から気になってただけど……」

「私もですわ」

「私も興味あるねー」

「ワイもや」

「確かに興味深いな」

「私も」

これには他のみんなも気になっていたらしい。何せ、フアングがレイルの言う事を素直に聞くくらいなのだから。

「なあ、兄貴。あの話してもいいのか？」

「んー？ 僕は別に構わないよ？ 隠す程でもないと思うけどね」

「ミュージー♪」

一応、レイルに話してもいいのかとフアングは訊くが、当の本人は別に隠すほどでもないから平気といった感じで、自分の膝元でくつろいでるミュイを撫でながら質問に答えた。

「俺がまだ4歳の時に、兄貴が村にふらりとやって来たんだよ。そんな時が最初だった」

「フアングさんが4歳なら……当時のお義兄様は……」

「8歳ね」

「は、8歳っ!？」

姉であるティルアの一言にティアラは驚きの声を上げる。他のみんなも驚いていた。

「それで兄貴が村に滞在する事になったんだ。俺みたいな年頃のガキや赤ん坊の面倒を見てくれたんだよ」

「へー。ねえ、その時のレイルの身長ってどうだったの?」

「今と少ししか変わんねえよ。あー……でも、俺が6歳の時は今と同

じ身長だったぞ?」

「……あんた、よくそれでレイルが年上だって分かったわね」

「雰囲気だよ、雰囲気!」

アリンの疑問に雰囲気や勘でレイルが自分より年上だと解ったというフアング。なんとも彼らしい。

「んで、俺が6歳の時に、村の柵が壊れたと同時にモンスターが襲ってきた日があつてな。大騒ぎになったんだよ」

「それで村の人達が混乱してた時に、1人の子供が石を投げて、モンスターの気を逸らしてくれたんだよ」

「ちなみにそのバカな行動をしたガキが俺な」

あん時の俺を殴りてえ……と呟きながら、肩を落とすフアング。

「それでフアングが上手くモンスターを比較的 안전한場所までおびき寄せてくれた後に、僕が仕留めたつたつて訳」

「へー、そんな事があつたんだ…… 안전한場所であつたわね、フアング」

「おい、アリン。兄貴は比較的 안전한場所って言うてつけど、村の外れにある崖だからな?」

「全然危ない場所じゃないの!」

話を訂正するフアングにアリンが突っ込む。

「そのモンスターを倒した直後にちよつとね。威力の加減をミスしちゃって、足場が崩れちゃつてさ……流石に焦つたよ。ほんと」

「ええつ!? け、怪我とかしなかつたんですの?」

「僕はちよつとだけ怪我しちゃつたけど、フアングは無傷で済んだから、大丈夫だったよ」

のほほんとした表情でティアラの質問に答えるレイル。

「フアング。気になる事があるのだけれど」

「なんだよ」

「実際のところ、レイはどんな怪我をしたの?」

するとマリアノが先程の話で気になった事をフアングに訊く。それを聞かれたフアングはやっぱりそうなるかと肩を落としながら

……

「……俺が無傷だったっていうのは本当だが、兄貴は両腕を骨折しちまったんだよ」

「は?」

「だから、両腕骨折だよ」

フアングの口から衝撃の事実が放たれた。マリアノだけでなく、全員が目が点になった。10歳の子供が6歳の子供を助けて両腕骨折である。ちよつとではない。大怪我じゃないか。

「まあ……そこからちよつと独自の治療をして両腕を治したって感じかな」

「しかも兄貴、治療してる間、普通に足だけで生活してたよな……」

「だって落ち着かないし、当時は体が鈍ったら嫌だったんだもん……」

ちなみにレイルが両腕に赤いリボンを巻いているのは、両腕骨折をした時に活動してた際の感覚を今でも忘れないようにしてる為だけの事。

「お陰で足で包丁を持って、料理もできるようになったんだよ。今は普通に両腕使えるから、やらないけど」

「それはそれでなんか凄い!」

サラツと凄い事を言うレイルに突っ込むアリンなのであった。

第56話 休息と次のフューリー

定食屋から帰ってきた一同は、向日葵荘で休息をとっていた。

「あー、いい風呂だった。旅の疲れが吹き飛んだぜ。体中の皴しわが伸びまくりで気持ちがいいいな」

「何をおっさんくさい事を言ってるのよ。髪ぐらい乾かしなさい、風邪ひいても知らないからね!」

「そういうお前も、羽がシワシワでふやけてるぞ?」

「う、それぐらい見逃しなさいよ」

全くデリカシーがないわねとファングに言うアリン。

「ほら、2人共、さつさと支度しなさい。ロロさんが情報を仕入れたから、来てつて、さつき電話がありましたわよ」

「えー、お風呂上がりぐらい、ゆっくりさせてよー」

タイミングがいいのか悪いのか、ティアラの言葉に対して愚痴るアリン。

「ハーラーさんも、下着姿で出歩かないでくださいまし」

「殿方もいるのだから、着替えなさいよ……」

「んー、分かったー」

ティアラとマリアノに注意されるハーラー。当人は何かおかしいか?という表情をしながら返事をしているが。

「おい、ハーラー、そんな格好で出歩くな。というか、なんで下だけ履いてないんだ、お前は」

「な……破廉恥な」

またかとバハスは呆れ、アポローネスは顔を赤くしていた。

「うっひょー、姐ねえさん、ええ身体してまんなー!」

「はしたない! おやめなさい!!」

「ぐはっ……な、なんで、ワイだけが……でもええ右やで……ぐふ」

そしてガルドの反応にティアラが彼の顔を右手で殴った。謎の言葉を残しながらガルドはその場に倒れて気絶した。

「……ふう、とりあえず鈍つてなくて良かった……つて、マリー? 何してんの? 前が見えないんだけど……」

「レイは見なくていいの」

今度はレイルが入ってくるなり、マリアノに視界を塞がれた。しかも秒速で。

「どうしたの？ あ、なるほど。そういう事……」

「確かにこれは私達でも反応できないわね。レイ、ハーラーちゃんがまた着替えてなかったわよ」

「また？ だからマリーに視界を塞がれたのか。納得……」

遅れて彼の後から来たティルアとシャルが、マリアノの行動を見て察したのか、ナイスとサムズアップした。そして何故レイルの視界を塞いだのかを彼に話すと、レイルも納得したのであった。



そしてロロが居る噴水広場にやってきたレイル達。

「やつほー、お兄ちゃん、いらっしやーい！ 今日の情報はこのお値段だよー！」

そう言つて、今回の情報料金を見せるロロ。

「……えっと、7980Gold^{ゴルド}か。えっと、端数分のお金は……うわ、240Gold足りないし……」

「レイルよ。端数分ならば私も出そう」

「私も出すわ」

細かい端数分のお金が足りない事にレイルが悩んでると、アポロ―ネスとマリアノが足りない分を出してくれた。

「ありがと2人共。ロロちゃん、これでちょうどだと思っただけど、確認してもらえる？」

「はあーい♪ あ、領収書とかいる？」

「お願いします」

そして手慣れた感じで、領収書をレイルに渡すロロ。

「えへへっ、まいどありー！ 今回のフューリーはビューイの谷だよ。気を付けてね！」

「ビューイの谷だね。早速行ってみるよ」

「それじゃーね！」

そして上機嫌で去っていくロロ。

「……ビューイの谷か。場所が場所だから、少し急ぎで行った方がいいかもね」

「その方がいいだろうね。ビューイの谷は風の強さによって行動が味に制限されるからね」

「ならば、必要な物も買っていったほうがいいだろう。あそこは野営する場所も限られてた筈だからな」

「それもそうね」

「……（なんか見てて、頼もしいな（わね））」

レイルにハーラー、アポローネスとマリアノの4人は次の目的地であるビューイの谷で行動する際の会議をし始め、その光景を見たフアングとアリンは頼もしいなと思った。

第57話 エフオール

ロロからの情報でビューイの谷にやってきたレイル達。

「……気のせい、か」

「どうしたの？ あ、そうか。確か……」

「……また襲ってくるかもね」

フアングが何かの気配を感じた事に疑問に思ったアリンとレイルが訊く。だがその疑問は直ぐに分かった。

前の世界と同じパターンならば、もしかしたら、彼女が自分達を付けているのかも。

その事に気をつけながら先に進むのであった。



「……殺」

「……（付いてくる気配は変わりなし）」

しばらく進んでるが、相変わらず自分達を付いてくる気配を感じながらレイルは観察していた。

「今……聞こえたな。どこだ、どこにいる？」

「さつきから、何をキョロキョロとされてますの？ 挙動不審者は通報されてしまいますわよ？」

「うるせーな……俺には俺なりの考えがあるんだよ」

ティアラの言葉にフアングはちげーよと否定する。何も知らない彼女からすれば、フアングの行動がそう見えても仕方ないのだが……

「我らを狙っている者がいるな……斬るか？」

「この感じ、1人……みたいだけど」

「流石にアポロとマリーも気づくよね。で？ フアングはどうしたいの？」

流石にアポローネスとマリアノも自分達を狙っていると思われる視線には気づいたようだ。とりあえずフアングに意見を訊く。

「俺はそいつと戦いたくない」

「だよね。僕も正直言うと、フアングと同じ意見だし」

「……(ツンツン)」

「レイルく、ホロンが獯猛な視線を感じるって言ってるよ〜?」

するとホロンが何か訴えてきたので、視線を向けると、クララが通訳してくれた。

「多分、ビューイの谷に生息してるモンスターだろうね。ホロンが獯猛な視線って言ってるから……鳥獣系のモンスターだね」

「俺ら狙われてんのか?」

「……どうだろうね。とりあえずこのまま先に進もう」

とりあえずモンスターの行動次第という形で放っておく事にした。



「確かこの奥にフューリーがあるんだったな」

「なんで分かるんや?」

「……勘だよ、勘!」

ビューイの谷の奥まで進んだ一行。前の世界の事を知らないガルドにフアングはフューリーがこの奥にあるのは勘だと言った。

「確かにフューリーによる空気の変化が感じられる」

「そうね」

「え、マジで?」

アポローネスとマリアノの言葉にフアングは目が点になった。レイルはそんなフアングを見て苦笑い。

「まあいいや。とにかく、この先に行く前にあいつに出て来てもらう」

「ん? なんやあの耳の生えた岩」

「あの特徴的なお耳は……!」

そしてガルドはある物体を発見する。そこには不審な耳の生えた岩が鎮座しているではないか。それを見たティアラは見覚えがあった。

「出て来いよ、エフオール!」

「殺殺殺。殺殺殺」

「気配を消していたのによく分かったな。とエフオールは申しております。お久しぶりですね、皆様」

フアングの言葉に岩陰から、うさ耳フードを身に付けた少女、エフオールとパートナー妖聖の果林が現れた。

「……（パタパタ）」

「あー、果林ちゃんだー。今日も可愛いくて絵になるねー。……って、あのねえ……」

「~~~~~っ!？」

「むう~~~~!」

「マリー。ちよつとクララを押さええて。荒れ狂う何かに目覚めそうだから」

「もう押さええてるわ。クララ、少し落ち着きなさい」

「はくなくしてください!」

レイルの肩でホロンが果林に手を振りながら何かを訴えている。そして溜息しながらも通訳するレイル。そしてそれを聞いて顔を紅くする果林。頬を膨らませながら暴れ出すクララを押さええるマリアノ。

「殺、殺殺殺殺。殺殺」

「お前から受けた屈辱は忘れてない。人の事を痛いだのなんだの言いやがって。そのフリフリミニワンピース着た奴の方がよっぽど痛い!との事です」

「誰の事を言ってるんだろうね?」

エフオールが指摘してるフリフリミニワンピースを着た奴は誰の事だとばかりに首を傾げるレイル。

「ティアラに言ってるんじゃないの? この中でフリフリミニワンピースなんて着てるの、この子だけだし」

「お姉様!?! まさか私に向かって言われてたんですの!?! このお嬢様スタイルが痛い!?!」

「というか、もう少しスカート丈の長さは何とかならなかったの? 今更だけど」

「あの、お姉様、真顔で説教は……」

姉であるティルアの指摘に軽くショックを受けるティアラ。しかも軽く妹と説教も混ぜながらである。

「殺殺！・ 殺殺殺殺！」

「エフオールを痛い子呼ばわりした事、死んで後悔させてやる！」

「結構傷付いてたのね……」

明らかに怒ってるエフオールを見て、アリンが呟く。

「殺！・」

「フェアライズ！」

そしてエフオールは必殺の鎧を身に纏った。その姿は全翼機のような翼と肩キャノン、足には姿勢制御用のアンカーが装備されていた。

「…フアング。みんなも悪いけど、エフオールの相手は僕がするから手は出さないで」

『!?!』

フアング達が武器を構えると、レイルがフアングの前に出て制した。

「だけどよ……」

「分かってるよ、大丈夫。それよりも周りのモンスターの気配が強まったから、そっちに気を配ってほしい。僕もなんとかするけど」

「フアング君、あの子の事はレイル君に任せよう。いざとなったら、私達が助けに入ればいいだろう？」

「ああ、分かった……」

ハーラーの言葉もあつて、他のみんなもなんとか納得してくれたようだ。そしてレイルはエフオールの前に立ち……

「ホロン、ティルア、シャル、ミュイ」

「……（コクコク）」

「フェアリンク！」

「ミュイ！」

自分のパートナー妖聖とフェアリンクをする。妖聖は光となりレイルの元を集まる。

「…少しだけ本気で相手をしてあげる。掛かってきなよ」

「殺!」

その言葉を合図にエフオールはレイルに向かって突っ込んだ。彼女のフューリーフォームの特性なのか、突進する時の推進力が格段に飛躍していた。

「ふーん、直線的な推進力は一番速いみたいだね。けど……」

「っ!」

「こうやって軌道をずらせばいいだけの事だよね?」

レイルが全翼機部分に触れた途端にエフオールはバランスを崩して、倒れかけるがなんとか踏ん張り上空に逃げる。

「レイルはん、今何したんや? 触れた途端にあの嬢ちゃん、バランス崩したで……」

「恐らく軌道をずらす事で相手の勢いを完全に殺したのだろう」

「どういう事だ?」

「簡単な話、一時的とはいえ相手を完全に無力化させたのだ。スピードの軌道をずらされてしまえば、ほぼ無防備に近い状態だからな」

ガルドとファンクの疑問に答えるアポローネス。現にエフオールが倒れかけたのが証拠だと付け足す。

「殺!」

『アタックエフェクト『シューティングスター』』

エフオールの持つ弓から魔力が注ぎ込まれた氷の魔矢がレイル目掛けて放たれた。場所がビューイの谷もあつてか風の影響で魔矢の速度が上がっているのは明白だった。

「……」

「さ、殺!」

しかしどういう訳か放たれた魔矢はレイルに当たる前に碎け散ってしまった。これには撃った本人であるエフオールでさえも驚かざるを得なかった。

「ファンク、それにみんな。今から使う魔法、そっちにも被害がちよこつとだけ出るかもだから、先に謝っとくよ」

『はっ!』

すると突然レイルは何故かファンク達に謝ったのだ。そんな皆の

反応をよそにレイルは空中にいるエフオール目掛けて両手を上げ
……

「……『グライネス』」

「ぎ、つ……!?!」

『こ、これは……重力!?!』

「なんだ、これ……!?! 身体が……」

「重くて、動けない……」

「どういう原理……なんですの、この魔法は……」

「多分、地属性の初級魔法『グライブ』と闇属性の初級魔法『ダクネス』を組み合わせた重力を発生させる魔法……だね。初級魔法なだけマシだけど」

「これで初級魔法って、無茶苦茶もいいところやんけ……」

「こちらにも影響が出るとは言っていたが……これ程とは……!」

「ちよつとどころじゃないでしょ、レイ……」

とどめの魔法を放った。

『グライネス』と呼ばれたその魔法の正体は、いわゆる重力そのもので、エフオールだけでなく、ファンング達にも影響が発生した。何かに押しつぶされそうな感覚で身体が重くて動けない。

そして空中でグライネスの影響を強く受けているエフオールは重力の力に耐え切れず、地面に落下する。

「きゃ……っ……」

叩きつけられるのと同時にエフオールのフューリーフォームが解除された。

「う……く……。殺！ 殺！ 殺！」

「エフオールは負けました、どうぞ、私を殺害なさりやがってください、と申しております」

「……」

負けを認め自分を殺せというエフオールに、レイルはファンングに目を合わせる。彼も同じ事を思ってたのか、彼女の通訳をする果林にも正直、2人は呆れるしかなかった。

「あー、もう！ とりあえず、バハスのおっさんが作ったスイーツを食

え！」

「……………殺？」

「理解不能、と申しております。…………毒殺狙いですか？」

「毒なんてセコイもん入ってねえよ。作るのはムサイおっさんだが、
真正正銘、極上のスイーツだぜ」

フアングはそう言っつてバハスに頼む。

「ほう、そういう事なら…………チョコクッキーぐらいしかないが、これで
いいか？」

「よし、エフオール！ 四の五の言わず、黙つてこのクッキーを食べ。
話はそれからだ」

バハスから受け取ったチョコクッキーをフアングはエフオールに
渡す。

「…………殺」

「一口だけなら、と申しております。個人的には見知らぬ人からの施
しは、エフオールにオススメできませんが…………」

そして少し戸惑いながらも、チョコクッキーを口にするエフオー
ル。

「どうだ、どんな気持ちだ？」

「…………おい、しい」

「美味しい、とエフオールは…………えっ?! エフオールが普通に喋つた
…………?! それに美味しいだなんて…………!」

エフオールが普通に喋つた事に驚く果林。

「俺達と一緒に来たら、いつでもこの美味しいもんが食えるぜ？ ど
うだ、俺達の仲間にならねえか」

「なか、ま…………」

「ただの同行者つて事でもいいわよ。あなたの行く先々に偶然あたし
達がいと一緒にご飯を食べる。それならどうかしら？」

「…………」

フアングとアリンの提案にどう反応すればいいのか、戸惑つてるよ
うだった。

「エフオール…………戸惑っているのですね。無理ありません。エ

フオールは戦う事しか教えられませんでした。戦う以外に生き方を知らない……そう育てられたんです」

「……（戸惑う理由はそういう事か。それにバハスさんのチョコクッキーを食べた時のエフォールの表情……もしかして……）」

前の世界でも思ったが、初対面の時もフェンサーには興味がないと言ってたくらいだ。

ただ1つ分かった事がある。それはエフォールがチョコクッキーを食べた時の表情だ。それを見て、まだ確証がない訳ではないが、レイルは故郷に居るある人物が浮かんだ。

「でも私はずっと、普通の女の子みたいな楽しみをエフォールに知って欲しかったんです！」

「果林……」

「エフォール、この方達と共に行きましょう。そうしたらあなたは変われるかもしれません！」

「……果林が、そこまで言うなら……」

こうしてエフォールと果林が仲間になったのであった。

「それなら今晚はエフォールと果林ちゃんの歓迎会だね。って言うても、諸事情で今日は鶏肉料理がメインになっちゃうけど……」

「諸事情？　もしかして鶏肉が今日食べないとダメになっちゃうとかか？」

「ああ、それはね……」

フアングに理由を聞かれたので、まずそれを説明せねばなるまい。

「……（ルルルルルン♪）」

するとホロンがスキップをしながら3種類の鳥獣系モンスターを大量に担いでレイルの元に戻ってきたのだ。

「こいつは……サンダーバードだね」

「ああ。それにスパルナ、コカトリスもいるではないか。どれもビューイの谷に生息しているモンスターだぞ」

ハーラーとアポローネスがホロンが持ってきたモンスターを観察する。3隻共、白眼をむき泡を吐きながら、完全に気絶していた。

「こんなにくさん気絶してるのって、もしかして……」

「えつとね……」

アリンの推測通り、このモンスター達はレイル達に寧猛な視線を放つてた正体であり、エフオールとレイルが戦っていたところを割り込んで奇襲を狙うつもりが、レイルの魔法に巻き込まれてしまい、こうなったとの事だ。

「レイ……貴方ね……」

「あはは……」

ジト目でこちらを見るマリアノにレイルは苦笑いで返す……のだが、この後、マリアノに軽く説教されるレイルのであった。

第58話 定食屋で蒼き疾風を見かけた

エフオールと果林を仲間にした一行は大都市ゼルウインズの定食屋に来ていた。

「……ぱくぱくもぐもぐ。ごつくん。ぷはー。今日の飯は一際、美味いぜ。今日は俺の奢りだ！ 好きなだけ食え！」

「なんだか、今日は上機嫌ね」

いつもより上機嫌なファングを見て呟くアリン。

「エフオールさん、もつとこつちにいらっしやったらどうです？」

「……ヤダ」

「そうですか。ではこの苺のタルトはいらないのですね」

「……いる」

「もう私の通訳は必要なさそうですね。皆さん、エフオールを仲間にしてくれて、ありがとうございます」

ティアラとエフオールのやり取りを見た果林が全員にそう言った。

「ずっと普通の女の子らしく生きて欲しかったんです。だから、服もイメチェンさせたんですが、まさかこんな形で私の願いが叶うとは……」

「ま、いいって事よ。あんま感謝とかいらねーからな、ケツが痒くなる」

「ファングって、昔からそうだよな。他人から面と向かって感謝される事に慣れてないところとか」

「いや兄貴、別にそんなんじやねーし」

「なるほどねえ……ファングにも可愛いところあったのね？ ふふ」

他人から面と向かって感謝される事に慣れてないファングにレイルが指摘する。その光景を見て嬉しそうなアリン。

「でもさ、なんでエフオールはフューリーも集めてないのにフェンサーやってるの？」

戦いが目的、なんだっけ？とアリンが訊く。

「……」

「エフオールはフェンサー養成機関で訓練を受けていたんです」

その質問に答えたのは果林だった。

「フェンサー養成機関？」

「はい。才能のある子供をフェンサーとして育て、大手企業などに斡旋する機関の事です」

「……………」

ハーラーの疑問に答える果林。レイルはろくでもない機関だろうなど思いながら、同僚であるアポローネスとマリアノにも目を合わせてみるが、2人も自分と同じ事を考えていたようだ。

「しかしフェンサーとしての力を人為的に発現させるには大きなリスクが伴います。エフォールのようにフェンサーの力を得られたのはごく僅か。ほとんどは非人道的な実験や訓練の中で命を落としていったんです」

「胸糞悪い話やな」

ガルドが代弁する。正直、その機関の活動内容を聞いてて胸糞悪い。

「ある日、その施設が火事になり私達は混乱に乗じて逃げ出したのです」

「私は、戦う事しか教えられなかった……私に出来るのは破壊する事だけ。だから私は戦わなきゃいけない……」

施設を逃げ出したのはいいが、これから先の生き方が分からなかったのだろう。エフォールが教えられたのは戦う事だけだったのだから。

「あ、あのさあ。真剣なお話し中に悪いんだけどちよつといいか？」

「どないしたんや？ 食べ過ぎて腹でも壊したんか？」

するとフアングが気まずそうに言った。どうかしたのだろうか？

「……財布、無くしちまったみたいなんだよ」

「ええ!？」

その一言でアリンが驚きの表情になる。他の者も同様だった。

「言っておくが、私はこの店の代金が支払えるほどの持ち合わせはないぞ。金銭は極力持ち歩かない主義だ」

「昔から金銭面に関してはしっかりしてるもんね、アポロ」

そう言ったのはアポローネス。確かに彼はドルファア入社当時から金銭は必要最低限だけしか持ち歩かないという話は、レイルも知っていた。

「私も今はそんなに持ち合わせはないわよ」

次にそう言ったのはマリアノ。最も彼女の場合、カダカス氷窟で倒れてた事もあつて現在の持ち合わせが少ないという意味かもしれないが。

「やれやれ、ファング君の奢りだというから思いきり食べたというのに。君も結構抜けてるねえ」

「う、うるせえな!」

ハーラーにも指摘され、支払いはどうするのかとファングが悩んでると何かを見つけたようだ。

「お……あれは……ピピン!」

「……(あ、ほんとだ。ピピンだ)」

視線の先には確かに緑色のアフロヘアーの頭に剣を刺した、緑色の猫のような顔、紡錘形の身体という、着ぐるみのような謎の生物……ピピンの姿が。隣にはソウジの姿も。

「ああ、あの変な生き物は間違いようがねえ。相変わらず頭に剣が刺さったままだぜ。そういや、ピピンとは……」

そして何を思いついたのか、ファングはピピンの元に駆け寄った。

「ちよつと僕、少しだけ気配を消してるね。ホロン」

「……(こくり)」

『?』

テーブルの上で器用にクレープを食べてるホロンに合図を送るレイル。他の者は一瞬、何かが起こった気がしたのは確かだがその正体はなんなのか分からなかった。

「む……我が輩を呼んだのは君かね?」

「な、なんやコイツ……!?!」

「な、なんですの……この変な生き物は?」

「妖聖……いや、モンスター? ……違うな。およそ名状し難い容姿。そして、何やら、ちよつと香ばしい匂いがする」

「む、面妖な」

「そもそも人間なのかしら……?」

ピピンを見た他の者はこの反応である。

「(あれ? ピピン、もしかして……レイルがすぐ目の前に居る事に気づいてない?)」

ここでアリン。目の前にレイルが居るにも関わらず、彼の存在に全く気づいていないピピンに違和感をもった。

試しにレイルに視線を向けると、口元に指を当てながら、しー、だよ?と合図をアリンに送っていた。ティルアとシャルも『またレイの悪い癖が始まった』とばかりに溜息を吐いていた。

「なー、ピピン! 頼む、ここのお代を払ってくれ!」

「え、ファング、それはちよつと早いんじゃない? ただのタカリだと思われるよ。タカリだけど」

何を言い出すのかと思えば、ファングは前の世界と同じように、ピピンに払ってもらおうと思ってるらしい。

「むむ……我が輩は君など知らん。初対面なのである。よって、君の分は君が支払うべきだ」

全くその通りである。終いには、初対面の人にとかるなど恥を知らんのか!と叱られてしまい、ピピンとソウジは定食屋から去っていった。

「……あ、行っちゃったか。タダ飯大作戦失敗だな」

「もー、今のでピピンが仲間にならなくなったらどうする気?」

「どうもしねえよ。なるようになるって。ま、ピピンの事だ、またどこかで会えるだろ」

「そうだよ、アリンちゃん。ピピンなら、またどこかで会えるって」

まあまあとアリンを宥めるレイル。

「それにしても、ピピンなら心配を消してる僕に気づくと思ったのに……ピピンもまだまだだなあ」

「レイ。普通は気づかないよ?」

「そうよ。たまにそうやって反応を楽しむの悪い癖よ、レイ」

「え? ピピンにしかやらないよ?」

「そっぴや兄貴、かくれんぼに關しては天才だつたよな。今みたいに氣配を消しながら隠れるから全然見つからねーし……」

「あつたね。そんな事……」

のほほんど残りの紅茶を飲みながら答えるレイルに軽く呆れるティルアとシャル。氣配を消すで思ひ出したのか、ファングもそんな事を呟く。

「……これ、ファングの財布。テーブルの下に落ちてた」

「え……？」

「……バカ」

レイルが懐かしんでると、エフォールがファングの財布を見つけてくれた……のだが、まさかテーブルの下に落ちてた事に財布を無くした当人であるファングは目が点になるのであつた。

第59話 好きな事、こみ上げる嬉しさ

定食屋でピピンと遭遇し、向日葵荘に戻ってきた一行はそれぞれ自由時間を過ごしていた。

「果林ちゃん、もつと近くに来てくれないとよく調べられないな。さあ、怖がらないでこっちに来るんだ」

「うう……はい」

「ふむふむ、人型獣耳付きタイプか。可愛い……じゃない、実に興味深い」

「今、可愛いって言いかけなかった？」

「ハーラーちゃん、思いきり可愛いって言いかけてたよ」

ハーラーと果林の様子をたまたま見てたアリンとレイルが突っ込む。そしてフアングもその光景を見て何やってんだあれ？と2人に訊く。

「ハーラーの妖聖調査よ。仲間になった妖聖が越えなきやいけない試験。通過儀礼みたいなものね」

「…通過儀礼って。ああ、だからセグロだけじゃなく、クララやマリさんにも似たような事をやってたんだ……」

「調査あ？ 楽しんでやってるようには見えねえな。マッドサイエントイストの顔だろ、あれは」

現にハーラーは活き活きとした表情をしてるのは確かなのだが。

「おい、ハーラー、そろそろ解放してやれ」

「はいはい。それじゃあ、最後に髪の毛を一本貰えるかな？」

「分かりました。……つつ、はい、どうぞ」

バハスにそう言われ、ハーラーは果林から髪の毛を一本貰った。

「髪なんかどうするんだ？」

「研究に使うんだって。あたしも髪の毛提供したわ」

「あー、渡してたね。そういえば……」

「研究？」

前の世界でもそうだったが、アリンがハーラーに髪の毛を提供してたのをレイルは思い出した。

「妖聖にはまだまだ未知の部分が多い。毛から細胞を採取して、より詳しく調べるのさ」

「凄いですねー」

「私の自慢のコレクションさ。フッフ、グッフッフ……」

「ちよつと気持ち悪いです……」

これには果林もドン引きである。

「これまでに会った全ての妖聖の毛を保管してるよ。あ、ちなみに毛がないタイプの妖聖は除く」

「……………」

「おい、何故そこで俺を見る」

毛がないタイプの妖聖と言われ、レイルとフアング、アリンの視線はバハスに向く。

「おお、まさかのバハスオチだな！」

「…………（そこは言っちゃうんだ…………）」

笑いながらオチを言うハーラーに苦笑いするレイルなのであった。

◇

「…………お兄ちゃん、ご飯まだ？」

「さつき定食屋で食べたばかりじゃないか」

レイルが食堂で紅茶を一人で飲んでるとエフォールがやって来た。開口一番がこれである。ちなみに何故エフォールがレイルの事を『お兄ちゃん』と呼んでるのかと言うと……

『…………フアングやティアラがそう呼んでたから。あと雰囲気』
という事らしい。

まあレイルからすればエフォールはまだまだ子供だが。逆に身長はエフォールの方が少し高い。

「だって、みんなで食べると美味しい……。みんなが教えてくれたから、ご飯の時間が好きになった」

「それは何より。ところでエフォールって、好きな食べ物とかないの？」

「好きな食べ物……よく分からない……」

なんでもエフォールは特別好きな食べ物がない……というより、分からないとの事。

「まあ小難しい質問をしてもアレだから、とりあえず先に作っておいたおやつをエフォールに進呈しよう」

そう言ってレイルは冷蔵庫の中から、予め作っておいたプリンを取り出し、お皿に乗せた後、アイスや果物、仕上げに生クリームをかけてエフォールの元を持っていく。ついでに自分のも。

「今日のおやつは、特製プリンアラモードだよ。アイスも入ってるから、溶けないうちに食べて？」

「……いただき、ます」

プリンアラモードを口にするエフォール。すると彼女の瞳がキラキラと光った……気がした。

「……おい、しい」

「それは良かった。多めに作ってあるから、食べ過ぎない程度だったら、おかわりしてもいいよ？」

「っ！」

その言葉を聞くとすごい勢いで食べるエフォール。この様子だと、好きな食べ物が早速できたようだ。



「あ、レイルさん」

「果林ちゃん。なんか嬉しそうだね。どうしたの？」

エフォールとおやつを食べ終わったレイルが宿内を歩いてると、果林とぼったり遭遇した。しかもなんか嬉しそうだ。

「エフォールが穏やかな表情をするようになったんです。それが嬉しくって」

「そうなんだ。あ、さっきまで一緒におやつを食べてただけけど、瞳の奥がキラキラしてたよ？　なんかプリンアラモードが気に入ってくれたみたいだよ」

「まあ。そうなんですか？」

「うん。今は食堂でスイーツの料理本を熱心に読んでるよ」

あの様子だとスイーツ作りに興味を示すかもねと付け足しながら、
レイルは果林に教える。

「時に果林ちゃん？」

「はい？」

「ぶっちゃけ、ホロンの事どう思ってるの？」

「……………!!!」

前から気になってた事を真顔で訊くと果林はレイルの予想通りの
反応をしてくれた。その証拠に彼女の顔が紅くなっている。

「呼んできてあげようか？」

「い、いえ、だ、だだだ……………大丈夫です！」

「そう？　まあ、頑張ってるね」

「あう……………は、はい」

「……………(何？　この可愛い生き物ならぬ妖聖は……………)」

恥ずかしがる果林を見てレイルは、クララとは別の意味で何この可愛
い妖聖と思うのであった。

第60話 妖聖同士の散歩

「まいどおーきにー。儲かってまっかー」

「ぼちぼちでんなー。って、何言わせんのよ」

噴水広場にて。ロロの言葉に思わず反射的に返してしまうアリン。

「ノリがいいですね」

「……（コクコク）」

「グルル」

「そうだねー」

果林の言葉に頷くホロン、セグロ、クララ。

「今日はどうしたの？ 見慣れない組み合わせだけど」

「暇してたメンバーで、ちよいと散歩に出てきたんだ」

「そうなの。それでとりあえず街を回ってみようってなったのよー」

「キュイキュイ！」

バハスとマリサ、キュイが答える。

暇してたメンバー……ホロン、アリン、果林、クララ、キュイ、マリサ、バハス、セグロの妖聖組はする事がなかったので、散歩に出てみたのである。

ちなみにテイルアとシャル、ミュイはレイルの手伝いをする予定があるからと言ったので、この場には居ない。

「じゃあ散歩ついでに、何か買っていかない？」

「強引に商売をねじ込んできたわね」

やれやれと呆れるアリン。

「あの、飴とかありますか？」

「もっちゃん！ 添加物不使用のじっくりことこと煮詰めた手作りべっこう飴を仕入れたばかりだよ」

「じゃあ、それをください」

「まいどありー♪」

お金をロロに渡して、手作りべっこう飴を受け取る果林。

「あら。飴を買ってどうするの？」

「最近エフォールは、甘い物が好きになりました。皆さんの仲間にし

てもらってから、エフオールが人間らしくなりました」

そのお陰で少しずつだが、自分から喋るようにもなったと付け足す
果林。

「……（スッ）」

「ん？ あたしにー？」

「……（コクコク）」

するとホロンが懐から紙を取り出しロロに手渡す。そして紙を受け取るロロ。

「ふむふむ。ソーイングセットで使う部品だね。ちよつと待っててねー？」

そしてロロはホロンが見やすいように、ソーイングセットの部品を地面に置いた。針類や布を切るはさみ類、各色の布類や糸類等、様々な種類があつた。

「……（うーん）」

「グルル？」

「……（コクコク）」

セグロと何やら会話をしながら商品を真剣に見るホロン。軽く悩んだ末、2種類の針と各色の糸類1セットを購入した。

「まいどありー♪ 糸を収納出来る超小型ケースをおまけしといたからね」

「……（ウキウキ）」

「ねえそれ、何かに使うの？」

ロロから商品を受け取ったホロンにアリンが訊く。

「……（パタパタ）」

「みんなの服を繕うのに必要なんだよ。とホロンさんは申ししております」

「……（パタパタ）」

「アリンちゃんも服が破れちゃったら遠慮なく言っただって〜」

「へー。その時はお願いしようかしら」

ホロンの通訳をする果林とクララ。もし服が破れたりしたらお願いしてみようかなと思つたアリン。

「じゃ、そろそろ行くか」

「そうね」

「……（コクコク）」

「お仕事頑張ってください」

「グルル」

「またね」

そして噴水広場を後にする妖聖一同。

「教えてあげた方がよかったかな。でも、知らない方が幸せな事もあるし……」

去っていくホロン達を見たロロがポツリと呟く。

「……セグロ、すごく目立ってる」

それはセグロについてだった。街の人達がドン引きしていると教えて方がよかったかなーとロロは悩みながら思っていたのだ。

「そもそも散歩って言っても、あんなおっきな妖聖を連れて歩いたら、みんな驚くに決まってるのに……」

常識人に見えても、お兄ちゃんの間でやっぱりどっか非常識だわとロロは思うのであった。

第61話 地への回廊で蒼き疾風と再会した

口口からの情報により、次のフューリーは地への回廊にあると聞いた一行は、地への回廊にやって来た。

「なんだろ、羽がムズムズする……」

「背中が痒いなら、かいてやろーか?」

「バカ、そういうんじゃないわよ。でもなんだろ、強いフェンサーが居る、そんな気がする」

アリンのその一言にフアングはそんな特技があったなら先に言えよと愚痴る。

「まあ、何が来ても、俺様の敵じゃないけどな!」

「油断しないでください。ここは古の塔、何が出てくるかわかりませんわ」

「そうだ。ここはドルフアもまだ突き止めていない場所だ」

テイアラ、アポローネスが言う。

「いつその事、この塔ごと崩壊させて、フューリーを持ち帰るっていう手もあるけど?」

「レイ、縁起でもない事を言うの止めて頂戴」

「冗談だよ」

「真顔で言われても困るのだけれど……」

真顔でマリアノに返すレイルを見て一同は、どこまでが冗談なのだろうか?と思いつつ先に進むのであった。



「ね、ねごがく……も、もじやもじやがく……」

「なんだ、こいつら?」

少し先の広場に辿り着くと、複数の人間が倒れていた。

「フューリーは奪われてるけど、フェンサーだよ」

「どなたかに倒された後ですわよね……」

どうやら倒れてた人間はフェンサーだった。幸い、フューリーを奪

われただけで死んではいけないようだ。

「この傷、全て素手によるもの……デキる！」

「……………♪」

驚くアポローネスに対して、エフォールは逆にウキウキしているが。

「それにしても……素手、ねえ……」

レイルにはなんとなくだが、心当たりがあった。それはこの倒れるフェンサーの口から『ねこが……もじやもじやが……』という言葉だった。

とりあえずこの倒れてるフェンサーを壁際に寄せて、一行は奥に進む。



「ん……？　なんだこれ……進めないぞ？」

「そんなおバカな事が……あら？　見えない壁がありますわ」

地への回廊の最下層と思われる場所まで辿り着く。少し歩くと何故か見えない壁が阻まれていた。

「何かの仕掛けかしら。……ちよつと調べてみましょう」

「あー、めんどくせえ……アリン、来い！　この見えない壁をぶつ壊してやる！」

「え……？　それは幾らなんでも乱暴すぎないかな？」

2人のやり取りを見てレイルは正直、どっちの意見も一理あるなと思っただが……

「他に方法がない訳だし、別にこの壁をぶつ壊しても問題ないと思うよ。フアング、やるなら思いきりやっちゃって」

「おう！　フェアライズ！」

必殺の鎧を纏ったフアングは見えない壁に向かって剣を叩き込む。すると見えない壁は脆くなったガラスのようにパリンパリンと音を鳴らしながら砕け散った。

「よし！　行くぞー！」

フューリーフォームを解除したフアングの言葉を合図に奥に進む
一同。

しかしそこには先客が居た。

「む……貴公は、いつぞやの、タカリフェンサーか？」

「ピピン、なんでお前がここに……？」

なんとその正体はピピンだった。まさかの人物に驚くフアング達。
ちなみにレイルは定食屋の時と同じく敢えて気配を消してる。

「世直しの為である！ 巷には粗暴なフェンサーが溢れておる。我が
輩はそのような輩を懲らしめながら、全国を行脚しているのだ」

「……（過去に戻っても、ピピンって変わらないな）」

逆に前の世界と同じく変わってなくて安心感を覚えるレイル。

「そして、この塔のフューリーが悪用されぬように、封印を施すつもり
であった。だが……」

「まさか、あなたのような方がピピンの作り出した壁を破壊してやつ
てくるとは思いませんでした」

ピピンの隣に立つてる青年、ソウジが言った。

「貴方もフェンサーですね？」

「ティアラ、ちげーよ。変な生き物の方がフェンサーだ」

「ほう……青年よ。もう貴公をタカリとは呼ばん。我が輩がフェン
サーだと見抜いたのは流石である」

ソウジがフェンサーだと勘違いしているティアラにフアングが訂
正する。それを聞いたピピンが感心したように言う。

「嘘……こつちの紳士然としたイケメンの方がフェンサーではありま
せんのか？」

「はい、私は妖聖のソウジと申します。そして、こちらに控えるピピン
の方がフェンサーなのです」

「ええええええええええ!!!」

衝撃の事実に驚きの声を上げるティアラ。

「ひよええええ……そんなんありか!？」

「なるほど……そういうパターンなのだね。どう見ても逆にしか見え
ないけれど」

これにはガルドとハーラーも驚いていた。

「人間、見た目より中身が肝心と知らんのか？ もっと見る目を養うがいい！」

「不覚……私にも見抜けなかった」

「私も分からなかったわ……普通、どんなに目を養っても無理な気がするけど」

「……そう？ 私分かったけど……」

アポローネスとマリアノも同じ反応である。しかし意外にもエフオールは分かっていたようだが。

「へー、エフオールはピピンがフェンサーだって分かったんだ？ 凄
い凄い……」

「へ、陛下!？」

「やあ、ピピン」

そしてレイルがエフオールを褒めながら何気なくピピンに声を掛けると、予想通りの反応をしてくれた。

「い、いつたい何時から……」

「君が定食屋でファングにタカリ云々って説教してくれた時からずーっと居たよ？ 目を養うのも大事だけど、気配を完全に消してる人間を見つける事も視野に入れてほしいね？」

「ま、まさかあの時から、陛下がいらっしやっただとは……我が輩とした
事が……」

気づかなかった事に軽く肩を落とすピピン。

「という事で、俺はお前の正体を見破った。だから、フューリーをよこ
せ」

「その厚かましいほどの心意気やよし！ 気に入ったぞ、青年。だが、
断る！ 時に陛下。我が輩と1対1の手合わせをしていただけませ
ぬか？」

「僕と？」

「何……!?! 兄貴とピピンが戦う事になるのかよ……」

ファングが驚きの声を上げる。

分かっていたが、簡単にはフューリーを渡してくれないようだ。と

「というか、まさか自分と1対1の手合わせを要求してくるとはレイルも思ってたなかったが。」

「思えば最後に陛下と手合わせしたのは、陛下が6歳の時でしたな。フエンサーとしての資質が気になりましたな」

「あー、そんな事もあったねー。それでピピンが納得したら、フューリーをくれるの?」

「それは勿論。我が輩の興味本位ですゆえ」

とんとん拍子で話が進んでいきながら、2人は広場のような場所に向かい合い、互いに距離を取る。

「ホロン、テイルア、シャル、ミュイ」

「……（コクコク）」

「フエアリンク!」

「ミュージー!」

自分のパートナー妖聖とフエアリンクをする。妖聖は光となりレイルの元を集まる。

「お義兄様1人で、大丈夫なんでしょうか……」

「大丈夫さ。兄貴なら」

フアング達が見守る中、広場の空気だけがピリピリと伝わるのであった。

第62話 ピピン

地への回廊の最下層の広場でピピンと1対1の手合わせをする事になってしまったレイル。

「参りませう、陛下！」

「……」

ピピンは自身のパートナー妖聖であるソウジとフェアリンクさせ、基本形態であるナツクルを装備してレイルに突撃する。

「…『メイルデーイン』！」

「むう!？」

レイルが魔法名を呟いた瞬間、彼の右手から電撃を纏ったビーム状の水流が放たれた。だが目の前の魔法の危険性を感じたピピンは即座に避ける。

「後ろがガラ空きですぞ?！」

「……おっと、危ない」

土煙が舞う中、レイルの背後を取ったピピンが拳を叩き込む……が、彼はそれを容易く回避した。

「ちよつとなんかレイル、ピピンに押されてない……?！」

「大丈夫でしょうか……」

「……それにしても少し妙ね」

防戦一方なレイルを見て不安な表情になるアリンとティアラ。しかしマリアナがそんな事を口にしたのだ。

「普段のレイルなら今の攻防の間で、反撃のチャンスはいくらでもあったのに、それすらしないで回避に専念するのが気になるわね……」

「ああ。相手を探る……というより、何かを看破しようとしてるにも見える」

アポローネスも疑問に思ってたのか、首を傾げながら言った。レイルがドルファに所属してた時、同僚であった彼とはよく戦闘訓練をした事がある2人から見れば、今の彼の行動に微妙な違和感を感じただ……

そして再び距離を取ったレイルとピピン。

「陛下。避けてばかりでは、我が輩は倒せませぬぞ?」

「……別にただ避けてた訳じゃないさ」

「む?」

「背後を取った時の君の一撃の威力を見て、あー、これは普通じゃ無理だなと悩んだよ。だから……」

瞬間、レイルの両腕が輝きだす。これはフューリーの形態変化の輝きだ。両腕という事は、自分と同じナツクルが装備されるのかと身構えるピピン。

「僕らしく、工夫しながらやらせてもらおう事にするよ」

『!?』

だが、レイルの両腕に装備されたのはナツクルではなく『トンファー』だった。見た事がない形態にピピンだけでなく、ファンング達も驚愕する。

「ティルア、シャル」

『スタンバイモード』

レイルが合図を呟くと、両腕のトンファーに変化が発生する。

右手に装備してるトンファーは水属性のオーラを纏い、左手に装備してるトンファーは光属性のオーラを纏っていた。その2つのオーラは炎のように燃え盛っている……

「さあ始めようか。次はさっきのように君の一撃が簡単に通るなんて思わない方がいいよ? 最も……」

そして音もなくその場から姿を消したレイル。

「む! (姿だけでなく、気配も消えた!? いったい何処に……)」

『ピピン! 後ろです!』

「…悪いけど、もう遅いよ」

「ぬう!」

「今みたいに僕に隙を与えるだけだから」

ソウジの警告にピピンはすぐさま振り向き防御の態勢を取るが、レイルのトンファーによる一撃でピピンは壁際まで吹き飛んでしまう。

「な、何が起こったんや……?」

「動きが全く見えませんでしたわ……」

「……そう？ 私見えただけど……」

何が起きたのか判らないというガルドとティアラに対し、エフォー
ルは今のレイルの動きが見えたと言う。

「え？ お前、今の兄貴の動きが見えたのか？」

「……うん。お兄ちゃんがやったの……踏み込みだけだった。ただの
踏み込みじゃなくて、予備動作が完全にはない状態の……普通の人間で
もできないやつだった……」

エフォールの説明によると、レイルが消えた種の正体はなんとただ
の踏み込みであり、その場で踏み込みを行い、ピピンが捜し始めた際
には既にピピンの背後におり、攻撃を当てようとしていたというの
だ。

「ふうー、間一髪でしたな……」

「よくダメージを逃がしたね、ピピン」

「流石に色々な意味で肝を冷やしましたからな……」

すると土煙の中から、ピピンがやれやれといった感じで現れた。レ
イルの口振りから察するに、どうやらピピンは吹っ飛ばされた際に何
らかの方法でレイルの攻撃の威力を軽減したようだ。

「全力で参りますぞ！ ソウジ！」

『『フェアライズ』！』

そしてピピンは必殺の鎧を身に纏った。その姿は5本の剣が刺
さった体より大きいヘルメット状の姿となって装着されていた。

「…見くびってる訳じゃないけど、動きとか遅くなったりしないの？」

「それはやれば分かりますゆえ」

「だろうね」

レイルとピピンは再び、剣戟……ならぬ拳戟けんげきを互いに繰り出し始め
た。トンファーとナツクルがぶつかり合う音が最下層の広場に響く。

「……(流石はピピン。フェアライズした途端、攻撃の速度がさつきよ
り上がってる。しかも一撃を入れられる隙が無い。こりや振り出し
に戻っちゃうかもな……)」

ピピンの拳を受け流しながら次の策を考えるレイル。当たり前だ
が、フューリーフォーム中は物理攻撃や魔法攻撃も向上するのが特徴

だ。防御面も然りである。幸い、昔からピピンの事を知ってるレイルは攻撃をまともにも受けた時の威力が容易に想像できた。

そうなれば対策は限られる。

「……(ピピンのフューリーフォームは、主に体術特化寄りの身体強化系。なら……あれをやろう。結局、そうなっちゃうのか)」

トンファアでピピンのナツクルを弾き、距離を取ったレイルはフェアリンク状態を解除した。その証拠に頭にはホロン、両脇にはティルアとシャル、肩にはミュイが居る。当然だが、この行動にはピピンを含んだ全員が目を見開く。

「まさか兄貴……」

「うん。フューリーフォームを使う気なんじゃ……」

「何!? レイルがフューリーフォームだと!?!」

「あのレイルが……?」

だがファングとアリンの言葉を聞くと、アポローネスとマリアノが反応した。

「え? 2人は見た事あるんじゃないの?」

「昔、レイルとは何度か共に行動した事はあるが、あいつのフューリーフォームは一度も見た事がない」

「私もレイルのフューリーフォームは見た事がないわ」

アリンの問いにアポローネスとマリアノは首を横に振りながらそう答えた。

2人曰く、当時レイルはフューリーフォームを使えないんじゃないか?という噂がドルファア内で流れていたらしく、アポローネスとマリアノには『制約を付けてるだけ』とレイルは言ったそうさ。

「……いくよ」

それが合図かのように、ティルアとシャルもレイルと同じ利き手の前に構え目を閉じた。するとレイルの足元から銀色と虹色が混じり合った光が出現する。

そしてレイルは目をゆっくりと開き……

「「フェアライズー!」」

必殺の鎧の言霊を発する。光は輝きを増しながら、レイルを中心に

最下層内を包み込み始めた。

そして光は収まり姿を現したのは……

「……」

『フェアライズ・シーケンス・コンプリート』

レイル……の筈だが、その姿は完全に別人だった。

髪形はショートヘアから、ロングヘアに変わっており、瞳の色も『濃い紫色』から『赤色』に変色していた。

次に外装。紫色のヘッドドレスを被り、紫色のレオタード、両手には紫色の指絞め器を絞め付け、靴底に大量の棘がついた紫色のブーツを履いていた。

そしてオーラを纏っており、傍らには、ホロンが魔導書のような物を持ちながら浮遊していた。

「アリン、俺やっぱり兄貴のフューリーフォーム……見慣れねえよ」「大丈夫。あたしも同じ事を思ってるから」

前の世界でレイルのフューリーフォームを見た事があるファングとアリンがそう呟く。その言葉を聞いたティアラ達は驚愕せざるを得ない。

「はい!? あ、ああ……あの可愛い女の子が……お義兄様なんですの!?!」

「ふむ……見た感じ、融合係数を弄ってる訳ではなさそうだね……」

「別人じゃねえのか?」

「どう見ても別人やんけ!」

「でもホロンちゃんも傍にいるし……」

「初めて……見た……」

「私もです。あんなフューリーフォーム、初めて見ます……」

「威圧感がここまで伝わる。だが……」

「ええ。あれがほんとにレイルだというの……?」

「でもでも、本人で間違いないと思いますよ」

見た目が完全に変わっている為、レイル本人なのかという状況整理をするだけでティアラ達はいっぱいいっぱいだった。特にアポロースとマリアノは衝撃的過ぎたのか、目が点になってしまっている。

「……それが陛下のフューリーフォームですか？」

「そうなりますね。この姿では……という意味になりますけど」

『いや、本当に誰!』

ピピンの問いかけに答えるレイル。なんと声も余計に女性らしい声色になつてゐる。直で聞いたティアアラ達は心の中で突っ込んだ。

「ピピン、先に言っておきますね。今からほんのちよつとでも何かを見逃したり、瞬きでもしたら……貴方の負けです」

「はったりですか？」

「いいえ。大真面目です」

真顔で答えるレイル。

「ティルア、シャル、ミュイ」

『リミットアタック』『ファントム・ホロンナイツ』』

するとレイルの周囲を中心に複数の半透明のホロンと同じ大きさのちんまりとした古びた騎士甲冑等の装具を装備した幽霊が12体、出現したではないか。

「……ホロンナイツ、スタンバイモード」

レイルがそう呟くと同時に、ホロンナイツと呼ばれた12体の幽霊達はなんと武器を自ら召喚したのだ。

12体の内の10体は『剣』・『大剣』・『ナックル』・『薙刀』・『槍』・『鎌』・『弓』・『銃』・『斧』・『ランチャー』を、残りの2体は『鎖』と『盾』を装備している。

「……（フーン）」

「ぬう！ いつの間にな?」

そして突如、レイルの傍らに居た筈のホロンがいつの間にかピピンの懐に入り込んでおり、愛用の古びたボロい釘で斬りかかる。寸でるところでナックルで受け止めるが……

「足元がガラ空きですよ。ふん！」

今度はレイルが背後に回り込んでおり、蹴り上げでピピンを上空に吹き飛ばす。飛ばされた先には銃とランチャーを装備した2体のホロンナイツが待ち構えていた。

「仕方あるまい。ソウジ！ このまま迎え撃つぞ！」

『ピピン！ 後ろから何か来ます！』

「むっ!？」

このまま上空で待ち構えてるホロンナイツを迎撃しようと思ったピピン。だがソウジの警告により、背後から槍を装備したホロンナイツがこちらに接近していた。

「言いましたよね。ほんのちよつとでも何かを見逃したり、瞬きしたら貴方の負けだと……」

すると地上に居たレイルがそう呟いた。

「むっ……これは……雪の結晶?」

気づけばピピンの周りには無数の雪の結晶が宙を舞っていた。

「さて……念の為、加減はしておきますね」

「……（パチン）」

『アタックエフェクト『百花氷乱』』

レイルとホロンが指をパチンと鳴らした刹那、結晶が弾けるのと同じ時に青白い光が最下層の広場を覆いつくした。

「……………」

青白い光が収まる。そこにはフューリーフォームを解除され、仰向けに倒れるピピンの姿があった。

「…おーい、ピピン。大丈夫?」

そしてレイルもフューリーフォームを解除し倒れてるピピンに声をかける。変身前と変わらずのファング達が知るショートヘア時の姿だった。

「正直に申し上げますと、少しばかり全身が痛いですが……いやー、我が輩の負けです。陛下」

「これでもピピンが死なないように加減をしたんだから、その辺は勘弁してね。立てそう?」

「申し訳ありません。それと陛下。約束通り、ここで手に入れたフューリーをお譲りいたしましょう」

「…ん。ありがとう」

ピピンをゆっくりと起こし、フューリーを譲ってもらったレイル。

「ピピン。せっかくだから、このまま僕らの仲間になってよ」

「なんと!?! ……失礼ながら陛下は、我が輩のような古参フェンサーの助けが欲しいというのですかな?」

「僕としてはピピンが仲間になってくれると、この先も色々と凄く助かるんだけど」

「なるほど……よろしい。我が輩で良ければ、役立てましようぞ! ソウジもそれで良いな?」

「はい。異論はありません。皆さん、よろしくお願いします」

こうして、なんやかんやで前の世界と同じく、ピピンとソウジも仲間になったのであった。

第63話 朝食とホロンの用事

ピピンとソウジを仲間にした翌日の朝。

「おはよー……って、そんなところで集まってどうしたの？」

「あらアリンちゃん、おはよう〜」

向日葵荘の食堂にアリンが向かう途中、何故か食堂の入口付近で女性陣と遭遇した。アリンに気づいたマリサが挨拶をする。

「朝食をどうするか考えていましたの。お義兄様も出掛けていますし……」

「そういえば昨日の夜にレイルが言ってたよね。あっ！ そっか。フアングも一緒に出掛けてるんだっけ……」

「そうなのよ。私もガルドちゃんが居ないから、ついさつき気づいて……」

「なんか珍しくハーラーもレイル達についていくって言ってたもんね……」

そう。

実はレイルの発案の元、男性陣は食材の調達の為、昨夜から不在なのだ。なので、一部の女性陣しか居ないのである。ちなみにハーラーが自発的にレイルについていくと言ってた時は、全員が驚いたが。

そして当然だが、バハスも今日は不在なのである。

「……（せっせ）」

とりあえず食堂に入る。するとテーブルを拭いて食器を並べるホロンの姿が目に入った。

「あー……終わった。シャル、朝なんだから、手加減してよ……」

「心外ね。ティルアがそれ言うの？」

それと同時にティルアとシャルが姿を現した。2人共、軽くボロボロ口である。

「朝から何してたの？ 軽くボロボロだけど」

「ん？ 朝練。レイと旅をしてた頃の日課で、交代しながら軽く打ち合いをしてるの」

マリアノの質問に答えるティルア。そんな頻繁にやるわけじゃな

いけどね?と付け足しながら。

「……(ちよいちよい)」

「みんなそこで立ってないで座って待っていてください。とホロンさんは申しております。あ、あの……私も運ぶのお手伝いします」

「わ、わたしも手伝う」

ホロンの通訳をしながら手伝いを申し出る果林。それに続くクララ。

「あれ? ミュイは?」

「ミュイならレイについて行ったよ。一応、レイが無茶をしないかの見張りも含めてだけ」

「同じ年の女性がハーラーちゃん含めて2人も一緒なんだから、流石のレイも自重はすると思うけど」

「え!? お、お姉様達と同じ年なんですの!?!」

「そうよ。ミュイは普段あんな外見をしてるけど、ティアラ達よりも年上なんだから敬いなさいよ?」

アリンの疑問に答えるティアラとシャル。そしてミュイが実は24歳だったという事実には驚くティアラ達。

「……お腹……すいた……」

エフオールの言葉を合図に女性陣は、ホロンが用意してくれた朝食の準備を手伝う事に。



「このスープ、美味しい」

「もしかしてこの料理、ヴィシソワーズですよね……初めて食べますが、とても美味しいですわ」

朝食中、ホロンが作ったと思われるスープ料理、ヴィシソワーズに舌鼓を打つアリンとティアラ。

「おいしく♪ はむはむ……」

「……(ふきふき)」

「は、はわわ……あ、ありがと……」

美味しそうに食べてるクララの口元に食べかすが付いてる事に気づいたホロンが懐からポケットティッシュを一枚取り出し、クララの口元を拭いてあげた。二重の意味で恥ずかしいのかクララは真っ赤だが。

「あ、そうそう！今日はここに居るみんなにホロンの用事に付き合ってもらおうから♪」

「え？ いいけど……付き合うって……何に？」

思い出したとばかりにティルアが言った。アリンが首を傾げながら内容を訊くと……

「ホロンのフューリーを回収しに行くの」

「ちよつと。言葉が足りないわよ？ 厳密に言うなら、ホロンのパートナー妖聖を迎えに行くって言わなきゃダメでしょう……」

『は、はあ!』

いつもの笑顔で表情で答えるティルアにシャルが呆れながら訂正する。それを聞いたアリン達は驚きの声を上げる。マリアノとエフォールに至っては、目が点になっている。

「ホロンちゃんって、私達と同じ妖聖じゃないんですか？」

「妖聖の気配もするのに……ホロンさんにパートナー妖聖がいるんですか？」

「説明してあげたいけど、これがまた二度手間以上にややこしいの。用事を済ませながらの説明になっちゃうわね」

マリサと果林の質問にシャルが申し訳なさそうに答える。

「それでレイがお互いに用事が済んだら、シユケスの塔の近くで合流しようって」

「レイが？」

「うん。その方が効率的だし、なんだったらピクニック感覚で行って来たら？ だって」

「確かに効率的だけど……その例えもどうなの？」

ティルアの説明を聞いたマリアノは納得する。……レイルの言う『ピクニック感覚で』という例えはどうか？ と疑問に思ったが。

「フューリーの場所は分かるんですか？」

「その辺は大丈夫よ。ホロンしか判らない場所に封印されてるから。普通に探しても場所は絶対に見つからないわよ。例え、妖聖や女神、邪神でもね」

テイアラの質問にティルアは真面目な表情で言い切った。シャルも頷いてる。

「……（もぐもぐ）」

そんな場所が本当にあるのだろうか？とアリン達はホロンに視線を向けるが、当の本人はマーマレードジャムを塗ったトーストに夢中なのであった。

第64話 ホロンの正体

朝食を食べ終え出発の準備も完了したアリン達は、大都市ゼルウィングズの郊外を移動していた。

「それでホロンのフューリーが封印されてる場所って、何処にあるの？」

「前にヤタガン溶窟に寄ったでしょ？ その近くにあるルドケー溶鉱炉跡っていう場所」

現在進行形で向かってる場所をアリンが訊くと、ティルアはそう答えた。これから向かう目的地は、ヤタガン溶窟の近くにあるルドケー溶鉱炉跡という場所らしい。

「聞いた事があるわ。かつて製鉄の為に使われた溶鉱炉らしいわね」
「マリアノ様、物知り〜」

マリアノ曰く、その場所は昔に製鉄をする為に使われた溶鉱炉らしい。

「……あ。そういうえば、果林ちゃんって、暑い場所って苦手？」

「はい。私、氷の妖聖なので暑い場所は苦手です……」

「果林、元気出して」

今思い出したとばかりにティルアが果林に訊くと、元気のない回答が返ってきた。やはり妖聖にも体質があるようだ。

「いざという時はホロンに頼んでおんぶしてもらったら？」

「へ？ お、おとおお……おんぶですか!？」

「いやいや、そんな事したらホロンが潰れちゃうじゃない……」

顔を赤くしながら動揺する果林にアリンがティルアに突っ込む。キュイやクララよりも小さな体のホロンがどうやって果林をおんぶするのだろうか？

「ホロンちゃんが果林ちゃんをおんぶって……」

「シニールですわね……」

その絵面を想像したマリサとティアラも苦笑いを浮かべる。

「とりあえず、あの辺まで歩きましょうか。休憩を挟むにはちょうどいいっ」

「そうだね。ルドケー溶鉱炉跡は距離的に、もう少し歩けば着く頃合
いだし……みんなもそれでいい？」

シャルの提案にティルアも同意し、他の女性陣も異論はなかった。

◇

「この辺で休憩にしましょうか」

「……（せっせ）」

休憩ができそうな場所をシャルが決め終わると、ホロンがどこから
取り出したのか、レジャーシートを広げた。

「疲れた〜。やっと休める〜……」

「私も少しだけ疲れましたわ……」

アリンとティアアラがレジャーシートに座り込む。それに続いて他
の女性陣達も各々座る。

「……（せっせ）」

女性陣が全員座るのを確認するとホロンはお茶菓子の用意し始め
たのだ。朝食の準備も時も思ったが、休まないのだろうか？

「……（スッ）」

「あ。ありがと。ホロンは休まないの？」

「……（うーん）」

お茶菓子をホロンから受け取り疑問に思ったアリンが訊ねると、ホ
ロンは軽く悩む仕草をし始めた。

「ホロンも変なところで遠慮しなくてもいいのに。そういえば、あの
姿になれなくもないんでしょ？」

「……（こくり）」

「みんなに見せなくていいの？ あの姿」

どうやら遠慮していたらしい。しかしティルアとシャルが言っ
てるあの姿とは一体どういう意味なのだろうか？

3人のやり取りを見てアリン達、他の女性陣も首を傾げると、ホ
ロンが左手を顔に翳し始めたのだ。

そしてアリン達の目の前に現れたのは、160cmの1人の美少女

?だった。

「……」

「えっと……誰？」

「ホロンだけど……」

「う、嘘ー!?!」

「ええええええええええ!?!」

「今日一番驚いたわ……」

「あらあら……」

「……びつくり」

その美少女?の言葉にアリンだけでなく、ティアラも驚きの声を上げた。マリアノとマリサも驚いており、エフオールに至っては目が点になっていた。

ホロンと呼ばれた人物は、銀色の髪をボブカットにし、黒色のリボンを付けており、眼の色は暗めの青緑色。肌は人間より白かった。

服装は白いシャツに青緑色のベストを着ており、下半身は青緑色のスカート、白靴下に黒い靴を着用。胸元には黒い蝶ネクタイを付けていた。

「あのさ、変な事を聞くけど……ホロンって……男?」

「うん。僕は性別上、れっきとした男だよ? よく女の子って間違われた事もあるけど」

「……(寧ろ、間違われない方が難しいわ)」

そして何事もなかったかのように、再びお茶菓子を用意し始めたホロン。アリンが気になった事を訊くと、彼はのほほんとした表情で答える。その回答に突っ込むアリン。

「(こ)座ってもいいかな?」

「は、はい! ど、どどど、どどど……」

「ど、どうぞ……」

自分の分のお茶菓子を用意し、果林とクララの間座るホロン。そしていつもの姿と違う……というか、完全に違う彼に動揺しまくりの果林とクララなのであった。

第65話 ルドケー溶鉱炉跡

休憩を終えたアリン達はホロンのパートナー妖聖が封印されている目的地、ルドケー溶鉱炉跡に辿り着いた。

「ここに、ホロンのパートナー妖聖が封印されてるの?」

「うん。ただ僕が最後にルドケー溶鉱炉跡に来たのは女神と邪神の封印戦争以来だから……波長の流れで捜す感じ」

「今、何か重要な事を言わなかった?」

「しれっと言うホロンの言葉にアリンが突っ込む。

「……良かった。地形の場所は変わってないみたい。あっちに行くよ」

「え? あっちって……?」

「あっち」

ホロンが指さした方は完全に一面が溶岩だった。アリンが目をよく凝らしてホロンが指差した方を見ると、遠くに陸地らしきものが確認できた。

「もしかして溶岩を泳いで行くの?」

「それよりテイルア、予備の服は持ってきてるの?」

「お姉様もお姉様で何を言ってるんですの!?!」

「そっちもなんか違う!」

軽く準備運動をし始めながらぶっ飛んだ発言をするテイルアとシヤルを見て、ティアアラとアリンが突っ込む。

「結局どうやって渡るの?」

「泥船を使って渡るか、氷の魔法を使って橋を作るか……もしくはゴリ押しだね」

クララの問いにやんわりと答えるホロン。

「……なんか考えるのがめんどくさくなってきた。溶岩をぶった切りながら橋を作る」

溜息をつきながら考えるのを放棄したホロンは、その場で左手で軽く横薙ぎをした。

『えっ?』

一瞬の出来事にアリン達の目が点になる。先程まで溶岩だった部分は真つ二つに分かれ、代わりに氷の橋が出現していたのだから。

「やっぱり、ホロンもぶっ飛んでるよね」

「それティルアが言う？ 相変わらずお手並み鮮やかね」

「…そりやどーも。さ、氷の橋が溶けない内に早く渡っちゃおう」

ティルアとシャルの言葉に答えたホロンは、未だに唾然としてるアリン達を呼ぶのであった。

◇

氷の橋を使って無事に陸地に渡り終わると、氷の橋は溶けてしまい再び一面が溶岩に戻ってしまった。

「橋……溶けちゃった……」

「私達が渡ってる時は溶ける様子はなかったのに……」

「みんなが無事に渡り終わられるくらいの強度を計算して作ったからね」

エフオールと果林の言葉にその辺はしようがないし、帰りに自分がまた作るからと答える。

「ホロンさんのパートナー妖聖って、どのような方なんですか？」

ティアラがそんな事を言った。他の女性陣も気になるという反応だった。レイルとティルアとシャルは彼女の事も知ってるし。どうせ聞かれるかとも思ってた質問にホロンはうーんと考えながら口を開く。

「努力家で博識、あと妹想いな女の子」

「しゅーん……」

女の子のパートナー妖聖というホロンの言葉に、この世の終わりの表情をしながら落ち込むクララと果林。

「あらく、じゃあこの中だと誰に似てるの？」

「……そうですね。この中だとアリンちゃんですね。拗ねる時の仕草が特に」

「そ、そんなにあたしに似てるの……？」

マリサに聞かれたので、この中だとアリンに似てると答えるホロ
ン。

「似てると思うよ。ねえ、シャル？」

「そうね。雰囲気もそうだけど、仕草は完全に似てるわね」

「2人はその妖聖に会った事があるの？」

するとティルアとシャルも似てると言い出した。

その言い方に違和感を感じたマリアノが2人に訊く。まるでホロ
ンのパートナー妖聖とも交流があるかのような感じだったから。

「あるよ。レイの精神世界でだけ」

「レイの精神世界に初めて来た私達に向かったの第一声が『紅茶飲む
？』だものね」

「あー……そんな事もあったね」

なんでも2人はレイルの精神世界で会った事があるらしい。

シャル曰く、普段はホロンの中で眠っており、フェアリンク中はレ
イルの中で活動できるとの事。フェアリンクしなくてもレイルの精
神世界に居る時もあるとか。

「……えっと次は……あっちか」

それぞれがホロンのパートナー妖聖は、どんな人物なのだろうか？
とアリン達は想像してみるが、見当もつかないのであった。